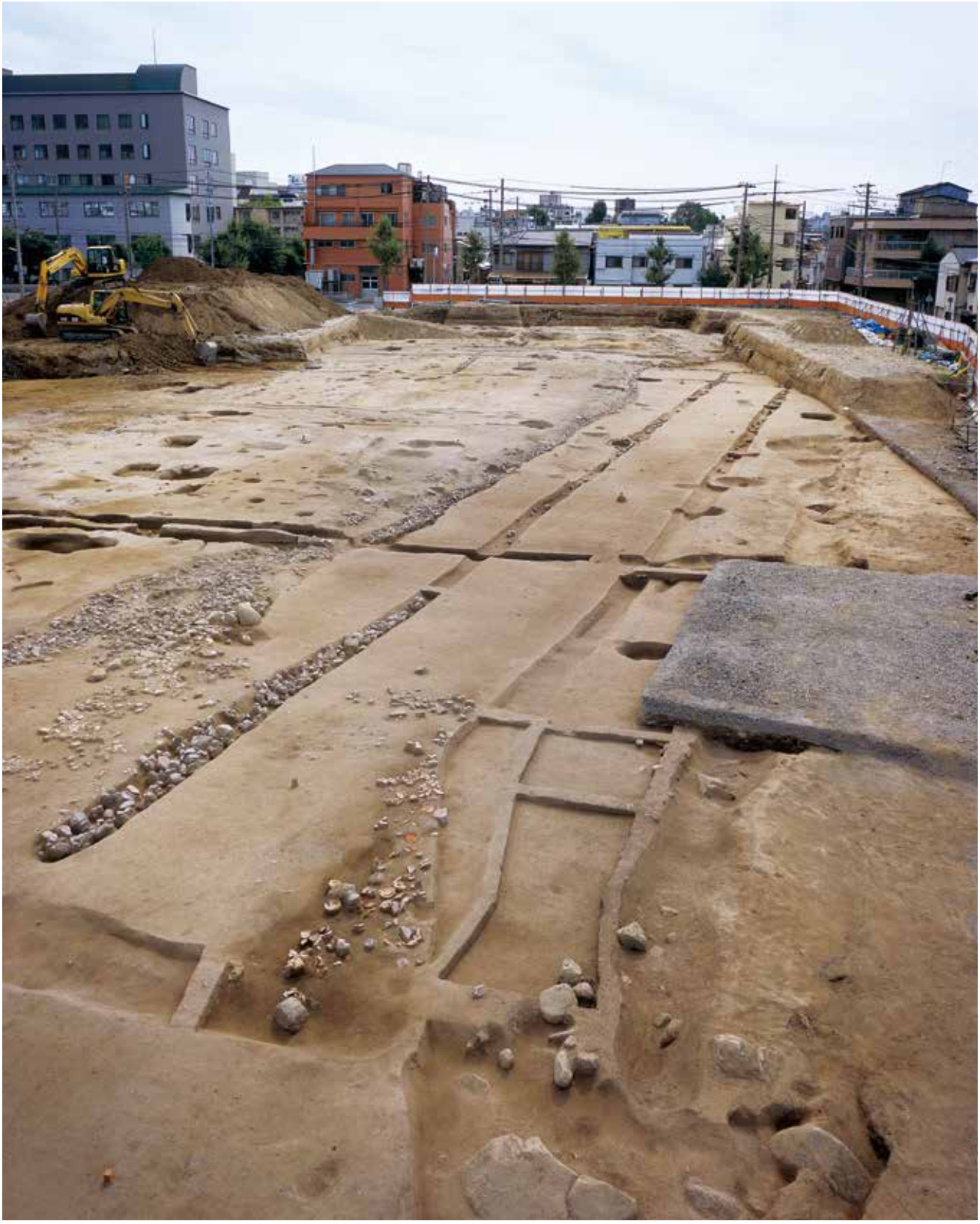
祇園遺跡第17・18次発掘調査報告書

2016年
神戸市教育委員会



18次－５・６区第２遺構面全景

18次－４区SD201〔東〕出土土器

祇園遺跡第17・18次発掘調査報告書

2016 年
神戸市教育委員会

序

治承４（1180）年、都に暮らす貴族達が「天狗の所為、･･･悲しむべき所業なり」、「洛中騒動、悲泣と云々」と書き残した出来事が起こります。平清盛によって強行された世にいう「福原遷都」です。一方の清盛にとって遷都は、古い権威や勢力から脱却するための新天地を求める行為だったと考えられます。

このとき都の候補地とされたのは、彼が晩年に活動拠点とした摂津国八部郡平野、現在の神戸市兵庫区平野周辺から南に拡がる地域でした。この遷都によって一帯には、都から移り住んだ平家一門や貴族の屋敷が建ち並んだとされています。

今回調査の行われた祇園遺跡は、西に隣接する雪御所遺跡や谷筋を挟んで南に位置する楠・荒田町遺跡とともに、福原京の中枢部にあたる場所といえます。

今回報告する祇園遺跡 17・18 次発掘調査では、平安時代末の福原京に関連する邸宅跡が確認されるなど周辺の歴史を考える上で貴重な成果がありました。

また、調査地に新しく開校した小学校は、遺跡名にちなみ「神戸祇園小学校」と名付けられました。由緒ある歴史や地名を地域の人々が大切に伝えていく思いの広まりが感じられ大変喜ばしいことです。

本書が地域の歴史を知っていただくための一助となり、文化財の保護に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係者および地域住民のみなさまの多大なるご理解とご協力によって、実施することができましたことを厚くお礼申し上げます。

平成 28 年３月

神戸市教育委員会

例　　言

1．　本書は、神戸市兵庫区下三条町10・11・13・14において、平成24・25年度に発掘調査を実施した、祇園遺跡第17・18次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。なお17・18次調査については、当該年度の『神戸市埋蔵文化財年報』に記載があるが、本書をもって正式報告とする。

2．　調査は、神戸市立神戸祇園小学校建設に伴うもので神戸市教育委員会が実施したものである。

3．　現地での調査は、平成25年1月10日から同年12月16日まで実施し、神戸市教育委員会文化財課　谷　正俊・池田　毅・内藤俊哉・川上厚志・纐纈文佳・山田侑生が担当した。現地調査終了後より平成27年度にかけ神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理および報告書の作成をおこなった。

4．　本書写真図版のうち現地での遺構写真は神戸市教育委員会文化財課　丸山　潔および調査担当者によるもので、航空写真は（株）GEOソリューションズによる。また遺物写真については杉本和樹（西大寺フォト）、金属製品のＸ線透過写真については、文化財課　中村大介によるものである。

5．　本書の「第１章」から「第４章」と「第７章」までの記述は調査担当者が分担し文責は目次に記した。また全体の編集については内藤・谷がおこなった。

6．　本書「第５章」の、自然科学分析（樹種同定・珪藻・花粉・寄生虫卵分析および放射性炭素年代測定）についてはパリノ・サーヴェイ㈱に委託した。

7．　本書の作成にあたり、同志社大学　増田富士雄氏、東海大学　丸山真史氏より玉稿を賜わり、「第５章　自然科学調査」に掲載させていただくことができました。記してお礼申し上げます。

8．　調査にあたり工樂善通氏（大阪府立狭山池博物館長）、菱田哲郎氏（京都府立大学）、増田富士雄氏（同志社大学）の現地指導を受けました。また、出土した墨書土器については、独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所　都城発掘調査部史料研究室室長渡辺晃宏氏・主任研究員山本　崇氏、研究員桑田訓也氏に釈読をお願いしました。なお、墨書土器の赤外線写真は同研究所企画調整部写真室主任　中村一郎氏に撮影いただきました。

9．　本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の１の地形図「神戸主部」・「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の１の地形図「烏原」「夢野」「諏訪山」「神戸駅」を使用した。また、標高は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を、方位座標については平面直角座標系第Ｖ系（世界測地系）を使用している。

10.　発掘調査で出土遺物および図面・写真等の記録類は、神戸市教育委員会において保管している。

目　　次

第１章　はじめに …… 1

第１節　調査に至る経過と調査組織 …… 1（内藤）

第２節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 7（内藤）

第２章　調査区の設定 …… 10（内藤）

第１節　調査区の設定 …… 10（内藤）

第３章　第17次調査 …… 11

第１節　基本層序 …… 11（川上）

第２節　１区の調査成果 …… 12（川上・谷）

第３節　２区の調査成果 …… 18（川上・谷）

第４節　第18次調査 …… 21

第１節　調査区の状況 …… 21（内藤）

第２節　基本層序 …… 21（内藤）

第３節　１～７区およびⅠ～Ⅴトレンチ …… 23（内藤・谷・川上）

第４節　８区の調査成果 …… 78（谷）

第５節　出土金属製品 …… 82（谷）

第６節　18次調査出土の墨書土器について …… 84（谷）

第５章　自然科学調査 …… 85

祇園遺跡第18次調査の自然科学分析

（パリノ・サーヴェイ株式会社）… 85

祇園遺跡第17・18次調査出土の動物遺存体　（丸山真史）… 91

神戸市兵庫区祇園遺跡で観察された土石流と土砂流堆積物

（増田富士雄）… 94

第６章　まとめ …… 102

第１節　遺構について …… 102（内藤）

第２節　遺物について …… 107（谷）

第３節　結びにかえて …… 110（谷・内藤）

挿図　目次

図１　周辺遺跡図 …… 7
図２　今回の調査地と周辺調査区 …… 8
図３　調査区設定図 …… 10
図４　17次－１・２区土層断面図 …… 11
図５　17次－１区第１・２遺構面平面図 …… 13
図６　17次－１区SX21平面・断面図 …… 14
図７　17次－１区SX21出土土器（１） …… 15
図８　17次－１区SX21出土土器（２） …… 16
図９　17次－１区SK21・SD21出土土器 …… 17
図10　17次－２区石組段平面・断面図 …… 18
図11　17次－２区第１遺構面～第３遺構面平面図 …… 19
図12　17次－２区SX31出土土器 …… 20
図13　18次調査区土層断面図 …… 22
図14　18次－４区SB201平面・断面図 …… 23
図15　18次－１～７区・Ⅰ～Ⅳトレンチ第２遺構面平面図 24
図16　18次－４区SB202平面・断面図 …… 25
図17　18次－４区SB203平面・断面図 …… 26
図18　18次－５区SB204平面・断面図 …… 26
図19　18次－５区SB205平面・断面図 …… 27
図20　18次－５区SB206平面・断面図 …… 27
図21　18次－６区SB207平面・断面図 …… 28
図22　18次－４・５区SD201〔東〕〔西〕平面・断面図 … 29
図23　18次－５区SD201〔東〕出土土器・陶磁器（１）… 30
図24　18次－５区SD201〔東〕出土土器・陶磁器（２）… 31
図25　18次－５区SD201〔東〕出土土器・陶磁器（３）… 32
図26　18次－４区SD201〔東〕出土土器（１） …… 33
図27　18次－４区SD201〔東〕出土土器（２） …… 34
図28　18次－ⅠトレンチSD201〔東〕出土土器 …… 35
図29　18次－５区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（１）… 36
図30　18次－５区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（２）… 37
図31　18次－５区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（３）… 38
図32　18次－５区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（４）… 39
図33　18次－５区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（５）… 40
図34　18次－５区SD202出土土器 …… 40
図35　18次－４区SD203出土土器 …… 41
図36　18次－６区SD204・205・206平面・断面図 …… 41
図37　18次－６区SD204・205・206出土土器・陶磁器… 42
図38　18次－１区SD210出土土器・陶磁器 …… 43
図39　18次－４区SE201平面・断面図 …… 44
図40　18次－４区SE201出土土器 …… 45
図41　18次－４区SE202平面・断面図 …… 46
図42　18次－４区SE202出土土器・陶磁器・石製品（１） 47
図43　18次－４区SE202出土土器・陶磁器・硯・石製品（２）48
図44　18次－５区SE203平面・断面図 …… 49
図45　18次－５区SE203出土土器 …… 50
図46　18次－ⅢトレンチSK201平面・断面図 …… 50
図47　18次－ⅢトレンチSK201出土土器 …… 51
図48　18次－ⅢトレンチSK202平面・断面図 …… 51
図49　18次－ⅢトレンチSK202出土土器・陶磁器 …… 51
図50　18次－６区・Ⅲトレンチ
　　SK203・SK204・SK205平面・断面図 …… 52
図51　18次－６区SK205出土土器・陶磁器 …… 53
図52　18次－７区SK206平面・断面図 …… 53
図53　18次－７区SK206出土瓦 …… 53
図54　18次－６区落ち込み状遺構出土土器・陶磁器 … 54
図55　18次－６区落ち込み状遺構平面・断面図 …… 55
図56　18次－６区SX201平面・断面図 …… 57
図57　18次－６区北東西溝出土土器 …… 58
図58　18次－６区東溝出土土器・陶磁器 …… 60
図59　18次－６区中央溝出土土器・陶磁器 …… 61
図60　18次－６区西溝出土土器・陶磁器（１） …… 62
図61　18次－６区西溝出土土器・陶磁器（２） …… 63
図62　18次－６区南東西溝出土土器・陶磁器（１） …… 64
図63　18次－６区南東西溝出土土器・陶磁器（２） …… 65
図64　18次－６区南東西溝出土土器・陶磁器（３） …… 66
図65　18次－６区南東西溝出土土器・陶磁器（４） …… 67
図66　18次－６区南東西溝出土カマド …… 67
図67　18次－６区南東西溝出土瓦 …… 68
図68　18次－６区集石部分出土土器 …… 68
図69　18次－６区土器溜り出土土器 …… 69
図70　18次－６区土器群出土土器 …… 70
図71　18次－５区SX202平面・断面図 …… 71
図72　18次－５区・ⅢトレンチSX203平面・断面図 …… 72
図73　18次－６区SX204平面・立面図 …… 73
図74　18次－６区SX204出土土器・陶磁器 …… 73
図75　18次－６区SX204出土瓦 …… 74
図76　18次－Ⅲ・ⅣトレンチSX205出土土器 …… 74
図77　18次－４区SP202平面・立面図 …… 75
図78　18次－４区SP201出土土器・陶磁器 …… 75
図79　18次－４区SP202出土土器・陶磁器 …… 76
図80　18次－４区遺物包含層出土土器・陶磁器 …… 77
図81　第18次調査出土縄文土器 …… 77
図82　第18次調査出土石器 …… 77
図83　18次－４区第４遺構面ピット群平面図 …… 78
図84　18次－４区～６区第３遺構面水田遺構平面図 …… 79
図85　18次－８区遺構平面図 …… 80
図86　18次－８区暗褐色混礫砂質土・
　　SX101出土土器・陶磁器 …… 80
図87　18次－８区暗褐色混礫砂質土出土瓦 …… 81
図88　金属製品実測図 …… 82
図89　第18次調査出土墨書土器 …… 84
図90　調査地点の断面図・試料採取位置
　　および不攪乱柱状資料写真 …… 86
図91　主要珪藻化石群集の層位分布 …… 87
図92　断割りトレンチ下層落ち込みの植物珪酸体結果 … 87
図93　祇園遺跡の位置 …… 95
図94　調査地区内の土層観察用トレンチ配置図 …… 96
図95　観察したトレンチの地層 …… 97
図96　土石流堆積物から土砂流堆積物
　　さらに洪水氾濫堆積物への堆積相の変化と特徴 … 100
図97　18次－６区SX201遺構変遷図 …… 103
図98　祇園遺跡内平安時代末邸宅内遺構配置図 …… 104
図99　祇園遺跡周辺の微地形図 …… 105

写真目次

写真１　17次－１区重機掘削作業 …… 2
写真２　17次－１区SX21写真図化作業 …… 3
写真３　17次－２区第1遺構面人力掘削作業…… 3
写真４　17次－１区遺構掘削作業 …… 3
写真５　18次－１区埋め戻し作業 …… 4
写真６　18次－２区重機掘削作業 …… 4
写真７　トライやるウィーク体験発掘 …… 4
写真８　18次－４区遺構掘削作業 …… 4
写真９　18次－４区クレーンによる写真撮影 …… 5
写真10　残土処分作業 …… 5
写真11　18次－６区SX201掘削作業 …… 5
写真12　湊山小学校見学 …… 5
写真13　現地説明会開催 …… 5
写真14　ラジコンヘリによる空中写真測量 …… 6
写真15　18次－Ⅰトレンチ遺構検出作業 …… 6
写真16　小学校建設工事 …… 6
写真17　17次－１区第１遺構面石列・圃場 …… 13
写真18　17次－２区SX31土器出土状況 …… 20
写真19　18次－４区SE201埋土断面 …… 44
写真20　18次－４区SE202井戸枠検出状況 …… 46
写真21　18次－６区東肩部遺物出土状況 …… 55
写真22　18次－６区落ち込み状遺構土層断面 …… 55
写真23　18次－６区SX201中央溝遺物出土状況 …… 56
写真24　18次－６区SX201集石部分断面 …… 58
写真25　出土金属製品Ｘ線透過写真（１） …… 83
写真26　出土金属製品Ｘ線透過写真（２） …… 83
写真27　第18次調査出土墨書土器（１） …… 84
写真28　第18次調査出土墨書土器（２） …… 84
写真29　木材組織写真 …… 90
写真30　調査区周辺垂直写真 …… 110

表目次

表１　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 85
表２　花粉分析・寄生虫卵分析結果 …… 87
表３　樹種同定結果 …… 89
表４　動物遺存体種名表 …… 93
表５　祇園遺跡17次・18次調査出土動物遺存体一覧表　93
表６　18次－５区SD201〔西〕出土土師器小皿計数表　108
表７　18次－５区SD201〔西〕出土土師器皿計数表 … 108
表８　18次－６区南東西溝出土土師器小皿計数表 …… 108
表９　18次－６区南東西溝出土土師器皿計数表 …… 108

写真図版　目次

巻頭カラー写真
１　18次－５・６区第２遺構面全景
２　18次－４区SD201〔東〕出土土器
写真図版扉
調査地より南方を望む
写真図版
カラー図版１　１　調査地周辺空中写真
　　２　調査地より北方　雪御所遺跡を望む
カラー図版２　１　18次－５・６区全景（北から）
　　２　18次－６・７区全景（南東から）
カラー図版３　１　18次－５区SD201〔西〕（北西から）
　　２　18次－５区SD201〔東〕（北東から）
カラー図版４　18次－４区SD201〔東〕出土土器
カラー図版５　18次－６区南東西溝出土土器・カマド
カラー図版６　１　18次－４区SP201出土陶磁器
　　２　18次－６区東溝・西溝出土陶磁器
写真図版１　１　17次－１区第１遺構面全景（北東から）
　　２　17次－１区第２遺構面全景（北から）
写真図版２　１　17次－１区SX21（西から）
　　２　同上　遺物出土状況（南西から）
写真図版３　１　17次－２区第１遺構面全景（西から）
　　２　同上　第２遺構面全景（南東から）
　　３　同上　第３遺構面全景（東から）
写真図版４　18次－１～７区・Ⅰ～Ⅳトレンチ垂直写真
（モザイク写真）

写真図版５　１　18次－１区第１遺構面全景（北から）
　　２　18次－２区第２遺構面全景（北から）
写真図版６　１　18次－３区第２遺構面全景（北から）
　　２　18次－４区第２遺構面全景（北から）
写真図版７　１　18次－４区建物群（SB201 ～ 203）（北から）
　　２　18次－４区SD201〔東〕（西から）
写真図版８　１　18次－４区SE201上層
　　２　同上　断割り断面
　　３　18次－４区SE202
　　４　同上　断割り断面
　　５　18次－４区SP201
　　６　18次－４区SP202
写真図版９　１　18次－４区第３遺構面水田面（北から）
　　２　18次－４区第４遺構面全景（北から）
写真図版10　１　18次－５区２遺構面全景（北西から）
　　２　18次－５区東拡張部第２遺構面全景（北東から）
写真図版11　１　18次－６・７区第２遺構面全景（南から）
　　２　18次－７区第２遺構面全景（北から）
写真図版12　１　18次－５区建物群（東から）
　　２　同上　（北西から）
写真図版13　１　18次－５区SD201〔西〕遺物出土状況
　　２　同左　SD201〔東〕遺物出土状況
　　３　18次－５区SD204 ～ 207（北から）
写真図版14　１　左上　18次－５区SE203　上層遺物出土状況
　　２　右上　同上　井戸枠
　　３　下　同上　断割り断面
　　４　18次－５区SX202
写真図版15　１　18次－６区SX201東・中央溝（北西から）
　　２　同上　南東西溝（南西から）
　　３　同上　集石部分・土器群（北から）
写真図版16　１　左　18次－５区SX203　全景
　　２　右上　同上　蓋石
　　３　右下　同上　導水部
　　４　18次－６区SX204（北東から）
写真図版17　１　18次－６区第３遺構面水田遺構（北から）
　　２　同上　細部（畦畔）（南東から）
　　３　同上　畦畔断面
　　４　同上　水口
写真図版18　１　18次－Ⅰトレンチ第２遺構面全景（北から）
　　２　18次－Ⅰトレンチ SD201（南西から）
　　３　18次－Ⅲトレンチ第２遺構面全景（北西から）
写真図版19　１　18次－Ⅲトレンチ（東）遺構面全景（北西から）
　　２　18次－Ⅲトレンチ（西）遺構面全景（東から）
　　３　18次－Ⅳトレンチ遺構面全景（北から）
写真図版20　１　18次－Ⅲトレンチ（西）SK201
　　２　18次－Ⅲトレンチ（東）SK202
　　３　18次－Ⅲトレンチ（西）SX203
　　４　同左　底部導水部
　　５　同上　断面
　　６　同上　蓋石
写真図版21　１　18次－８区遠景（北から）
　　２　同左　遺構面全景（南から）
　　３　18次－８区石垣列（北から）
写真図版22　　17次－１区　SX21出土土器
写真図版23　１　17次－１区　SK21出土土器（個体）
　　２　17次－１区　SK21出土土器（集合）
写真図版24　　18次－５区　SD201〔東〕〔西〕出土土器（個体）
写真図版25　１　18次－４区　SE201出土土器
　　２　18次－５区　SE203出土土器
写真図版26　１　18次－４区　SE202出土陶磁器・石鍋
　　２　18次－４区　SE202出土土器
写真図版27　１　18次－５区　SD205出土土器
　　２　18次－６区　北東西溝出土土器
写真図版28　　18次－６区　東溝出土土器
写真図版29　　18次－６区　中央溝出土土器
写真図版30　　18次－６区　西溝出土土器
写真図版31　　18次－６区　土器群出土土器
写真図版32　１　18次－６区　土器溜出土土器
　　２　18次－６区　集石部分出土土器
写真図版33　　油煙の付着した土器
写真図版34　１　18次－７区　SK206出土瓦
　　２　18次－６区　南東西溝出土瓦
　　３　18次－６区　SX204出土瓦
写真図版35　１　18次－６区　南東西溝出土カマド
　　２　18次－４区　SP201出土褐釉四耳壷
　　３　18次－４区　SP202出土土器
写真図版36　１　第18次調査出土墨書土器（１）（赤外線写真）
　　２　第18次調査出土墨書土器（２）（赤外線写真）
　　３　第18次調査出土石器

付図

１　18次－１～７区・Ⅰ～Ⅳトレンチ第2遺構面平面図
２　18次－６区SX201平面・断面図

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯と経過

今回の調査は、中央区西部と兵庫区北東部にある平野小学校、湊山小学校、荒田小学校、湊川多聞小学校の４校を統合する事業に伴い、旧湊中学校跡地と旧楠幼稚園と既存の公園用地等を利用して新校舎建設と公園および道路などを整備する計画が立てられた。

当該地は、祇園遺跡の範囲に含まれることから、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲（約6500㎡）について発掘調査を実施した。

調査組織　発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導を得て実施した。それぞれの調査組織は、以下のとおりである。

神戸市文化財保護審議会委員　（史跡・考古資料担当）

工樂　善通	大阪府立狭山池博物館長（平成27年８月12日まで）
黒崎　　直	大阪府立弥生文化博物館長（平成27年８月13日から）
和田　晴吾	立命館大学文学部教授（平成25年７月14日まで）
菱田　哲郎	京都府立大学文学部教授（平成25年７月15日から）

現地調査

平成24年度

教育委員会事務局

教育長	永井　秀憲
社会教育部長	東野　展也
文化財担当部長	安達　宏二
（文化財課長事務取扱）	
埋蔵文化財担当課長	千種　　浩
（埋蔵文化財係長事務取扱）	
文化財専門役	丸山　　潔
埋蔵文化財担当係長	丹治　康明
同	安田　　滋
埋蔵文化財センター担当係長	斎木　　巌
事務担当学芸員	佐伯　二郎
	井尻　　格
	中谷　　正
	小林さやか
調査担当学芸員	川上　厚志
保存科学担当学芸員	中村　大介
遺物整理担当学芸員	藤井　太郎

平成25年度

教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野　展也
文化財担当部長	安達　宏二
（文化財課長事務取扱）	
埋蔵文化財担当課長	千種　　浩
（埋蔵文化財係長事務取扱）	
文化財専門役	丸山　　潔
文化財課担当係長	丹治　康明
同	前田　佳久
埋蔵文化財センター担当係長	斎木　　巌
事務担当学芸員	西岡　誠司
	井尻　　格
	中谷　　正
調査担当学芸員	谷　　正俊
	池田　　毅
	内藤　俊哉
	纐纈　文佳
	山田　侑生
保存科学担当学芸員	中村　大介
遺物整理担当学芸員	藤井　太郎

出土遺物整理・報告書作成

平成26年度

教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野　展也
文化財担当部長	安達　宏二
（文化財課長事務取扱）	
埋蔵文化財担当課長	千種　　浩
（埋蔵文化財係長事務取扱）	
文化財専門役	丸山　　潔
埋蔵文化財担当係長	丹治　康明
同	前田　佳久
同	斎木　　巌
埋蔵文化財センター担当係長	安田　　滋
事務担当学芸員	山口　英正
	池田　　毅
	井尻　　格
	中村　大介
調査担当学芸員	谷　　正俊
	纐纈　文佳
遺物整理担当学芸員	黒田　恭正

平成27年度

教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野　展也
文化財課長	千種　　浩
文化財専門役	丸山　　潔
埋蔵文化財係長	前田　佳久
埋蔵文化財センター担当係長	安田　　滋
文化財課担当係長	松林　宏典
同	斎木　　巌
事務担当学芸員	山口　英正
	池田　　毅
	中村　大介
	井上　麻子
調査担当学芸員	谷　　正俊
	内藤　俊哉
遺物整理担当学芸員	佐伯　二郎
	中谷　　正

調査の経過　調査の経過は、次のとおりである。

第17次調査　平成25年1月10日より調査を開始する。調査対象面積は約780㎡で、1区の東側から残土処分をしながら重機掘削を実施する。調査区の西側に認められる水田面を覆う洪水砂の直上まで掘削した後、順次遺構検出作業を行う。

1月18日、1区の重機掘削を完了。21日に水田面の写真撮影を実施、その後、実測作業等を進めながら、下層の平安時代包含層にむけて水田面を掘削。

1月25日、さらに平安時代の包含層を除去した上で遺構検出作業を行う。

調査区の西側の試掘坑の周辺に遺構が存在することを確認する。また東側と西端には土石流状の堆積がみられる。

写真1　17次－1区重機掘削作業

1月29日より遺構掘削を始める。試

掘坑周辺の遺構は、遺物を多量に含む大型の園池状遺構SX21となる。記録を取りながら遺構掘削を行い２月８日には、全景写真撮影を行う。その後、遺構平面・断面図等の実測にかかり12日には土石流の断割り調査を実施する。また、13日には、SX21遺物出土状況のポールによる図化撮影を行い、遺物を取り上げる。

２月13日からは、２区についても重機掘削を開始。順次西端から水田面の検出と調査区壁面の整形作業等を行う。また､残土を利用し１区の調査終了部分の埋め戻しも進める。

２月20日、１区の下層確認調査を行い調査を完了する。

２月22日には２区の重機掘削と１区の埋戻しが完了する。

２月25日には、近世の水田面の顕出を完了して、下層の中世の水田面へ掘り下げを始める。３月５日、東西方向の石段が検出される。

３月７日、中世の鋤溝を伴う遺構面の写真撮影。その後、さらに下層に残る包含層を掘削して平安時代後期の遺構面を確認する。

３月13日、遺構検出の結果、調査区の西側でピットや土坑など多数検出、22日までに、遺構を完掘し全景写真を撮影する。その後、遺構平面図の実測、合わせて遺構の断割り調査等を行う。

３月26日、調査区東端部において下層の確認調査を実施し、調査終了。埋戻し作業を開始する。

３月28日には、器材搬出等を含めすべての作業を終え､作業を完了する。

18次調査

４月15日、仮設道路が敷設される１区より調査を開始する。重機掘削を行いながら攪乱掘削や壁面整形作業を進める。17日に重機掘削完了。

４月19日からは調査区の南側より遺構検出作業を始める。22日、調査区南部で南北方向の溝１などを検出。

４月25日調査区南部の写真撮影。さらに中央～北部にかけて遺構検出と遺構掘削を進める。５月２日より平面図作成。

５月21日、仮設道路の敷設工事の影

写真２　17次－１区SX21写真図化作業

写真３　17次－２区第１遺構面人力掘削作業

写真４　17次－１区遺構掘削作業

響範囲を超えたため調査を一時中断。養生作業を施し埋戻しを行う。

５月９日より２区の重機掘削を開始する。攪乱の掘削等を行い22日から遺構検出と遺構掘削を始める。

５月27日、８区の重機掘削開始。あわせて攪乱掘削と遺構検出を行い、順次遺構掘削にかかる。

６月４日「トライやるウィーク」実習で体験発掘作業の生徒（西神中学校・歌敷山中学校各２名）を受け入れ。

６月10日、８区の全景写真撮影。平面図等の実測を行う。12日、調査完了。

６月13日、２区の全景写真撮影、平面・断面図の作成にかかる。14日、平面・断面図面等を作成し調査を完了。埋戻しを行う。

６月14日、３区掘削開始。２・８区埋戻し。24日、重機掘削完了、遺構検出。中央部は大きく攪乱されており東西の壁沿いに数m残存するのみ。６月28日、全景写真撮影。平面図作成後、下層遺構面へ。７月２日、３区第２遺構面の全景写真撮影。７月３日、４区掘削開始。包含層の掘削。７月４日、３区調査完了し埋戻し開始。

16日４区重機掘削完了。24日遺構検出、調査区南半部において掘立柱建物を２棟確認。26日、調査区北部で東西の堀状の溝を確認。29日、遺構掘削。７月31日４区全景写真撮影。５区重機掘削開始。８月１日、引き続きⅣ区写真撮影、終了後平面図作成。

８月６日、５区北半部機械掘削完了。８日より上面の旧耕土層を除去して遺構検出。８月８日より遺構検出開始。

８月13日、４区クレーンによる空中写真撮影。洪水砂掘削、水田面へ。15日、

写真５　18次－１区埋め戻し作業

写真６　18次－２区重機掘削作業

写真７　トライやるウィーク体験発掘

写真８　18次－４区遺構掘削作業

水田面の検出完了。写真撮影、平板測量。下層掘り下げ。

８月22日遺構検出。ピットが散在。23日４区全景写真撮影。９区では掘立柱建物を確認。

８月26日井戸２基について断割り調査を実施。５区南半部重機掘削開始。29日井戸材の取り上げ。４区調査完了。

９月２日５区重機掘削完了、引き続き６区重機掘削。９日重機掘削完了。

９月21日、ラジコンヘリによる空中写真撮影。

９月25日、７区重機掘削開始。27日重機掘削完了。遺構の記録作業などの調査と並行して調査は弥生時代の遺構の掘削に移る。

10月９日には現地指導のため、文化財保護審議会委員の工樂善通先生、菱田哲郎先生が現場来訪。10月12日、１区再掘削。

10月17日、ラジコンヘリによる写真撮影、写真測量を実施する。また、これまでの成果をもとに記者発表を行う。近隣の湊山小学校１～６年生170名による見学も催される。

10月19日には、現地説明会を開催し、130名の参加者を得た。

写真９　18次－４区クレーンによる写真撮影

写真10　残土処分作業

写真11　18次－６区SX201掘削作業

写真12　湊山小学校見学

写真13　現地説明会開催

以降さらに遺構検出、遺構掘削を続行し、11月１日には全景写真撮影とラジコンヘリによる写真撮影、写真測量を実施する。

11月７日から、５・６区の東側に堆積する洪水砂を除去し下層の水田面を検出する。11月９日には、水田面の全景写真を撮影、平板による測量を行う。

11月11日には、遺構面の断割り作業を実施し、下層土石流の状況について増田富士雄先生の現地指導を受ける。その後、調査区の平面・断面図、断割りトレンチの断面図等を作成し15日に５～７区についての調査を完了する。

また11月12日からは、南側のゲート部分と東側の擁壁工事部分Ⅰトレンチの調査を開始。18日に重機掘削完了。遺構検出を行い、21日から遺構掘削をはじめる。

11月28日、Ⅱトレンチの重機掘削開始。

11月29日、Ⅰトレンチ水田面写真撮影、平面図等作成後に埋戻し作業にはいり、Ⅰトレンチ調査終了。Ⅲトレンチについても重機掘削を開始する。

12月２日、Ⅱトレンチの遺構検出を始める。Ⅳトレンチの重機掘削も開始する。

12月３日、Ⅲトレンチの重機掘削が完了、遺構検出を開始する。

12月５日、Ⅱトレンチ写真撮影等を行い、下層の水田面を検出する。

12月７日、Ⅱトレンチの調査終了。

12月12日、Ⅲトレンチ東半部およびⅣトレンチの全景写真撮影。16日、Ⅳトレンチの調査を終了する。

12月17日、Ⅲトレンチの断割り調査を実施して写真撮影および実測作業。石組み遺構の分析用土壌をサンプリングする。これをもって遺構面の調査は終了し、翌18日にかけて現場の撤収作業にかかった。

12月20・21日には器材搬出作業を行い、すべての現地調査を終了した。

その後現地では、引き続き建築工事がおこなわれ、平成27年４月に神戸市立神戸祇園小学校として開校した。

写真14　ラジコンヘリによる空中写真測量

写真15　18次－Ⅰトレンチ遺構検出作業

写真16　小学校建設工事

第２節　遺跡の位置と歴史環境

祇園遺跡　祇園遺跡は、六甲山系に連なる再度山から注ぎ込む天王谷川によって形成された扇状地の、扇頂から扇央部にかけて位置しており、標高は40ｍから20ｍを測る。すぐ北側には、急峻な六甲山塊が迫り南には、沖積地からなる平野部が海まで拡がることから眺望に恵まれた立地となっている。また、天王谷川は遺跡の南西近くで石井川と合流し湊川となる。

今回の調査地は、祇園遺跡の南西端にあたるもので、比較的傾斜した地形が東西方向に入り込んだ谷地形に掛る部分にあたる。調査地の道路を挟んだ南側には谷を堰き止めて築いたと考えられる五郎池　十郎池と呼ばれる溜池があったことが明治期の地図などに記されており、微地形からも深い谷筋の存在が窺える。

この祇園遺跡が存在するのは、神戸市兵庫区の「平野」と呼ばれる一帯で、平安時代末期に平清盛が京都より移り住み、やがて「福原遷都」の中心地となる場所で、『山槐記』や『皇年代記』にもその地名が登場する。また古来よりの交通路とされる有馬道が遺跡の西寄りを南北に通っている。

過去の調査　近年、考古学的にも、この時代の成果は蓄積されてきており、平成６年に実施された第２次調査とその後の第５次調査や第15次調査において12世紀後半から末頃にかけての

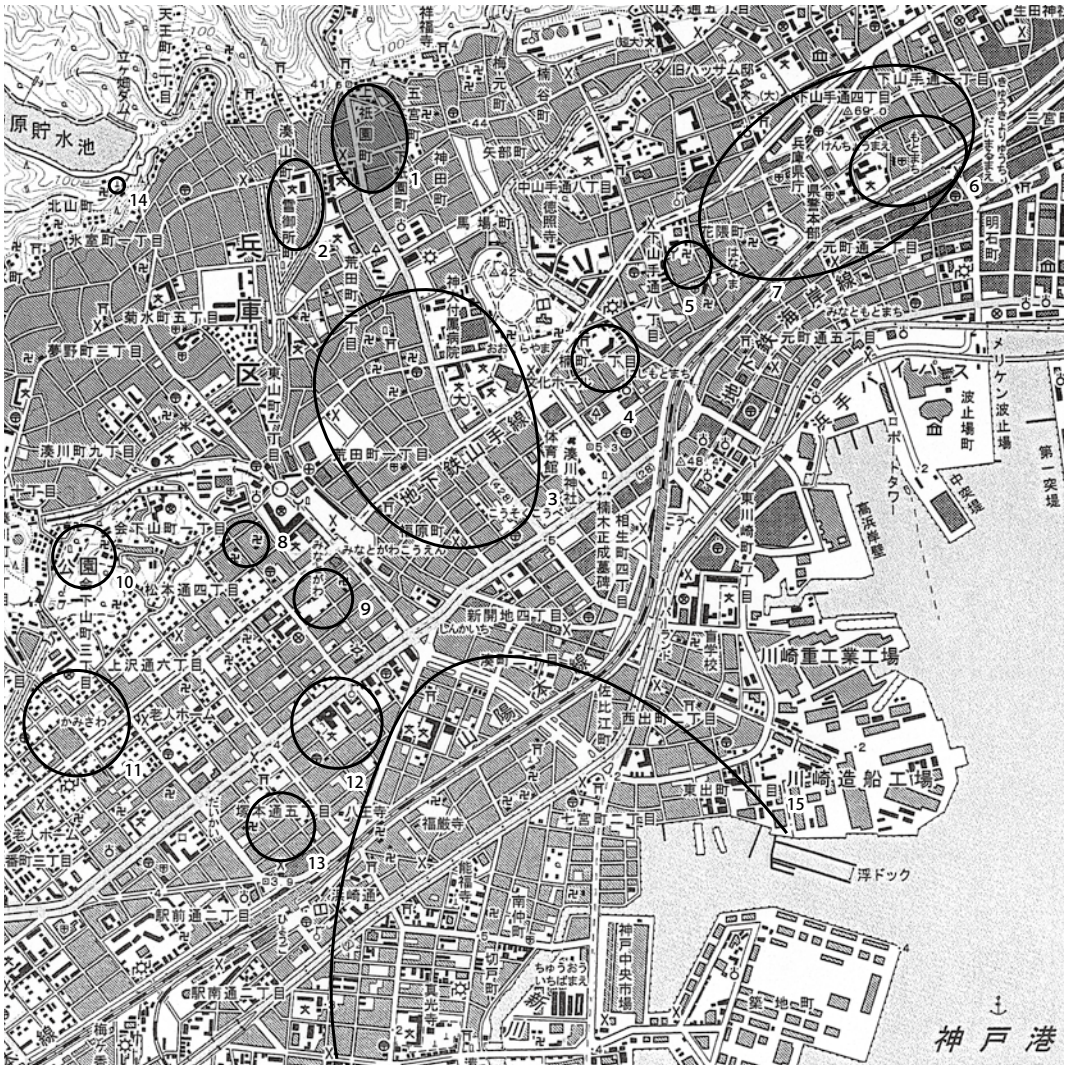
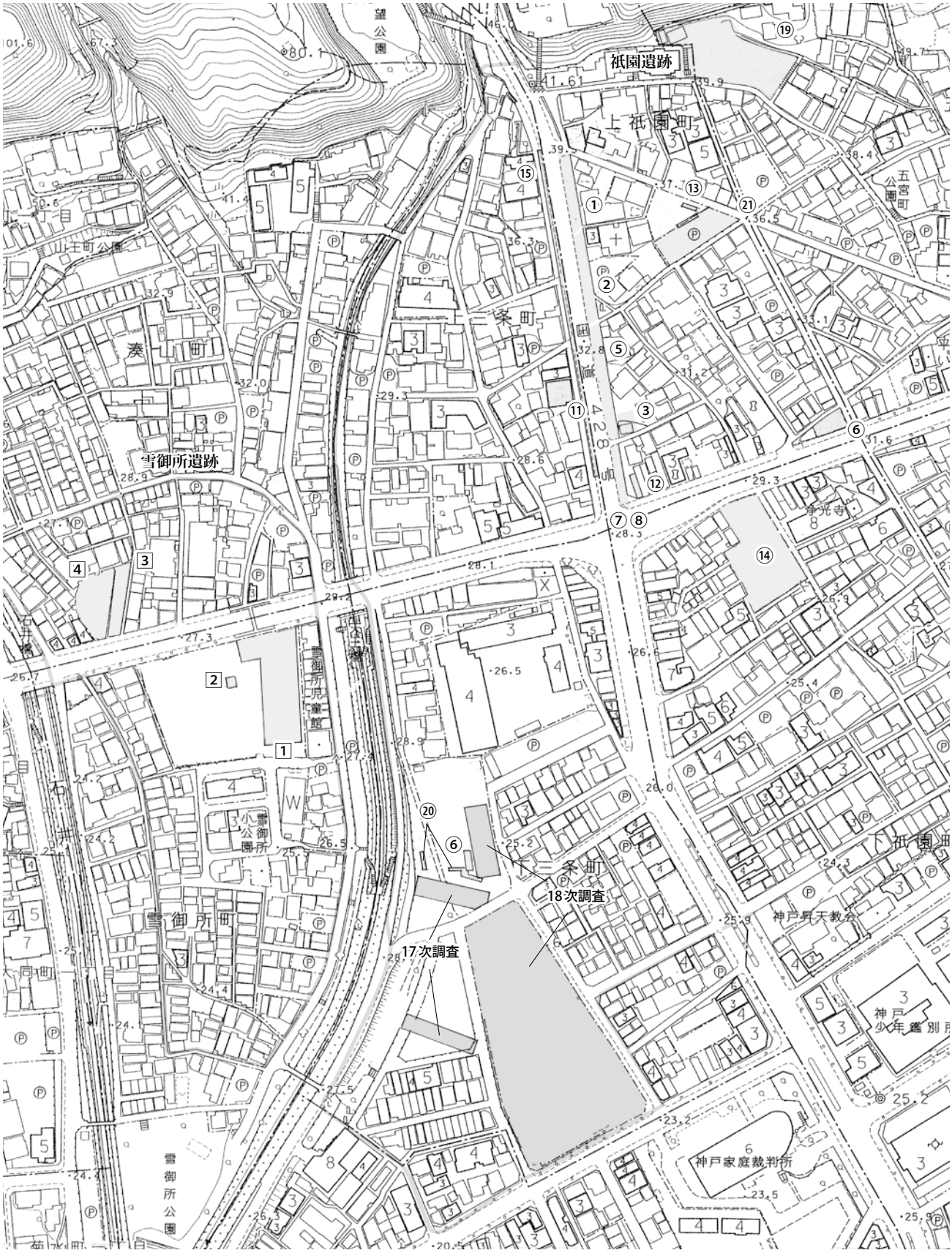


図１　周辺遺跡図（S＝１：25,000）



番号は調査次数
○ 祇園遺跡
□ 雪御所遺跡

図２　今回の調査地と周辺調査区（S= １：3,000）

庭園遺構　貴族の邸宅に伴うと考えられる庭園（園池）遺構が発見されている。出土した多量の土器や瓦は、京都周辺で生産されたものも含まれており、中央政権との深い関係を物語るものである。

また隣接する第３次調査においては、中国大陸との交易を偲ばせる吉州窯系玳玻天目小碗なども出土している。さらに、平成23年度の第14次調査においては、井戸などを埋め戻して整地した後に建物群と敷地内を区画する溝をもつ邸宅跡が確認され、平家一門を支えた在地の有力者の屋敷と考えられている。

また、平安時代末期以外の時期においても第７次・８次調査や第12次調査においては弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物や溝、第14次調査においては弥生時代中期の竪穴建物なども確認され古くから連綿と集落が営まれていたことが知られている。

雪御所遺跡　周辺の遺跡には、すぐ西に天王谷川を挟んで、明治時代に平安時代の瓦が出土した雪御所遺跡がある。「雪御所」の名称は現在の地名によるものであるが、これは『山槐記』の「本皇居、禅門家雪御所北也」や『平家物語』の一節「春は花見の岡の御所、秋は月みの浜の御所、・・・・雪見の御所、萱の御所」に登場する清盛の邸宅に由来すると言われている。昭和62年に湊山小学校の建替えに伴う第１次発掘調査において平安時代後期のかわらけ等が出土し、検出された石垣が雪の御所に関連する可能性が指摘されたが、平成24年度に実施された第２次調査において中世以降に築かれた可能性が高いことが判明した。

楠・荒田町遺跡　また南には北東から南西にはしる谷筋を挟んで楠・荒田町遺跡がある。神戸大学医学部附属病院構内の一連の調査において平安時代後期の二重の濠や建物群、などが確認されている。検出された建物には、大型の柱掘形をもつ掘立柱建物やＬ字形に配列された建物なども存在する。

さらに南の海岸部一帯には、平清盛によって開発された「大輪田泊」の推定地を含む港町である兵庫津遺跡がひろがっている。

主要参考文献

「福原京」に関するもの

１．石田善人　「平氏政権の崩壊」『兵庫県史』第二巻　兵庫県　1975
２．高橋昌明　『平清盛　福原の夢』　講談社　2007
３．元木泰雄　『平清盛の闘い　幻の中世国家』　角川書店　2001
　　「福原京の周辺」『兵庫のしおり』４　兵庫県県政資料館　2002
４．山田邦和　「『福原京』の都市構造」『古代文化』57- 4　㈶古代学協会　2005
５．歴史資料ネットワーク編　『歴史のなかの神戸と平家』神戸新聞総合出版センター　1999
６．歴史資料ネットワーク編　『平家と福原京の時代』岩田書院　2005
７．神戸市教育委員会『平氏と神戸の遺跡』2012

発掘調査報告書

１．岡田章一・久保弘幸・深江英憲『楠・荒田町遺跡　―神戸大学附属病院構内遺跡―』　兵庫県教育委員会　1997
２．富山直人編『祇園遺跡　第５次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000
３．別府洋二編『楠・荒田町遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　2008
４．富山直人・小林さやか編『楠・荒田町遺跡　第42・43・46次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2011
５．内藤俊哉編『祇園遺跡　第14次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2013
６．阿部　功編『祇園遺跡　第15次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2013
７．関野　豊編『楠・荒田町遺跡　第53次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2014
８．本市教育委員会の実施した祇園遺跡の発掘調査成果については、各年度の神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財年報』を参照されたい。

第２章　調査区の設定と調査方法

第１節　調査区の設定

作業の工程から調査範囲は分割して実施した。第17次調査については、北側の道路予定地を１区、南側の道路予定地を２区とした。また第18次調査については、１～８区に分割したが、１～７区は、旧湊川中学校跡地、８区は旧楠幼稚園跡地である。

また、敷地の南半部にあたる４区の東側および南側、５区の南側および西側については敷設する擁壁の工事に伴い東側から順にⅠ～Ⅳトレンチを設定し調査を実施した。今回の調査対象となった部分は、約6,500㎡である。

なお、調査区の敷地は周辺一帯の街並み同様に座標軸の北に対して32～３度ほど東に振っている。位置関係の呼称の煩雑さを避けるために、本報告においては便宜上、丘陵地形に向かう側を北、反対の海岸線に向かう側を南と呼称した。

なお、調査の記述については、遺構の連続性を考慮して第18次調査の１～７区およびⅠ～Ⅳトレンチは、合わせて行うこととする。

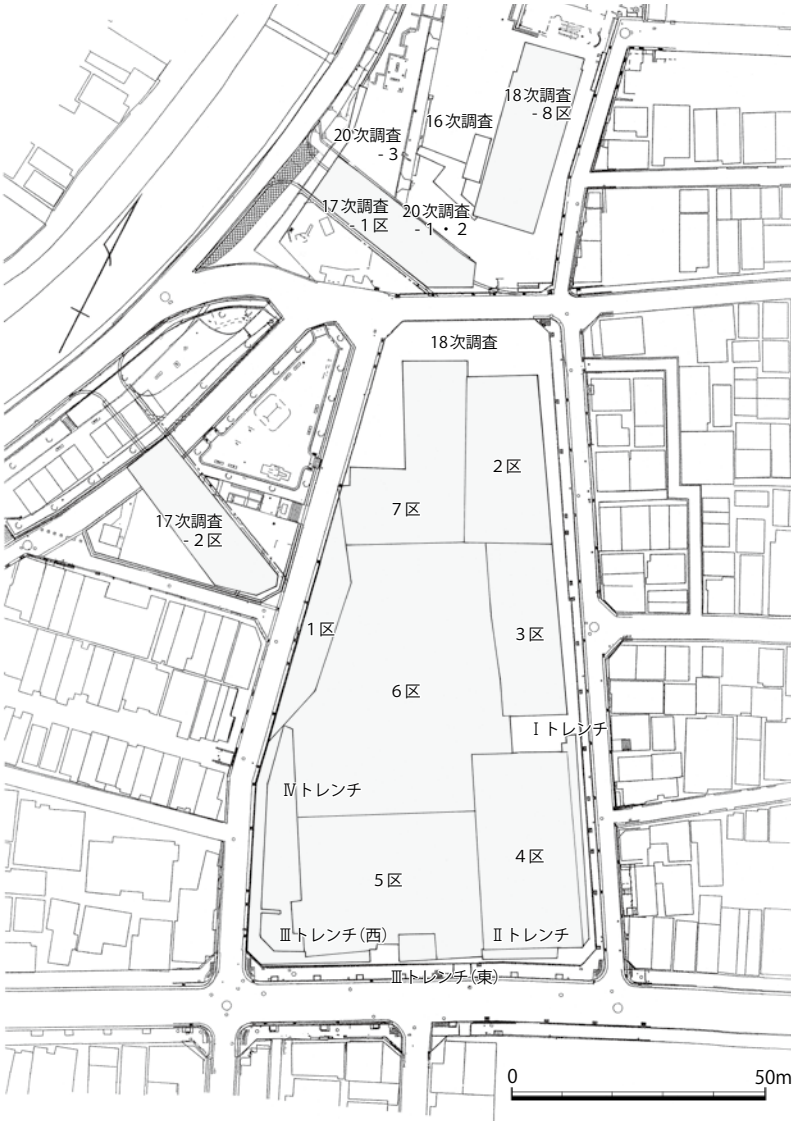


図３　調査区設定図

第３章　第17次調査

第１節　基本層序

現地表面は１区で、およそ24.5m、２区で、およそ23.0mである。１・２区共に、調査区東端部において西側に急激に落ちる地形がある。

１　区　１区は現地表面から約0.6～1.0mは、盛土を含む造成土及び攪乱土である。その下層には、戦災の整地層を挟んで昭和13年の阪神大水害と考えられる洪水砂が堆積している。その下層には近代から昭和初期にかけての耕作土で、複数の旧耕土層が存在し、22.80mで近世の耕作土で第１遺構面を形成する乳灰色粘性砂質土となる。その下層、22.60mで平安時代末から鎌倉時代にかけての第２遺構面のベース層乳灰白色極細砂シルトとなっている。

２　区　２区は、旧湊中学校のプールがあった場所であったため、ある程度の損壊が予想されていたが、現地表面から約1.0～2.6mは、盛土を含む造成土および攪乱土であったため、プール建設工事による遺跡への影響はなかった。22.50mで近世の耕土で第１遺構面の淡黄灰色粘性砂質土となる。その下層には、第２遺構面で中世の耕土である緑灰色粘性砂質土があり、21.10mで第３遺構面となる淡灰白色中砂となっている。

下　層　なお、１・２区共に調査終了後に下層断割りを行ったが、土石流である褐色系の粗砂～円角礫が続いている。

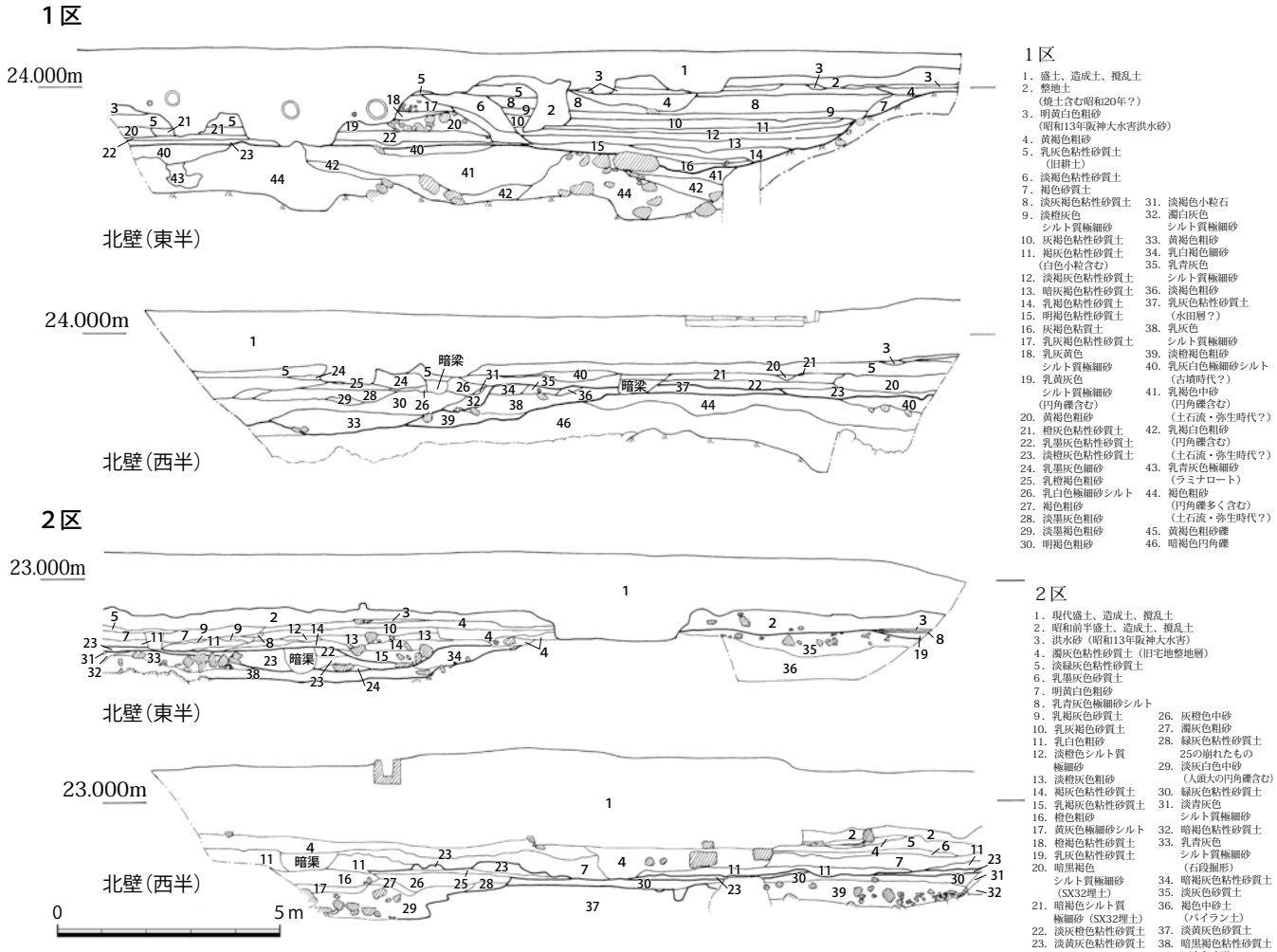


図４　17次－１・２区土層断面図

第２節　１ 区の調査成果

調査地は、旧楠幼稚園の園庭とその西側に隣接する公園内に付け替わる道路部分の調査である。２面の遺構面を確認した。

なお調査区のほぼ中央部分に、調査区の北側にある住宅への150㎜水道管があるため、この水道管を境に東西に調査区を２分した。

（１）第１遺構面

盛土、旧宅地面、戦災ガラ、阪神大水害と考えられる洪水砂、その下層には旧耕土があり、さらに洪水砂が厚く堆積しており、その洪水砂を取り除くと東西方向に細長い圃場が検出された。

近世圃場

圃場は、南北幅が２ｍ前後で、東西が長いもので10m、短くて2.5～４ｍのものである。この細長い圃場を南北に３列検出した。

圃場の西側には、石列を護岸とした水路を検出した。この水路の西側にも細長い圃場の耕土と同じ土が存在し、畦畔と思われる高まりが確認された。

しかしながら、細長い圃場が磁北による東西方向であるのに対し、水路とその西側の畦畔は天王川の方向沿った方向である。

石列

これらの圃場を覆う洪水砂には古墳時代の須恵器や中世の遺物に混り近世の陶磁器が含まれていることから、近世に発生した洪水で埋まった圃場と考えられる。

東端は旧地形としての段があり、一段上がる地形を検出した。おそらく、河道と安定した河岸段丘の境に当たるものと考えられ、この段から西側は大水が出るたびに洪水を繰り返す地区であったと考えられる。

（２）第２遺構面

第１遺構面の耕土層を掘削すると第２遺構面である。

東端部の段の下には、緩やかに落ちる溝状の窪みを検出した。その西は土石流による円角礫が露頭しており、近世に至るまでは旧耕土層が連綿と続いていたようである。

調査区の西半において、試掘で平安時代の大量の遺物が出土した地点でSX21とSK21を検出した。

SX21

東西5.0m、南北5.0mの不定形で、深さ25㎝を測る緩やかな鍋底状の窪みをもつ遺構である。

園池遺構

試掘坑を中心とした遺構の北側に集中して、底面に敷き並べたように土師器の皿が大量に出土した。出土状態としては、第２次調査において確認された園池遺構の土師器の出土状態と似通っている。

この土師器の集中する範囲の南側には組み上げたように石が集中する。石は大きいもので50㎝、大半は20㎝前後のもので、池に見られる州浜のように敷き並べたようではなく、集中して石が集められたような状態で検出した。

集石の中には長辺を垂直に立てたようなものもあり、明らかに自然に堆積したものではないと考えられるものもみられる。

土師器皿の出土状態や人工的に据えられた石が存在することなどから、園池の上面が削平を受けて池底の部分のみが、辛うじて残った状態の遺構と考えられる。

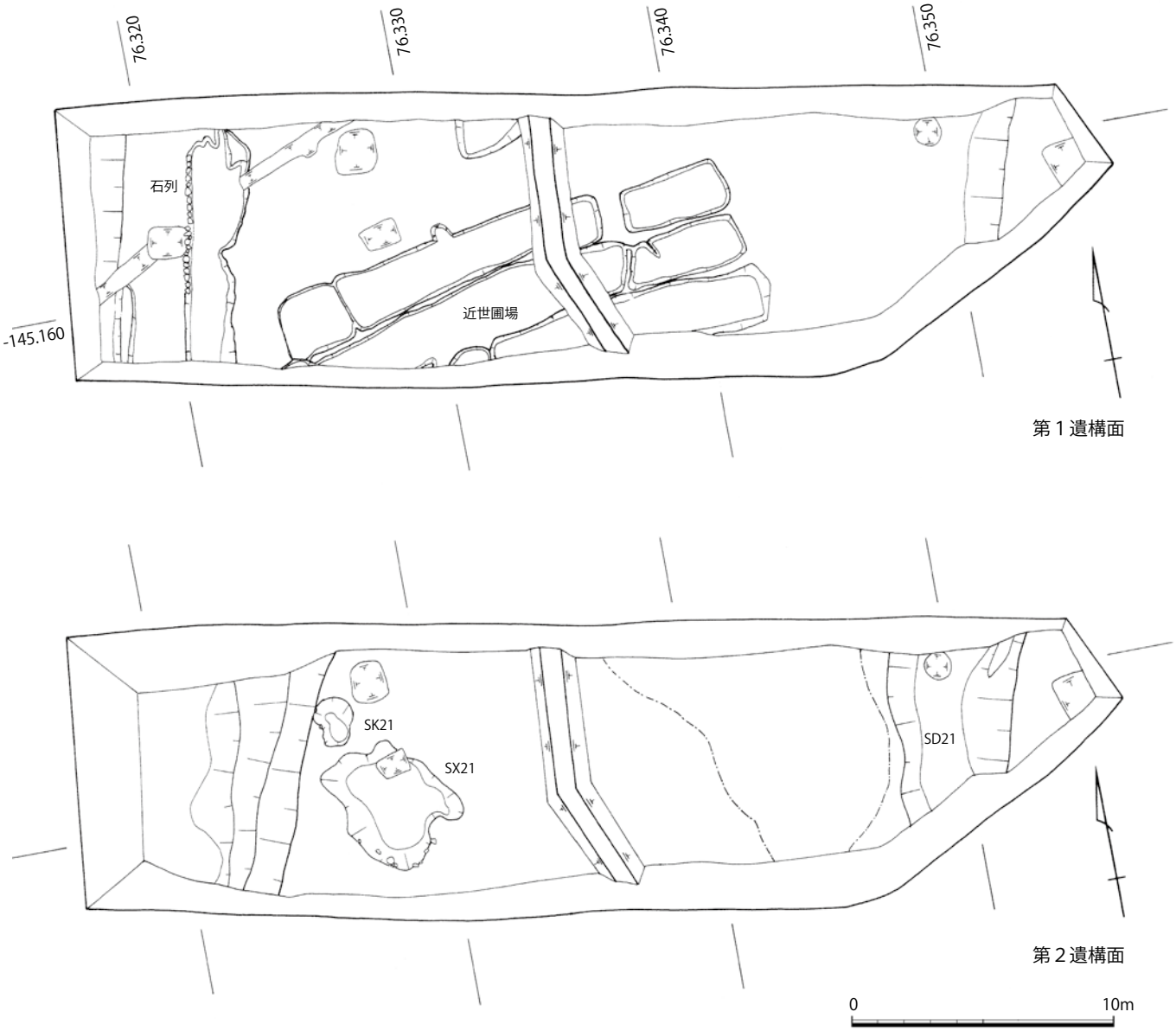


図５　17次－１区第１・２遺構面平面図

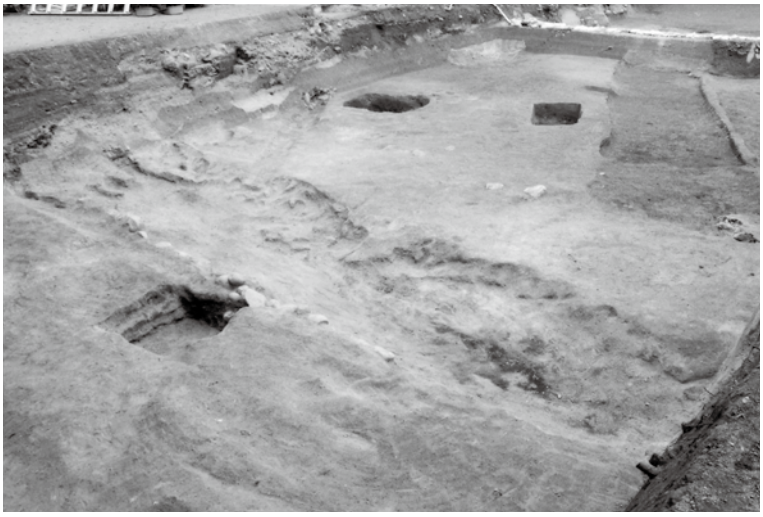
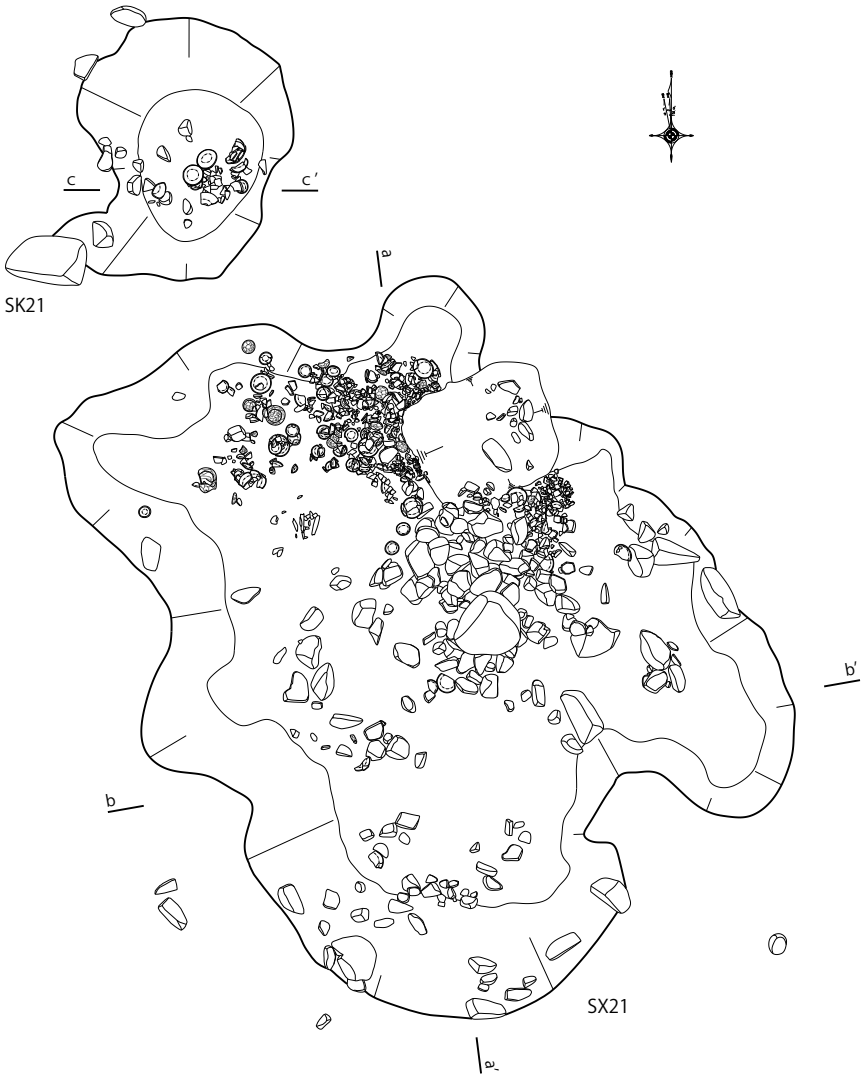


写真17　17次－１区第１遺構面石列・圃場



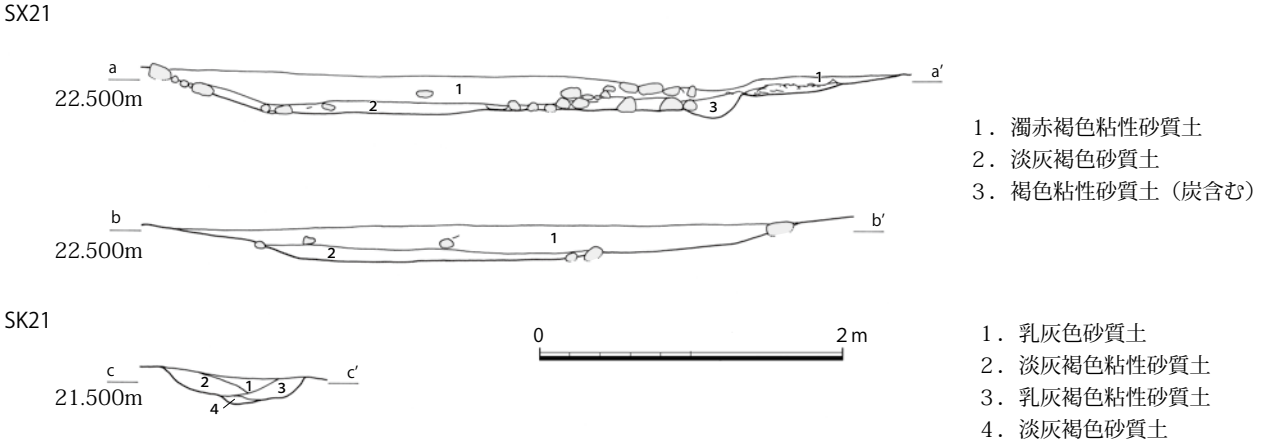


図６　17次－１区SX21平面・断面図

出土遺物　出土遺物は、土師器の皿（１～23）と小皿（24～71）がほとんどで、底部糸切りの土師器坏（72）が１点出土している。皿の口径は14㎝という規格がほぼ守られている。下半部は手づくね成形の後、軽くナデて器面を整えているが、指押さえの痕跡が残るものが多い。上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、内底面は指押さえの痕跡を残すものがある。成形技法としては、いわゆる一段ナデ技法で作られている。

口縁端部は明瞭に面取りを行うもの（１，６，７，８，15, 16, 17）と行わないものがある。

小皿は直径９～10㎝程度の手づくね成形のもの（24～64）、直径８㎝程度のロクロ成形で底部外面に回転糸切りの痕跡を残すもの（65～71）がある。手づくね成形のものは比較的薄手に作られたものは底の厚みが１～２㎜程度であるが、３～５㎜程度のものもあり、作り手の技術の巧拙が窺われる。

23・64は口縁端部に燈芯が焼け焦げた痕跡が明瞭に残っており、燈火器として用いられたことが判る。

遺物の出土状況から見て、これらの土器群は一時に投棄されたものであり、一括性が高い資料といえる。

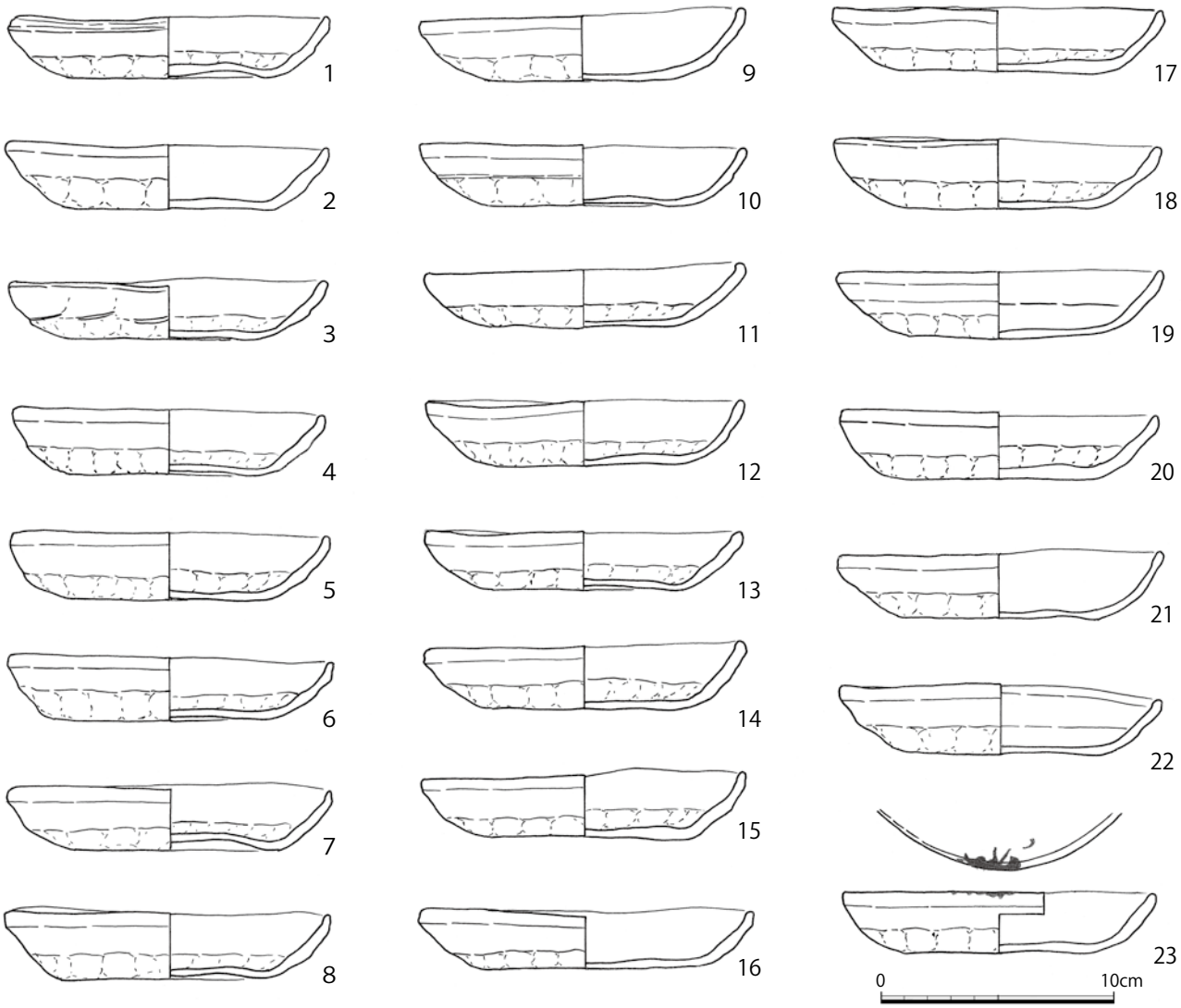


図７　17次－１区SX21出土土器（１）

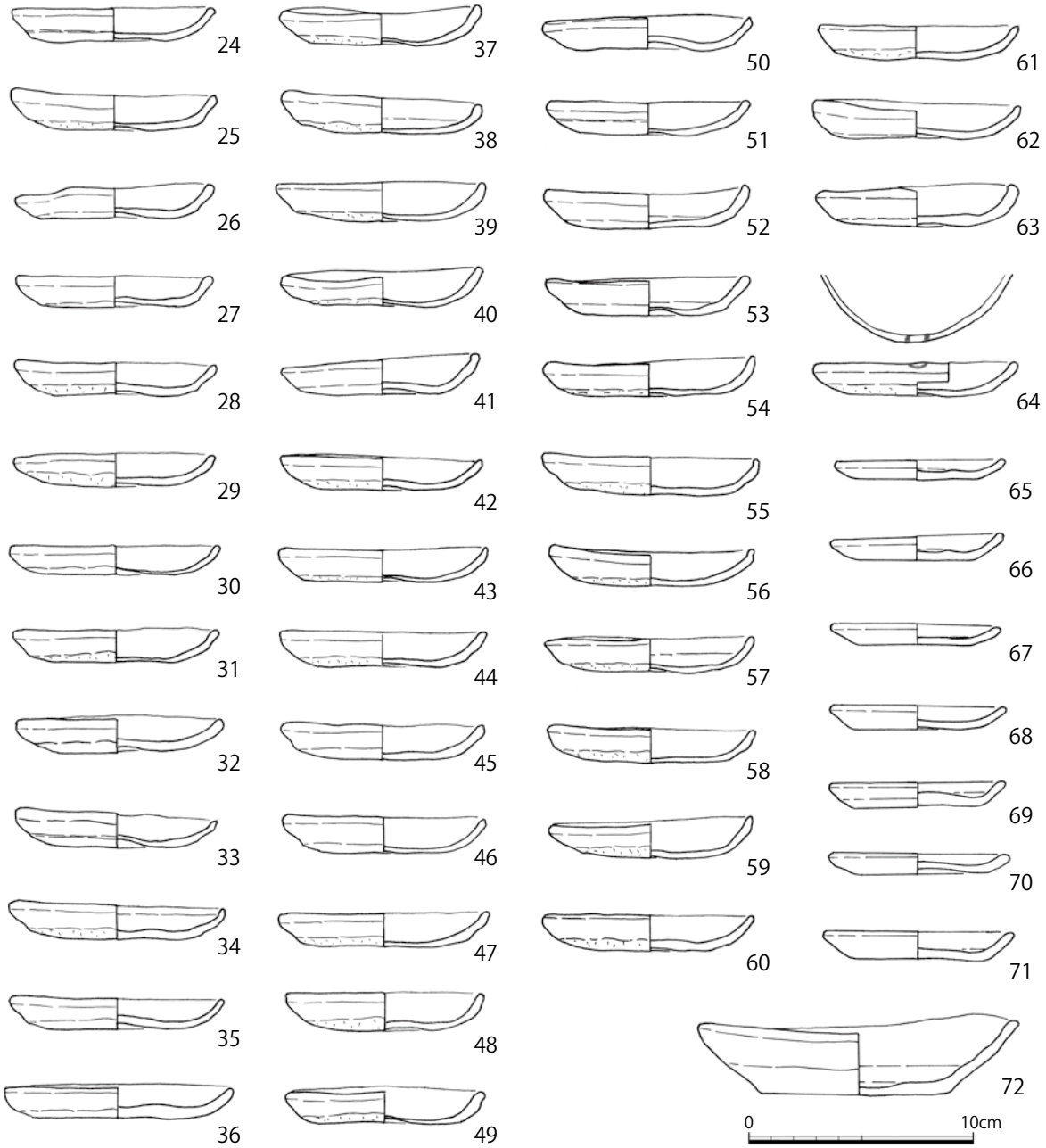


図８　17次－１区SX21出土土器（２）

SK21　SX21の北側に隣接して、SK21を検出した。東西1.5m、南北1.9mの楕円形のもので、緩い丸底の土坑である。

土坑内からは、土師器皿を中心として出土したSX21とは違い、瓦器、須恵器、土師器などの遺物が多く出土したが、銭などの特殊遺物は出土しなかった。

出土遺物　出土遺物の中で図化したものは、土師器皿（73～77）・小皿（78～79）、須恵器椀（80）、瓦器椀（81）である。

土師器皿・小皿の成形技法はSX21出土のものと同様であり、内外底面に指押さえの痕跡を残し、一段ナデ技法で作られている。土師器皿の口径は14～15㎝以内に収まる。

須恵器椀（80）はロクロ成形で、底部外面に回転糸切りの痕跡を残し、直線的に伸びる口縁部を有する。神出窯を中心とする東播系の須恵器窯で製作されたものである。

瓦器椀（81）は深めの坏部内面に圏線状の暗文を密に、見込部分には平行線状のものを疎に施す。外面上半部には僅かにヘラ磨きの痕跡が残り、下半部には指押さえの痕跡が残る。高台は断面三角形の粘土紐を貼り付けている。

18次調査の項で記述する和泉型瓦器椀とは異なり、大和型のものと思われる。

SD21

SD21は、１区調査区の東端、地形が一段上がる地形変換地点に存在する。

埋土には、近世陶磁器も含まれる。南北方向の大きな溝に切られて、平安時代にも同じ地点に溝が存在していたことが土層断面の観察から判明した。

規模などは判然としない。

出土遺物

図化したものは土師器小皿（82）、皿（83）の２点である。

土師器小皿（82）は手づくね成形で、外底面は指押さえの後、軽くナデを施し、口縁部は横方向のナデで調整する。内底面はナデて仕上げている。口縁端部と内底面に燈火器として使用した際の焦げ付きの痕跡が認められる。

土師器皿（83）は上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整する。下半部は手づくね成形の後、軽くナデて器面を整えているが、指押さえの痕跡が残る。内底面にも指押さえの痕跡が残っている。成形技法は一段ナデ成形である。

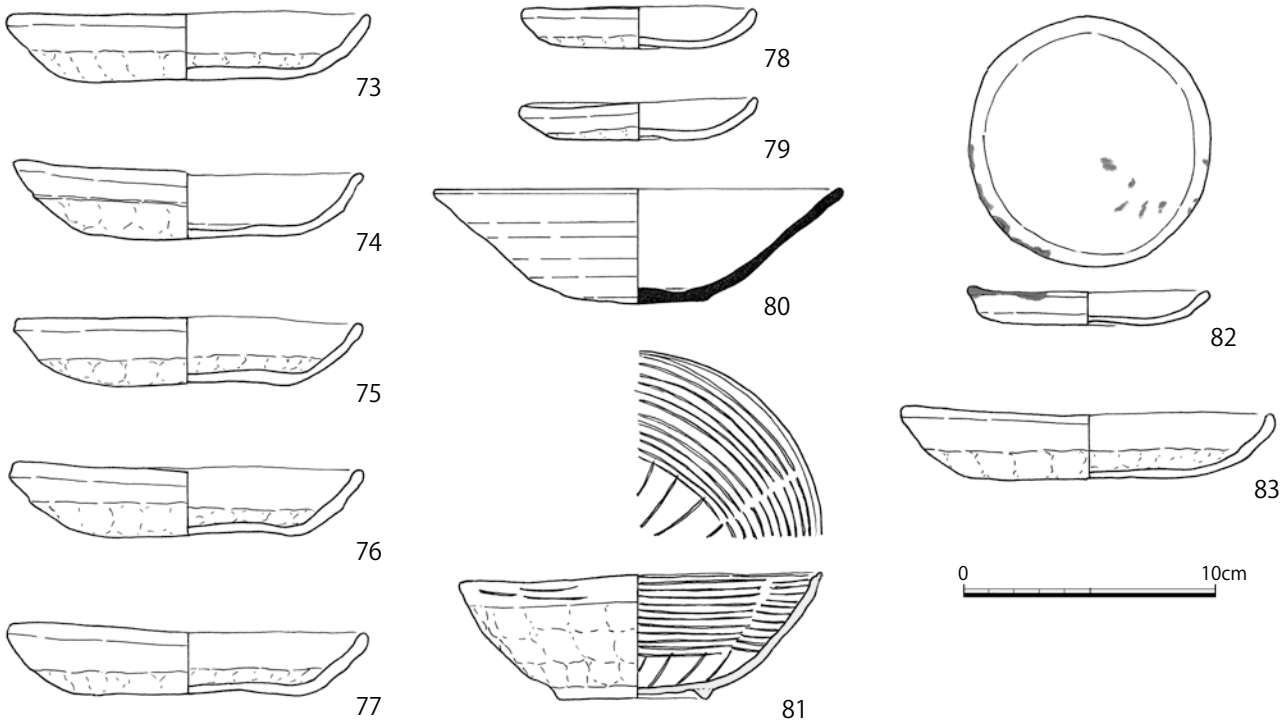


図９　17次－１区SK21・SD21出土土器

第３節　２ 区の調査成果

旧湊中学校のプールと西側にある南北道路を直交して天王谷川左岸堤防の上から東に向けて取りつく新設の道路建設予定地区である。

（１）第１遺構面

１区と同様に、上層から盛り土と旧宅地面、戦災焼土、阪神大水害、旧耕土とそれに伴う木製の暗渠を検出した。この木製暗渠は、松の細長い幹を暗渠内の側面に這わせ、その上に梯子状に細い木や枝を掛けた構造であった。これら旧耕土の下層には洪水砂があり、この洪水砂を掘削すると１区同様、近世の圃場を検出した。

近世圃場

圃場の形状は、１区と同じであるが、２区で検出したものはさらに細長く、東西幅80㎝、南北幅11mを測る。この形状のものを調査区のほぼ中央部分で座標軸に平行に13列分を検出した。細長い圃場列の西側には一辺２～３ｍの圃場を検出した。さらに西側は土石流により削り取られている。東端は、１区同様に河岸段丘の上りがあるが、耕土層は周辺を盛り土する前の旧宅地面の影響で削平されている。

（２）第２遺構面

石組段

近世の耕土層を掘削すると、近世圃場の方向と同様に正確な東西方向に石組の圃場段を検出した。使用されている石は大きいもので60㎝、大半は30㎝前後の自然石で、２段分を積んだように見える部分もあるが、精緻な作りとはいえない。

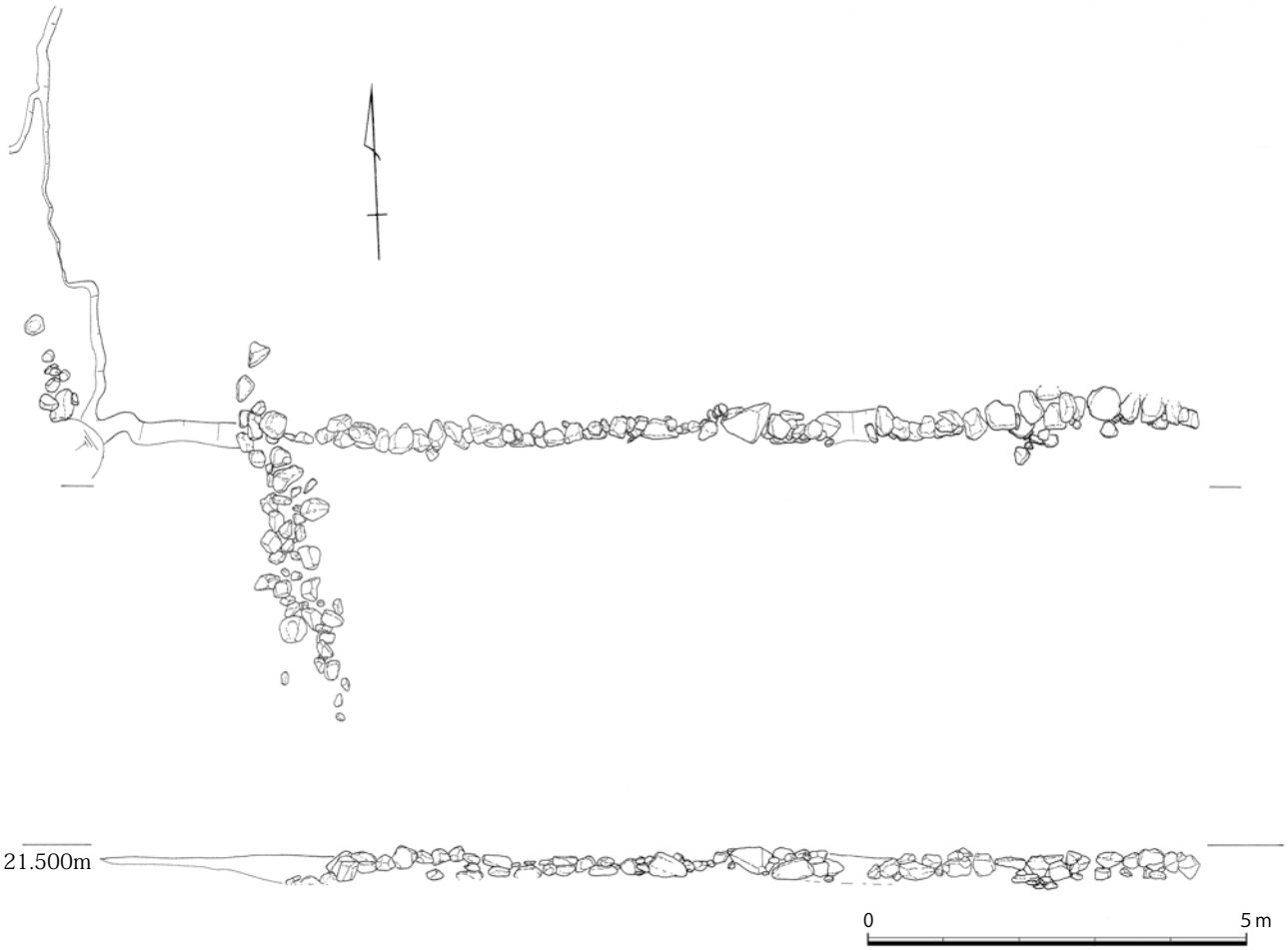


図10　17次－２区石組段平面・断面図

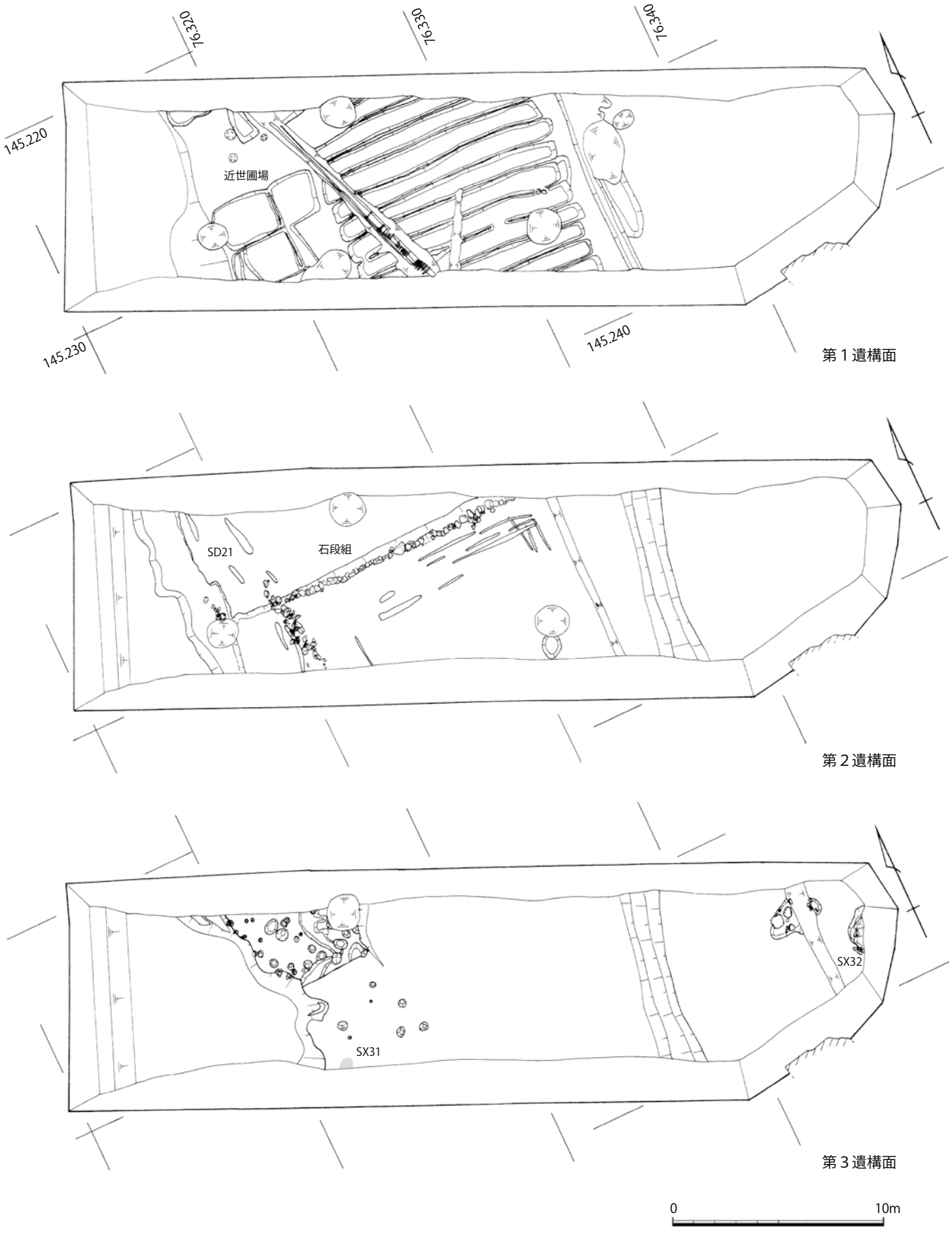


図11　17次－２区第１遺構面～第３遺構面平面図

西端には南北方向への石列を検出したが、のちの土石流の影響により崩れたようである。これらの石段を検出する土層からは15世紀代の遺物が混ざっていることから、室町時代に経営されていた圃場の段と考えられる。

（３）第３遺構面

石組の段を取り除くと、西端の土石流とほぼ中央部でも土石流である礫層が検出され、西半のごく一部に包含層と第３遺構面を検出することができた。特に北側は良好に残っていたが、南側に関しては第２遺構面である中世の圃場面により削平を受けており、深い遺構の一部だけ検出できた。

検出した遺構はピットが主体であるが、建物を構成する規則性は確認できていなかったものの、ピットの中には柱穴と考えられるような深い掘り込みのものもあるため、建物が建っていた可能性も考えられる。

調査区の中央部分は、東に河岸段丘の段があり、段下の湿地状になっていた地点を、中世の圃場造営時に石を点的に置いて整地したような痕跡を検出した。

包含層からは、11世紀末から12世紀にかけての遺物が出土しており、遺構内からも同時期の遺物が出土することから、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構が混在していると考えられる。

SX31

２区の南端で検出した土器溜り状の遺構である。明確な切り込みを持った掘り込みはなく、東西40㎝、南北40㎝ほどの範囲に大きな破片の遺物が集中して出土したため、不明遺構とした。

出土遺物

図化したものは土師器大皿（84）、須恵器捏鉢（85）の２点である。

土師器皿（84）の製作技法は一段ナデ技法である。

須恵器捏鉢（85）はロクロ成形で、底部外面には回転糸切りである。体部は直線的に開く。

写真18　17次－２区SX31土器出土状況

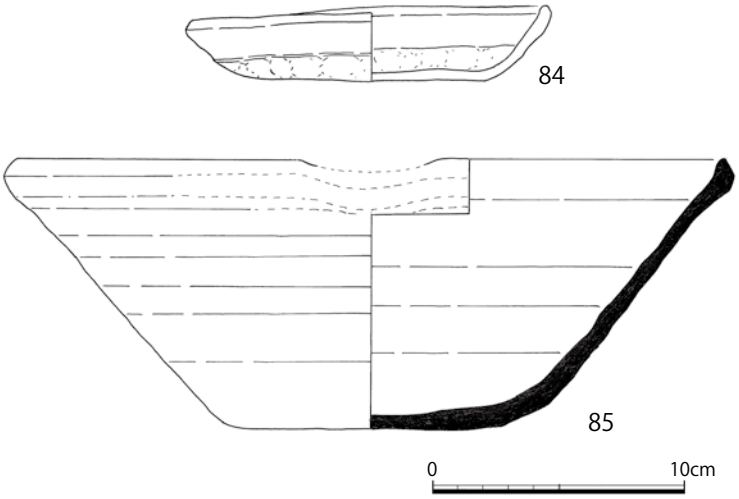


図12　17次－２区SX31出土土器

第４章　第18次調査

第１節　調査区

校舎関連の調査は、1～７区およびⅠ～Ⅳトレンチに区分し順次調査を実施した。また、北側に位置する旧幼稚園舎は、８区として調査した。各調査区状況は次のとおりである。

１　区　調査区の西辺は旧湊中学校の擁壁を設置する際に撹乱されており、西北辺には中学校建設以前と考えられる２ｍ×３ｍの大きな撹乱が４つ連なって検出された。南部において他の調査区より上層の遺構面を確認できた。この遺構面を第１遺構面とする。

２　区　調査区の中央東寄りに位置する。既存建物（中学校校舎）の基礎によって、現地表下２～2.5m程度まで掘削されており、建物基礎から外れた西端部分に平安時代の遺構面がわずかに残存していた。

３　区　調査区の中央東寄りに位置する。既存建物の基礎工事とその撤去作業によって、現地表下約1.5～２ｍまで掘削されており、建物基礎から外れた西端部分と南端部分に平安時代～中世の遺構面がわずかに残存していた。

４　区　調査範囲の南東部に位置する。調査区の北側1/3ほどは建物基礎撤去の際に遺構面まで掘られているが、それ以外の部分は良好に遺構面が残存していた。

５　区　４区の西側に並行する部分にあたる。南半部分では従前の建物の基礎によってかなりの部分が削平されていたもののそれ以外は比較的良好な遺構面が確認された。

６　区　３区の西側にあたり北西部分で１区に接する。南東隅部分が南北15ｍ、東西12ｍにわたり段状に削平を受けている。

７　区　調査区の北部、２区の西側にあたり全体に削平をうけているようで盛土・旧耕土直下に遺構面が存在する。北側は基礎等によって大きく撹乱されている。

第２節　基本層序

グランド整地土の下は、中近世の耕作土（灰色～黄灰色砂質土）、黄灰色～黄灰褐色砂質土が遺構面（T.P.21.70m）となり、土坑・溝・小流路が検出された。

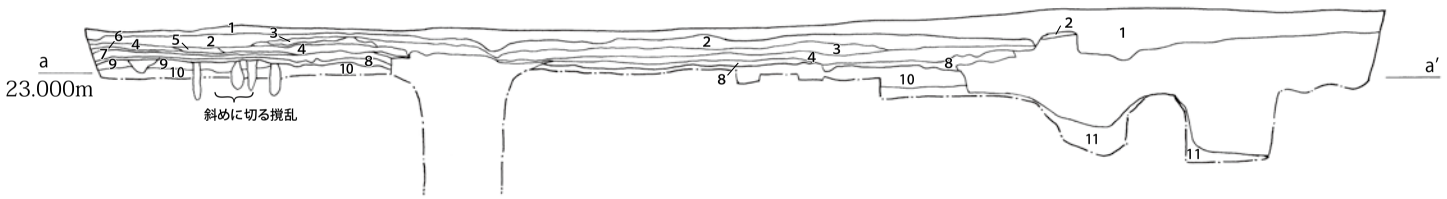
平安時代遺構面　遺構校舎造成時の盛土・基礎撤去時の撹乱層、戦災の後片づけの整地層の下は、中近世の耕作土である灰色～黄灰色系砂質土が重なって堆積する。それらを除去すると、灰褐色系砂質土が現れ、この層は平安時代末頃の遺物を多く含む。この下層は洪水堆積層の黄（灰）褐色中砂～粗砂であり、この上面で平安時代末頃の柱穴・溝等の遺構が検出される。ただし、この洪水堆積層は４区の南半分および６区にしか堆積しておらず、層厚も５～20㎝と薄い。この堆積層を除くと下層の暗褐色粘性砂質土が平安時代以前の水田耕作土であることが判明し、水田畦畔も明瞭な状態で残っていることを確認した。水田耕作土の下層は明灰黄色細砂～砂質土で、４区においてはこの上面でピットを確認した。これ以下は砂礫と細砂・粗砂が交互に流れる不安定な堆積である。なお調査区の北部では旧耕土がほとんどみられず遺構面があらわれる部分もある。遺構面の基盤層は、北よりの１区～３区と６区の北部および７区にかけては黄灰色～黄灰褐色シルトであるが、５区から６区中央部にかけては洪水堆積層の黄（灰）褐色細砂～粗砂で、また７区においては、土石流に伴う大型の転石が遺構面に露呈している部分が数箇所みられた。

水田面

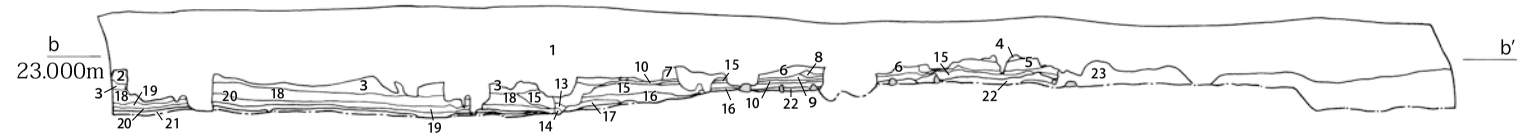
土石流

図13　18次調査区土層断面図

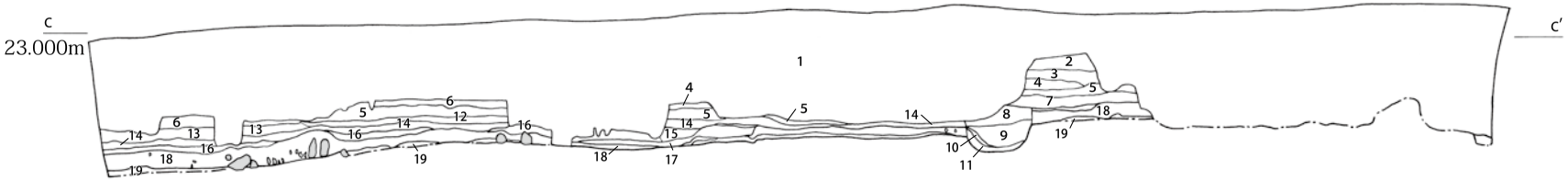
2区　西壁



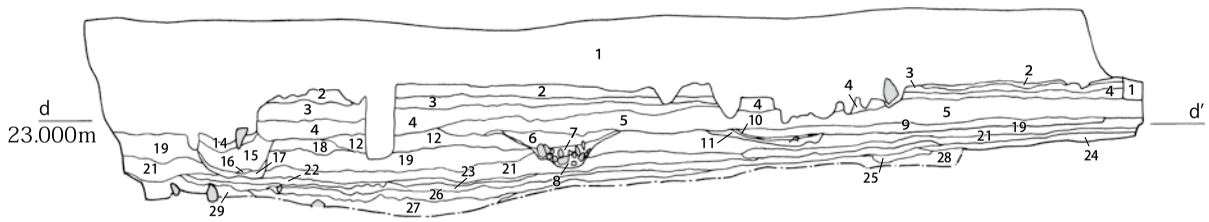
3区　西壁

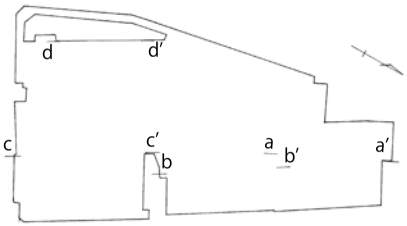


4区　西壁



5・6区　西壁





2区西壁
1．工事盛土
2．表土
3．整地土
4．淡灰色砂質土
5．黄灰褐色砂質土
6．明黄褐色粗砂
7．灰褐色砂質土
8．灰黄褐色砂質土
（中世遺物包含層）
9．灰茶褐色砂質土
10．淡黄灰褐色砂質土
11．茶褐色粘性砂質土

3区西壁
1．淡灰白色砂質土
2．茶黄色粘性砂質土
3．淡灰褐色粘性砂質土
4．明青灰色粘性砂質土
5．青灰色粘性砂質土
6．明灰黄色砂質土
7．明茶褐色粘性砂質土
8．暗灰褐色砂質土
9．明黄灰色砂質土
10．灰白色砂質土
11．暗灰色粘性砂質土
12．淡灰色粘性砂質土
13．淡青灰色粘性砂質土
14．暗青灰色粘性砂質土
15．灰褐色粘性砂質土
16．暗褐色粘性砂質土
（遺物包含層）
17．灰褐黄色粘性砂質土
18．暗灰褐色粘性砂質土
19．灰黄色粘性砂質土
20．明黄灰色粘性砂質土
21．淡灰黄色粘性砂質土
（遺構面基盤）
22．黒褐色砂質土
（土石流上面）
23．暗黒褐色砂質土
（土石流）

4区西壁
1．表土・整地土
2．淡灰色砂質土（中世耕土）
3．茶褐色砂質土（　〃　）
4．明灰色砂質土（　〃　）
5．淡黄褐色砂質土（　〃　）
6．灰褐色砂質土（　〃　）
7．暗茶褐色砂質土（　〃　）
8．茶黄色砂質土（SD201整地土）
9．灰黄色砂質土（SD201埋土）
10．黒色粘質土〔炭層〕（SD201埋土）
11．黒褐色粘性砂質土（SD201埋土）
12．黄褐色砂質土（中世耕土）
13．黄灰褐色粘性砂質土（中世耕土）
14．灰褐色粘性砂質土（遺物包含層）
15．赤褐色粗砂（遺構面基盤）（洪水砂）
16．黄灰色中砂
17．灰色細砂
18．暗褐色粘性砂質土（下層水田面）
19．暗黄色粘性砂質土
20．明灰黄色粘性砂質土

5・6区西壁
1．表土
2．淡灰褐色粘性砂質土
3．黄色粘性砂質土
4．灰褐黄色砂質土
5．灰黄色砂質土（遺物包含層）
6．淡灰褐色砂質土（SX201南東西溝埋土）
7．淡灰褐色粘質土（SX201南東西溝埋土）
8．　〃　（SX201南東西溝埋土）
9．暗灰褐色砂質土（西側落ち込み）
10．灰色砂質土（SX201埋土）
11．暗灰色粘性砂質土（SX201埋土）
12．暗灰褐色粘性砂質土（遺構面基盤）
13．灰黄色粘性砂質土
14．褐灰色砂質土（SD201埋土）
15．褐色粘性砂質土（　〃　）
16．灰色粘質土（　〃　）
17．灰褐色砂質土（　〃　）
18．灰褐色粘性砂質土（遺構面基盤）
19．灰褐黄色粘性砂質土（遺構面基盤）
20．暗褐灰色砂質土
21．暗褐色砂質土
22．黒褐色砂質土
23．黒褐色砂質土
24．黄灰褐色砂質土
25．暗灰黄色砂質土
26．灰褐色粘質土
27．青灰黄色粘質土
28．黄灰色粘質土
29．灰色粗砂（土石流）

第３節　１～７区・Ⅰ～Ⅳトレンチの調査成果

（１）第１遺構面

この調査区は、全体に削平が激しく上面の第１遺構面については、１区の南側約３分の１で確認された他は、３区やⅠトレンチの一部の狭い範囲で部分的に確認されたにとどまる。中世から近世にかけての遺構面と考えられる。

（２）第２遺構面

主な遺構としては、調査区南部において掘立柱建物６棟と井戸３基、敷地内を区画すると考えられる東西方向の溝１条、南北方向の集石溝、石組遺構、中央部で掘立柱建物１棟と西側でみつかった土器を多量に含む落ち込みとその下層で検出された並行する溝群や集石からなる園池状遺構などがある。

SB201　調査区の南東隅に位置する東西２間（5.0m）、南北６間（12.5m）以上の掘立柱建物で調査区東外に拡がる。総柱の構造で南北棟と考えられるが、南北の柱列のうち西から２列目の南側４間分は柱穴を欠いている。柱間は東西2.4～2.8ｍ、南北2.0～2.4ｍとなる。

図14　18次－４区SB201平面・断面図

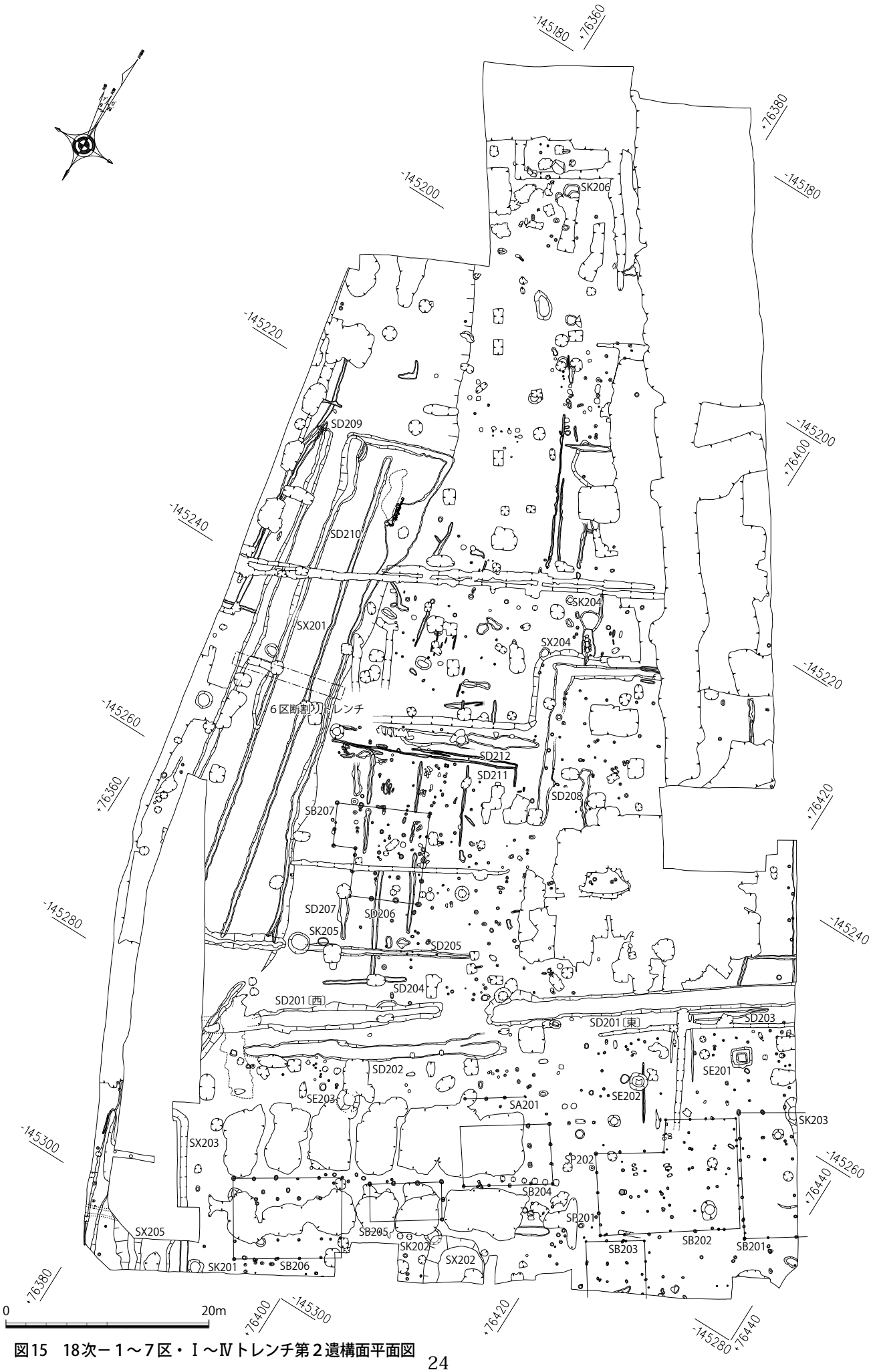


図15　18次－１～７区・Ⅰ～Ⅳトレンチ第２遺構面平面図

南の１間分はＩトレンチで確認した。柱穴は、径60～20㎝で深さ10～50㎝を測る。また建物の主軸は、Ｎ55°Ｅ（正東西方向より35°南に傾く）方向で築かれている。なお、西側に存在するSB202とは柱筋が接しており同時には存在できない。

SB202　SB201の西に接して建つ掘立柱建物で、東西６間（14.0m）、南北４間の間（8.2m）の東西棟で北側に２間×３間の出庇を有する。総柱建物で柱穴の直径は、20～50㎝、深さ５～40㎝で、建物の北西では底部に石が据えられたものが認められた。柱間は東西2.2～2.5ｍ、南北1.3～2.1ｍとなる。建物の主軸は、SB201とは若干違えＮ56°Ｅを示す。

SB203　SB201の南側に位置する掘立柱建物で、東西３間（5.8ｍ）以上、南北２間（3.8ｍ）以上の総柱建物で、南および西側は調査範囲外に延びる可能性がある。上面の削平のためか検出状況では南西隅の柱穴を欠く。柱間は東西1.8～1.9ｍ、南北1.8～2.0ｍとなる。柱穴は、径60～20㎝で深さ10～50㎝を測る。建物の主軸は、Ｎ56°Ｅを示す。

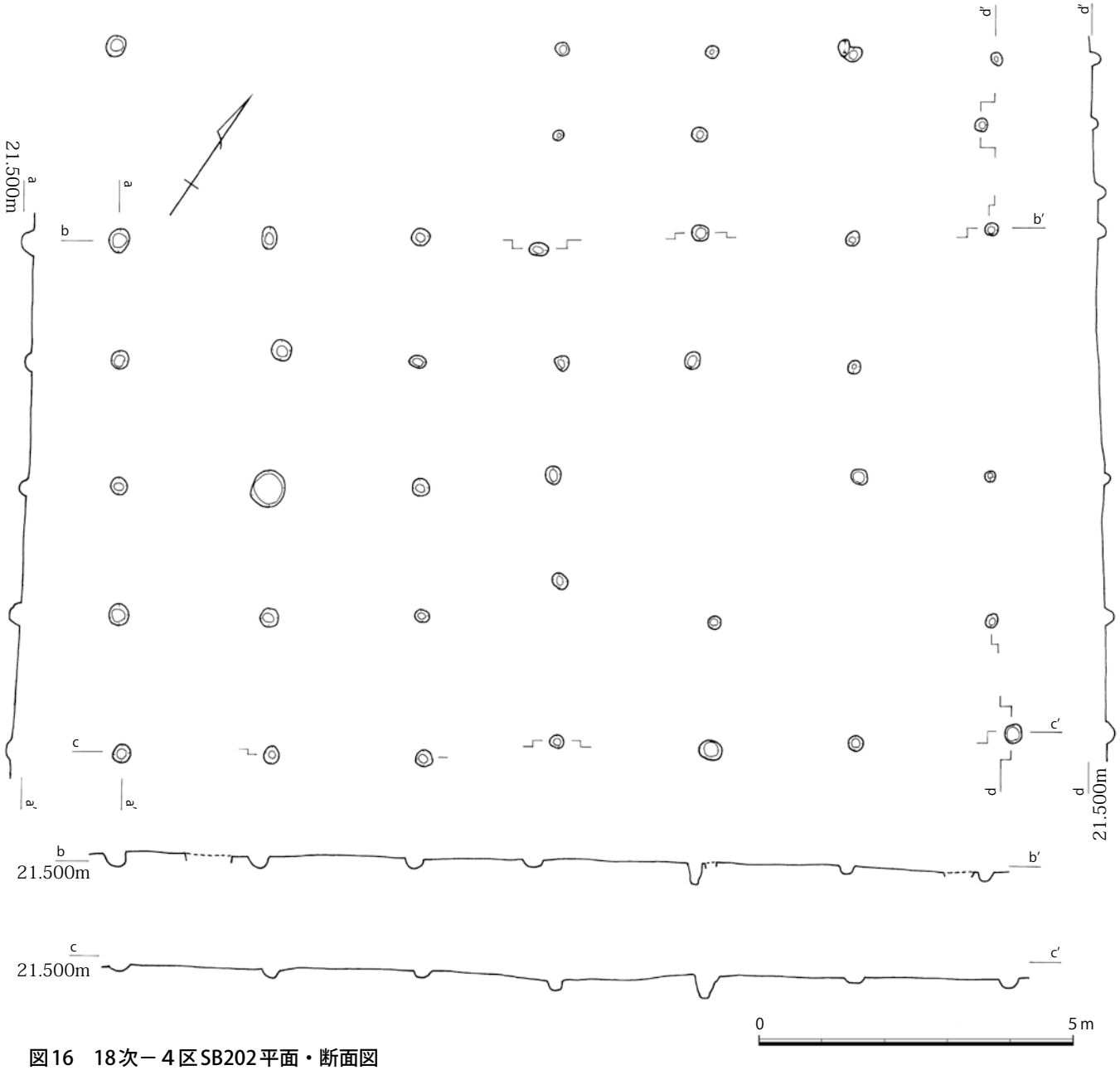


図16　18次－４区SB202平面・断面図

SB204　SB202の西側において検出された東西棟の掘立柱建物で、東西４間（8.8m）、南北３間（6.0m）の規模をもつ。総柱建物と考えられるが、北西から中央の柱列は削平のため確認できなかった。柱間は東西2.0～2.4ｍ、南北2.0ｍである。総柱で柱穴の直径は25～60㎝、深さ15～40㎝を測る。建物の主軸は、N 56° Eを示す。北側2.5ｍには、SA01が並行する。

SB205　SB204の南西に隣接して検出した、東西３間（7.0ｍ）、南北２間（3.8ｍ）以上の総柱建物で、柱間は東西2.4m、南北1.8・2.0mである。柱掘形は、他の建物に比べ全体的に一回り大きい。総柱で柱穴の直径は35～45㎝、深さ20～30㎝を測る。主軸は、N 56° Eを示す。

SB206　SB205の西に並列する、東西５間（10.8ｍ）、南北４間（8.0ｍ）の総柱建物と考えられるが、中央の柱列は削平のため確認できなかった。南の１間分はⅢトレンチで確認した。柱間は東西2.0～2.1m、南北2.0mである。総柱で柱穴の直径は25～40㎝、深さ20～50㎝を測る。建物の主軸は、N 57° Eを示す。

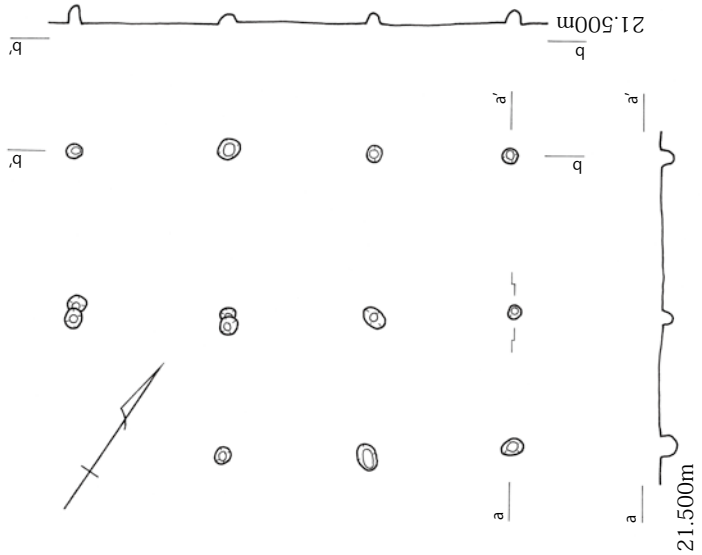


図17　18次－４区SB203平面・断面図

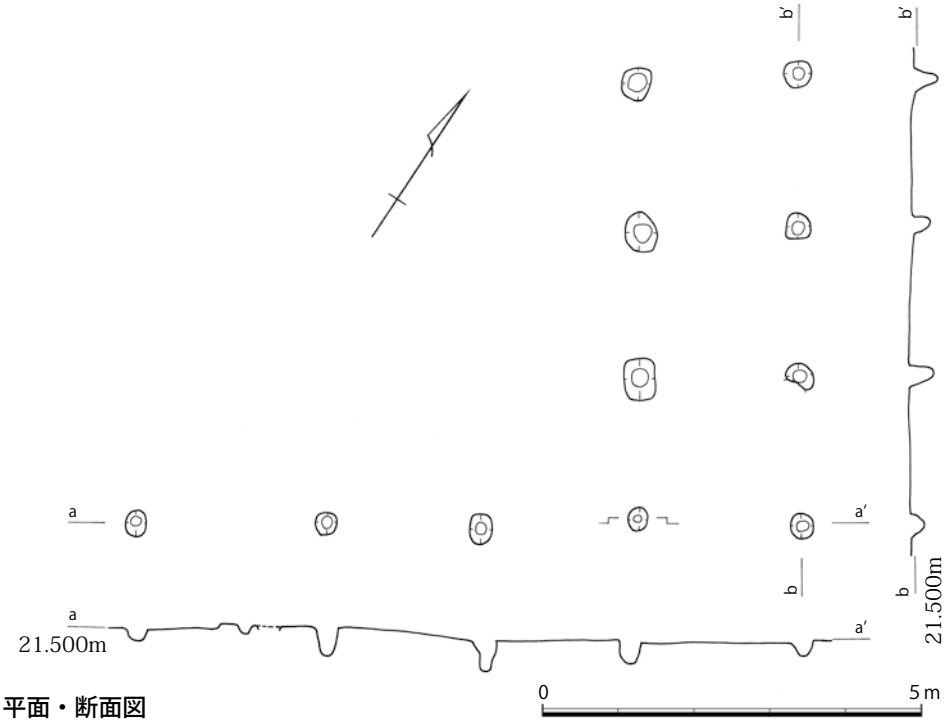


図18　18次－５区SB204平面・断面図

SB207　SD201の北側で検出した掘立柱建物で、東西６間（6.9ｍ）、南北４間の間（9.0ｍ）の南北棟で西側に１間×２間の出庇を有する。総柱建物で、柱間は東西2.2～2.4m、南北2.2～2.4mである。総柱で柱穴の直径は20～50㎝、深さ15～60㎝を測る。主軸はＮ65°Ｅを示し他の建物と方向を違える。

SA01　SB204の北側に位置する東西方向の柵列である。柱間2.0ｍほどの間隔で３間分、長さは6.2ｍを測る。ややくい違いながらさらに東に延びる可能性もある。

ピット群　SD201〔西〕の２ｍほど南において東西方向のピット群が検出されている。間隔は均一

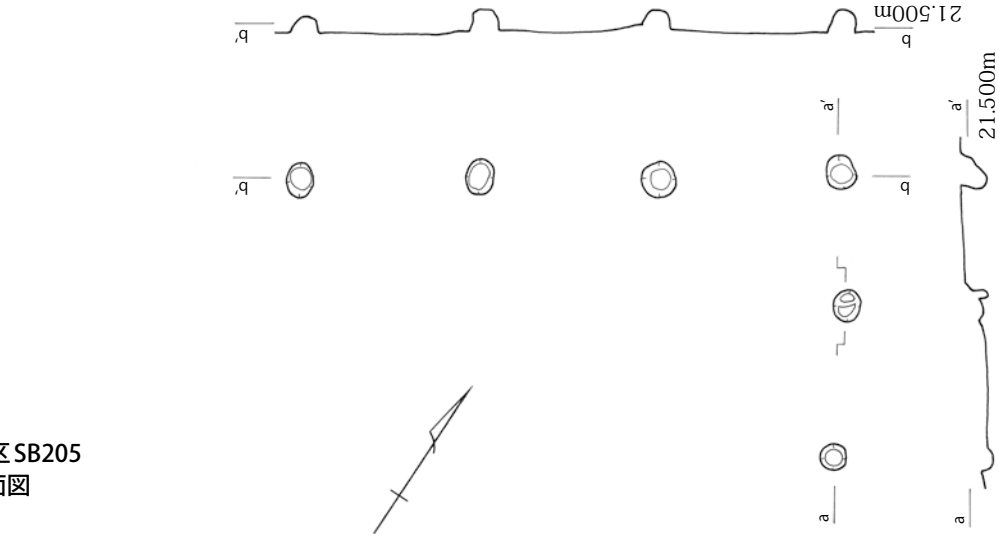
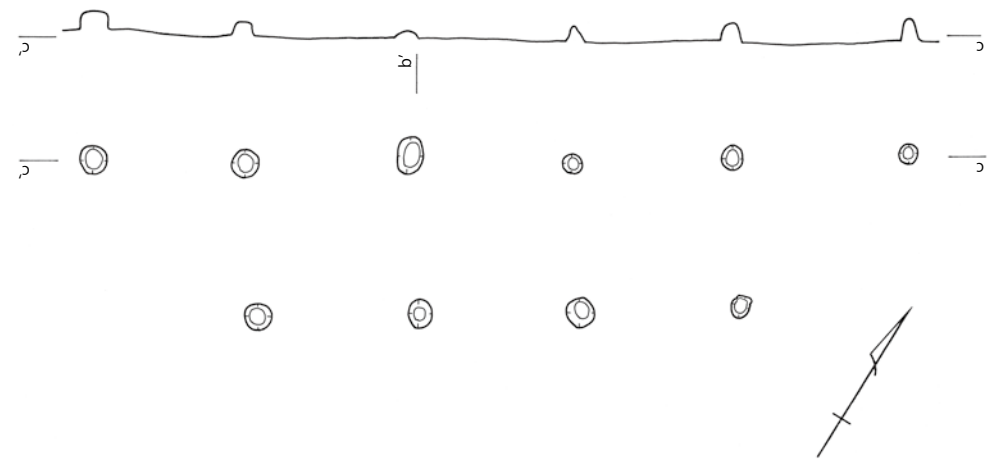


図19　18次－５区SB205 平面・断面図



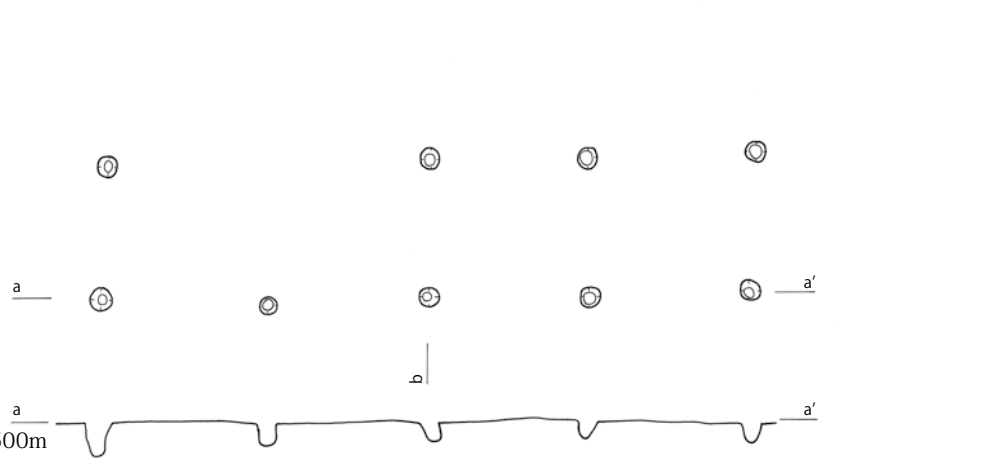


図20　18次－５区SB206平面・断面図

でなく、直線にも並ばない。ただSD201の南から建物群までの間は遺構が比較的希薄であるなか、この部分だけ溝に沿うようにピットが集中することから溝に関連する何らかの施設に伴うものであった可能性がある。

SD201〔東〕　（区画溝）調査区中央南よりの４・５区およびＩトレンチにわたって確認された東西方向の溝である。掘立柱建物群の北側にあり、検出面からの深さは東側から概ね60㎝、幅２ｍ前後を測るが、西端約２ｍでは深さ120㎝位まで徐々に深く掘り込まれており、遺物が集中して投棄されていた。

溝の堆積土は３層に分かれ、上層の淡灰褐色砂質土、暗褐色粘性砂質土には遺物は少なく、下層の（青）灰褐色粘性砂質土の特に溝底に近い部分から、平安時代末頃の土器類が完形に近い状態で多く出土した。土器は当遺跡で大量に出土する土師器の皿だけでなく、須恵器捏鉢、土師器の羽釜等も出土しており、南側にある建物群の性格を示唆している可能性がある。また炭化物が集中している部分の土壌を水洗選別すると、炭化穀粒や魚の骨が発見された。これらについては、第６章の分析成果を参照されたい。

なおこの溝は西側で約4.5m途切れて通路状の部分が存在した。さらにSD201〔西〕に連続するものと考えられる。また、東西延長31ｍで調査区外西にはさらに延びる。

図21　18次－６区SB207
平面・断面図

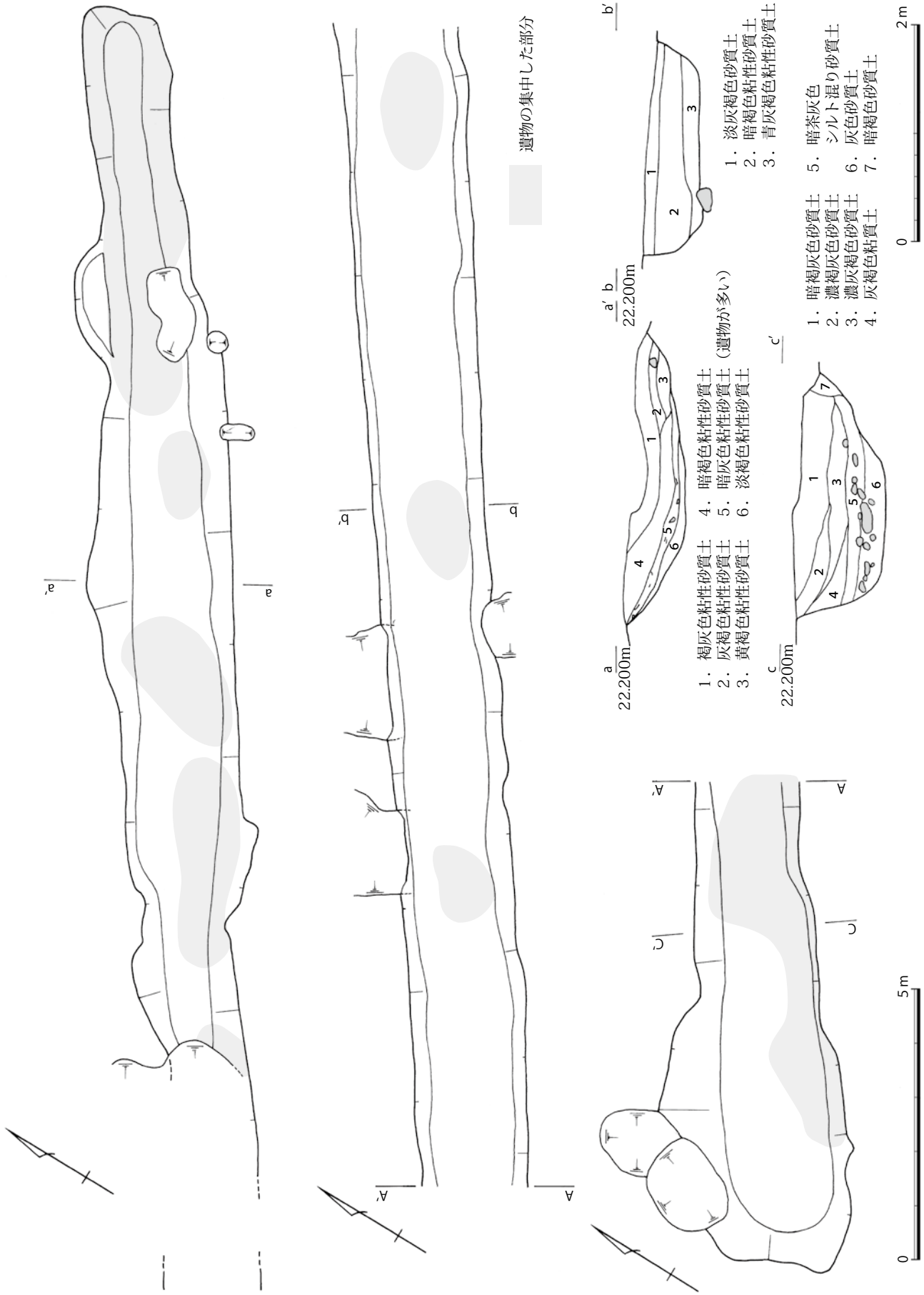


図22　18次－4・5区SD201〔東〕〔西〕平面・断面図

出土遺物

5区SD201〔東〕出土遺物

SD201〔東〕より出土した遺物を地区ごと（5区・4区・Ｉトレンチ部分）に報告する。図化した出土遺物は、土師器小皿（86～120，136～141）・皿（121～135，142～147）、白磁碗（148）、瓦器椀（149～151）、瓦器小皿（152）、須恵器椀（153，154）、須恵器鉢（155，156）などがある。土師器小皿は手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残すもの（86～115，137～141）、口縁端部を折り曲げて、いわゆるコースター型に仕上げるもの（116～119）、ロクロ成形で、底部外面に回転ヘラ切りの痕跡を残すもの（120）、同じく回転糸切りの痕跡を残すもの（136）がある。土師器皿は手づくね成形で底部に指頭圧痕を残すもの（121～135，142～147）があり、口縁部径は121が12㎝、その他は14～15㎝を測る。136～147には内外面に油煙や燈芯の痕跡が残り、燈火器として用いられたと判断される。

148は白磁の碗で、直線的な体部に端反りの口縁端部を有する。149～151は瓦器椀で、低い器高に外面には指頭圧痕を残し、口縁部は横方向のナデを施す。見込みの暗文は平行線状（150，151）である。内面上半部には圏線ミガキが残る。152は瓦器小皿で内面には圏線状、見込部分には直線状の暗文を施す。器面は赤褐色を呈し、燻化が進んでいない。口縁部内面に油煙が付着する。153・154は須恵器椀、155・156は須恵器捏鉢で、ロクロで成形され、底部には回転糸切りの痕跡を残す。これらの土器は溝堆積土下層からまとまって出土しており、時期差がほとんどない資料と判断される。

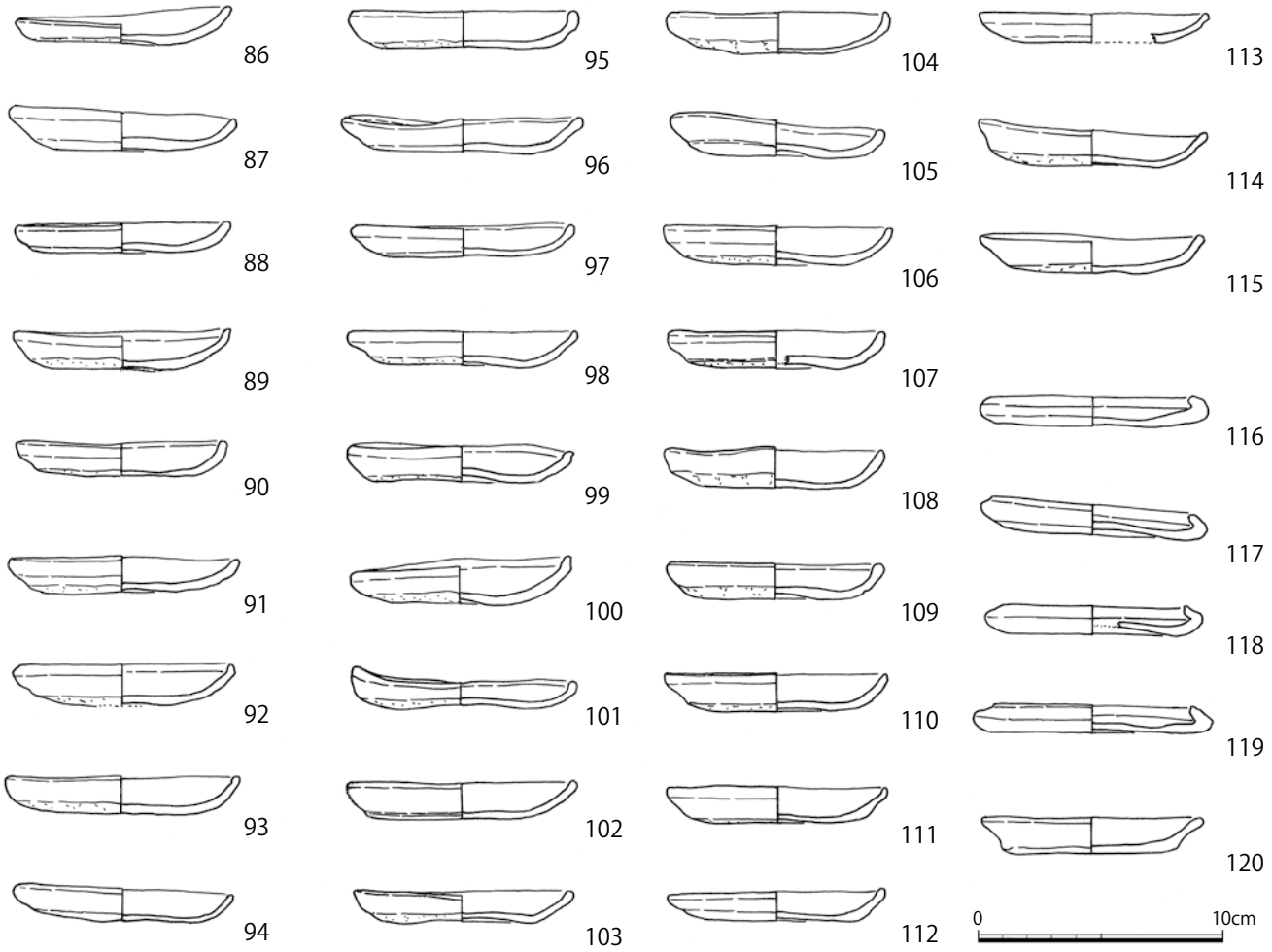


図23　18次－5区SD201〔東〕出土土器・陶磁器（1）

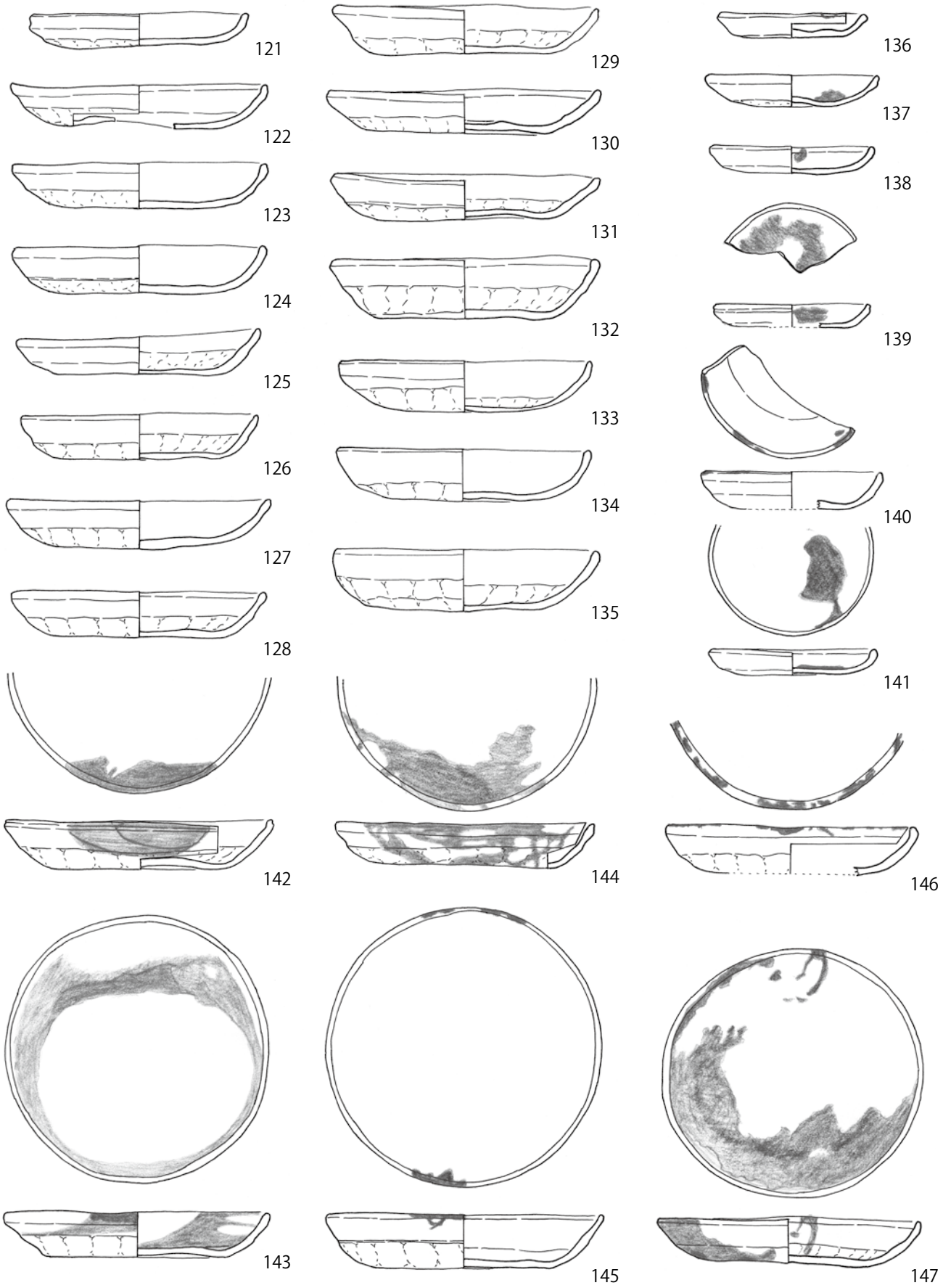


図24　18次－５区SD201〔東〕出土土器・陶磁器（２）

0　10cm

4区SD201〔東〕出土遺物

SD201は４区・Ｉトレンチまで延び、５区同様に下層～底付近からまとまって遺物が出土した。図化した出土遺物は、土師器皿（157～171，197～199，205）・小皿（172～180，202～204）、土師器坏（181～186，200）、土師器羽釜（194，196）、土師器鍋（195）、瓦器椀（192，193）、須恵器椀（187～189，201）、須恵器小皿（190）、須恵器捏鉢（191）などがある。

土師器皿・小皿は手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残すものが多い。皿は口径が14㎝～15㎝、小皿は９～10㎝の範囲に収まる。180の口縁端部には油煙の痕跡が残る。土師器坏はロクロ成形で、底部は回転糸切り未調整である。土師器羽釜は口径21㎝の屈曲して外反する口縁端部を持つもの（194）、口径25㎝の内傾するもの（196）がある。土師器鍋は半球形の胴部に外反する口縁部を持ち、内面は刷毛目、外面はタタキ成形の後、ナデで調整している。瓦器椀は器高が低く、胴部下半には指頭圧痕が残り、193の見込には平行線状の暗文、内面上半部には圏線ミガキが残る。いずれも和泉型の瓦器椀である。須恵器椀はロクロ成形で直線的に開く体部を持ち、底部外面は回転糸切り未調整である。須恵器小皿は短い口縁部を持つ、成形技法は椀と同様である。須恵器捏鉢は直線的に開く体部を持ち、口縁端部が外側に傾斜し、不明瞭な段を持つ。

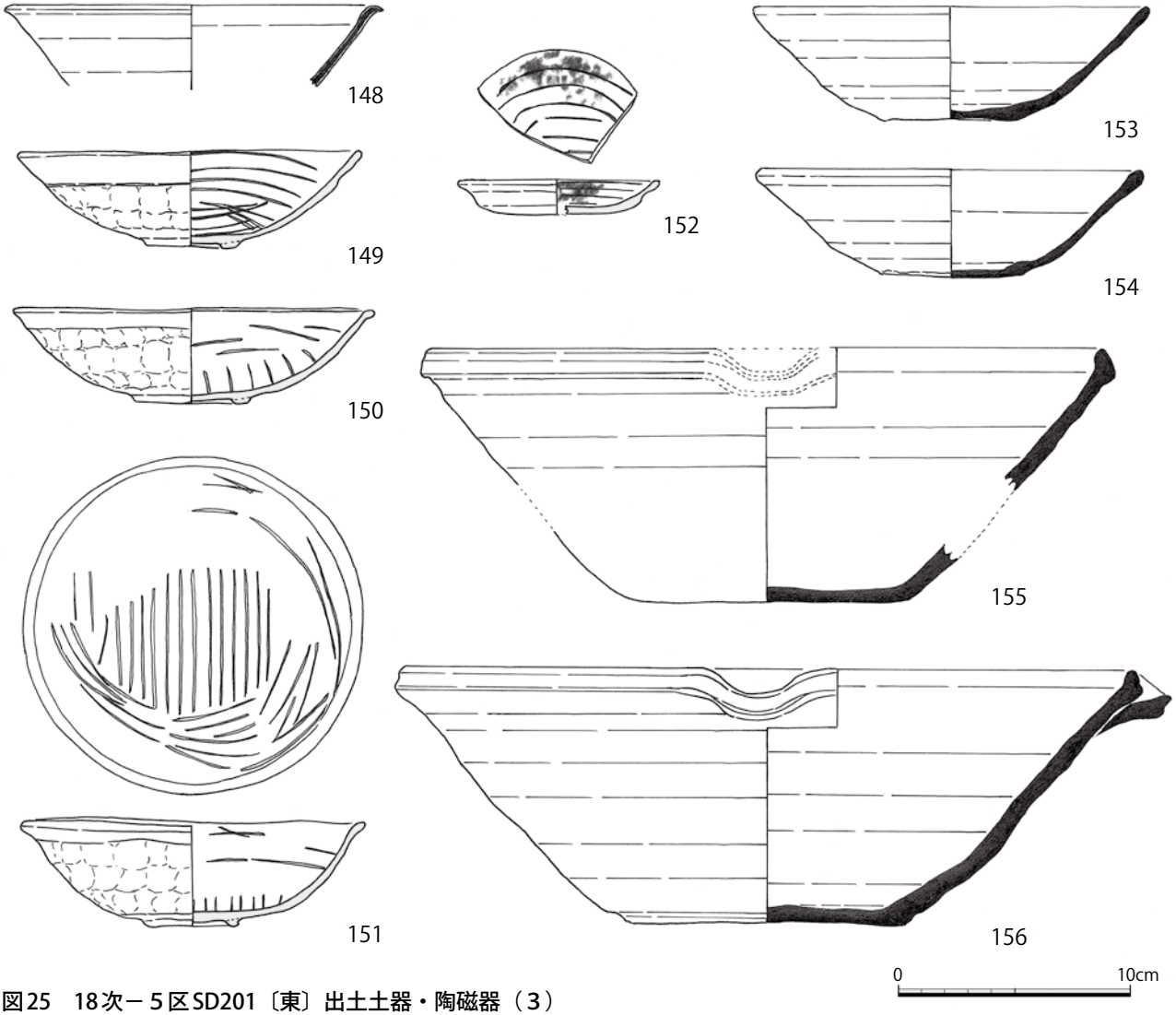


図25　18次－５区SD201〔東〕出土土器・陶磁器（３）

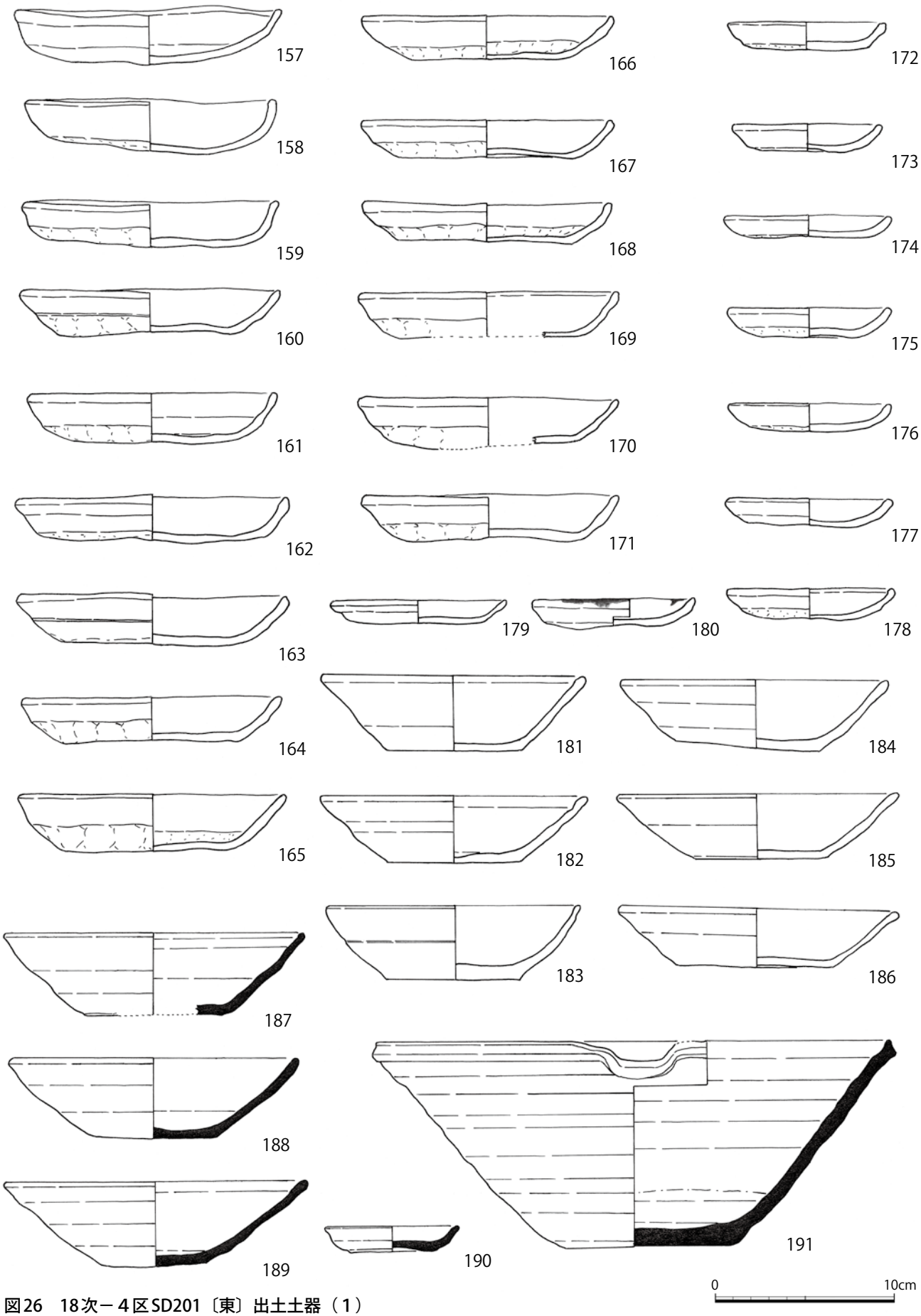


図26　18次－４区SD201〔東〕出土土器（１）

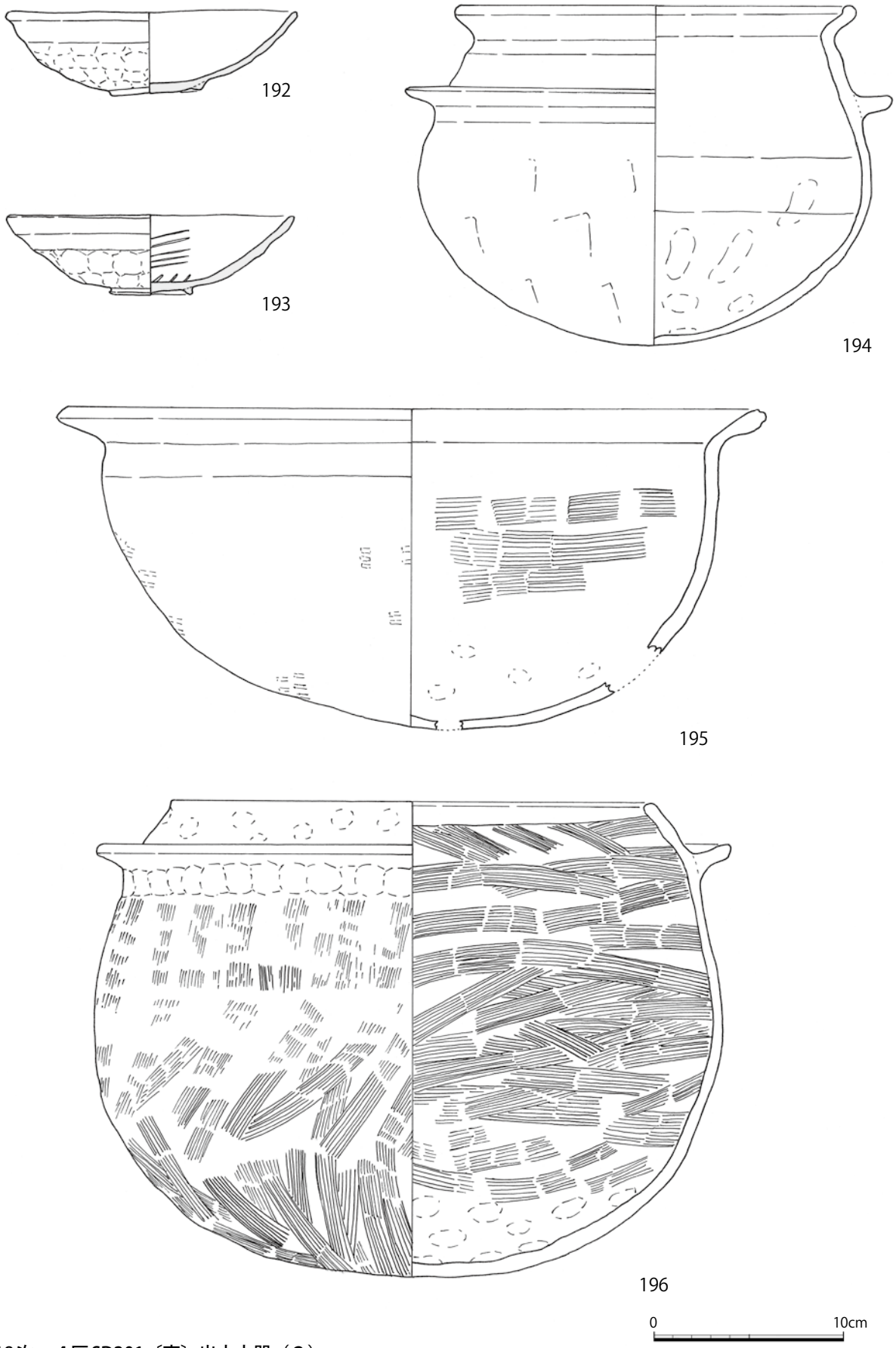


図27　18次－４区SD201〔東〕出土土器（２）

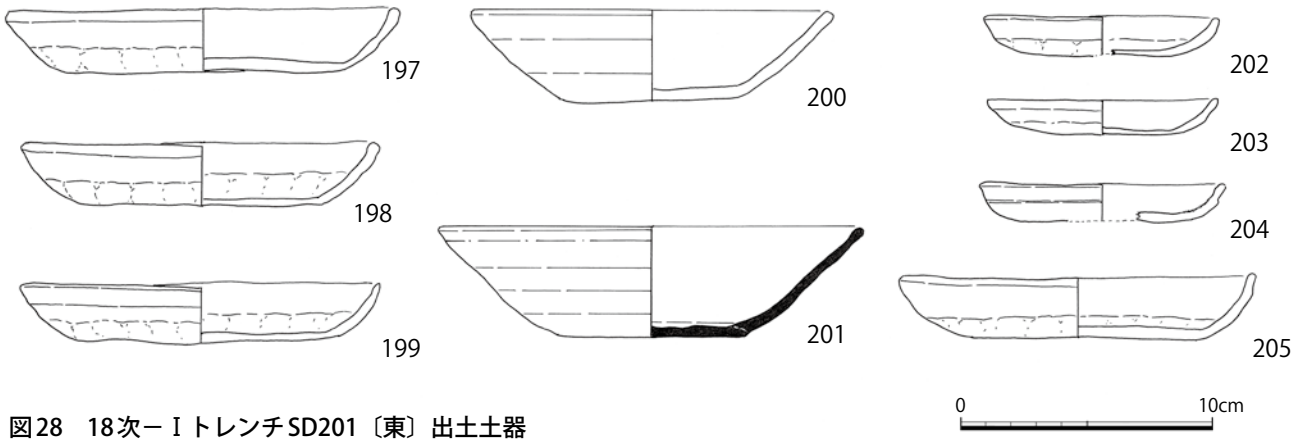


図28　18次－Ⅰトレンチ SD201〔東〕出土土器

SD201〔西〕（区画溝）

SD201〔東〕より連続すると考えられる東西方向の溝である。幅1.5～2.8mで東端が1.5mとやや狭まり中央部は肩崩れが生じているようで広くなる。堆積状況については土質は若干変わるものの西側と概ね同様である。なお、SD201〔東〕の西端部以外に比して遺物の出土量はかなり多い。

検出面の西側ほど上層からの削平が激しく浅くなる。また調査区の西壁手前の攪乱で切られているが、西壁面では存在が確認できるためさらに西に延びることがわかる。

出土遺物

図化した出土遺物は、土師器小皿（206～305）・皿（306～357，359，360）土師器坏（358）、瓦器椀（361～364，366～368）、瓦器小皿（365）、須恵器椀（370～373）、青磁碗（369）などがある。

土師器小皿は数が多く100個体ほど図化しているが、図化したすべてが手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残す。底部の成形時に中心部を窪ませるもの（236，242，247，248，263）が認められる。口径は概ね９～10㎝の範囲に収まる。

器高は１～1.5㎝のものが多いが、２㎝程度のもの（271～273）もあり、作り手の個性によるものか、用途の違いであるかは明らかでない。

また、焼け歪みが顕著なもの（286～298）があり、焼成時の不良品を選別して捨てたものか、そのまま器として使用後に廃棄されたのかは判然としない。

300～302は扁平な体部に口縁端部を丸く折り曲げたコースター型の小皿である。扁平な底部には指頭圧痕を残すものが多い。コースター型の小皿の用途は、皿・椀などの容器の下に敷いたものと考えられるが出土数は限られており、具体的な使用方法は明らかでない。

303～305は口縁端部に燈芯の焼け焦げた痕跡が明瞭に残っており、燈火器として用いられたことが判る。

土師器皿の上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、見込は指押さえで成形の後、軽くナデるが、指頭圧痕を残すものがある。下半部は手づくね成形の後、軽くナデを施して器面を整えているが、指押さえの痕跡を残すものが多い。

成形技法は、いわゆる一段ナデ技法で作られている。口径は14～15㎝の範囲に収まる。口縁端部は明瞭に面取りを行うもの（319，329，333，336，340，353）、浅い段を有するもの（315，325，330）と、丸く収めるものなどがある。これらを観ると、各々の作り手が皿を

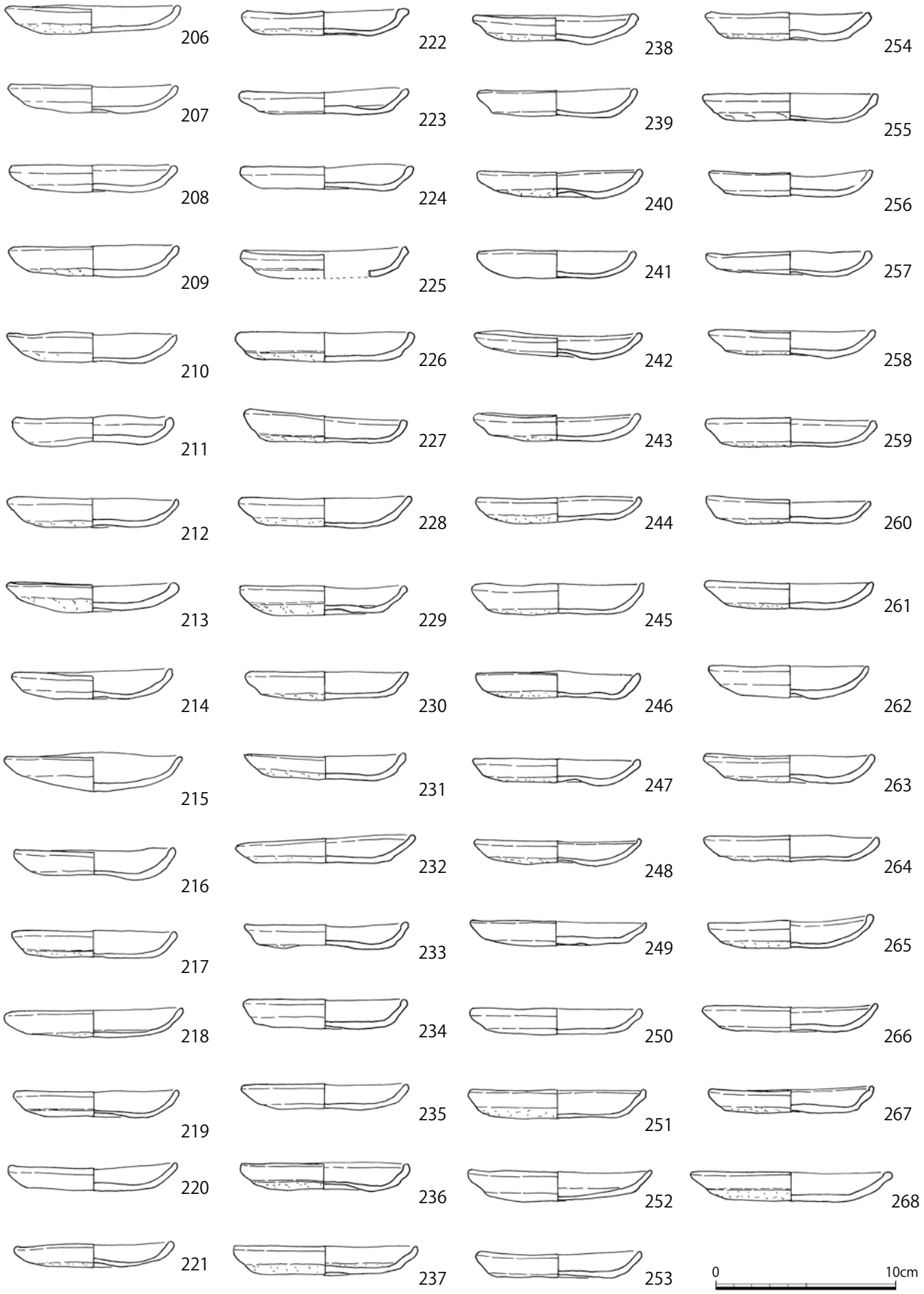


図29　18次－5区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（1）

仕上げる時の癖が反映されていると考えられ、当遺跡で多量に出土する土師器皿の製作は複数の作り手によって担われていたことが窺われる。

358は土師器坏でロクロを用いて成形し、底部は回転糸切り未調整である。

359の土師器皿は見込の１カ所を、錐状の鋭利な利器で穿孔している。その目的は不明である。360の土師器皿は口縁端部の複数個所に燈心の痕跡が残り、燈火器として用いられたことが判る。

361～364，366～368は瓦器椀で、口径15㎝、器高4.5㎝前後を測り、器高に対して口径が大きく、低平な印象を受ける。これらに断面三角形または半円形の高台を貼り付けている。胴部下半部は指押さえで二段または三段で成形し、口縁部は横方向のナデで仕上げ、二段にナデを行って仕上げるもの（361，364，367）もある。内面はナデで整形された後、見込には平行線状の暗文、内面上半部には圏線ミガキが残る。364は圏線のミガキが太いのが特徴的である。いずれも和泉型の瓦器椀である。365は瓦器小皿で、底部は指オサエ、口縁部は横方向のナデを行う。内面にはヘラ磨きを施す。

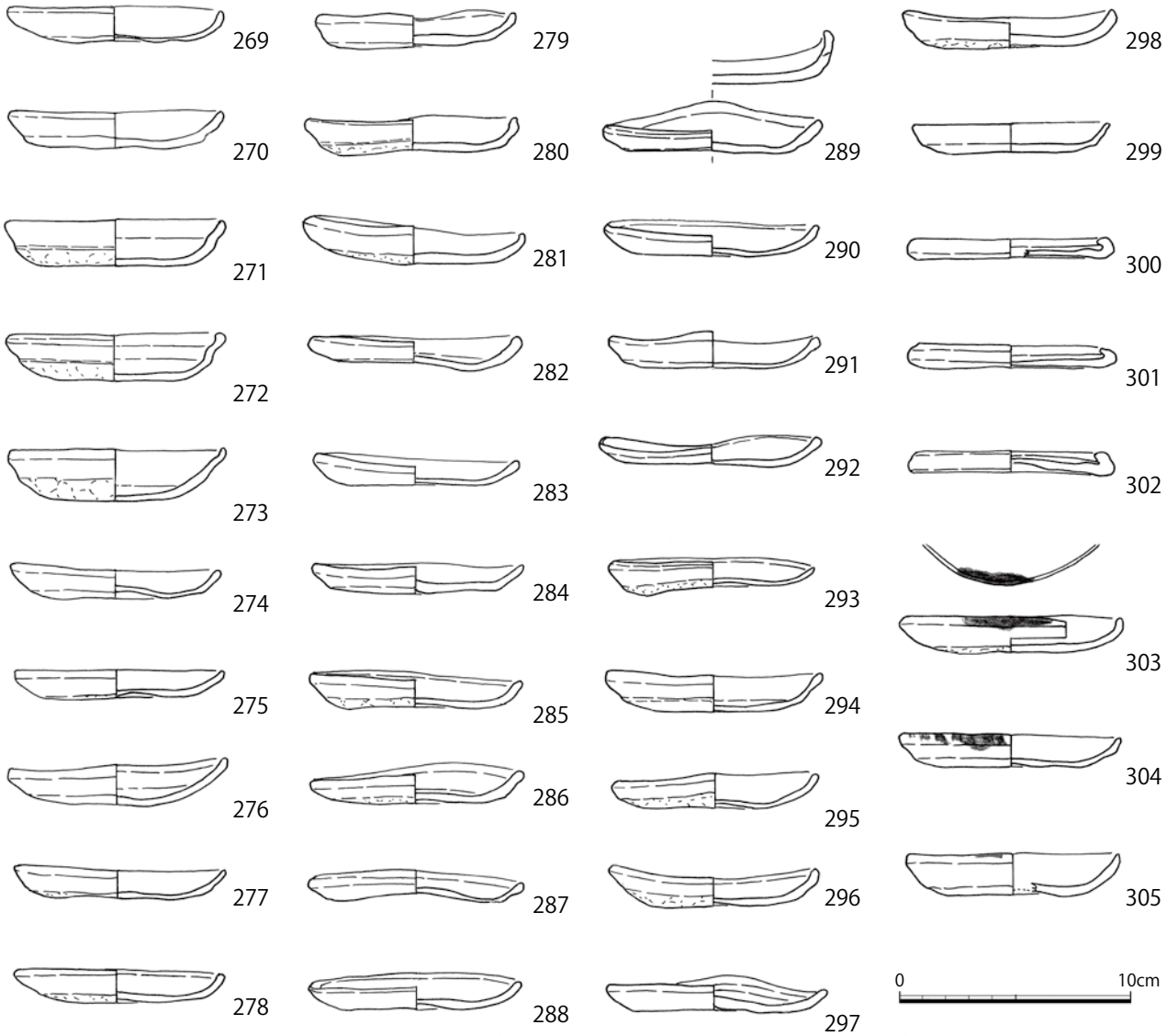


図30　18次－５区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（２）

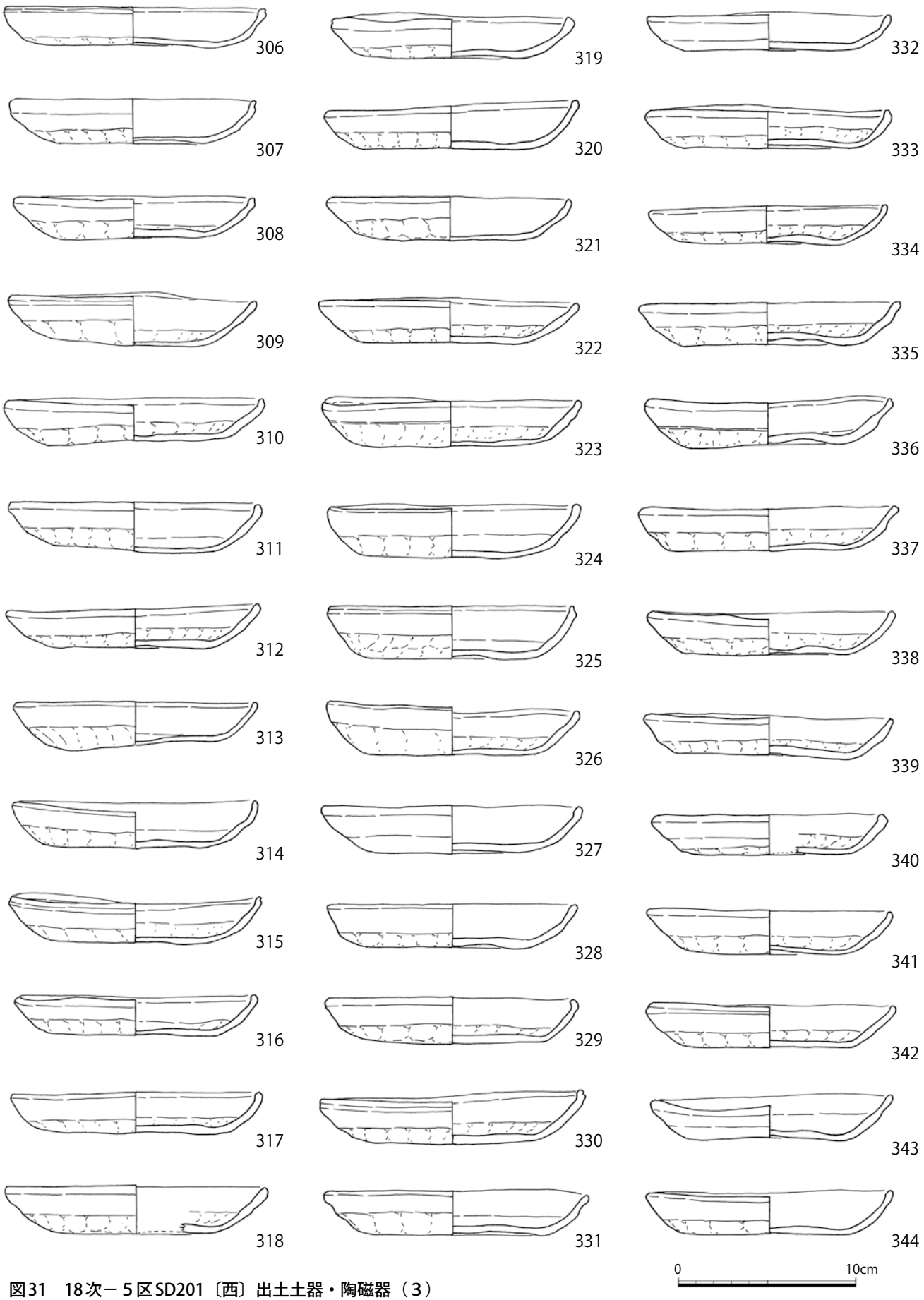


図31　18次－5区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（3）

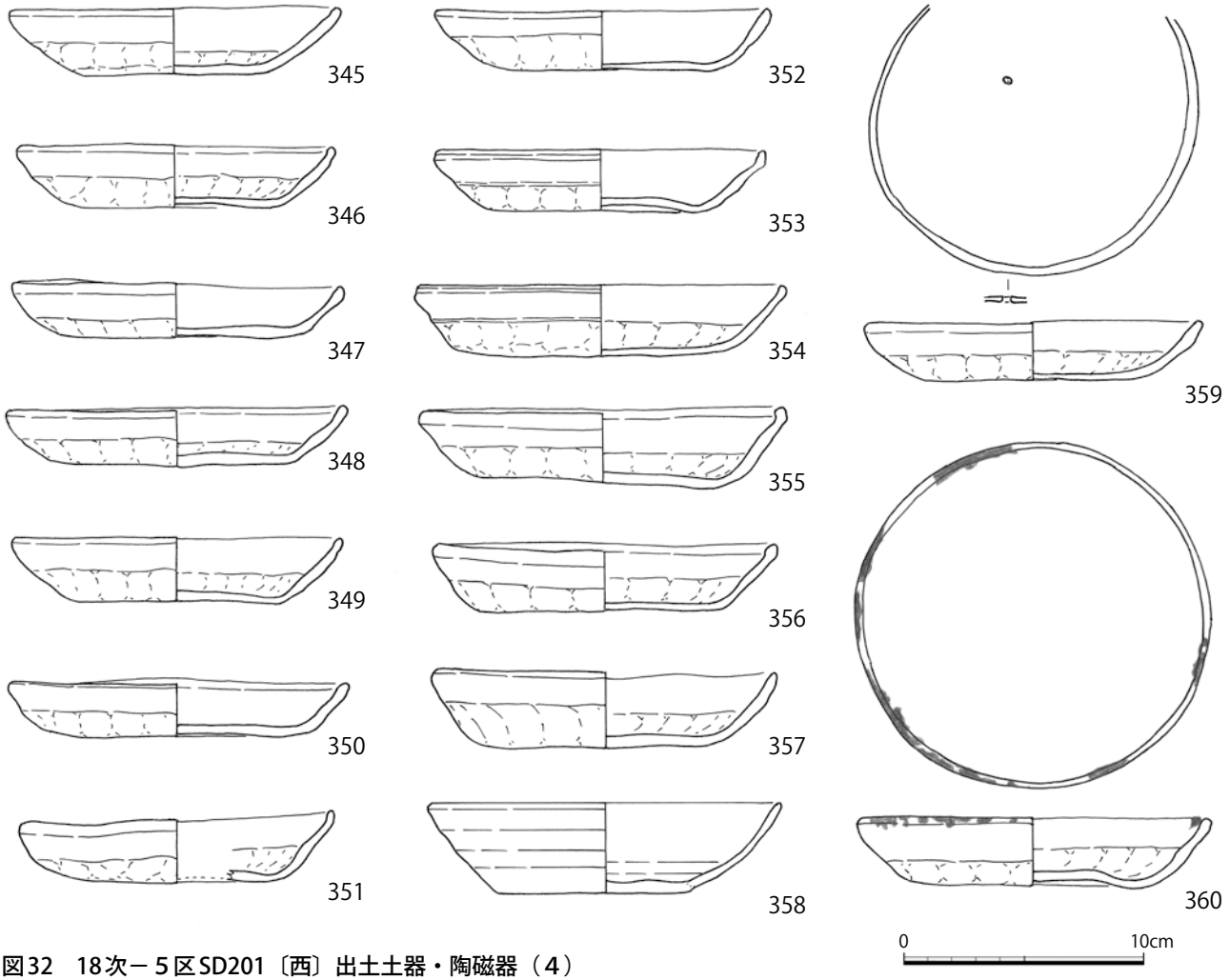


図32　18次－５区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（４）

369は青磁碗である。ロクロで挽き出した体部～口縁部をカンナで削って整形した後、ヘラ状工具で平行線を施す。内面は見込部分に段を削り出し、外面には櫛状の工具で施文する。その後内面には全面に、外面は高台の少し上まで釉薬を掛ける。釉色は光沢のあるオリーブグリーンである。中国産と思われるが産地はよく判らない。

370～373は須恵器椀で、ロクロ成形の後、回転糸切りで切り離す。いずれもほぼ直線的な体部～口縁部を呈し、口径は15.5～17㎝、器高は4.5～5㎝である。

SD201〔西〕では、大量の土器が出土した。そのほとんどが、土師器の皿・小皿であり、その他は少量の瓦器椀・皿、須恵器椀、青磁碗が発見されたにとどまった。

これらの出土状況は、同じ層位に折重なる状態で見つかっており、短い期間に投棄されたことを示しているため、ほぼ時期を同じくする土器群と判断される。

種類の限定された土師器の皿が大量に出土することは、多人数に食事を供する様々な行事が営まれたということを示唆するものである。

さらに燈火器として使用された皿が、しばしば出土土器の中に見出されるということは、相当高価な植物油（荏胡麻油か？）を消費して、夜間の照明を必要とする生活を送っていた人々の存在を想起することが可能であろう。

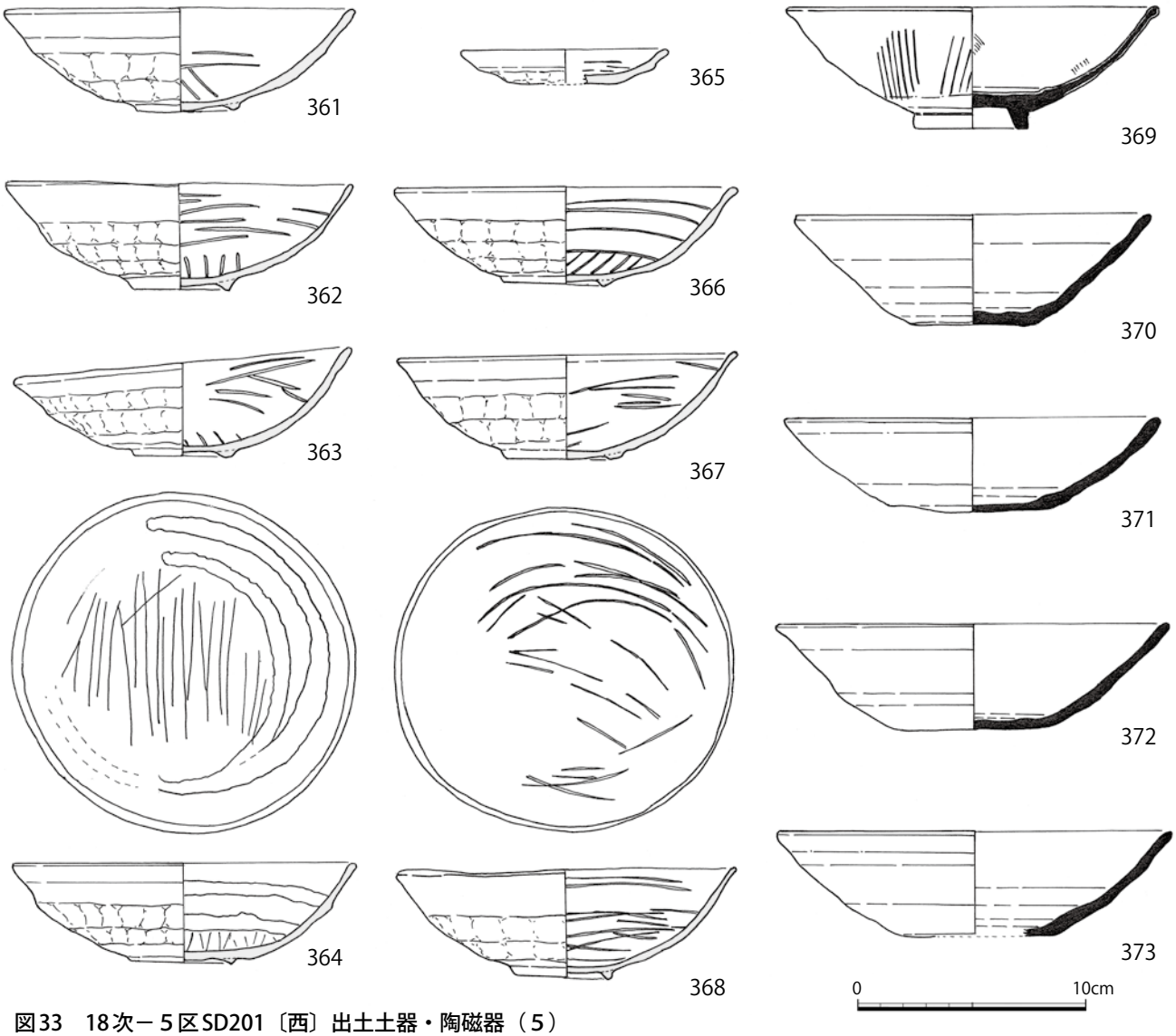


図33　18次－５区SD201〔西〕出土土器・陶磁器（５）

SD202　調査区の南部、SD201〔西〕の南を１ｍほど離れて並行にはしる幅1.2～2.0m、深さ数～10㎝の比較的浅い溝である。長さ約25mを確認したが、西側は削平により切られている。東端部で遺物が集中して出土した。

調査区の東側でも、SD203が同様にSD201の南で確認されていることから一連の溝として対応する可能性がある。

出土遺物　出土遺物は、土師器小皿（374～376）・皿（378～381）で、いずれも手づくね成形、口縁部は横方向のナデで整形する。内面はナデ調整を行う。377は瓦器小皿で底部は指オサエ、内面には暗文を施す。

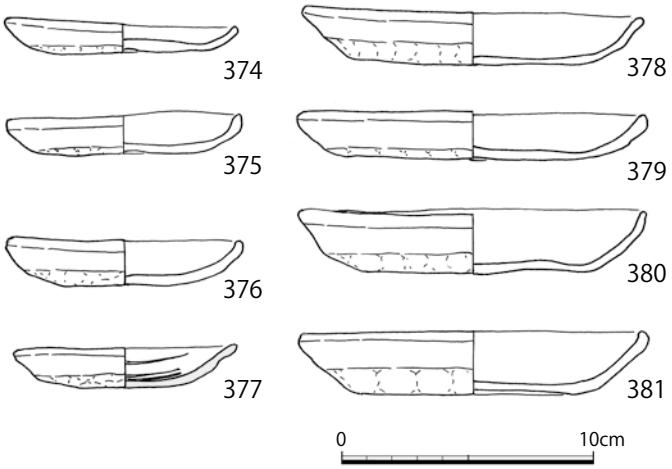


図34　18次－５区SD202出土土器

SD203　４区・Ｉトレンチで検出された東西方向の溝である。幅50～90㎝、深さ10～20㎝を測る。SD201〔東〕に並行しており前述のSD202と規模は違うものの対応する溝の可能性がある。

出土遺物　出土遺物は土師器小皿で、382は手づくね成形、底部は指おさえ後ナデ調整､口縁部は横方向のナデを行う。383, 384はコースター型の扁平な小皿で、口縁端部を内側に屈曲させる。

SD204～207　調査区の中央部を南北、東西方向にはしる幅0.4～1.1m、深さ20㎝前後の溝群である。内部には拳大の礫が多く含まれ、とくにSD204・206では礫が密に入れられた状態で検出された。

SD210　調査区の北西１区で検出された幅0.8～1.1mの溝である。後述するSX201内西溝の北半の上に重なるように検出された。

削平のためSX201との関係が不明確である。SX201を切って掘られたか、SX201の機能が停止した後に崩れた際の堆積かの可能性がある。

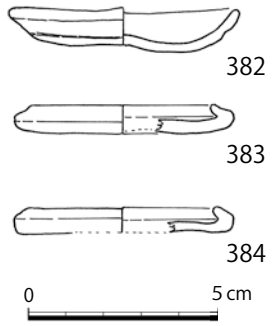


図35　18次－４区 SD203出土土器

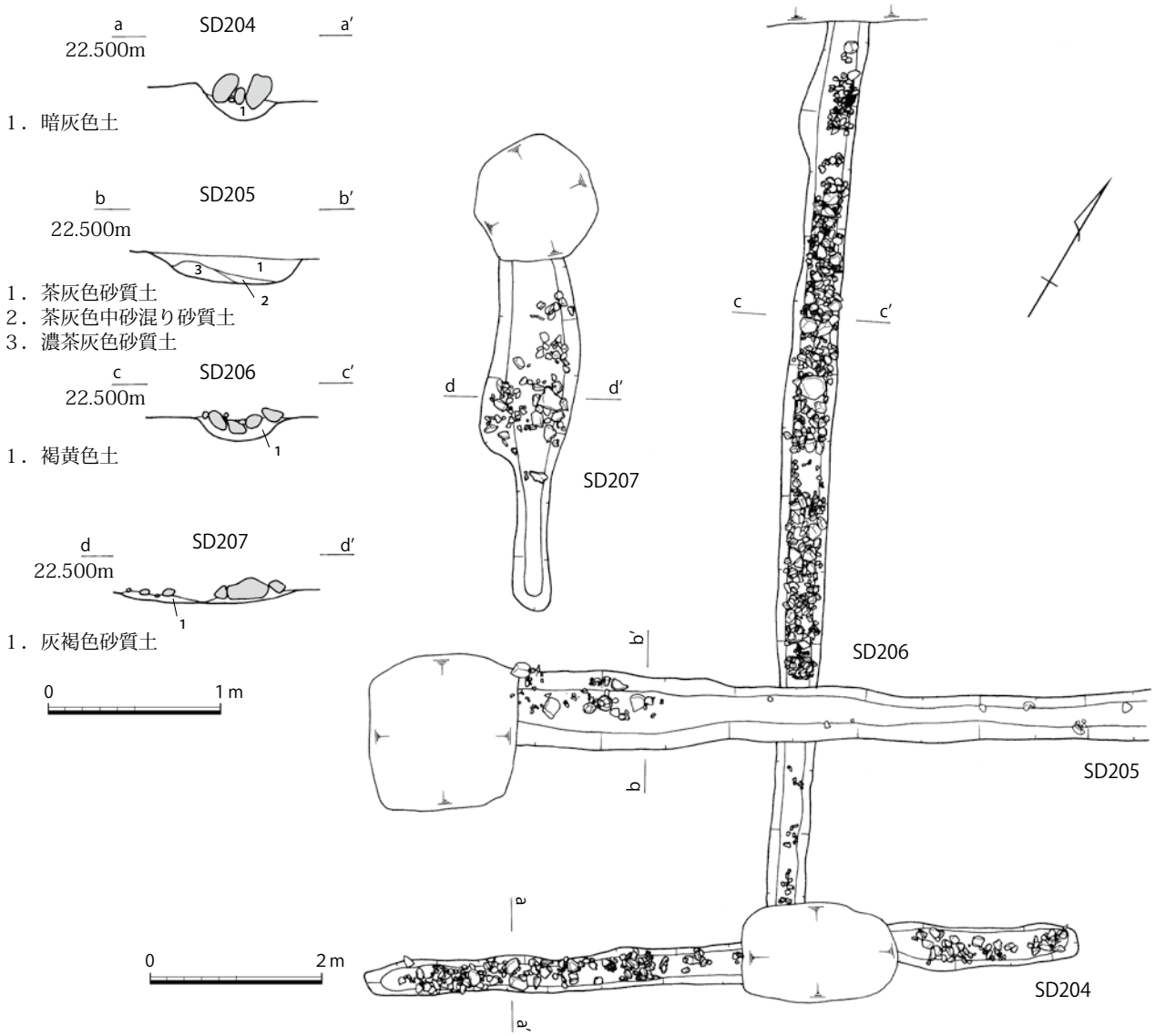


図36　18次－６区SD204・205・206平面・断面図

SD204出土遺物　図化したものは1点である。399は土師器皿で、上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、下半部は手づくね成形の後、軽くナデを施して器面を整えるが、指押さえの痕跡は残る。内面は指押さえで成形の後、軽くナデるが、指押さえの痕跡を残している。

SD205出土遺物　385～391は土師器皿で、399と同じ製作工程で作られる。いずれも一段ナデ技法である。

392～395は土師器小皿で、手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残す。口縁部は横方向のナデを施す。396～398は青磁碗で、ロクロ成形の後、カンナ削りで外面を整え、396，397の内面には劃花文の文様を施す。光沢のあるオリーブグリーン釉が厚く掛けられている。龍泉窯の製品と思われる。398の高台内は露胎で、緑灰色の釉を掛けるが発色が悪く、釉が縮んでいる。

SD206出土遺物　400，401は土師器小皿である。手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残す。402は瓦器椀で、形状が低平であり、外面には指頭圧痕が残る。口縁端部には強い横方向のナデを施す。見込は平行線状の、上半部は圏線状の暗文で仕上げている。

SD210出土遺物　403～426は土師器小皿で、手づくね成形で、外底面は指押さえで整形する。口縁部は横方向のナデで調整する。内底面はナデて仕上げている。426は口縁部内面に煤が付着している。

427は手づくね成形で扁平な作りのコースター型の土師器小皿である。

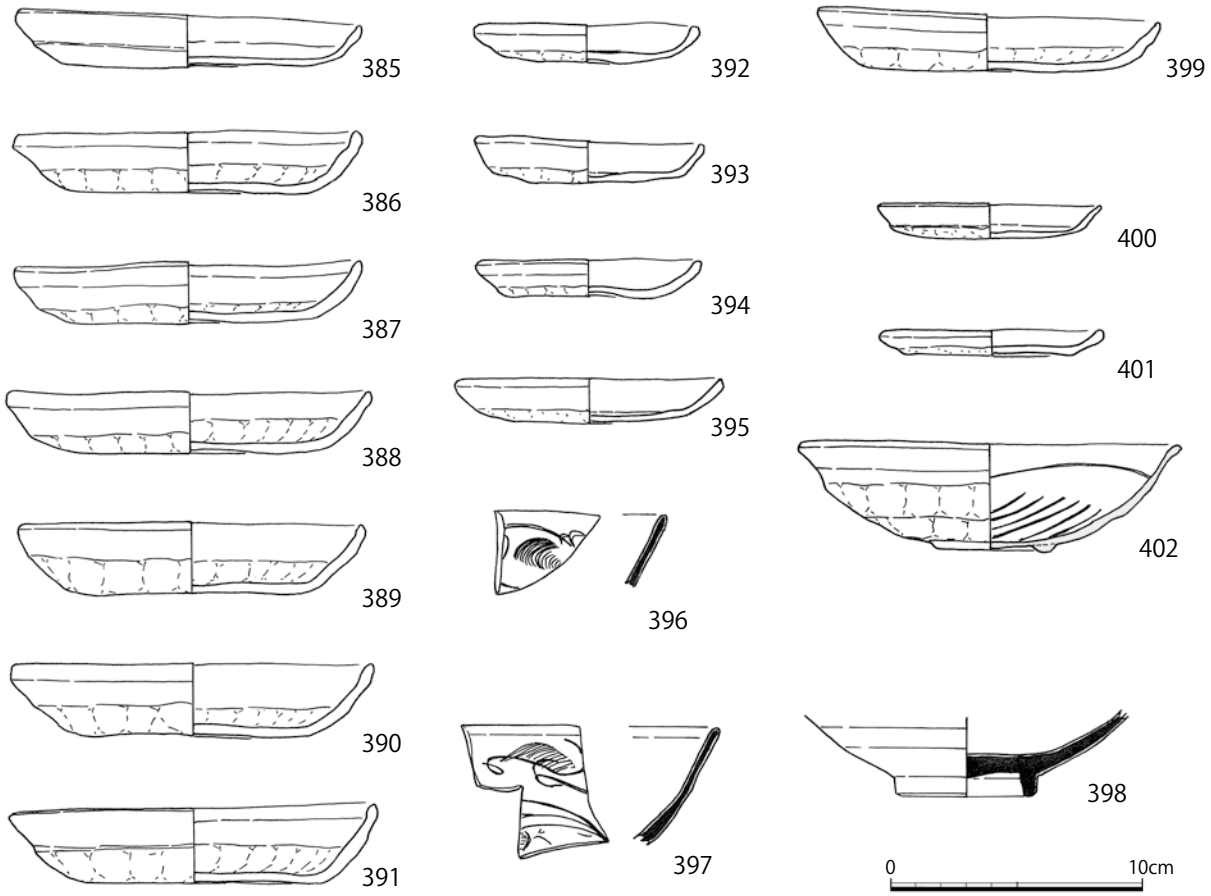


図37　18次－6区SD204・205・206出土土器・陶磁器

428～445は土師器の皿で、上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、見込には指押さえの痕跡を残すものがある。下半部は手づくね成形の後、ナデで器面を整えているが、指押さえの痕跡が残るものが多い。成形技法は、一段ナデ技法で作られている。皿の口径は、13.5～15㎝とややばらつきがある。444，445の口縁端部、見込部分には、燈火器として用いられた際に付着した煤や焦げ付きが認められる。

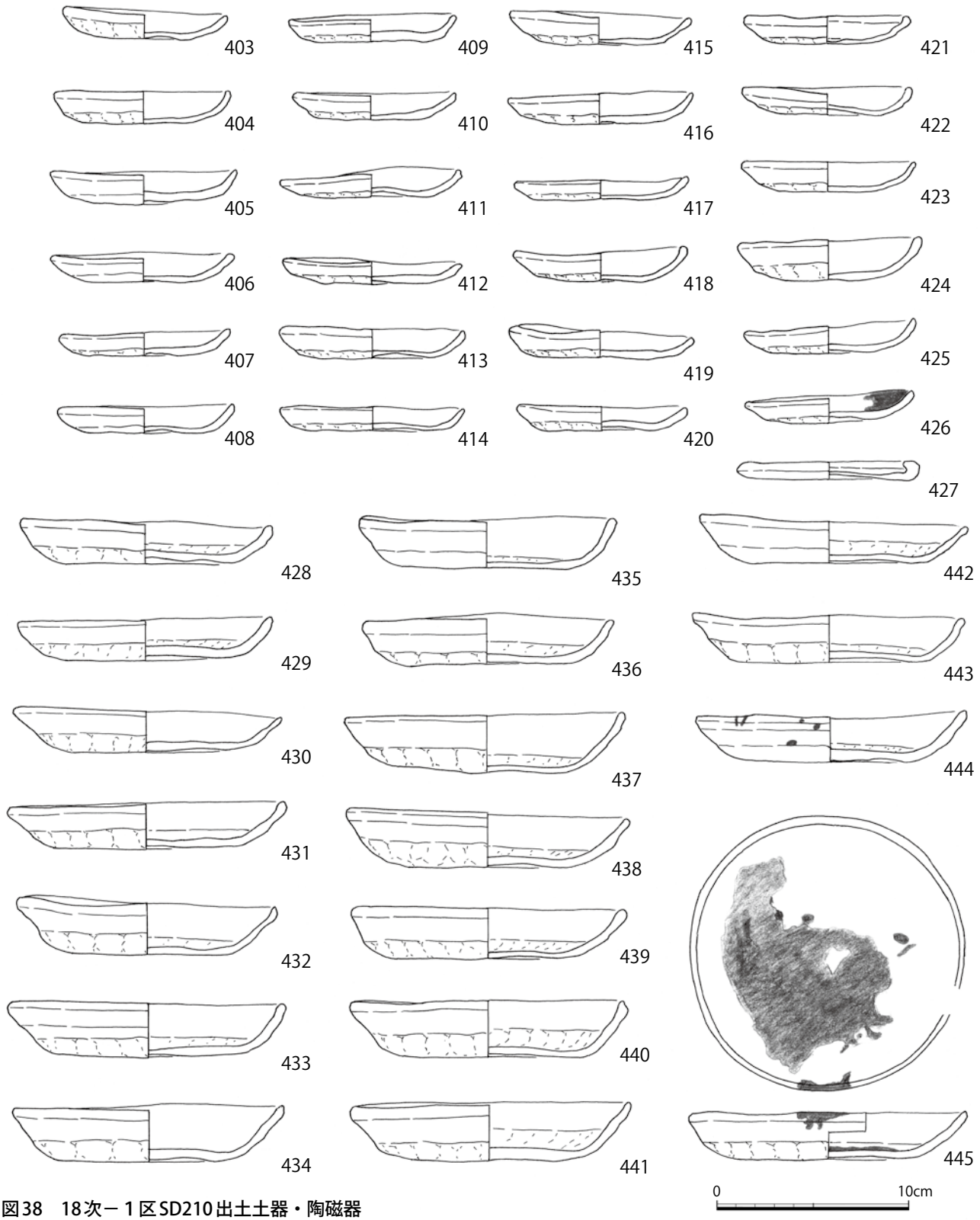


図38　18次－1区SD210出土土器・陶磁器

SD211・212　調査区中央部に位置する幅20～30㎝、深さ10㎝前後の２条の溝で30㎝前後の間隔で東西にはしり西端で合わさるように南に折れ曲がる。SD211は18ｍ、SD212は10ｍを確認した。SB207から北に5.5～6.0ｍ離れるが、東西方向については、建物とほぼ方向を揃えたかたちとなる。

SE201　調査区南部の東寄りに位置する井戸である。検出面では２×２ｍの正方形を呈し、上層は人頭大の礫を多量に投入して埋められていた。深さ約80㎝の礫層を除去すると、底面には、80×90㎝の方形の掘形の井戸が現れ、掘形に沿って並べられた幅12㎝程の竪板の痕跡を検出した。さらに下層では、竪板を固定する縦と横の桟なども確認された。

井戸検出面から掘形底まではおよそ1.7ｍを測る。底からやや浮いた状態で長さ40㎝を超える大きな石が投入されていた。また井戸底に近い部分からは平安時代末頃の土師器皿が数枚出土した。

また調査後、取り上げできた井戸枠のうち残存状況が良好であった部材（横桟）の一部については、樹種同定を実施した。ヒノキ・スダジイ・スギなどが使用されていることが判った。これらについての詳細は、第５章の分析成果を参照されたい。

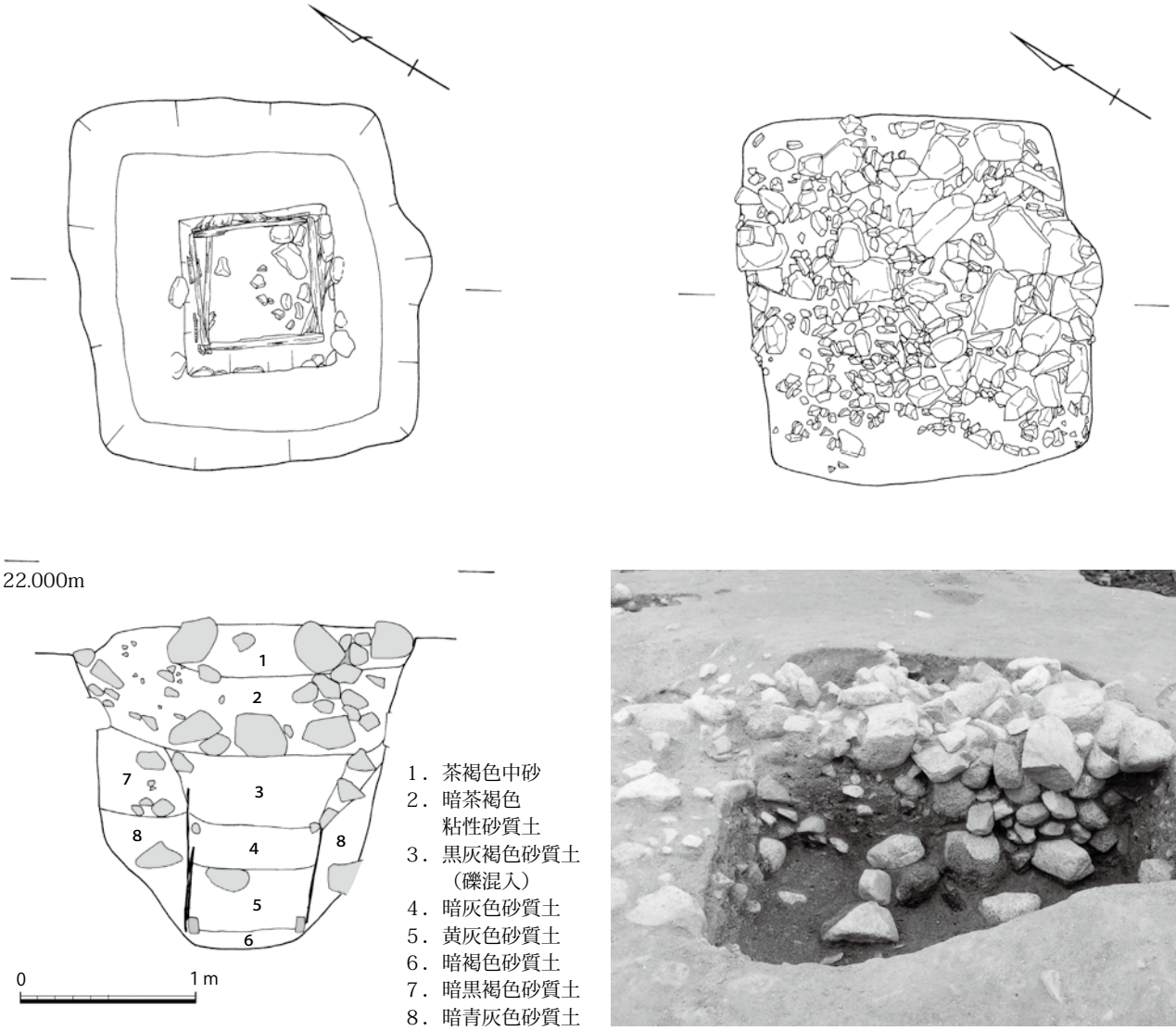


図39　18次－４区SE201平面・断面図

写真19　18次－４区SE201埋土断面

出土遺物　図化したものは、土師器皿（446～453，454，455）、土師器小皿（460～465）、土師器坏（456）、瓦器椀（457～459）である。

土師器皿の下半部は手づくね成形の後、軽くナデて器面を整えているが、指押さえの痕跡は残る。上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、見込には指押さえの痕跡を残すものが多い。口縁端部に面取りを施すもの（446～448，450，451，453，455）が見られる。成形技法は、一段ナデ技法である。皿の口径は14～15㎝の間で収まる。

土師器小皿は手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残す。口縁部は横方向のナデを施す。底部を成形時に中心部を窪ませるもの（460，464）が認められる。また、手づくね成形で口縁部の立ち上がりが浅く、扁平な小皿（465）は出土数が少ない。

土師器坏はロクロ成形の後、底部を回転糸切りで切り離し、未調整のままにしている。口径（14.4㎝）に比して底径（９㎝）は広く、体部は直線的で口縁端部がやや外反する。

瓦器椀は器高に対して口径が大きく、低平な印象を受ける。胴部下半部は指押さえで二段または三段で成形し、口縁部は横方向のナデで仕上げ、幅が広く二段に仕上げられるもの（457）がある。底部には断面三角形または台形の高台を貼り付けている。内面はナデで整形された後、見込には平行線状の暗文、内面上半部には圏線ミガキを施す。いずれも和泉型の瓦器椀である。この井戸の上層は、礫を大量に投棄して人為的に埋めている。図化した土器は井戸の底または下層付近から出土しており、井戸廃絶時に投棄されたものであるといえる。

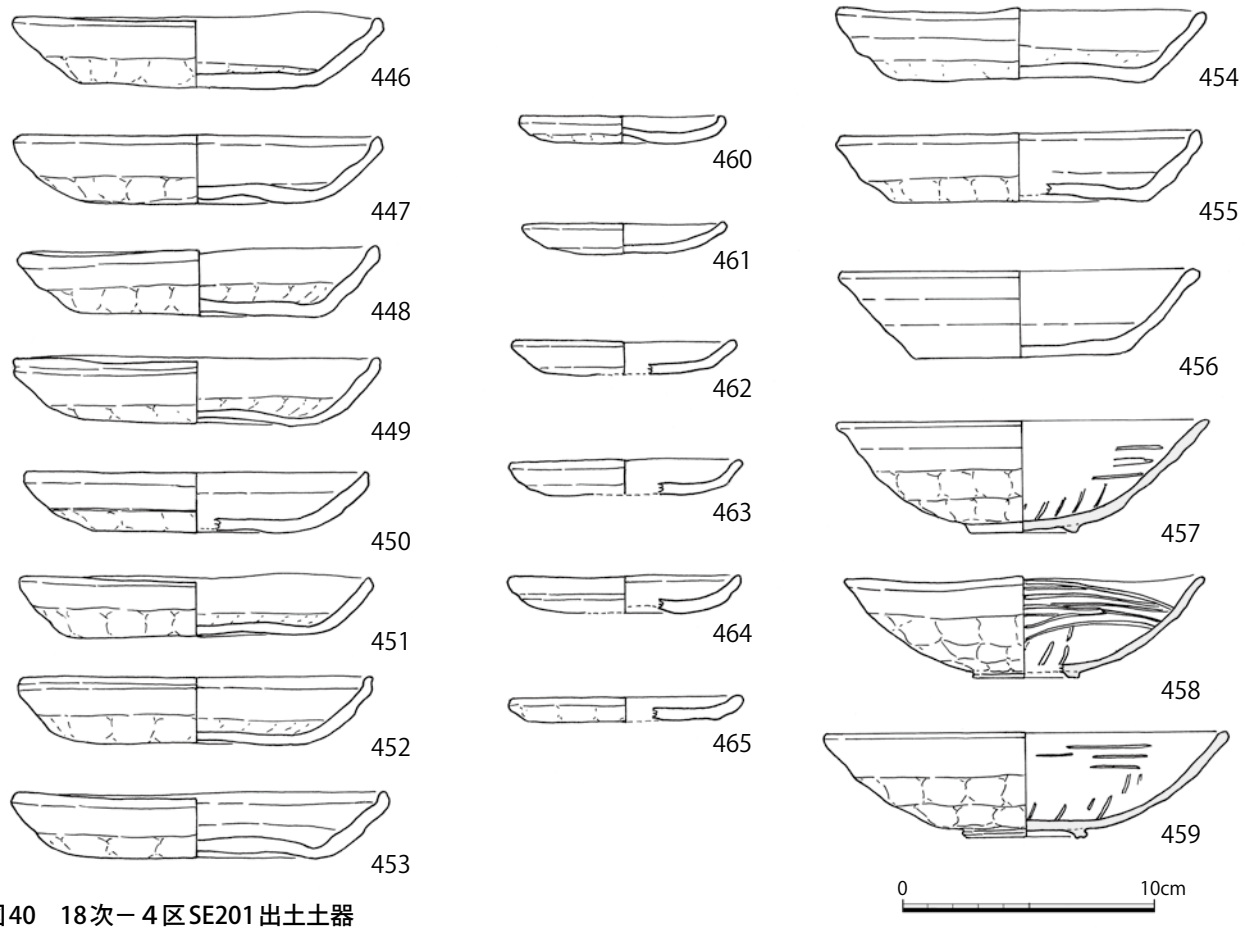


図40　18次－４区SE201出土土器

SE202　調査区の南西部、SB203の北側に位置する井戸である。検出面では1.8×1.7mの隅円方形の平面形を呈する。

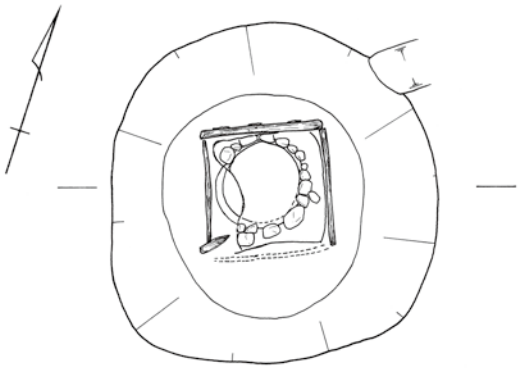
埋土の上層では遺物は出土せず、約30㎝掘削した段階で厚さ１㎝程の炭化物の層が確認される。この焼土を除去すると暗灰褐色粘性砂質土の堆積がみられる。この層は空隙が多く、人為的に急いで埋められたような堆積状況が窺われた。またこの土からは、同時に平安時代末頃の土器が完形に近い状態で出土している。

この層の下からは、60×70㎝の方形の桟とその周りを囲む竪板の痕跡が確認された。さらに約20㎝下には二段目の桟があり、その下には直径40㎝程度の曲物桶が据えられた痕跡を確認した。曲物桶の外側には拳大の礫群が桶を囲む状態で置かれていた。この深さでは湧水が激しくなる。井戸検出面から掘形底まではおよそ1.7mを測る。

堆積状況から井戸の上半部については、廃棄時に井戸材などを抜き取るため再掘削を行いその後埋め戻したと考えられる。

調査後、取り上げできた井戸枠の部材については、SE201同様樹種同定を実施した。この結果、ヒノキ・スギ・マツ属などの用材が確認された。

また炭化物が集中している部分の土壌を水洗選別すると、炭化穀粒や魚の骨が発見された。マダイ・ハモ属・スズキ属・タイ科・コチ科などの魚が含まれていることが判った。なお、これらの成果についての詳細は、第５章の自然科学分析および第６章の各論を参照されたい。



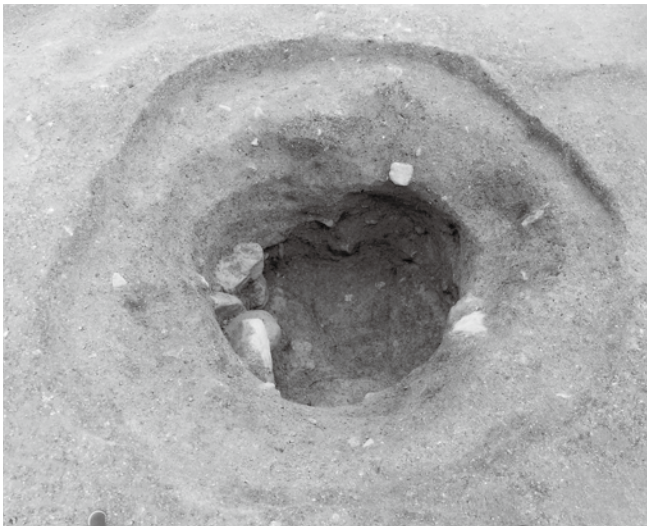
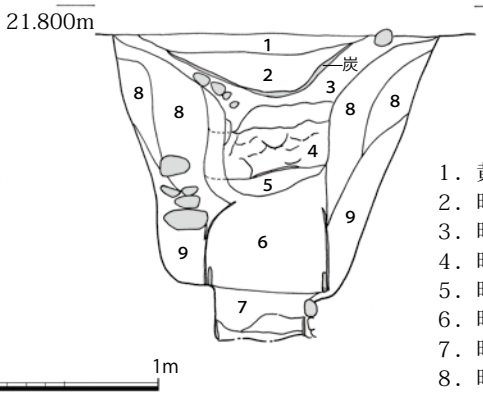


写真20　18次－４区SE202井戸枠検出状況



1．黄灰褐色砂質土
2．暗灰褐色砂質土
3．暗茶灰褐色砂質土
4．暗灰褐色粘性砂質土
5．暗緑灰色粘性砂質土
6．暗褐色粘性砂質土
7．暗褐色砂質土
8．暗褐色砂質土（掘形埋土）
9．黒褐色砂質土（掘形埋土）

図41　18次－４区SE202平面・断面図

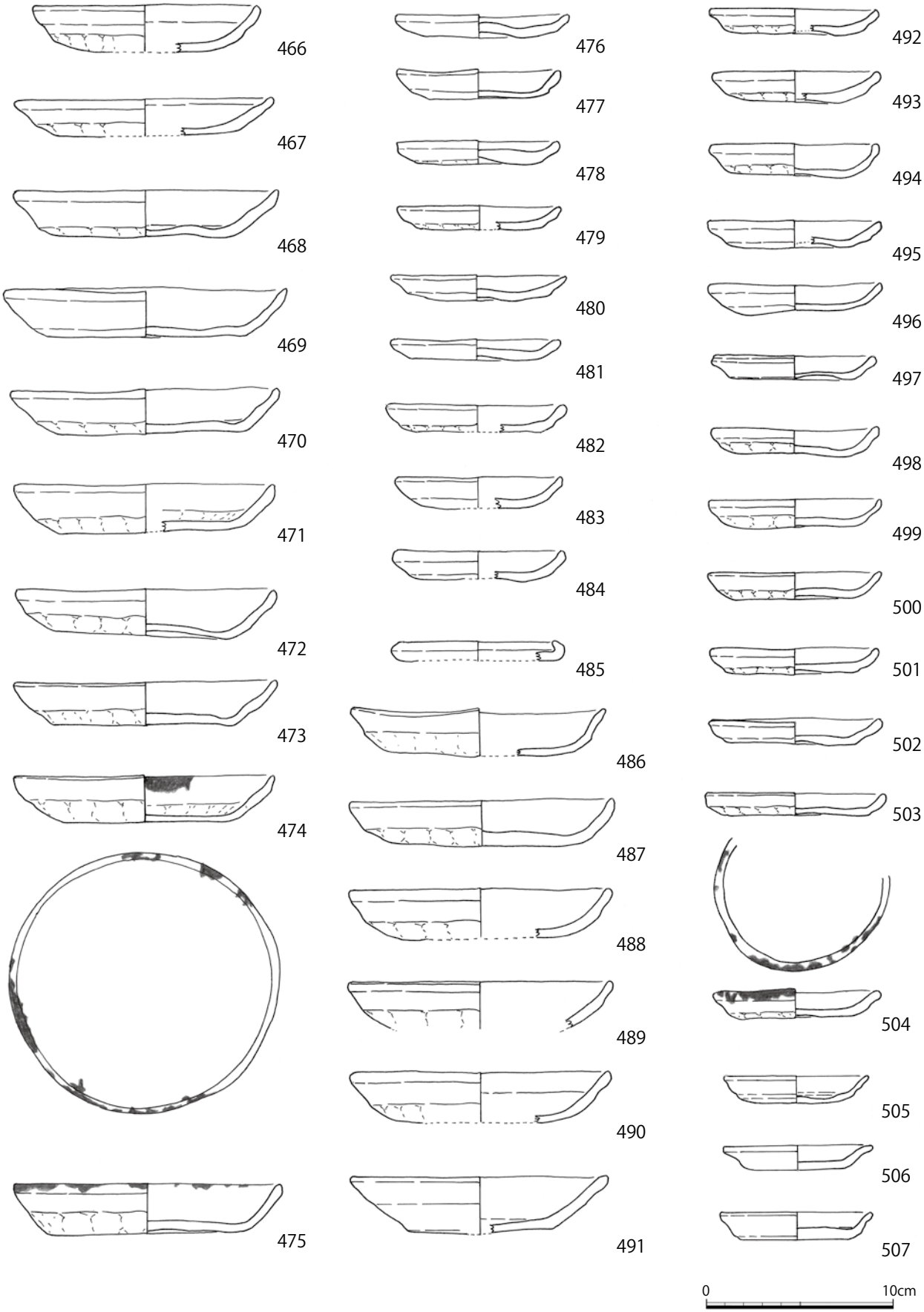


図42　18次－４区SE202出土土器・陶磁器・石製品（１）

出土遺物　図化した出土遺物は土師器皿（466～475，486～490）、土師器小皿（476～485，492～507）土師器坏（491）、青磁碗（508，509，512）、青磁小皿（510，511）、白磁小皿（513）、瓦器椀（514）、瓦質硯（515）、石鍋（516，517）などがある。

土師器皿の上半部は横方向のナデ調整、下半部は指押さえの痕跡を残すものが多い。土師器小皿は手づくね成形のもの（476～485，492～504）、ロクロ成形で底部外面に回転ヘラ切りの痕跡を残すもの（505）、回転糸切りのもの（506, 507）がある。コースター型（485）が1点含まれる。また、口縁端部に煤が付着したもの（474, 475, 504）がある。土師器坏はロクロ成形で、底部を回転糸切りで切り離す。508, 509は同安窯系の青磁碗で、外面に櫛目、内面に櫛とヘラで文様を描く。ガラス質の緑灰色の釉が掛る。512は龍泉窯系の青磁碗で、内面に劃花文を施し、釉色は光沢のあるオリーブグリーンである。511の青磁小皿は見込にヘラで施文する。ガラス質のオリーブ色の釉が掛る。白磁小皿は見込にヘラで施文し、灰白色の釉が掛る。瓦器椀は外面に指頭圧痕、見込に平行線、上半部に圏線の暗文を施す。瓦質硯はナデで表面を調整し、黒灰色を呈する。石鍋は滑石製で、516は短い鍔を持ち、幅広の工具で器面を調整する。517は外面を工具で細かく削って器面を仕上げる。

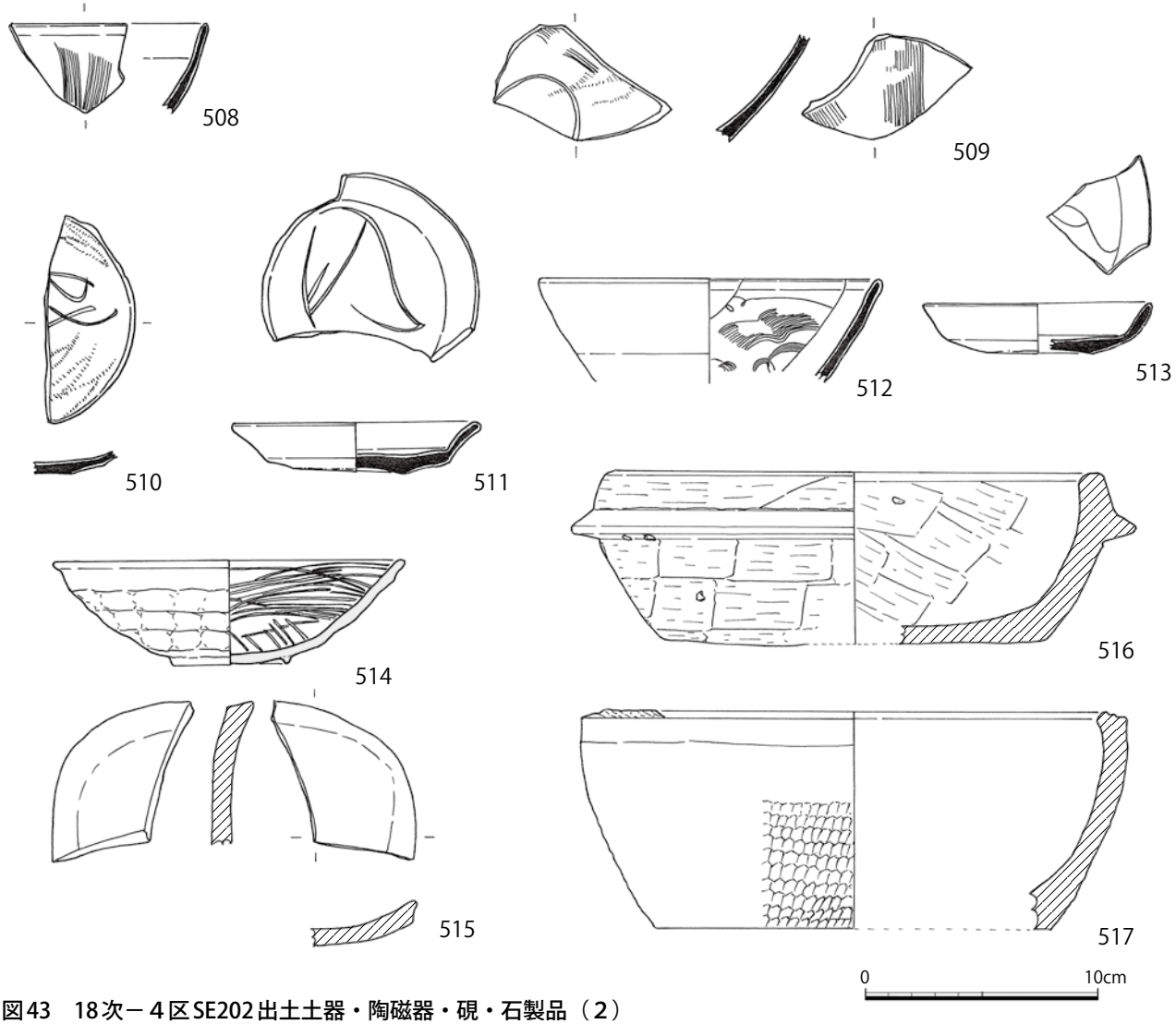


図43　18次－4区SE202出土土器・陶磁器・硯・石製品（2）

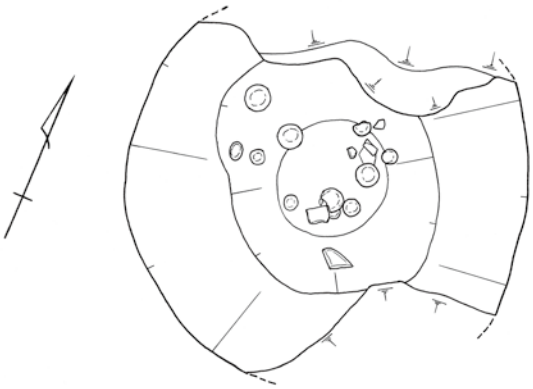
SE203　調査区の南西部に位置する井戸である。南北両側を攪乱によって大きく削平されている。

検出面においては、土坑状の凹みが認められ平安時代末頃の完形の土師器皿数枚と瓦器椀が出土した。おそらく、井戸を埋戻す際に上面を窪めて最終の埋土と一緒に埋められた祭祀によるものと考えられる。

埋土上層においては、掘形の周囲が当初のものより切り広げられているようで、廃絶時に再掘削がおこなわれて井戸枠材が抜き取られた可能性が高い。中層においては、柱と縦板および横桟からなる四角い木組みと、その下に直径約60㎝木桶を利用した井戸枠の痕跡が認められた。また最下層においては、直径30㎝程度の曲物桶が１段、底面を窪めて据えられていた痕跡を確認した。

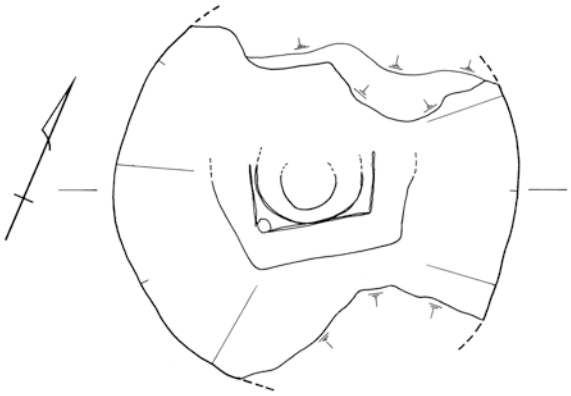
いずれも残存状態が悪く取り上げることはできなかった。

なお掘形は、検出面で径２ｍの円形で、断面形は漏斗状になる。井戸の検出面から掘形底まではおよそ1.4ｍを測る。



井戸枠内埋土
1．褐黄色土
2．暗灰褐色土
3．灰褐色土
4．褐灰色土
5．淡灰色シルト
6．明褐黄色砂
7．暗灰色土
8．淡灰褐色粘性砂質土
9．灰黄色粘性砂質土
10．暗灰黄色粘性砂質土
11．淡青灰色粘性砂質土
12．明青灰色粘性砂質土
13．暗灰色シルト
14．灰色粗砂
15．暗灰黄色シルト
16．青灰色粗砂

掘方内埋土
17．淡黄灰色砂質土
18．灰褐色砂質土
19．黒褐色粘性砂質土
20．淡灰黄色粘性砂質土
21．黒灰色粘性砂質土
22．淡青灰色粘性砂質土
23．灰褐色砂質土
24．青灰色粘性砂質土
25．灰色粗砂
26．黒灰色粘質土
27．淡灰褐色砂質土
28．暗灰色粘性砂質土
29．暗青灰色粘性砂質土
30．灰黄色粘性砂質土
31．灰色粘性砂質土
32．淡黒灰色粘性砂質土
33．暗灰色砂質土
34．淡青灰色粘性砂質土
35．暗灰色粘性砂質土
36．灰色粗砂
37．灰黄色砂質土
38．灰黄色粗砂
39．暗灰黄色砂質土
40．暗灰黄色粗砂
41．暗灰色粘土質
42．黒褐色混礫砂質土



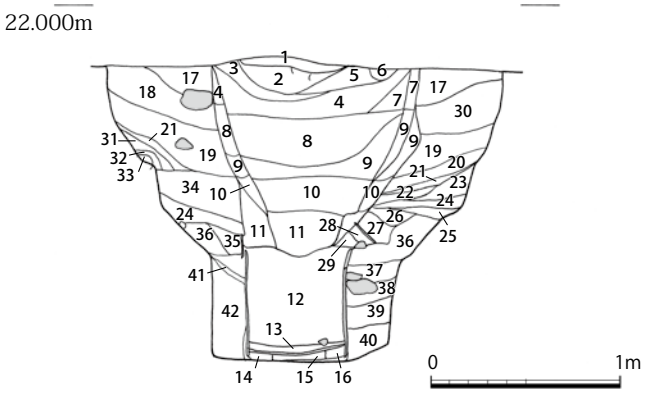


図44　18次－５区SE203平面・断面図

出土遺物　出土した遺物は、土師器皿（518～523）、土師器小皿（524～531）瓦器小皿（532）、瓦器椀（533）などである。土師器皿は手づくね成形、一段ナデ技法で仕上げられる。土師器小皿は手づくね成形で、524のコースター型は底部が穿孔されている。瓦器小皿は内面に暗文を施し、瓦器椀は台形の貼り付け高台に、見込には平行線状、上半分には細い圏線を施す。

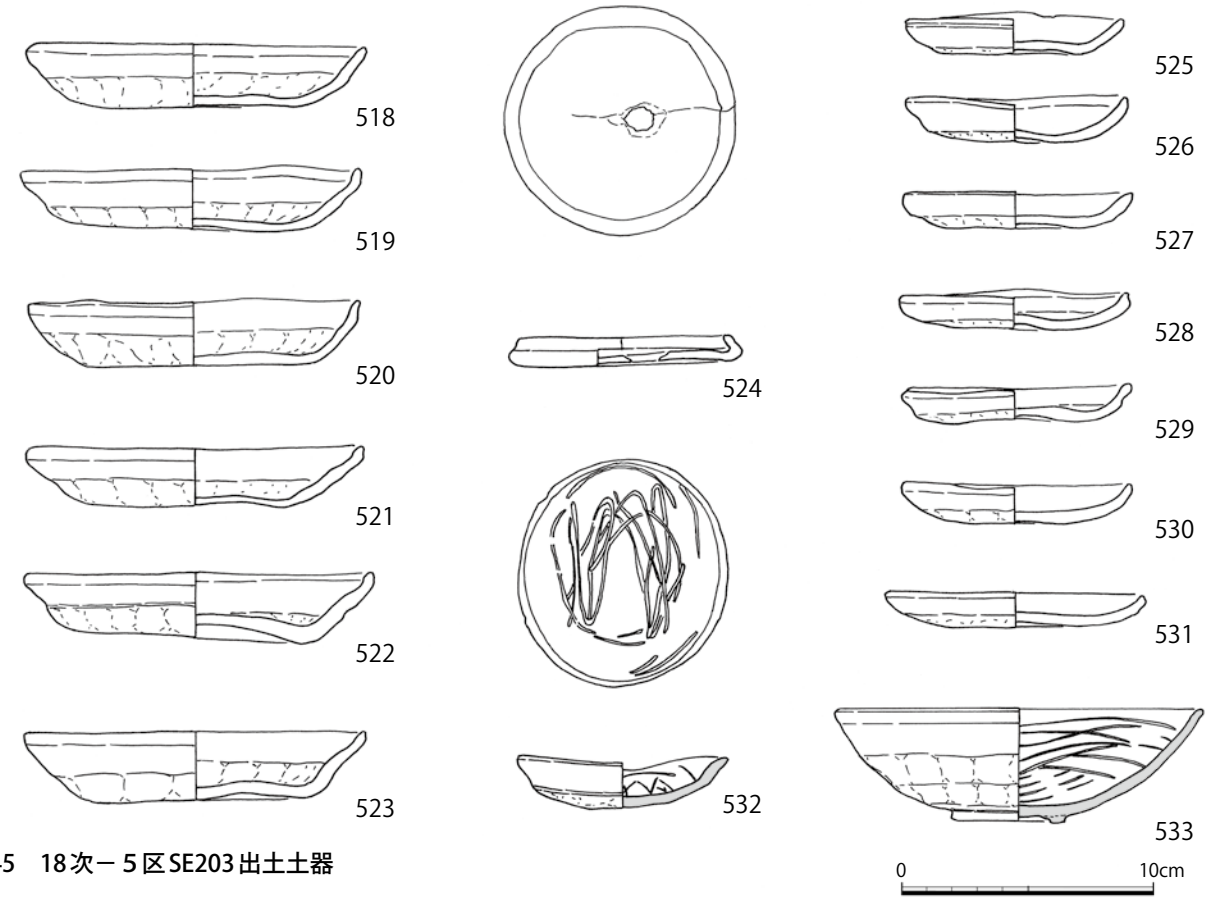


図45　18次－５区SE203出土土器

SK201　調査区の南西隅で位置する南北1.2m以上、東西1.6mの平面形やや崩れた円形の土坑である。南側の一部を攪乱によって削平されている。断面形は、緩い椀形で深さ50㎝を測る。

埋土の上層には、10～40㎝の礫が多くみられる。堆積状況から廃棄時に一度に投入されたようである。

出土遺物　土師器小皿（534～536）を３点図化した。

いずれも手づくね成形で、底部に指頭圧痕を残し、口縁部は横方向のナデを施す。内面はナデ調整を行う。

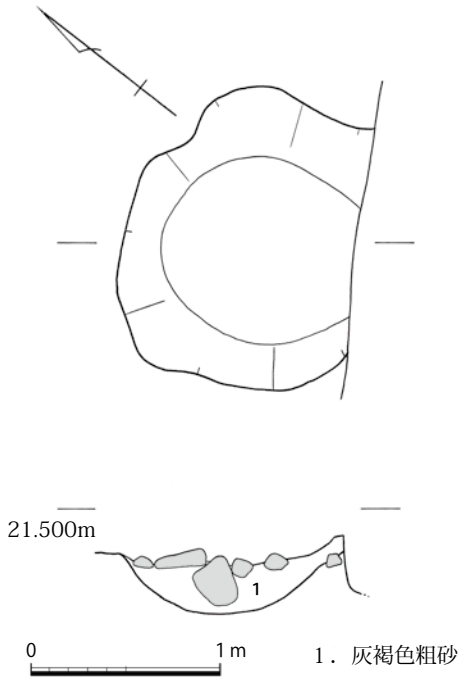


図46　18次－Ⅲトレンチ SK201平面・断面図

SK202

調査区の南で位置する、直径1.6m、深さ1.0mの土坑である。掘形は、遺構の中ほどにおいて段がついて径80㎝ほどに窄まる。形状などから井戸の可能性もあるが、枠などの痕跡は確認できなかった。埋土には、数～30㎝を超える大きさの礫が多く含まれていた。

西側を攪乱によって大きく削平されている。また東側では、SX202と切り合い関係にあり、先行して存在していたことが分かる。

出土遺物

瓦器椀（537）、青磁碗（538）、土師器小皿（539, 540）、土師器皿（541）の５点が図化し得た。

瓦器椀は外面に三段の指オサエを施し、口縁部は横方向のナデで仕上げる。底部には断面三角形の貼り付け高台を持つ。内面の調整は、見込には平行線状、上半部には圏線状の暗文を施す。和泉型の瓦器椀である。

青磁碗の外面は櫛状工具で細かい平行な直線を、内面は櫛状工具とヘラで階段状と曲線の文様を施す。高台部はカンナで中心部が高く削り出される。口縁部から胴部にかけてガラス質のオリーブ色の施釉が施される。高台部は露胎である。同安窯系と思われる。

土師器小皿・皿は手づくね成形で、底部に指頭圧痕を残し、口縁部は横方向のナデ、内面はナデで仕上げる。

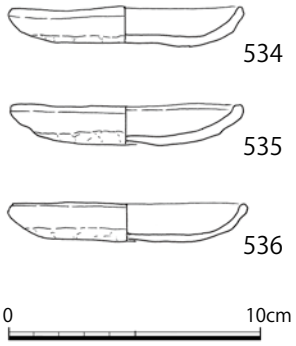


図47　18次－Ⅲトレンチ SK201出土土器

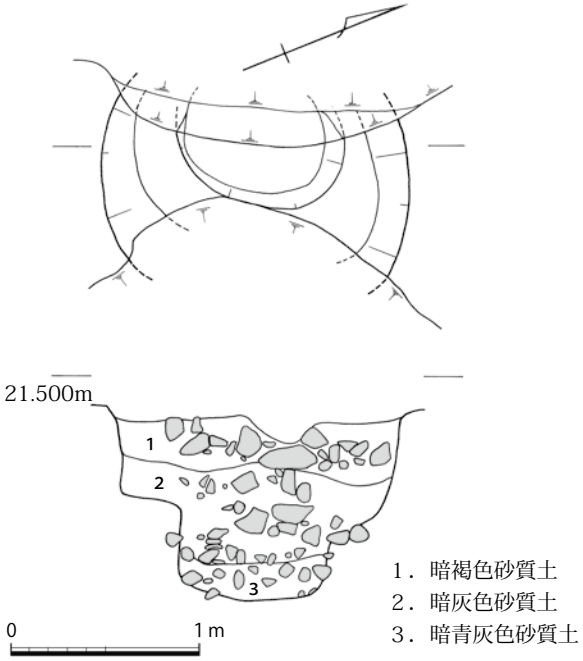


図48　18次－Ⅲトレンチ SK202平面・断面図

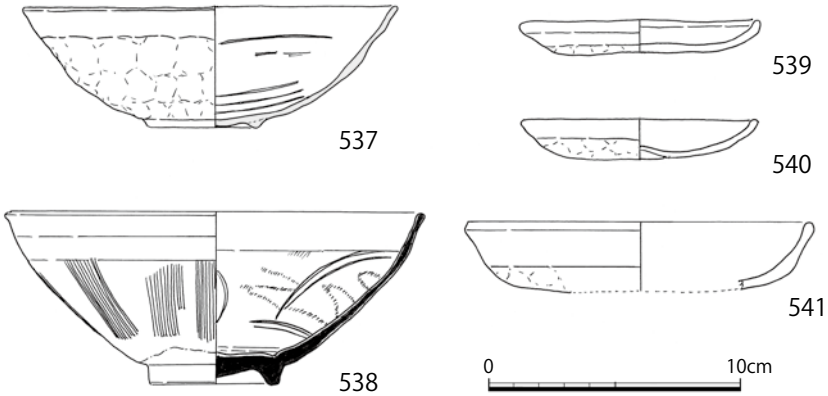


図49　18次－Ⅲトレンチ SK202 出土土器・陶磁器

SK203　調査区の東端に位置する東西1.0m以上、南北4.5m以上、深さ1.0mの土坑である。さらに調査区外の東へ拡がる。

底部の北側が径1.0m、深さ20㎝ほど一段窪んでいる。埋土は上層が洪水砂の流れ込んだような砂層、下層には粘性の砂質土となる。形状などから水溜め遺構のようである。

平安時代後期の須恵器や土師器の破片が少量出土している。

SK204　調査区の中央部に位置する径0.8～1.0mの歪な円の平面形をもつ土坑である。深さは50㎝を測り、底面は凹凸をもつ。

平安時代後期の土師器の皿などが出土している。

SK205　調査区の南西に位置する東西0.8m、南北1.0mの楕円の平面形をもつ土坑である。断面形はU字形で、深さは50㎝を測る。底部には、炭を多く含む粘土が堆積している。SD205と切り合い関係にあり先行する。

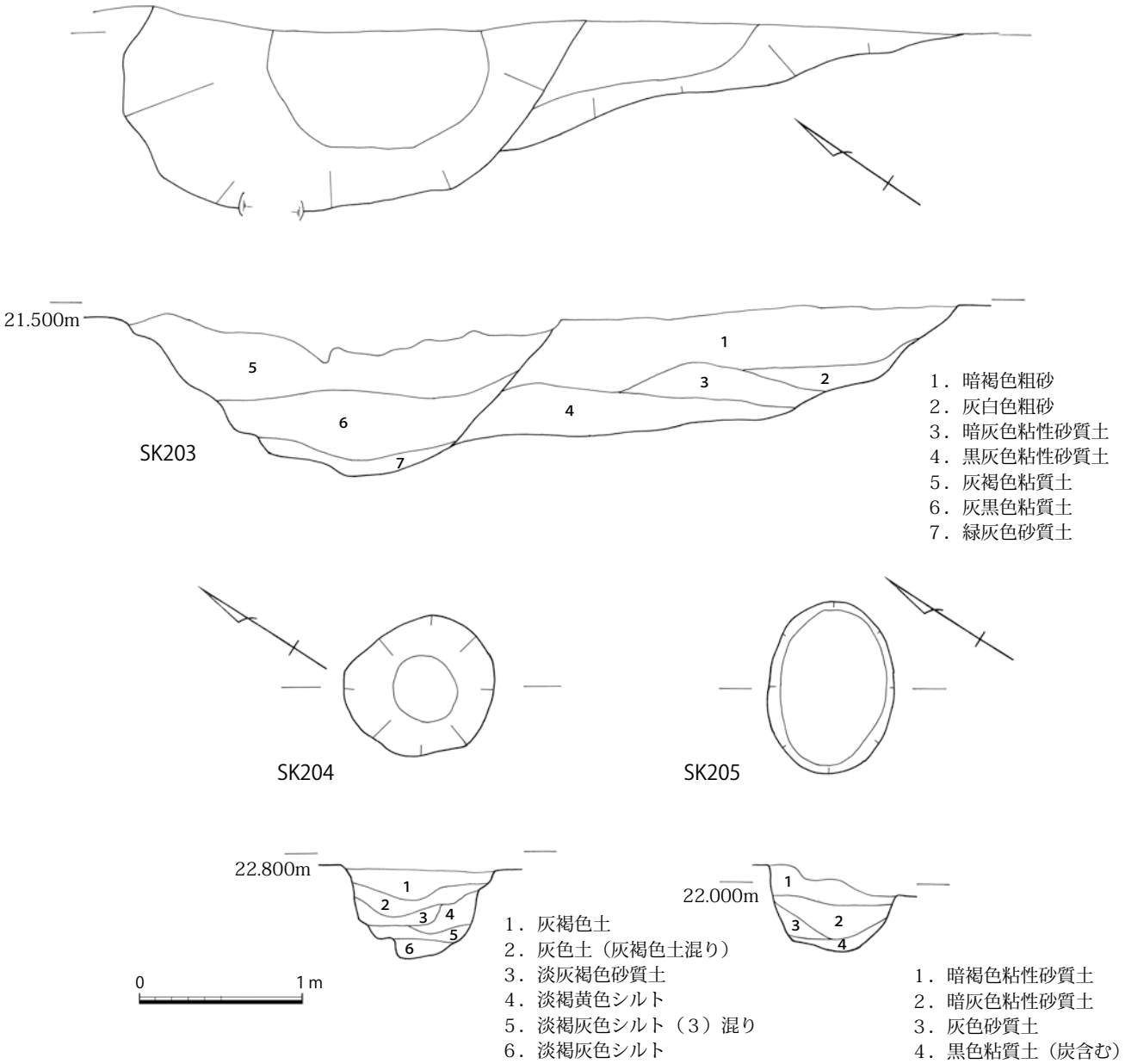


図50　18次－6区・Ⅲトレンチ SK203・SK204・SK205 平面・断面図

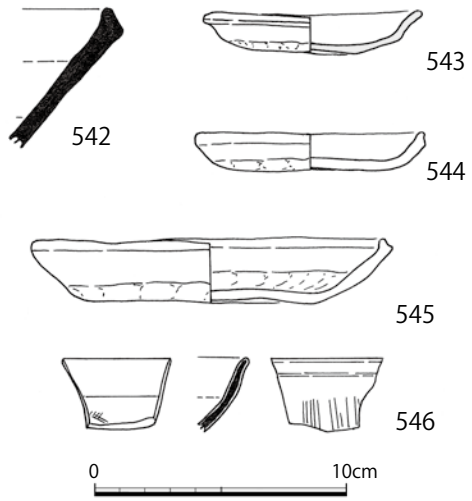


図51　18次－６区SK205出土土器・陶磁器

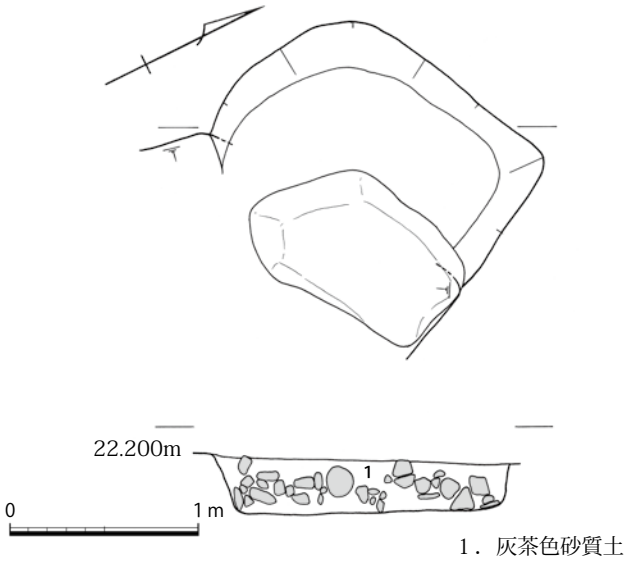


図52　18次－７区SK206平面・断面図

出土遺物　須恵器捏鉢（542）、瓦器小皿（543）、土師器小皿（544）、土師器皿（545）、青磁碗（546）が図化し得た。須恵器鉢はロクロ成形で口縁端部は黒灰色を呈する。瓦器小皿は底部外面に指頭圧痕を残し、口縁部は外反する。土師器小皿・皿は手づくね成形で、底部外面は指オサエで整え、口縁部は横方向のナデで整形する。青磁碗は内外面に櫛状工具を使用して文様を施す。同安窯系の青磁と思われる。

SK206　調査区の北端に位置する東西1.6m、南北1.0m以上の土坑である。南側を攪乱によって大きく削平されている。埋土に礫を多く含む。深さ30㎝で底部は平坦である。

出土遺物　軒平瓦（547，548）、平瓦（549，550）の４点を図示する。547，548は均整唐草文である。548は瓦質、それ以外は須恵質である。平瓦の凹面は布目痕、凸面はタタキ目を残す。

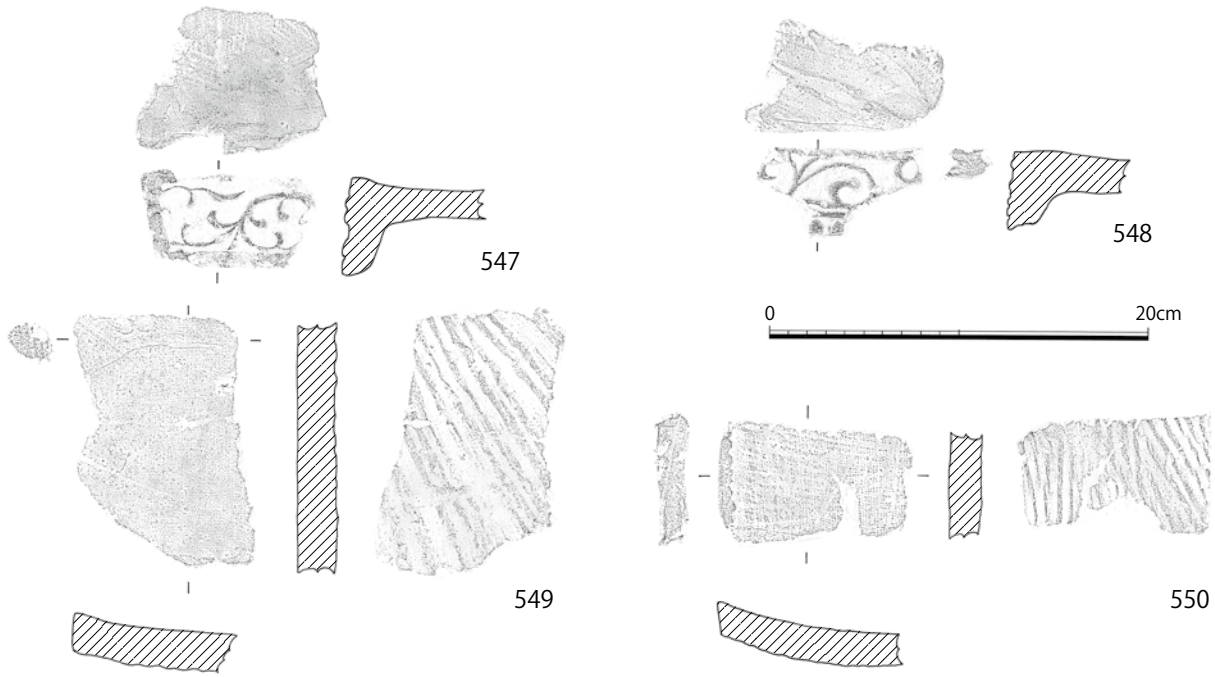


図53　18次－７区SK206出土瓦

落ち込み状遺構　調査区の西側で確認された、南北60m、東西10m、深さ20㎝前後の規模をもつ落ち込み状遺構である。西側と北側では削平のため後述のSX201と同一の検出高であるが南側ではSX201を覆うように埋土がみられる。東側肩部には土師器皿を中心とする遺物が多量に出土した。SX201（庭園状遺構）が廃棄後の堆積土や整地土の可能性が高い。

出土遺物　図化したものは土師器小皿（551～555，562～567）、土師器皿（556～561）、瓦器小皿（568，569）、須恵器椀（570）、須恵器捏鉢（572，573）、須恵器長頸壷（571）、青白磁合子（574）、青磁碗（575，576）、白磁碗（577～580）、青磁皿（581，582）などである。

土師器小皿・皿は手づくね成形で、一段ナデ技法である。566，567はコースター型である。瓦器小皿は内面に平行線状の暗文を入れる。青磁碗と581の青磁皿は龍泉窯系のものである。577は定窯系の白磁碗と思われるが、長頸壷と共に古い時代の遺物の混入と判断される。

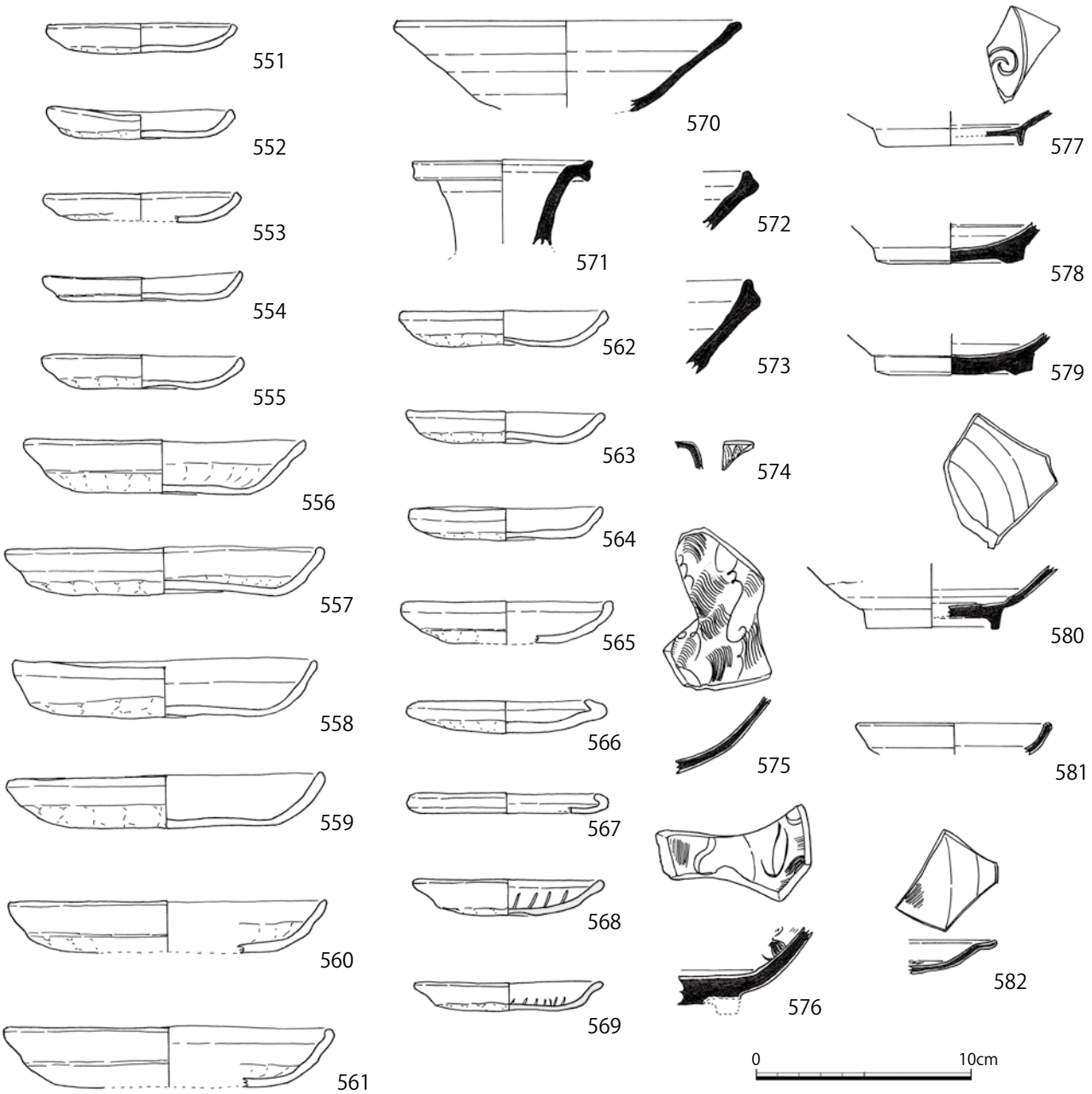


図54　18次－６区落ち込み状遺構出土土器・陶磁器

写真21　18次－６区東肩部遺物出土状況

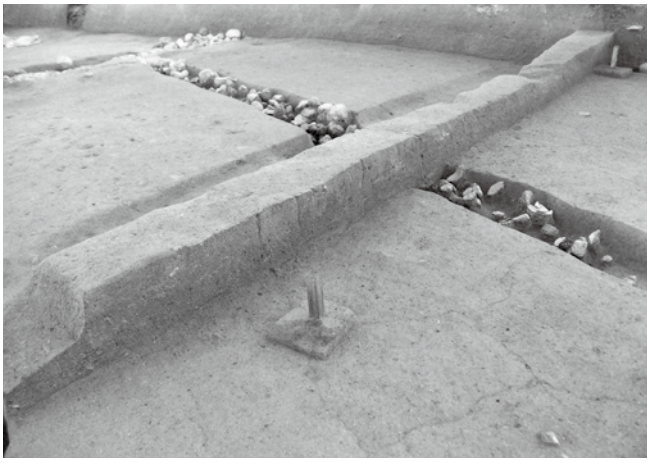
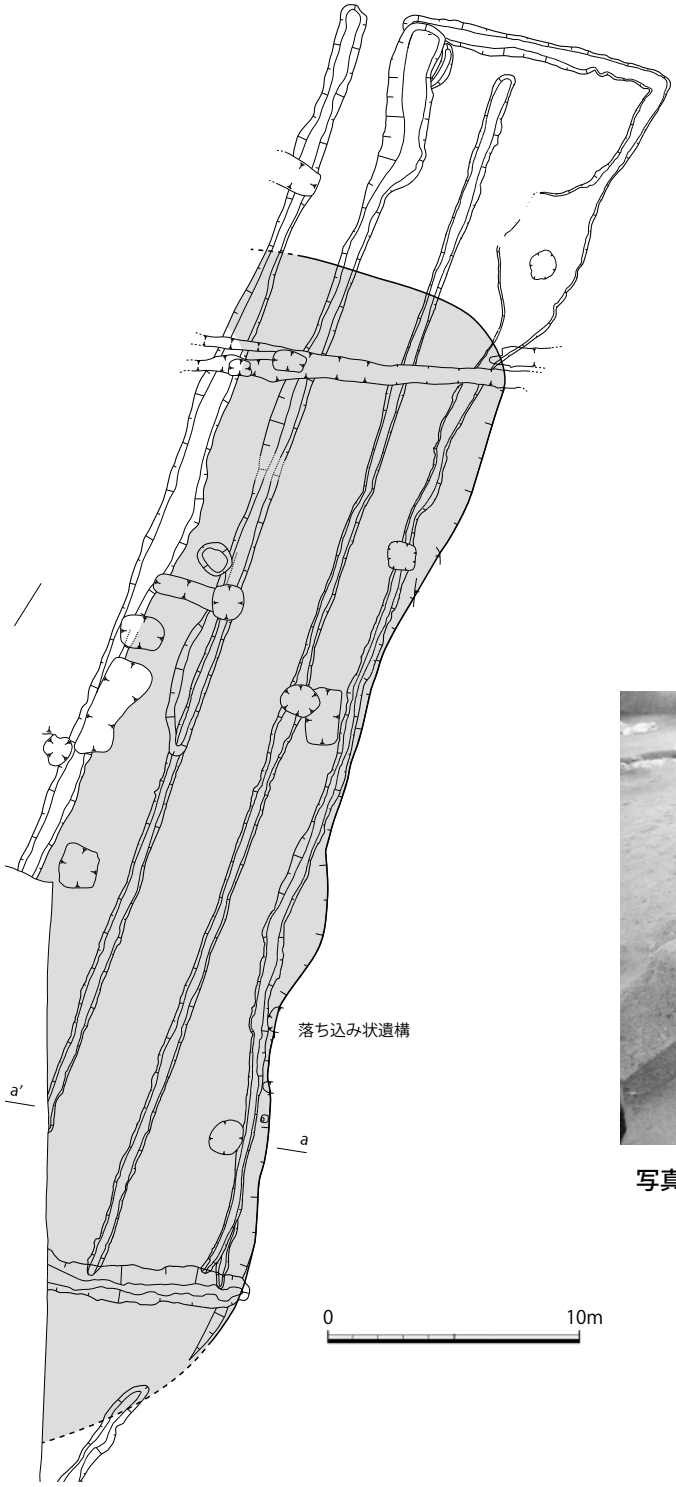
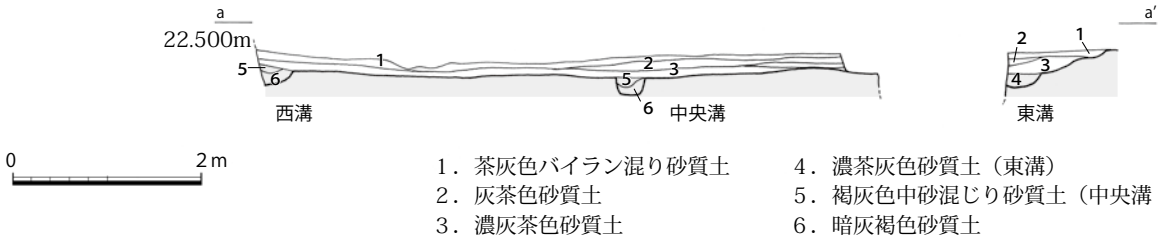


写真22　18次－６区落ち込み状遺構土層断面





1．茶灰色バイラン混り砂質土
2．灰茶色砂質土
3．濃灰茶色砂質土
4．濃茶灰色砂質土（東溝）
5．褐灰色中砂混じり砂質土（中央溝・西溝）
6．暗灰褐色砂質土

図55　18次－６区落ち込み状遺構平面・断面図

SX201（庭園状遺構）

調査区中央部６区の西側の落ち込み状遺構の下面において、南北に並行する３条の溝と北端と南部に２条の東西方向の溝、および東側の縁辺部の石列を伴う集石遺構からなる遺構群が確認された。

一部遺構が切り合うなど時期差があるものの、検出状況から一連の遺構と考えられることからまとめてSX201としてあつかう。中央溝と東溝に２条の溝については、3.0mの間隔をもち、南北方向に長さ約50mを並行し溝の間には他の遺構の無い空間であったため、当初形状から側溝および道路遺構かとも考えられたが、北方向へ続かず、建物等の施設にも接続しなかった。埋土には、いずれも平安時代末の遺物や礫を多く含み、溝や集石などから構成される遺構であることからむしろ庭園遺構の導水や排水に伴う施設の可能性がある。

なお、個別の遺構の呼称として南北方向３条の溝は東側よりそれぞれ西溝、中央溝とし、東西方向の２条の溝は北東西溝、南東西溝とした。また、北東部の石列および礫群が認められる部分を集石部分とした。さらに北東西溝の南側の落ち込み埋土に集中する遺物を土器溜り、底面で検出された遺物群を土器群とし遺物を取り上げている。

これらSX201の規模は、東西60ｍ、南北10ｍにおよぶ大きなもので、さらに西側１区において検出されている南北方向の溝SD209についても削平のため詳細が不明であるものの、並行することから本遺構との関係も考えられさらに拡がるとも考えられる。

なお、集石部分周辺については、検出面において工事影響深度に達したため保護土で埋戻し保存をおこなった。各遺構の規模や形状については次のとおりである。

北東西溝

SX201の北端にある幅0.7～1.0ｍ、深さ20㎝前後の東西方向の溝である。東は屈曲して東溝に繋がる。埋土には、礫や土師器皿などの遺物が多く含まれる。とくに東半部では東溝にかけては、若干底部より浮いた状態で拳大の礫が多量にみられた。

溝東半部の南側の肩は土器溜りのために一段低くなっている。

東溝

北東西溝から南に屈曲して南北方向にはしる幅0.4～1.0ｍ、深さ10～20㎝程度の断面Ｕ字形の溝である。落ち込み状遺構のすぐ内側に掘られている。

北部で集石部分に覆われているため、これに先行すると考えられる。中央溝や西溝と違い緩く蛇行している。埋土には、北東西溝と同様に土師器皿などの遺物に混じって底面より若干浮いた状態で拳大の礫が多量に含まれる。

なお、南東西溝の南側の攪乱を隔てたさらに南に、同様の礫を多く含む溝が検出されている。

中央溝

規模や形状はよく似ているものの、検出面が50㎝ほど低く底部では70㎝の比高差がある。俄かに同一の遺構とするのは難しいかもしれない。

東溝の西側を２～４ｍ離れて南北にはしる長さ50ｍ、幅40～70㎝の直線的な溝である。断面はＵ字形で、深さは20㎝前後を測る。北は北東西溝の手前で途切れており、南は南東西溝に切られているようである

写真23　18次－６区SX201中央溝遺物出土状況

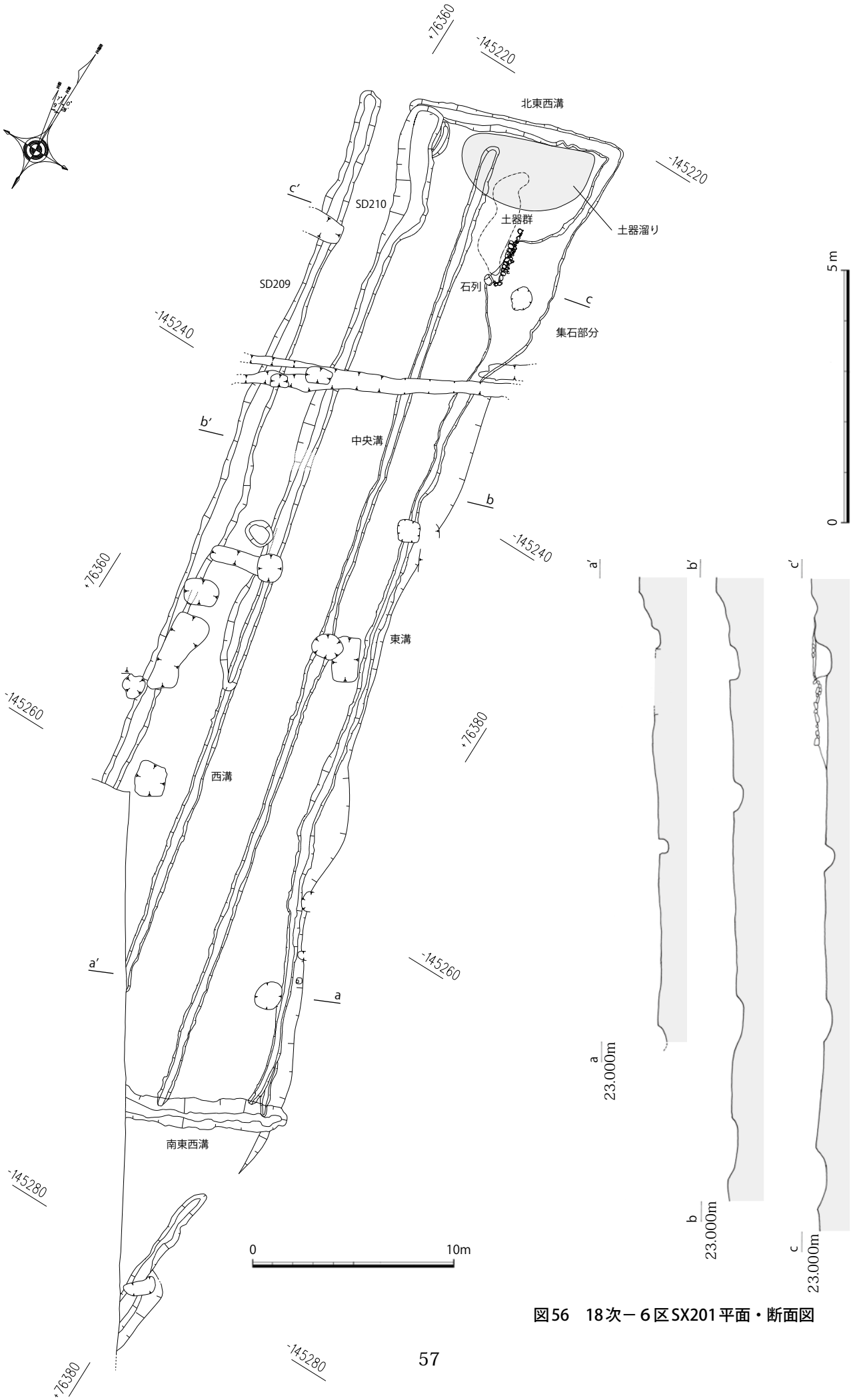


図56　18次－6区SX201平面・断面図

が、削平が激しくさらに南に続くかは、不明である。埋土には、礫や土師器皿などの遺物が多く含まれる。

西溝

中央溝から３ｍの間隔で並行する幅50～70㎝、深さ20～30㎝の真直ぐな溝である。南側は、調査区外のさらに南に続くがⅣトレンチにおいては確認されなかった。北側の30ｍほどは上層をSD210によって切られているようであるが、廃絶後の堆積の痕跡の可能性もある。埋土には、土師器皿などの遺物が多く含まれる。

写真24　18次－６区SX201集石部分断面

南東西溝

SX201の南端にある幅1.0～1.5ｍ、深さ30㎝程度の東西方向の溝である。８ｍを確認したが、西側はさらに調査区外に延びる。東溝および中央溝を切っている。埋土には、非常に大量の土師器が含まれていた。

集石部分

SX201の北部において東西3.0m、南北7.0ｍの範囲で集石部分が認められた。この集石は、東溝の東側の肩部から覆うように造られ、東側には数㎝以下の細礫が敷かれ、西側に５～10㎝の礫が入れられる。さらに西辺では、20～30㎝の自然石による石列が３ｍ分確認された。

土器溜り

北東西溝と東溝のコーナー部分の南側は緩く落ち込んでいくが、この埋土に多くの遺物が集中し土器溜りとなっている。範囲は４ｍ×４ｍ、深さ10㎝前後である。

土器群

集石部分の石列の西側は、一段窪んでいるが、この周辺において底面についた状態で遺物が多くみられた。

北東西溝出土遺物

図化できたものは土師器小皿（583～591）、土師器皿（592，593）がある。

小皿は手づくね成形で、底部に指頭圧痕が残る。

587，589は外底面を指でつまみながら成形するため顕著な窪みが認められる。

591は手づくね成形で扁平な形に作り、口縁端部を折り曲げてコースター型に仕上げている。

土師器皿の口縁部は

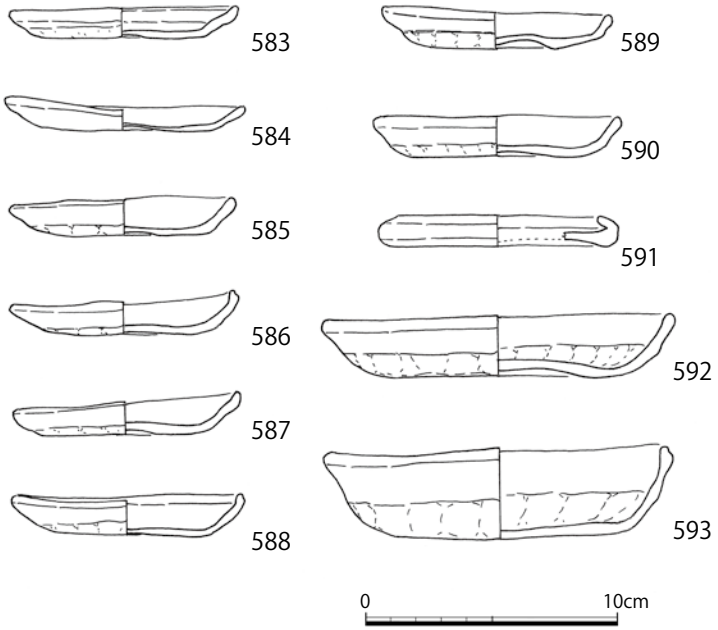


図57　18次－６区北東西溝出土土器

内外面共に横方向のナデで器面を調整し、下半部は手づくね成形の後、軽くナデて器面を整えているが、指押さえの痕跡が残っている。一段ナデ技法で整形している。器高は2.2～3.6㎝と幅がある。

東溝出土遺物

図化したものは、土師器小皿（594～625）、土師器皿（629～644）、白磁碗（626）、青磁碗（627）、陶器壷（628）などがある。

土師器小皿は、手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残す。成形時に底部の中心部を窪ませるもの（596，597，598，614，619，620）が認められる。

614は錐状の工具で底部を穿孔している。口径は概ね９～10㎝の範囲に収まる。器高は１～1.5㎝のものが多いが、621のように２㎝を超えるものもある。

622～625はいわゆるコースター型の小皿で、手づくね成形で、口縁端部を折り曲げて整形する。

土師器皿の上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、下半部は手づくね成形の後、軽くナデて器面を整えているが、指押さえの痕跡が内外面共に残っていることが多い。一段ナデ技法で整形している。口径は概ね14～15㎝の範囲に収まる。器高は２～３㎝程度のものが多いが、638，639のように３㎝を超えるものもあり、用途が別の可能性もある。642～644の口縁端部には燈火器として用いた際に付着した煤の痕跡が見られる。

626の白磁碗は高く削り出した高台が特徴である。光沢のある乳灰色の釉が掛かるが、高台部分は露胎である。

627の青磁碗は内面を櫛状工具で施文する。高台内はカンナで削り出すが、中心部分を削り残して高く盛り上がる。光沢のない緑灰色の釉が掛るが、高台部分は施釉されていない。同安窯系の製品と思われる。628の陶器壷はロクロで挽き出した後、カンナで削り整形する。短い頸部を持ち、全体に細長い作りである。外面に工具の当たった痕跡が認められる。内外面に半光沢の淡青灰色の釉が掛る。

中央溝出土遺物

図化したものは、土師器小皿（645～676）、土師器皿（678～699）、白磁碗（677）などがある。

土師器小皿は手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残す。口縁部は横方向のナデを施す。底部を成形時に中心部を窪ませるもの（665）が認められる。コースター型のもの（674，675）は少数ながら出土する。676は口縁部付近に煤や焦げ付きが付着しており、燈火器として用いられたと判断される。

土師器皿の上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、見込には指押さえの痕跡を残すものが多い。下半部は手づくね成形の後、軽くナデて器面を整えているが、指頭圧痕は残っている。すべて一段ナデ技法である。皿の口径は14～15㎝の間で収まる。器高は２～2.5㎝のものが多いが、３㎝を超えるもの（696～699）が混じる。また口縁端部に面を持つもの（681，682，689，695，697）が認められる。694には口縁部内面に燈火器として用いられた際の燈心の焦げた痕跡が残っている。

白磁碗は高台の内刳は浅く露胎である。内面に光沢のある乳白色の釉が掛る。

北東西溝、東溝、中央溝ともに、東播系の須恵器椀・皿・捏鉢などは見られず、糸切り底の小皿や坏なども認められないのが特徴といえる。

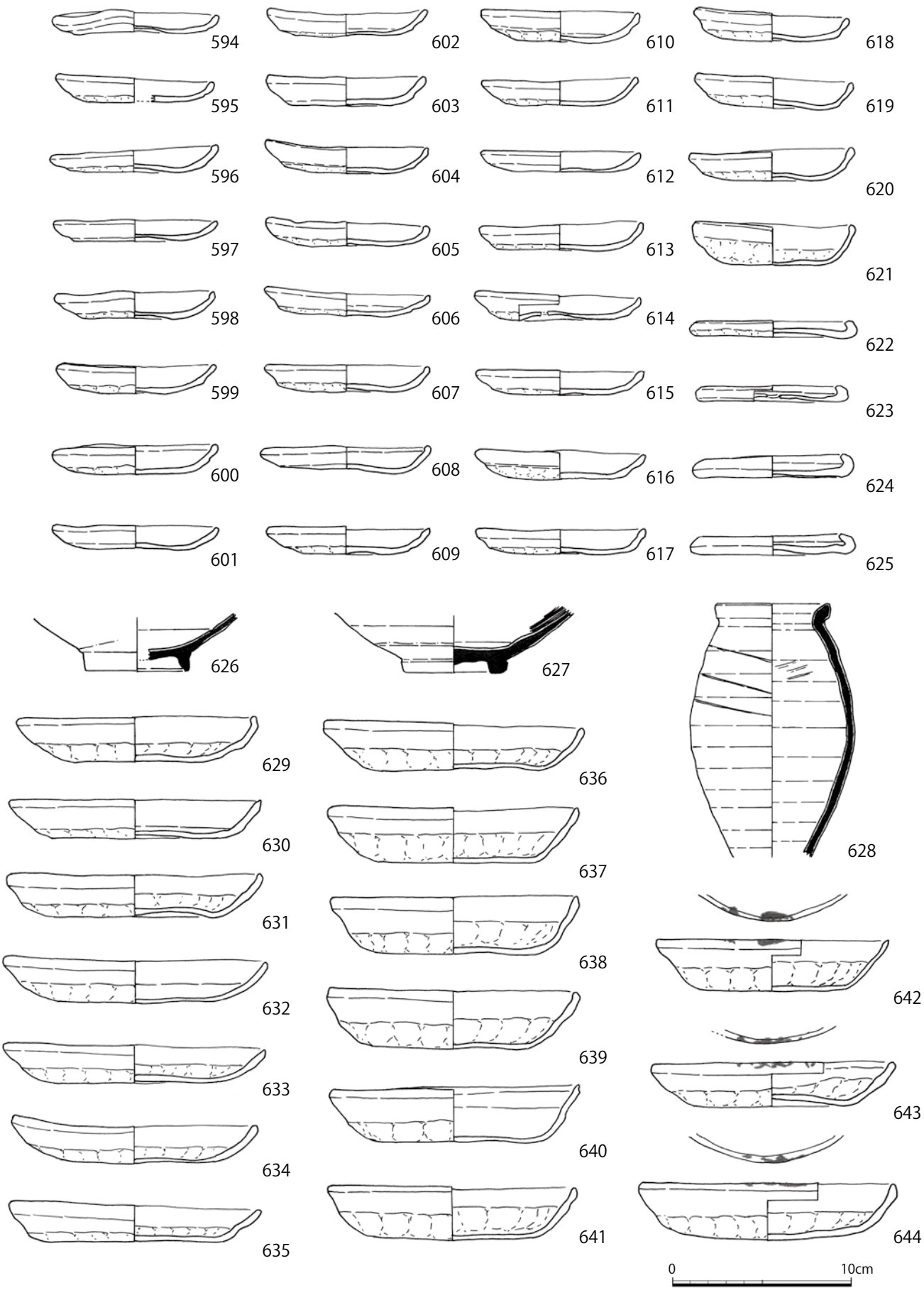


図58　18次－６区東溝出土土器・陶磁器

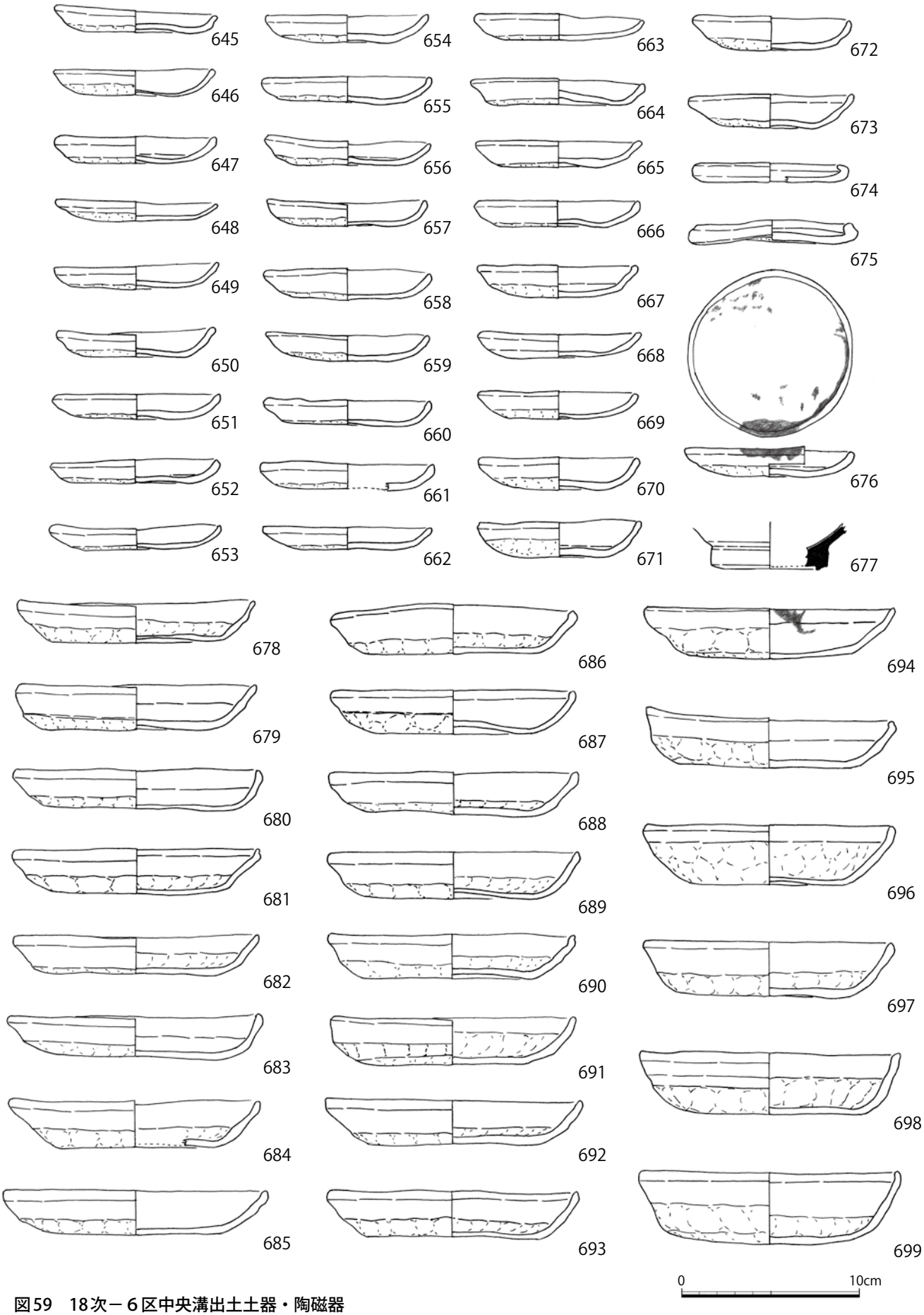


図59　18次－６区中央溝出土土器・陶磁器

西溝
出土遺物

図化したものは、土師器小皿（700～725）、土師器皿（729～766）、青磁碗（726，727）、土師器椀（728）などがある。土師器小皿は手づくね成形で、外底部に指頭圧痕を残すものが多い。口縁部は横方向のナデを施す。口縁径は９～10㎝以内に収まる。器高は１～1.5㎝を測るが、２㎝を超えるもの（719，720）もある。扁平で口縁端部を折り曲げるコースター型のもの（721～724）は少数出土する。725は、口縁部や見込に煤や焦げ付きが付着しており、燈火器として使用されている。土師器皿の口縁部は内外面共に横方向のナデで整形する。下半部は手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残す。口縁端部が面取りされているもの（743，750，759，762）が認められる。口縁直径は729が13.5㎝、その他は14～15㎝を測る。764～766には口縁部付近に煤や燈芯の痕跡が付着し、燈火器として使用されたようである。

726の青磁碗は、口縁部内面に劃花文を施す。釉色は半光沢のオリーブグリーンである。龍泉窯系のものと判断される。727の青磁碗は、直線的な体部に口縁端部は外反する。外面の口縁部から体部にかけてヘラで平行な線を刻む。口縁部から体部上半までガラス質のオリーブグリーンで施釉される。土師器椀は手づくね成形の後、半台形の高台を貼りつける。これは吉備系の土師器椀と思われる。

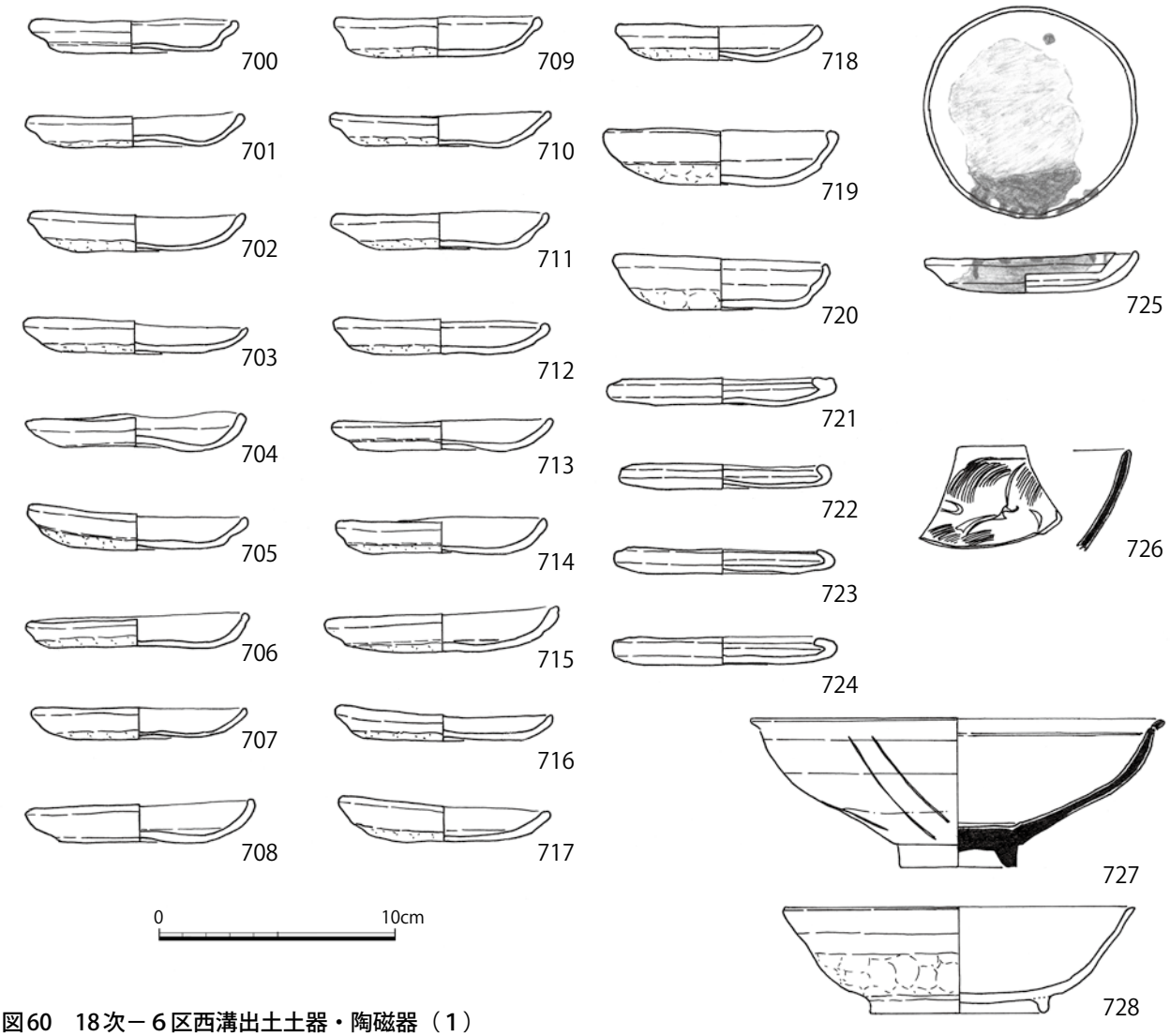


図60　18次－６区西溝出土土器・陶磁器（１）

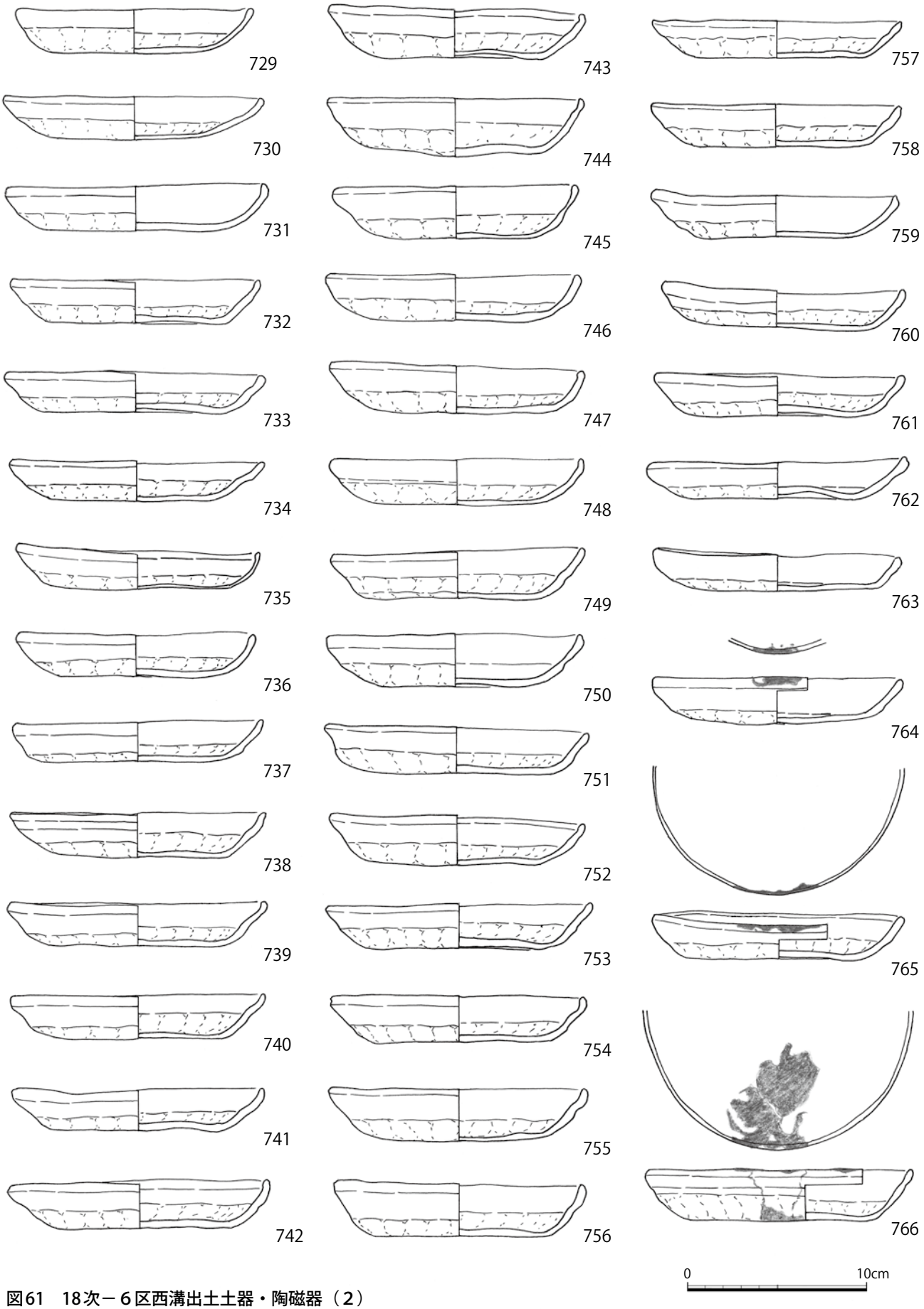


図61　18次－６区西溝出土土器・陶磁器（２）

南東西溝出土遺物

図化したものは、土師器皿（767～818）、土師器小皿（819～885）、青白磁合子（886）、瓦器椀（887，888，892）、瓦器皿（889～891）、移動式カマド（893）、瓦（894，895）がある。

土師器皿の上半部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、下半部が手づくね成形の後、軽くナデを施して器面を整えているが、指押さえの痕跡は残るものが多い。見込部分は指押さえで成形の後、軽くナデるが、指頭圧痕を残すものが多い。成形技法は、一段ナデ技法で作られている。口径は14～15㎝の範囲に収まる。

土師器小皿は手づくね成形で底部に指頭圧痕を残すもの（819～881）、ロクロ成形で底部回転糸切りのもの（882）。扁平でコースター型のもの（883～885）がある。径は９～10㎝の範囲に収まる。手づくね成形で外底部に指頭圧痕を残すものの器高は、1～1.5㎝のものが多いが、２㎝程度のもの（869～875）もある。土師器皿・小皿のうち776～779，876～881は、口縁部・見込に煤や焦げ付きが付着しており、燈火器として使用されたと判断される。

瓦器椀は手づくね成形で口縁部に横方向のナデを施し、胴部には二段か三段の指頭圧痕を残す。底部には断面三角形、逆台形の高台を貼りつける。瓦器皿は手づくね成形の後、口縁部に強い横方向のナデで整形し、内面に暗文を施す。

886は青白磁合子の蓋である。型づくりで菊花の花弁状の文様を浮かび上がらせる。外面には光沢のある淡灰色の釉が掛る。

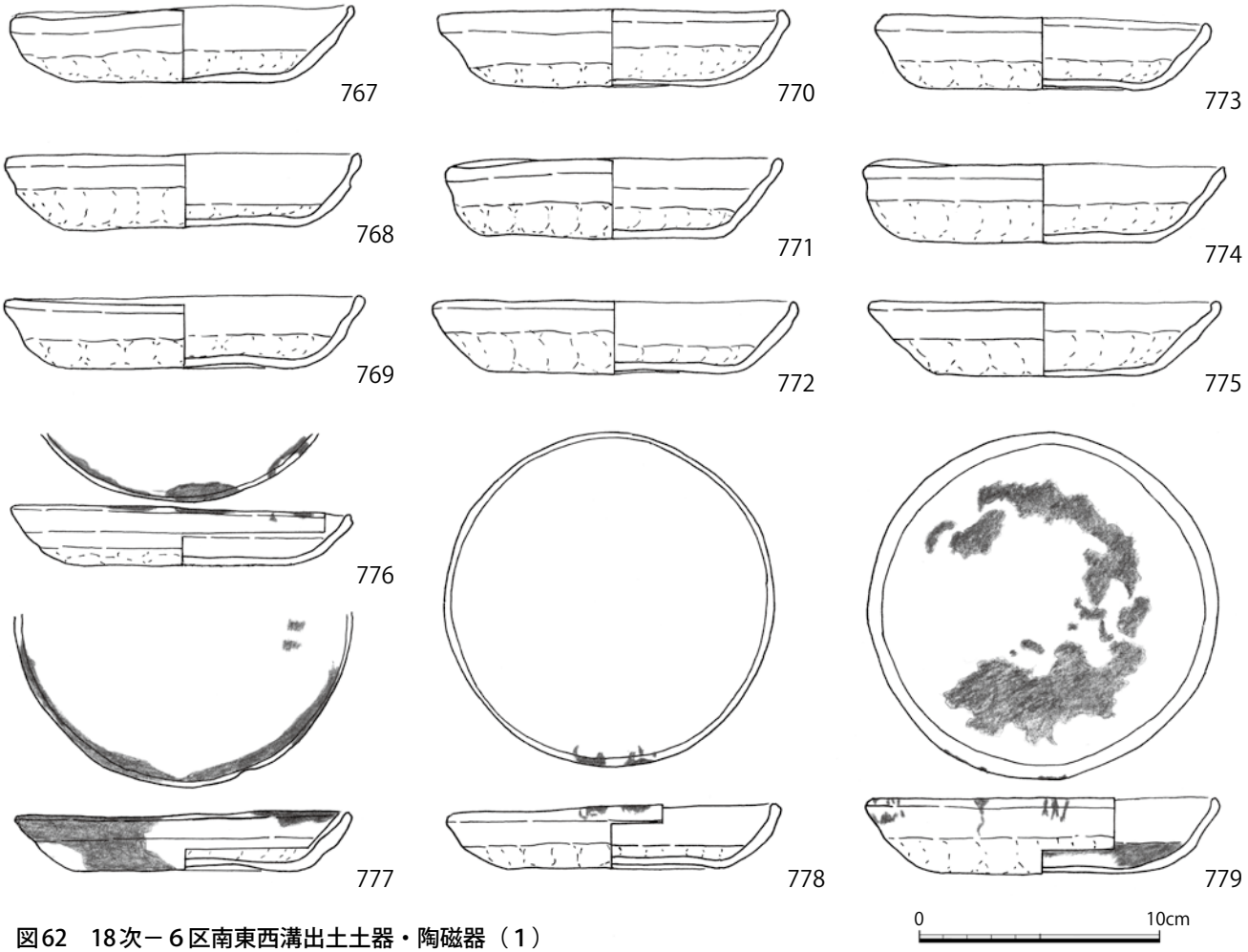


図62　18次－６区南東西溝出土土器・陶磁器（１）

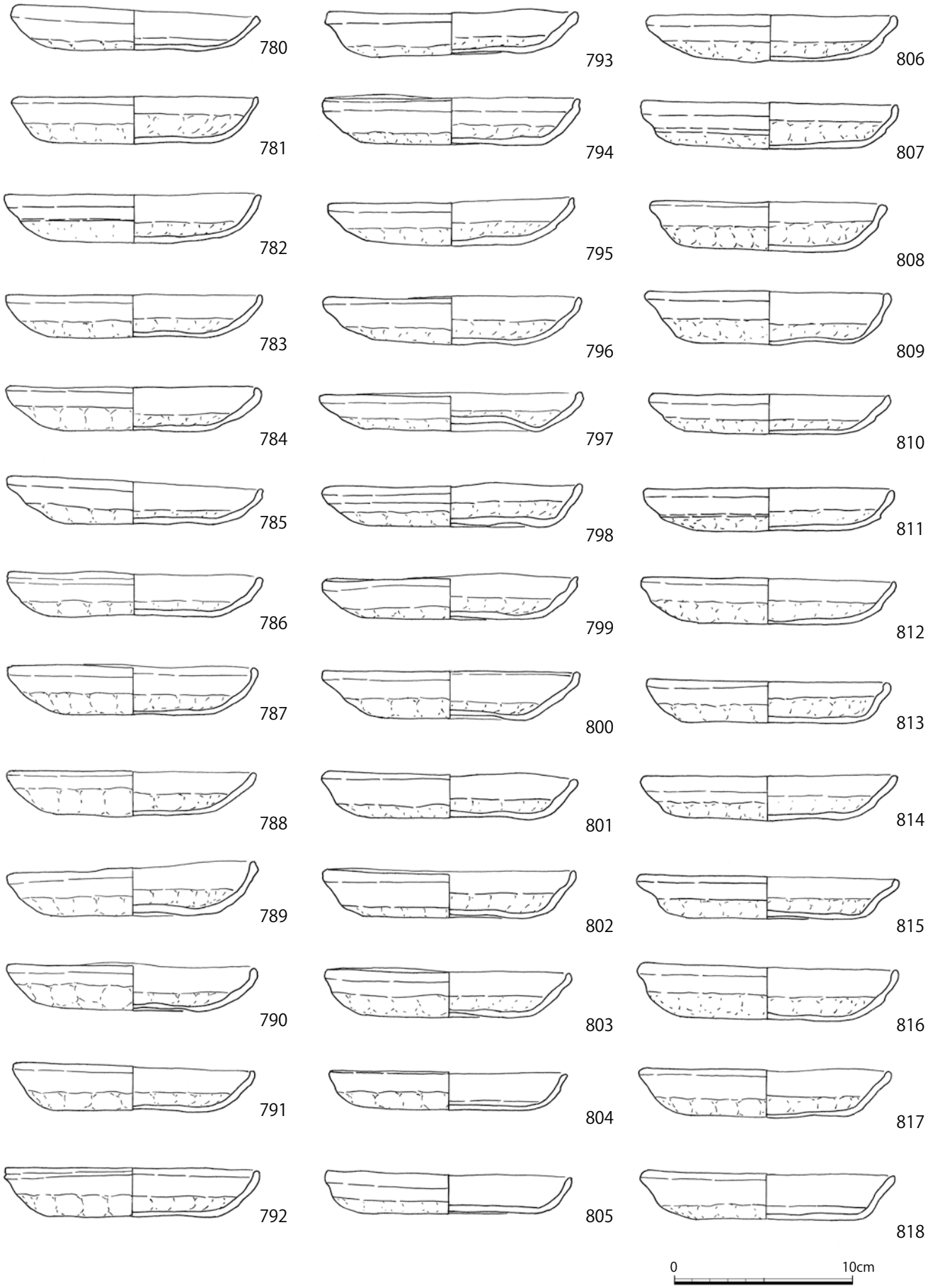


図63　18次－６区南東西溝出土土器・陶磁器（２）

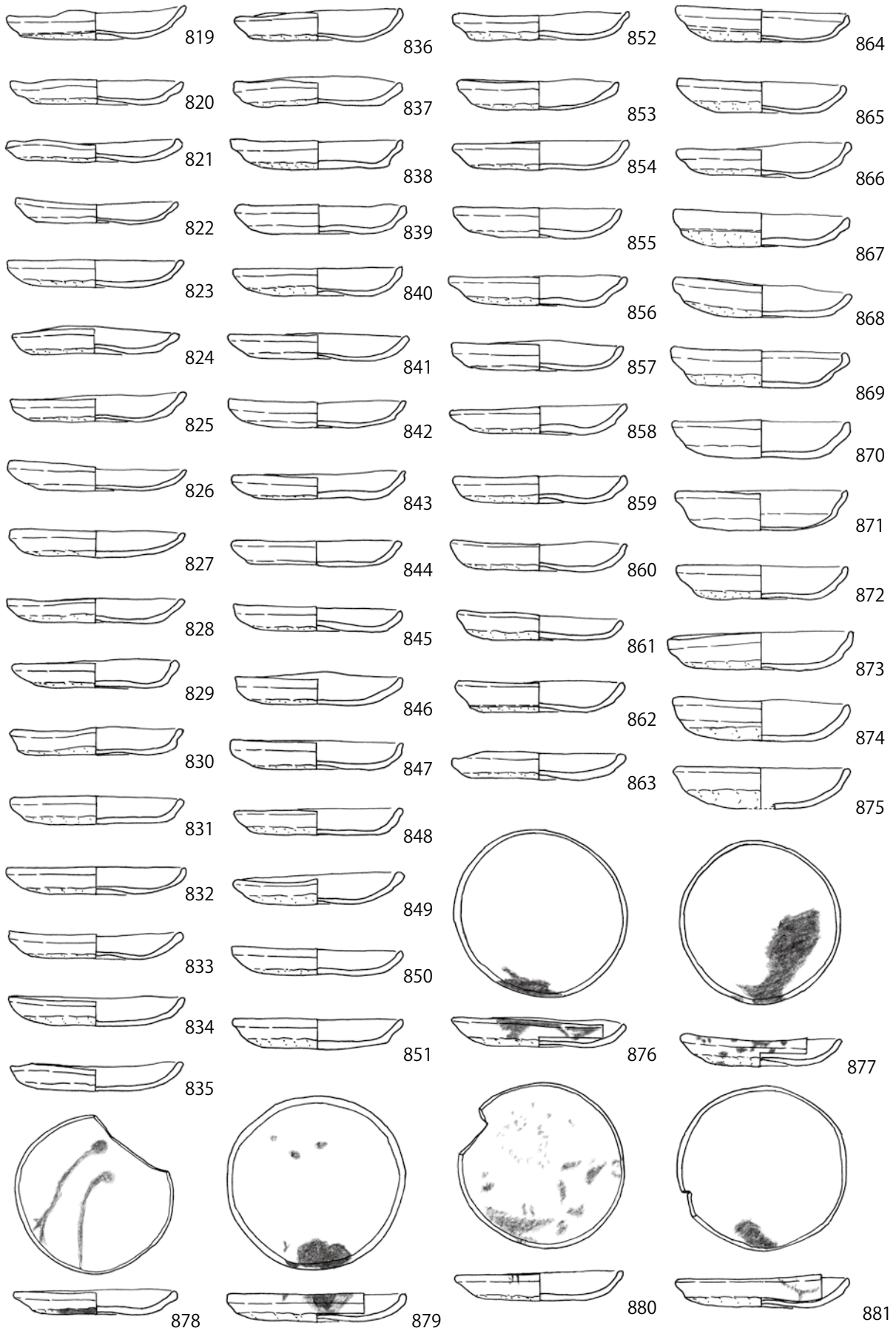


図64　18次－６区南東西溝出土土器・陶磁器（３）

0　10cm

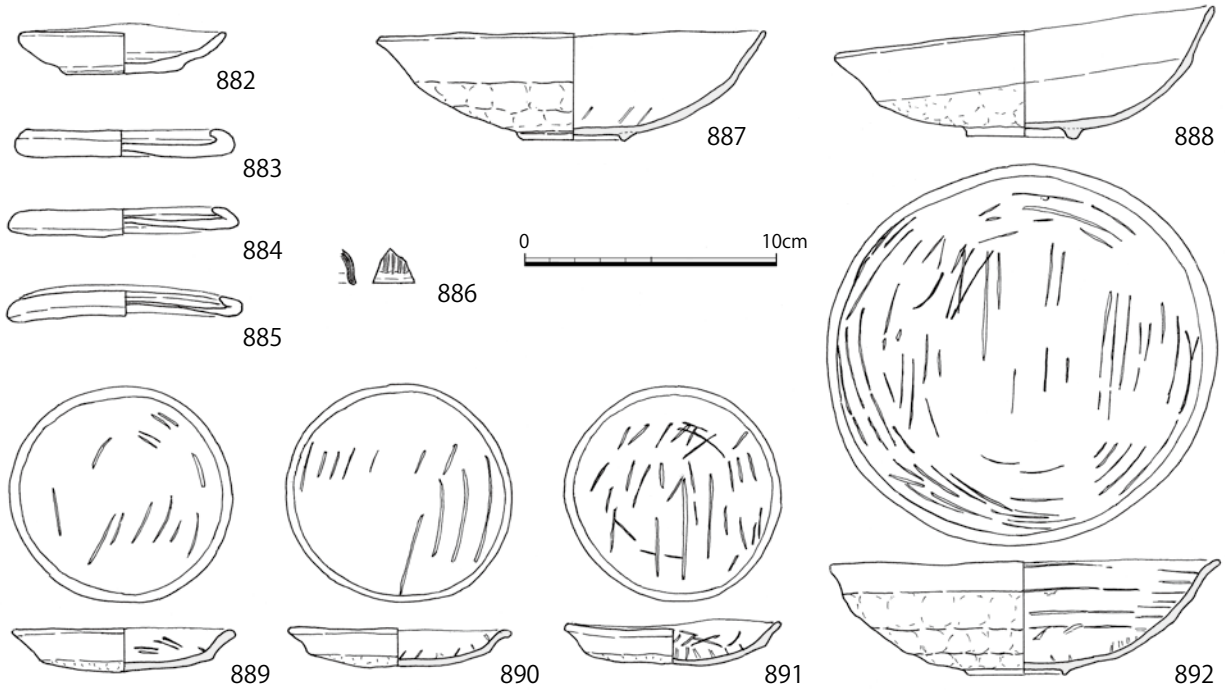


図65　18次－６区南東西溝出土土器・陶磁器（４）

893は土師質の移動式カマドである。鍋･羽釜を据える円形の天井部と前面に鍔を持ち、それが四角い焚口部分の縁を回る。焚口部および胴部は縦方向の刷毛目で壁体を調整する。内外面の上半分には煤が付着している。

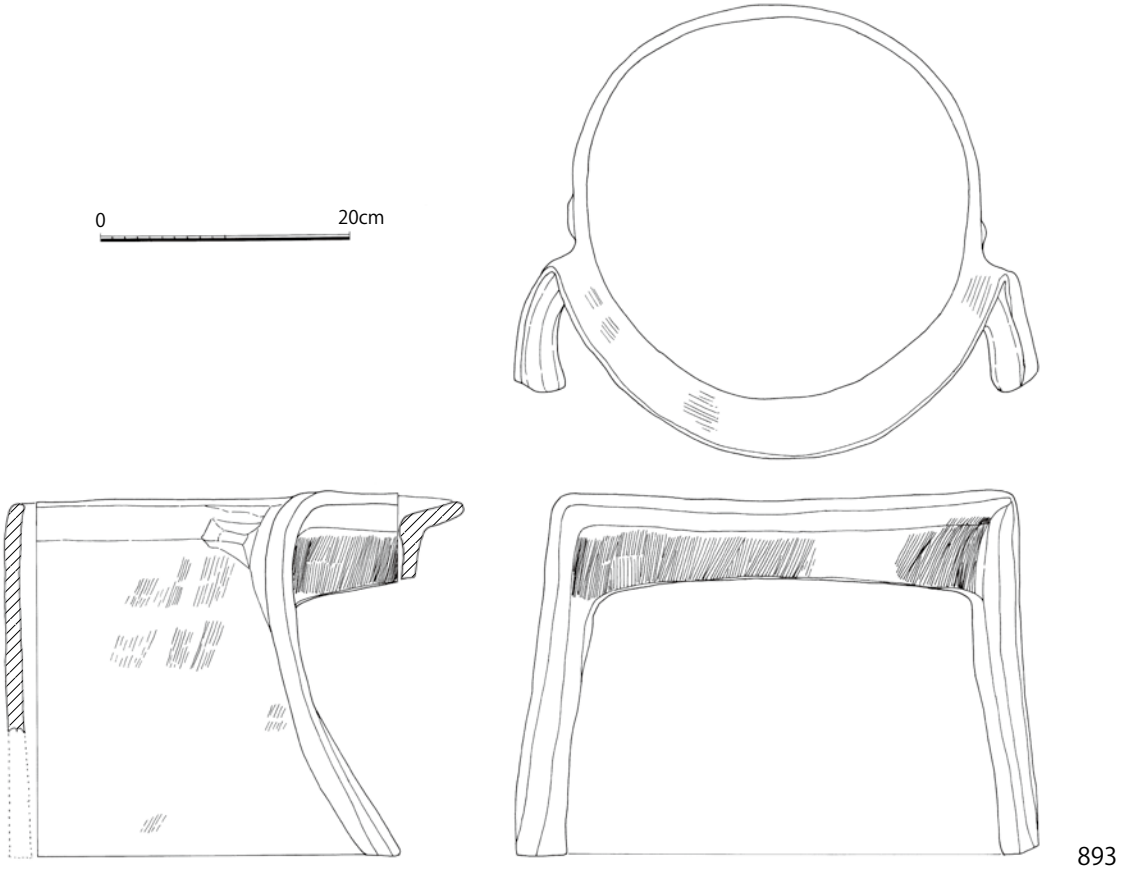


図66　18次－６区南東西溝出土カマド

894は須恵質の丸瓦である。外面はヘラ削りとナデで整形し、内面は布目圧痕とヘラ削りで調整する。895は須恵質の軒丸瓦で、瓦當の下半分弱しか残っていない。笵がかなり潰れており、文様が鮮明でない。これは播磨系のものと判断される。

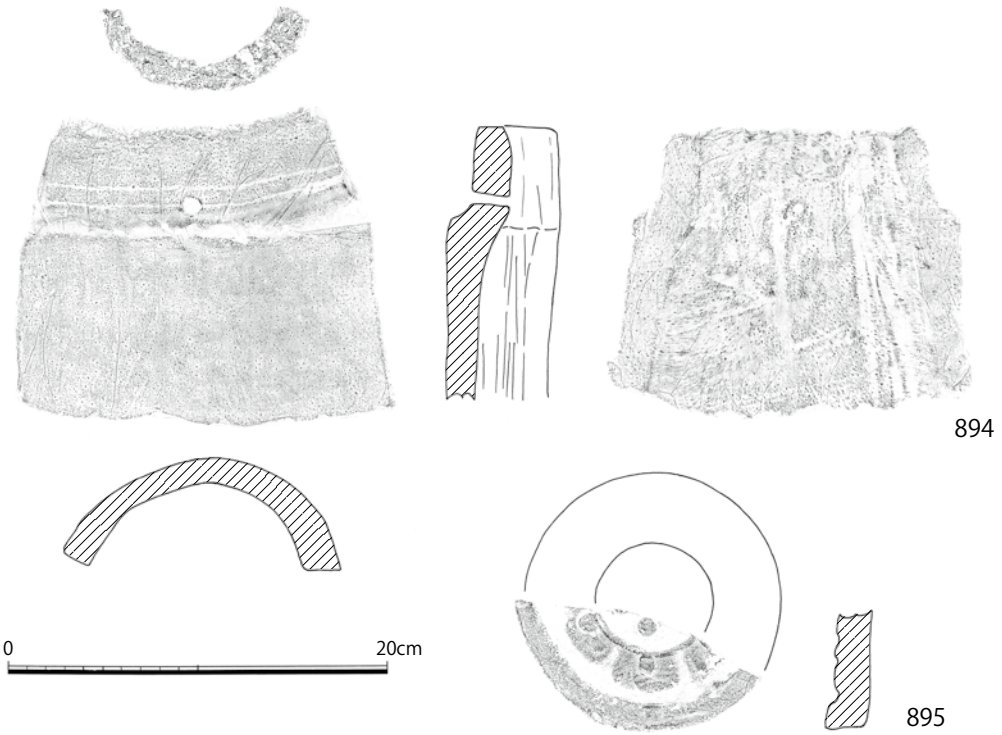


図67　18次－６区南東西溝出土瓦

集石部分出土土器

図化できたのは土師器小皿（896～901）６点である。手づくね成形で、底部には指頭圧痕が残るものが多い。口縁部は横方向のナデで整形する。見込部分は指押さえで成形の後、ナデる。底面の中心部を窪ませるもの（897，900）がある。

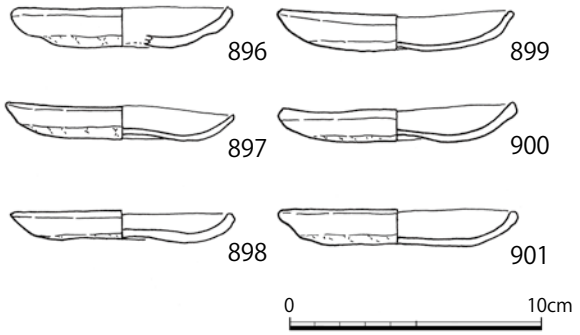


図68　18次－６区集石部分出土土器

土器溜り出土土器

図化したものは土師器小皿（902～917）、土師器皿（918～925）、瓦器椀（926）である。

土師器小皿の成形技法は、外底面に指押さえの痕跡を残すものが多い。皿の口径は９～10㎝以内である。器高は１～1.5㎝のものがほとんどであるが、２㎝を超えるもの（916）も出土する。底部の成形時に中心部を窪ませるもの（903，908，909）が認められる。

扁平な体部に口縁端部を内側に折り曲げるコースター型の小皿（917）が共伴している。

土師器皿の底部は手づくね成形の後、軽くナデを施して器面を整えているが、指押さえの痕跡が残っているものが多い。口縁部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、見込部分には指押さえの痕跡を残す。皿の口径は14～15㎝以内に収まり、一段ナデ技法で作られている。925は錐状の尖った利器で、側面を２カ所穿孔しているのが認められる。

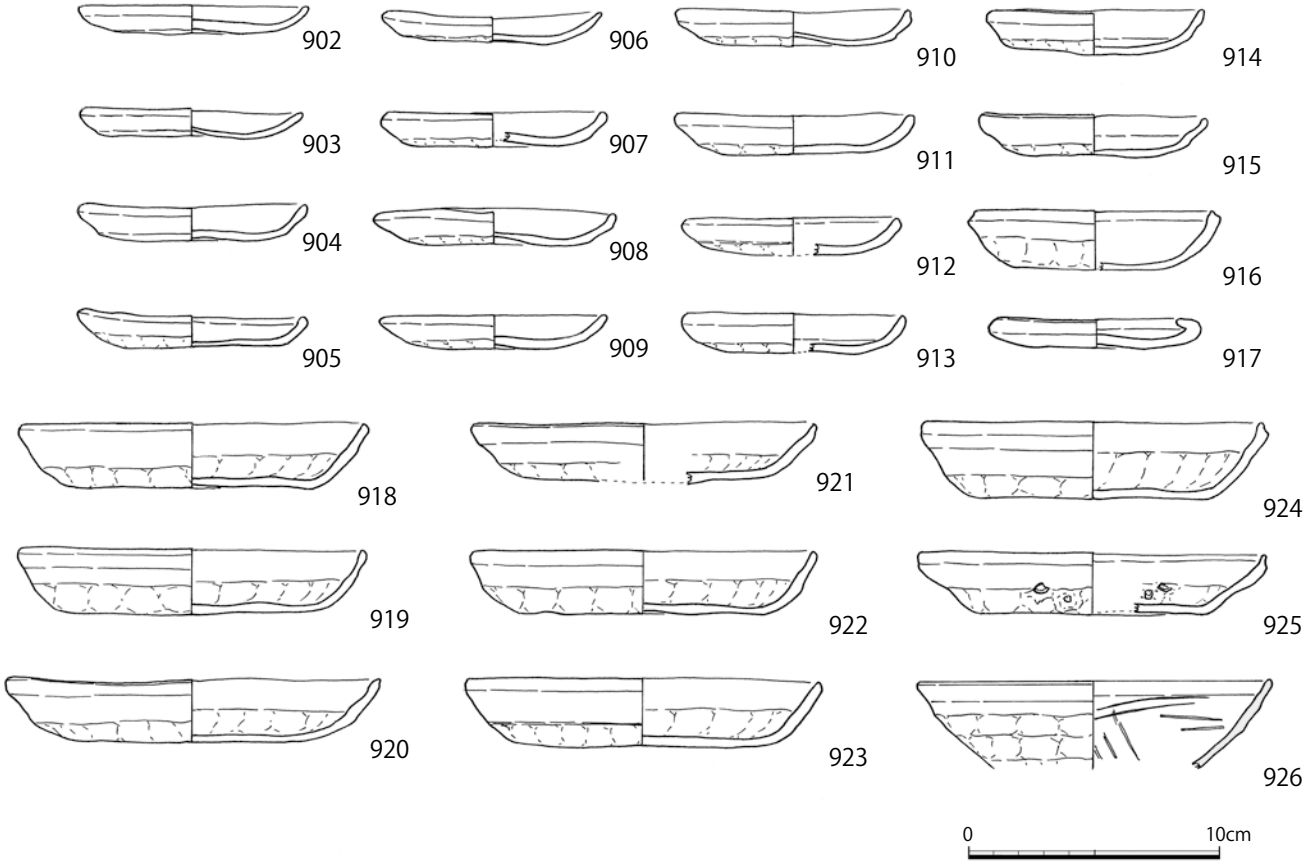


図69　18次－６区土器溜り出土土器

瓦器椀（926）は手づくね成形を行い、胴部は指押さえ、口縁部は横方向のナデで整形する。内面はナデ調整の後、口縁部付近は横方向、見込付近は平行線状の暗文を施す。

土器群
出土土器

図化したものは土師器小皿（927～949）、土師器皿（950～961）である。

土師器小皿は手づくね成形で底部に指頭圧痕を残すもの（927～947）、扁平でコースター型のもの（948，949）がある。いずれの形でも径は９～10㎝の範囲に収まる。

底部に指頭圧痕を残すものの中には、外底面の真中部分を凹ませるもの（931，944）が見受けられる。これは底部の真中部分を親指で押さえながら周囲を整形していくため、その分が窪んで仕上がるという過程を経るためと思われる。

土師器皿の口縁部は内外面共に横方向のナデで器面を調整し、底部は手づくね成形の後、軽くナデを施して器面を整えているが、指頭圧痕は残るものが多い。また、内底面は指押さえで成形の後、軽くナデるが、指頭圧痕を残すものがある。これらは一段ナデ技法で作られており、画一性がある。

口径は14～15㎝の範囲に収まる。器高２㎝は内外のものが多いが、３㎝前後のもの（960，961）もあり、用途の違いなのか、作り手の個性であるのかは定かではない。

また、口縁端部に面取りを施すもの（950，951，957，959，961）が散見されるが、数は多くはない。

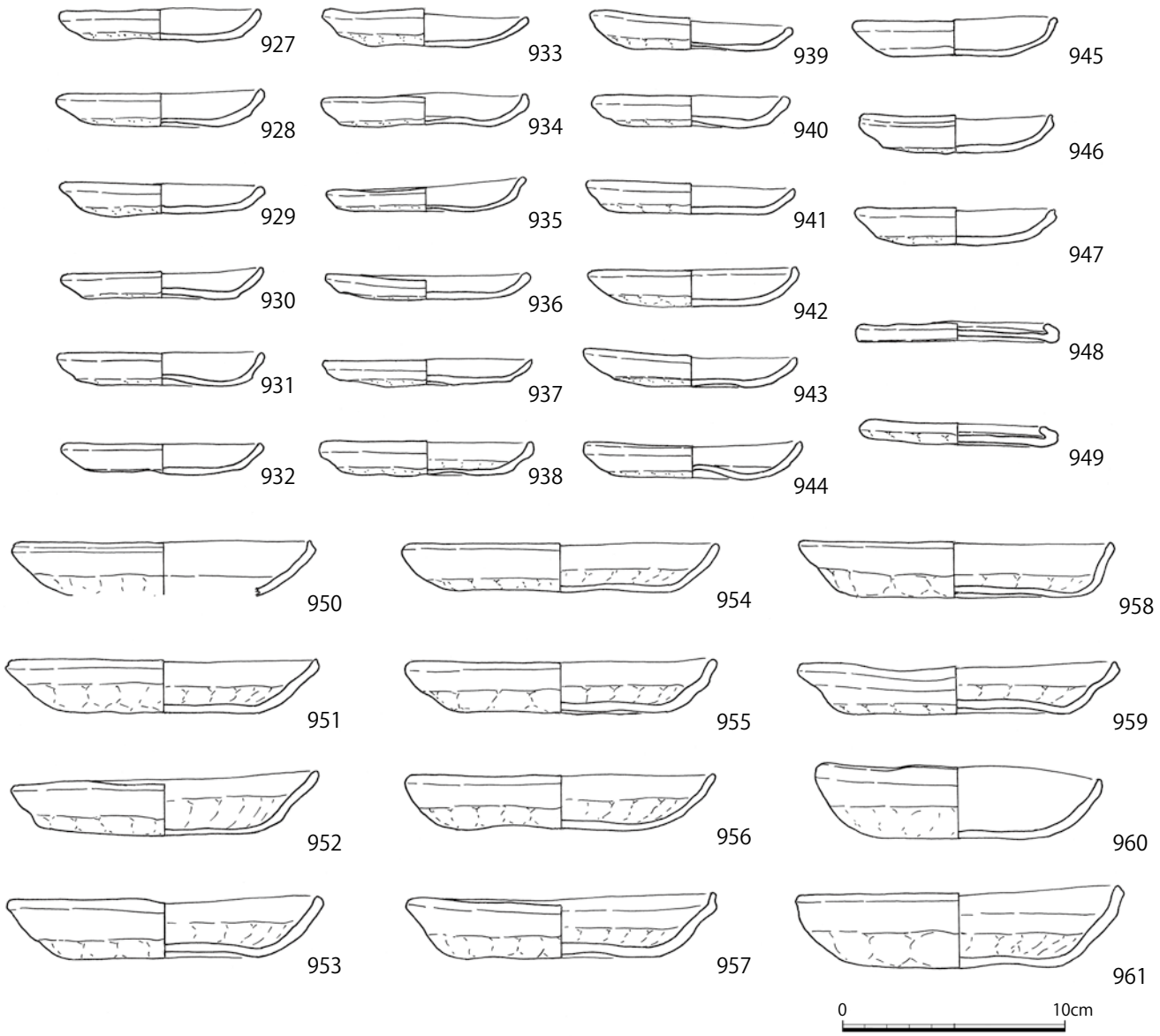
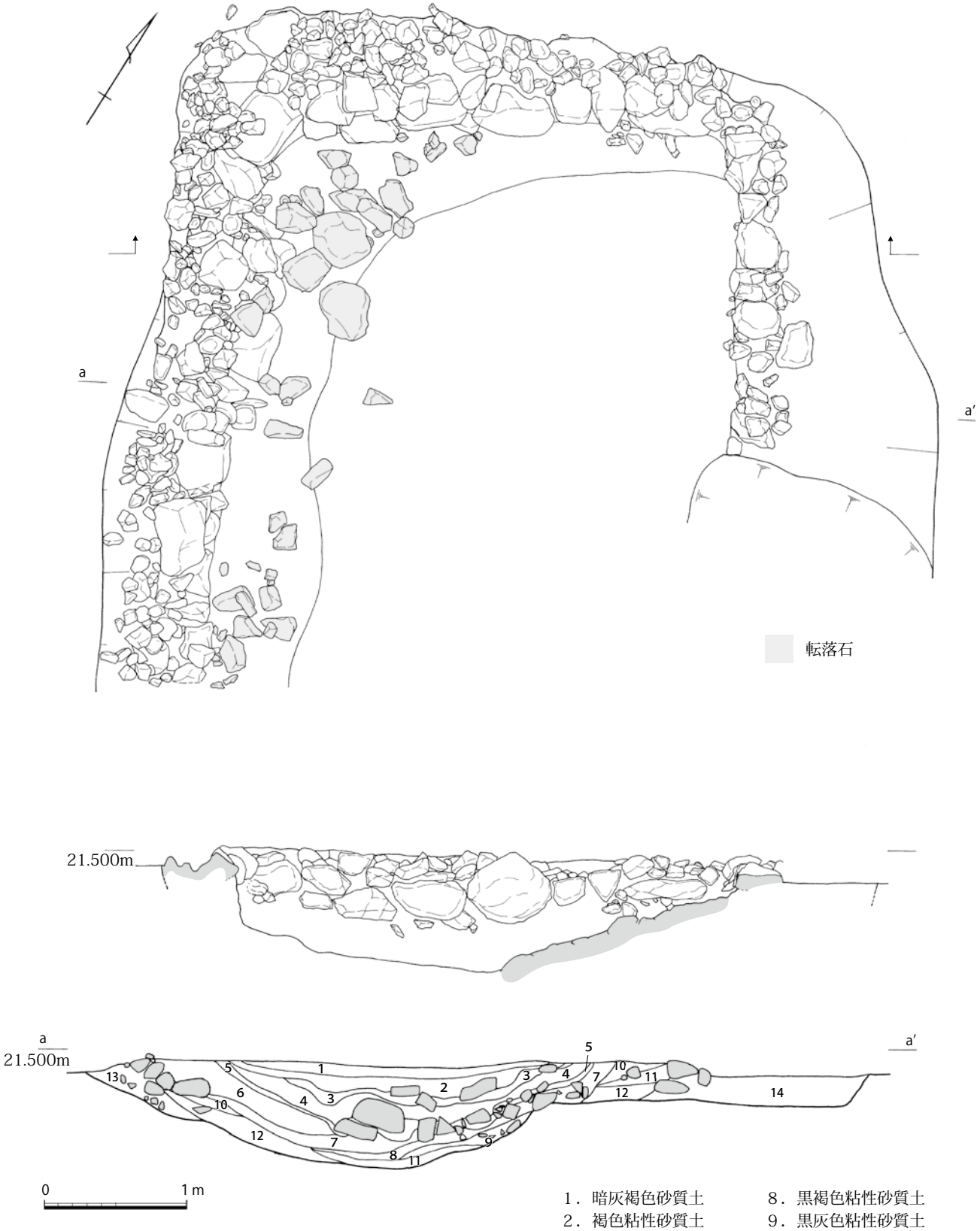


図70　18次－６区土器群出土土器

SX202　SX202は調査区の南端で検出した東西4.5ｍ、南北4.0ｍ以上、深さ80㎝の規模をもつ遺構である。東辺の南側を攪乱によって削平されている。南側は、さらに調査区外に拡がる。検出状態では、自然石を２～３段積み上げて内側を四角く囲む構造をもつが、底部はさらに素掘りの状態ですり鉢状に深くなる。裏込めには拳大の礫を入れている。埋土の状況から水が溜まっていたような痕跡が認められる。

平安時代から中世の遺物の細片が出土したが時期決定は難しい。平安時代後期と考えられるSK202を切り、これより新しいことが分かる。埋土については、花粉・プラントオパール・寄生虫卵の分析を実施したが、土質の状態などから良好な結果は得られなかった。

SX203　調査区の南西端で検出された幅70㎝、深さ40㎝の溝である。一部調査区外の部分を挟んで擁壁部のトレンチでも確認されていることから延長は東西16ｍ以上ある。また５区の中ほどで西方向にカーブしている。



1．暗灰褐色砂質土
2．褐色粘性砂質土
3．褐色粘質土
4．褐灰色粘性砂質土
5．暗褐色粘質土
6．暗灰色粘性砂質土
7．暗灰色砂質土
8．黒褐色粘性砂質土
9．黒灰色粘性砂質土
10．灰黄色粗砂
11．黄灰色粗砂
12．灰褐色粗砂
13．褐灰色土
14．暗灰色砂質土

図71　18次－５区SX202平面・断面図

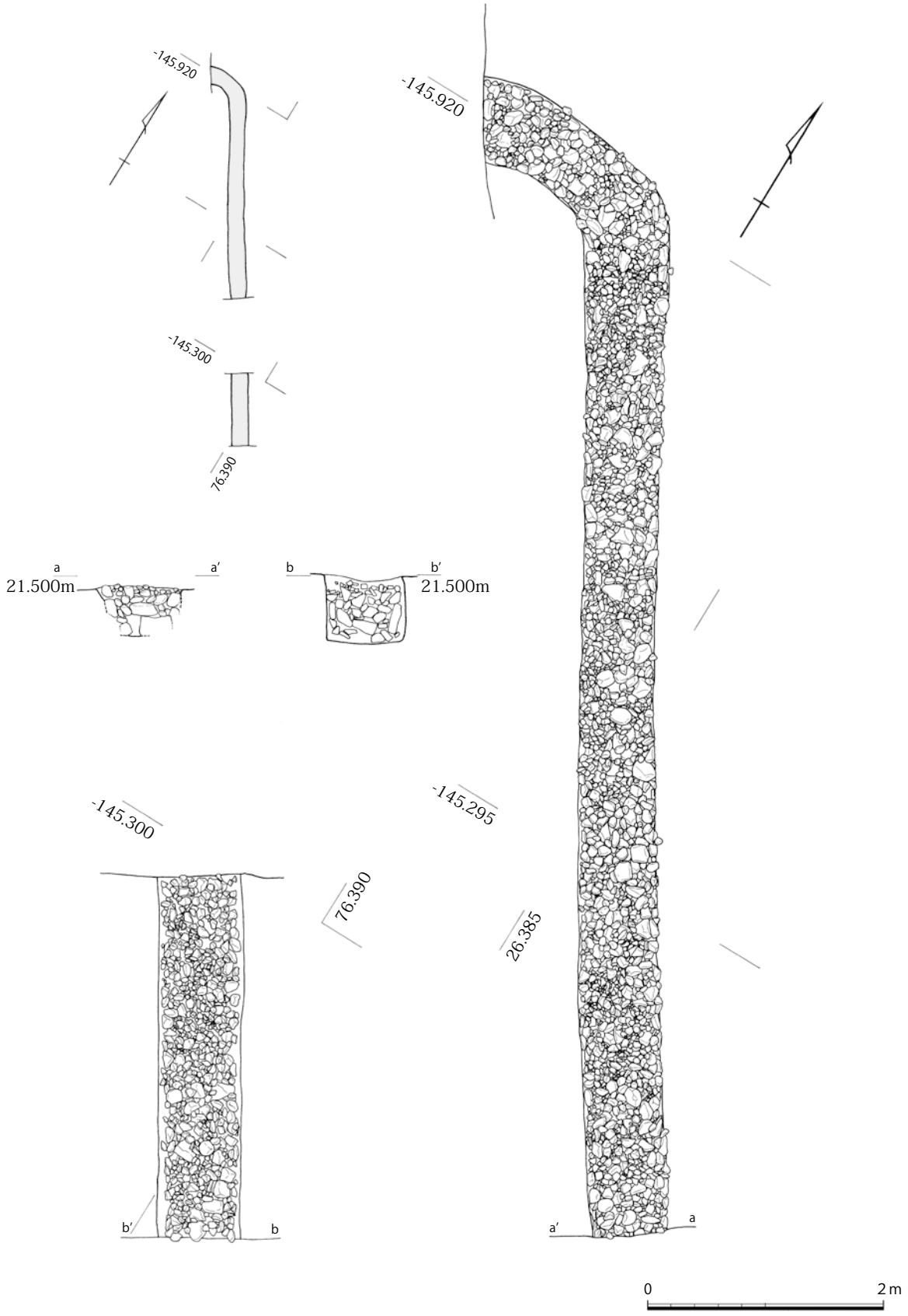


図72　18次－５区・Ⅲトレンチ SX203 平面・断面図

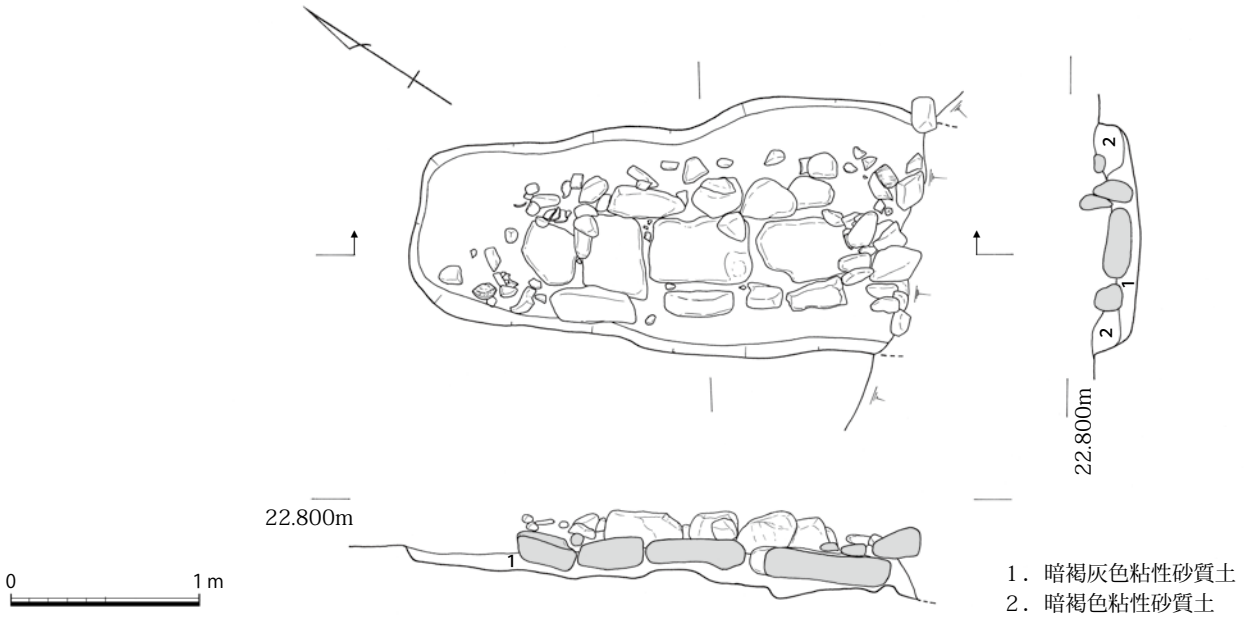


図73　18次－６区SX204平面・立面図

礫石を使用した丁寧な造りで、導水施設と考えられる。構造は、断面逆台形の掘形の側面に平らな石を数段積み、底面には中央に隙間を設け両側に大型の角礫を据え板状の石で塞いで四角い導水部分を確保したうえで上層には砂利、下層にはそれよりやや大振りの礫を充填し埋めている。なお3.5ｍ南のⅢトレンチにおいても同様の遺構が確認されていることから南北延長は13ｍ以上になる。他の遺構との接続は確認できなかった。

SX204

６区の北東部で検出された石組み遺構で、東西1.3m、南北2.7m以上を測る。南側を近世以降の整地によって大きく削られている。この削平段を挟み11ｍ南の直線状に浅い溝状の遺構SD208が、また北側についても石組は存在しないものの掘形状の窪みが北に向かってさらに延びていることから、削平された痕跡である可能性が高いと考えられる。

石組の構造は、底部に板状の石を敷いて並べた上に、平らな面をもつ石で側面を垂直に組み上げている。底面が、南にむかって僅かに傾斜していることから北から南への導水施設の一部の可能性がある。

出土遺物

出土遺物は、土師器小皿（962，963）、土師器皿（965～967）、青磁小皿（964）、須恵質の平瓦（968，969，971）、

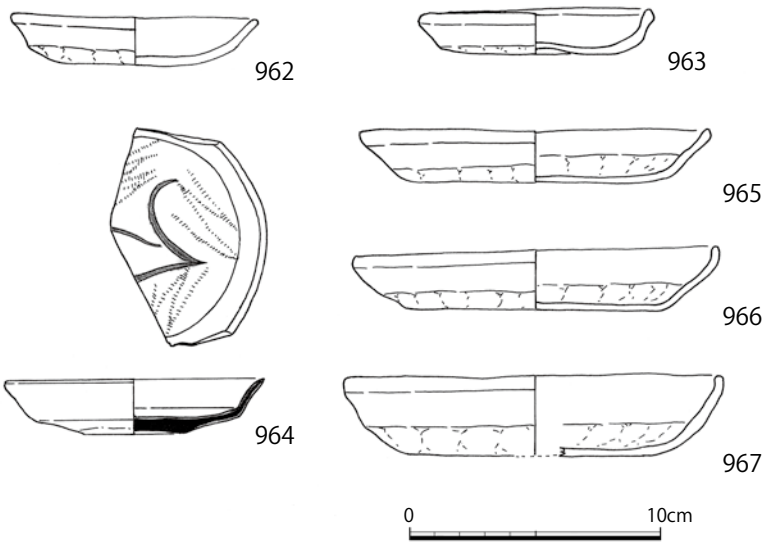


図74　18次－６区SX204出土土器・陶磁器

軒丸瓦（970）がある。土師器小皿は手づくね成形で底部には指頭圧痕を残し、口縁部は横方向のナデで整形する。内面はナデ調整を行う。土師器皿も同様の作業を行い、一段ナデ成形であるが、内面に成形時の指押さえ痕跡を残している。青磁小皿は見込にヘラと櫛で文様を施し、ガラス質のオリーブグリーンの釉が掛る。外底面は露胎である。同安窯系の製品と思われる。平瓦は凹面には布目痕、凸面にはタタキ目痕が残る。
軒丸瓦は花弁が単純省略化されており、非常に薄い作りとなっている。

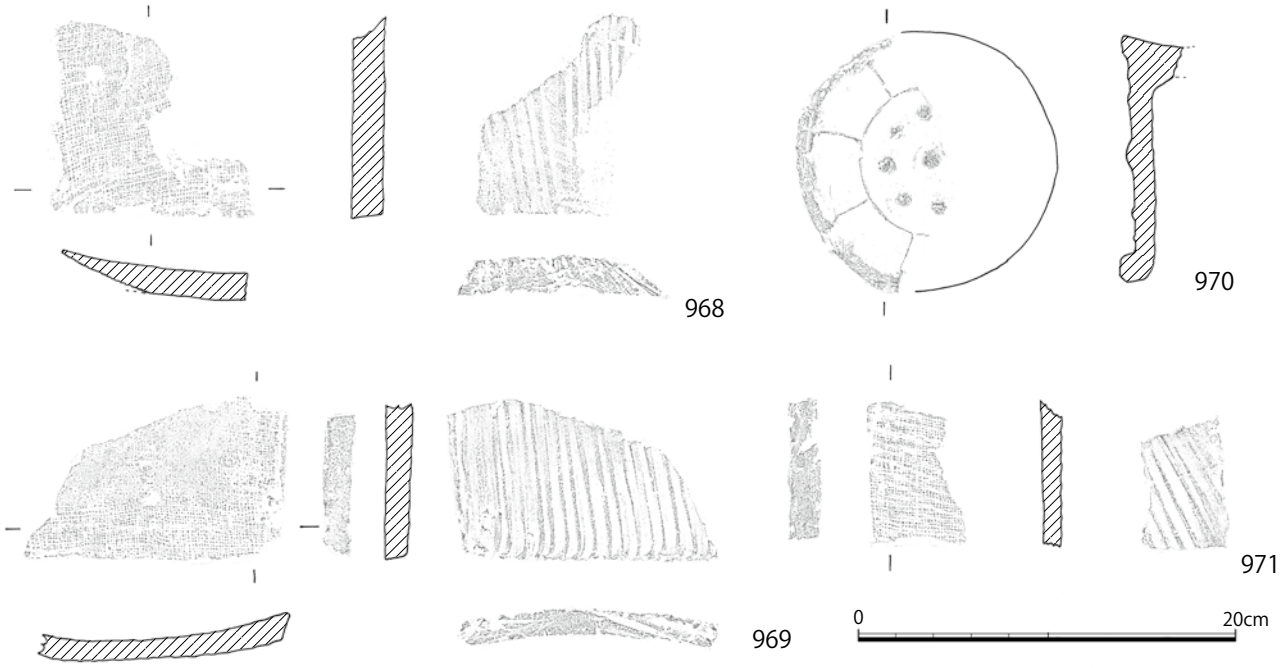


図75　18次－６区SX204出土瓦

SX205　調査地の南西隅のⅢトレンチからⅣトレンチへのコーナー部に位置する東西幅8.0ｍほどの不整形な落ち込み状の遺構である。南北とも調査区外に拡がる。両肩から深さ20～30㎝ほどで一旦平坦になるが、中央付近で幅1.5～2.5mでさらに40㎝ほど溝状に窪む。埋土からは、平安時代後期の遺物が比較的多く出土した。

出土遺物　出土遺物で図化したものは、土師器小皿（972～982）、土師器皿（983）である。
土師器小皿・皿は手づくね成形で、底部に指頭圧痕が残る。口縁部は横方向のナデで仕上げる。小皿の口径は９㎝前後であるが、982のように10㎝を超えるものがある。皿は内面にも指頭圧痕が残る。口径は15㎝を計る。

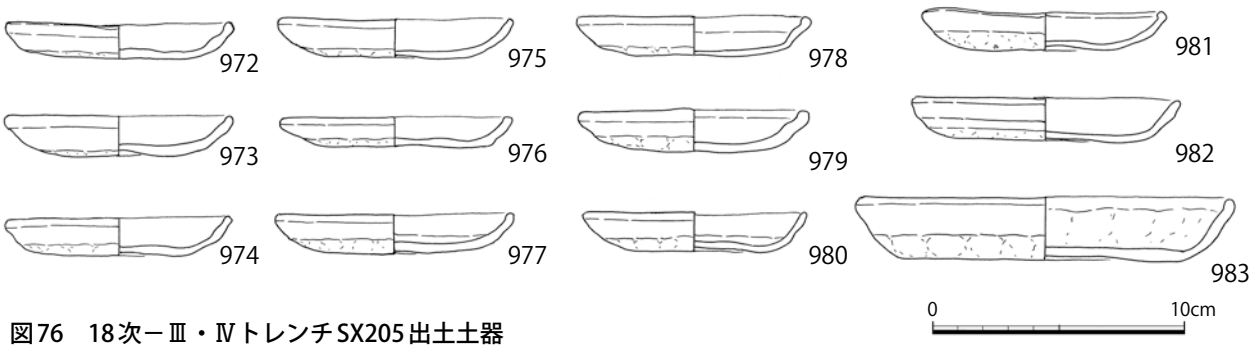


図76　18次－Ⅲ・Ⅳトレンチ SX205出土土器

その他の遺構

平安時代末期の遺構で良好な遺物が出土したものに、調査区の南部SB202の西側に位置するSP201・SP202がある。

SP201は径50～60㎝、深さ40㎝の円形のピットで、埋土からは円礫や土器と共に、中国製の陶磁器が破片で出土した。

SP202は径50㎝、深さ20㎝の円形のピットである。埋土に拳大の礫と遺物をまとめて投棄した状態で発見された。

SP201出土遺物

青磁小碗（984）、青磁碗（985）、白磁碗（990）、青白磁碗（988）、青磁小皿（989）、褐釉四耳壷（991）、土師器皿（986）、瓦器椀（987）である。青磁碗・小碗・小皿は同安窯系、白磁碗は端反りの口縁部を有し、高台部は高く削り出し、露胎である。

褐釉四耳壷は内外面共に褐色の光沢のある釉を施す。外底面は露胎である。

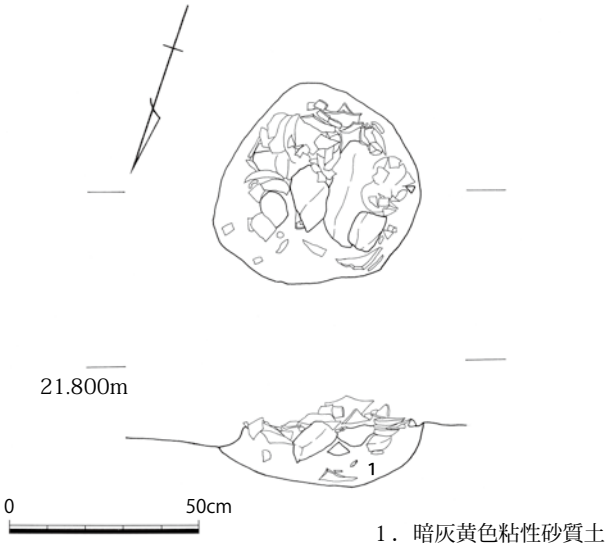


図77　18次－４区SP202平面・立面図

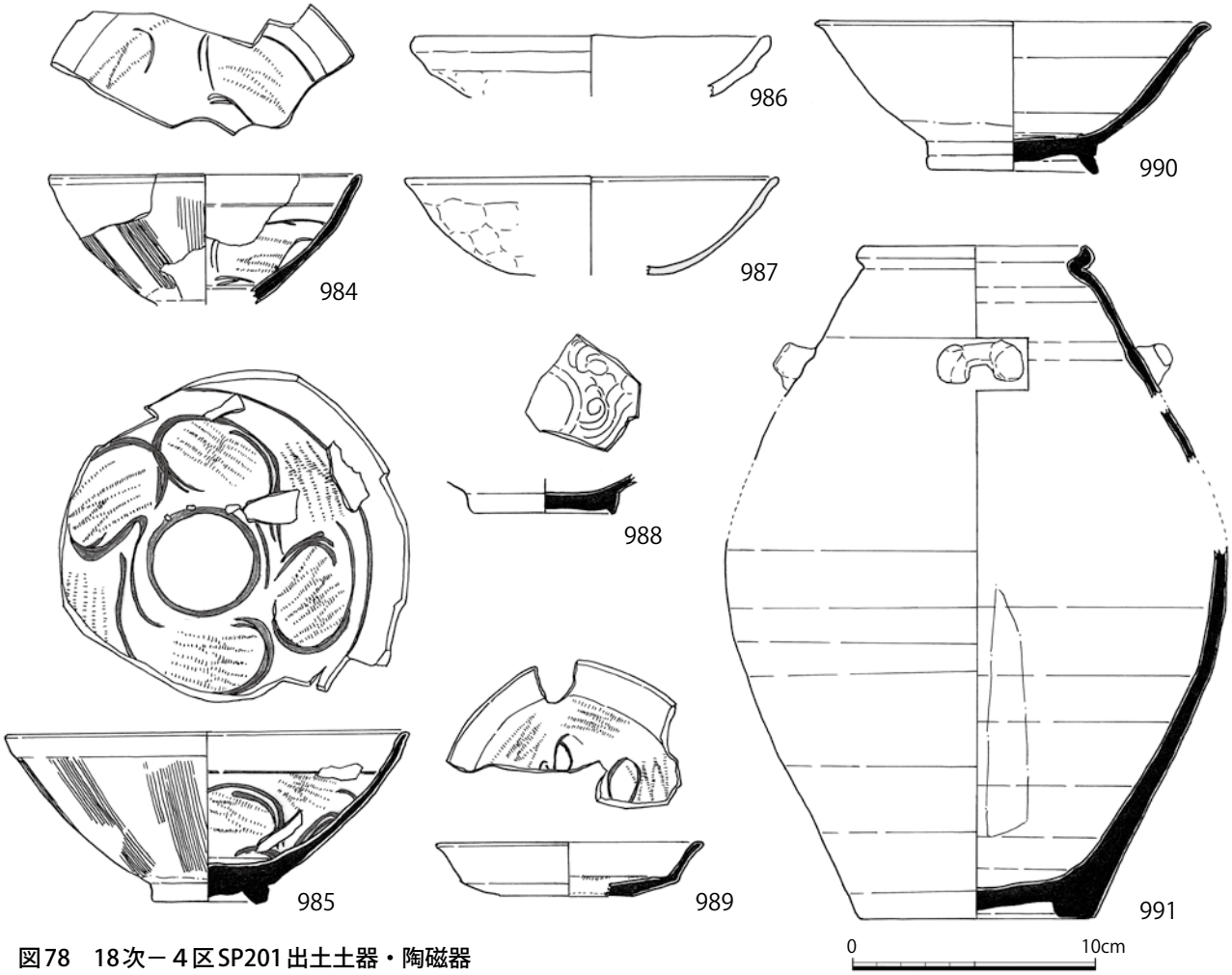


図78　18次－４区SP201出土土器・陶磁器

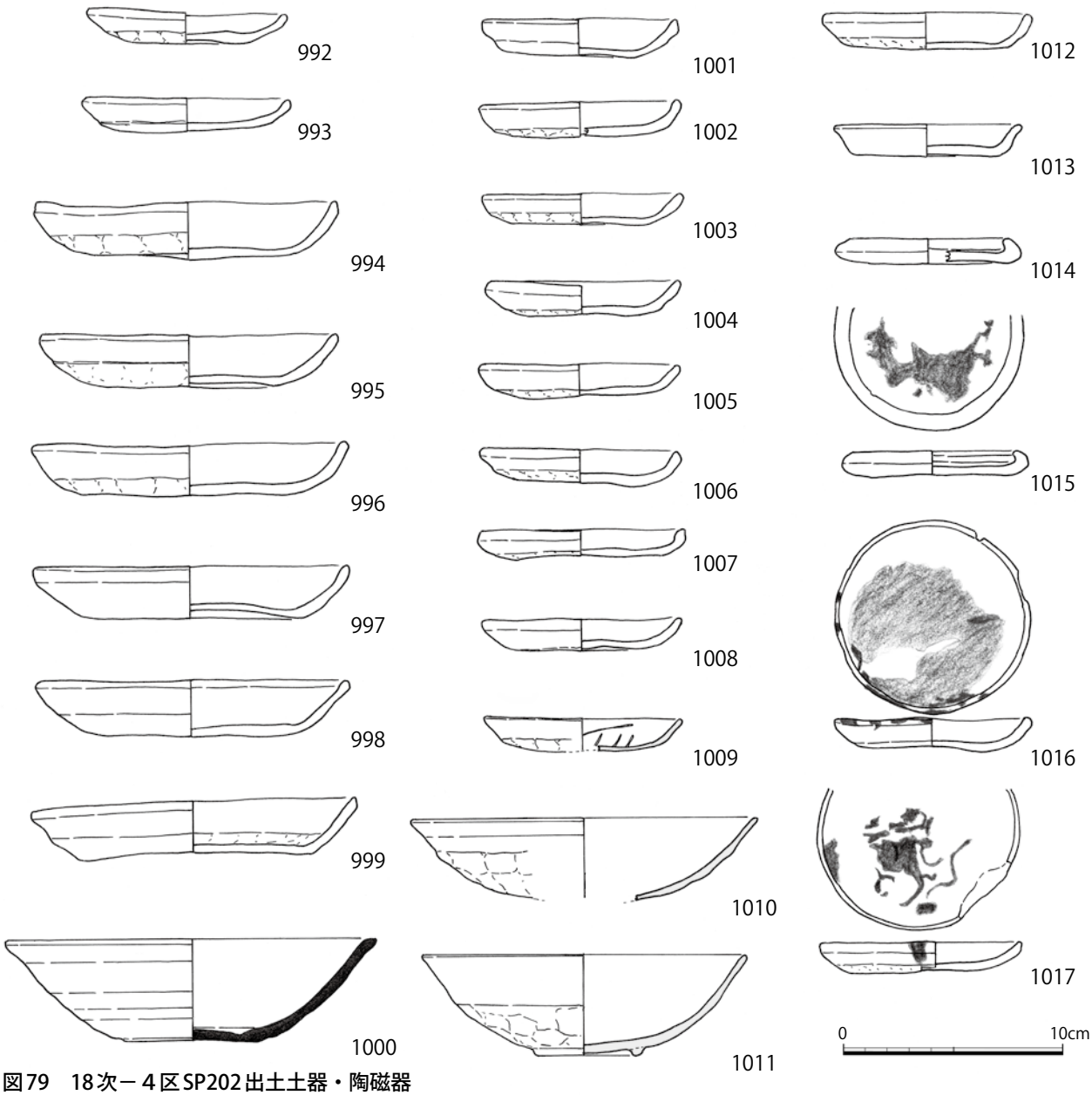


図79　18次－４区SP202出土土器・陶磁器

SP202 出土遺物

土師器小皿（992, 993, 1001～1008, 1012～1017）、土師器皿（994～999）、須恵器椀（1000）、瓦器小皿（1009）、瓦器椀（1010, 1011）である。土師器小皿は手づくね成形のもの（992, 993, 1001～1008, 1012, 1016, 1017）、ロクロ成形で底部が糸切りのもの（1013）、コースター型のもの（1014, 1015）がある。1015～1017は煤の付着具合から、燈火器として使用されたことが判る。土師器皿は一段ナデ技法である。須恵器椀はロクロ成形、底部は回転糸切りである。瓦器椀は胴部に指頭圧痕を残し、口縁部は横方向のナデを施す。

遺物包含層 出土遺物

４区の遺物包含層から出土したものを図化した。土師器小皿（1018～1022）、青磁碗（1023）、青白磁皿（1024, 1025）、瓦器椀（1026）、須恵器捏鉢（1027, 1028）である。1022はロクロ成形で底部は回転糸切り未調整である。1025は型押し成形で内面は薄く削られている。

第18次調査 出土縄文土器

縄文時代の土器が５区断割り部分から出土した。1029は中期の里木式、1030は後期の縁帯文式土器と思われる。1031は時期不明である。

第18次調査出土石器　1032は磨製石剣、1033は磨製石斧、1034，1036，1038，1039は打製石鏃、1037は打製石槍、1035は石錐である。1036はチャート、1033は結晶片岩製と思われる。他はサヌカイトである。1032は断割り部分、1033は遺構検出作業時に出土した。

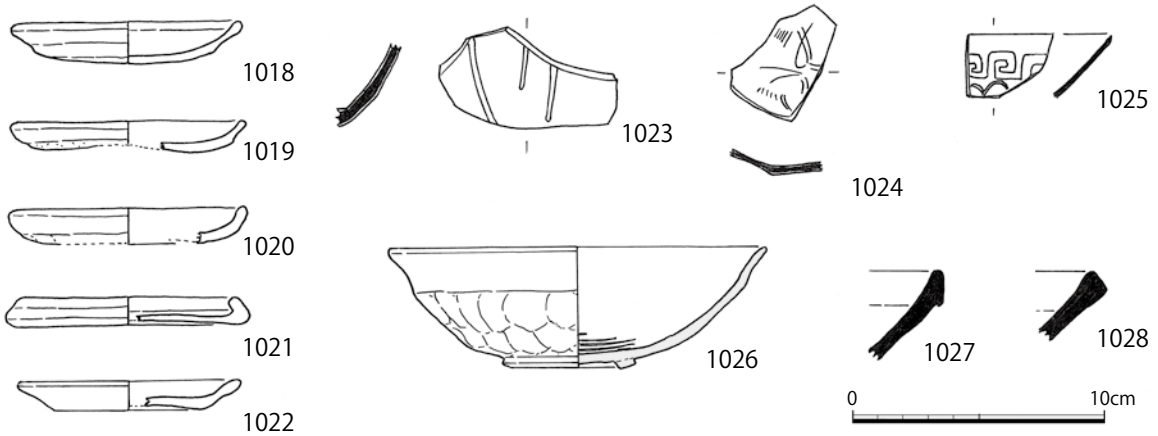


図80　18次－４区遺物包含層出土土器・陶磁器

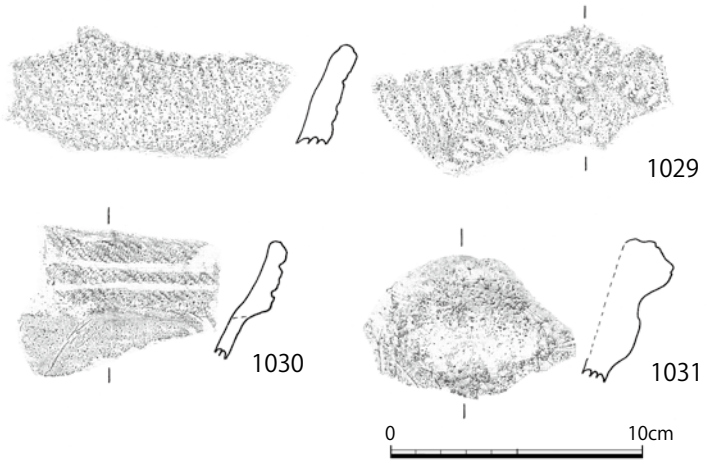


図81　第18次調査出土縄文土器

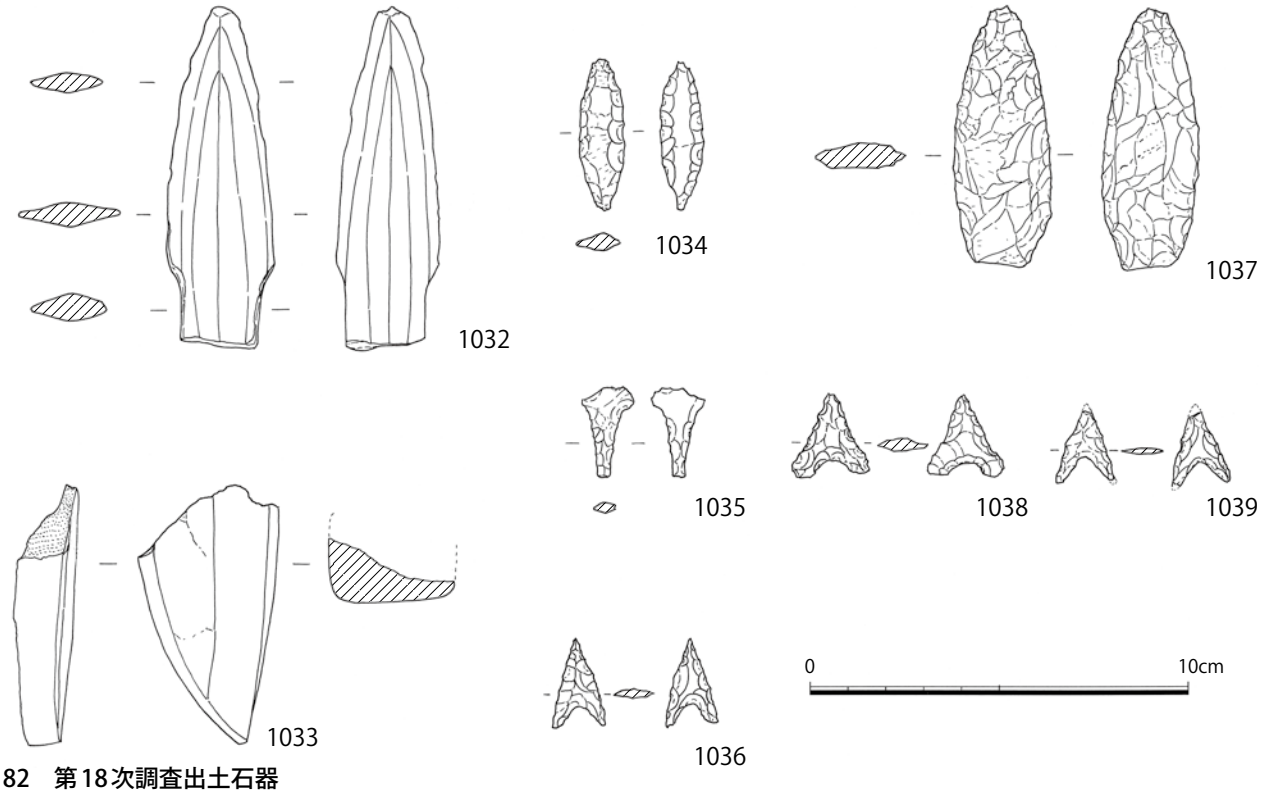


図82　第18次調査出土石器

（３）第３遺構面

水田面　５区北部から６区中央部の東側では、洪水堆積層を除いた下層の暗褐色粘性土において平安時代以前の、水田畦畔を明瞭な状態で確認した。水田の区画は不整形で地形に規制されていたと考えられる。調査区の南側と西側については洪水砂が厚く堆積することから土石流により水田面が流されたと考えられる。なお北側の拡がりは削平のため不明である。

洪水砂から僅かに遺物が出土しているが時期を明確に示すものは認められなかった。

（４）第４遺構面

水田耕作土の下は明灰黄色細砂～砂質土で、４区南半部において、この上面でピット群を確認した。ピットは直径10～30㎝、深さ10㎝程度で、遺物は出土せず時期については不明である。

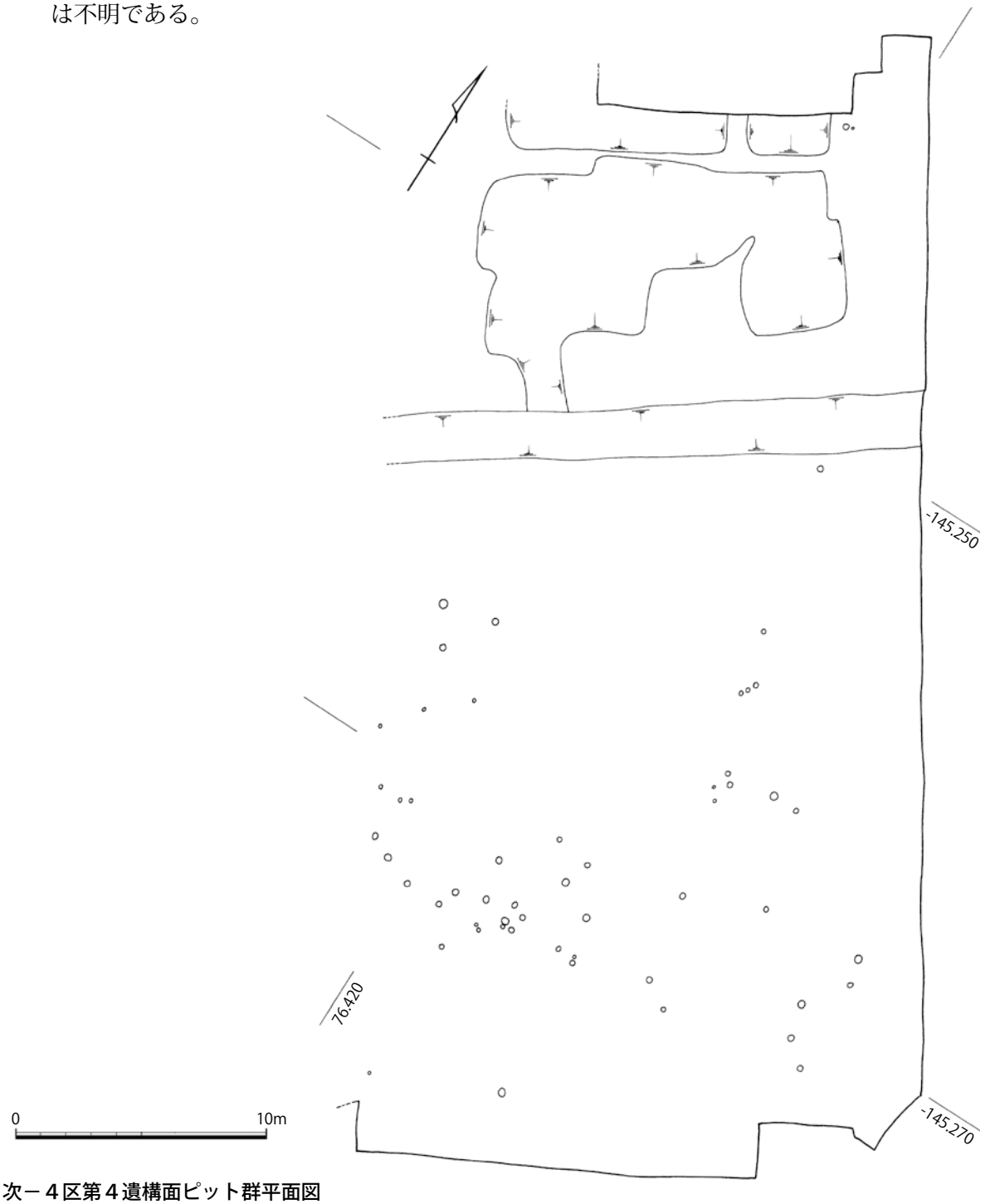


図83　18次－４区第４遺構面ピット群平面図

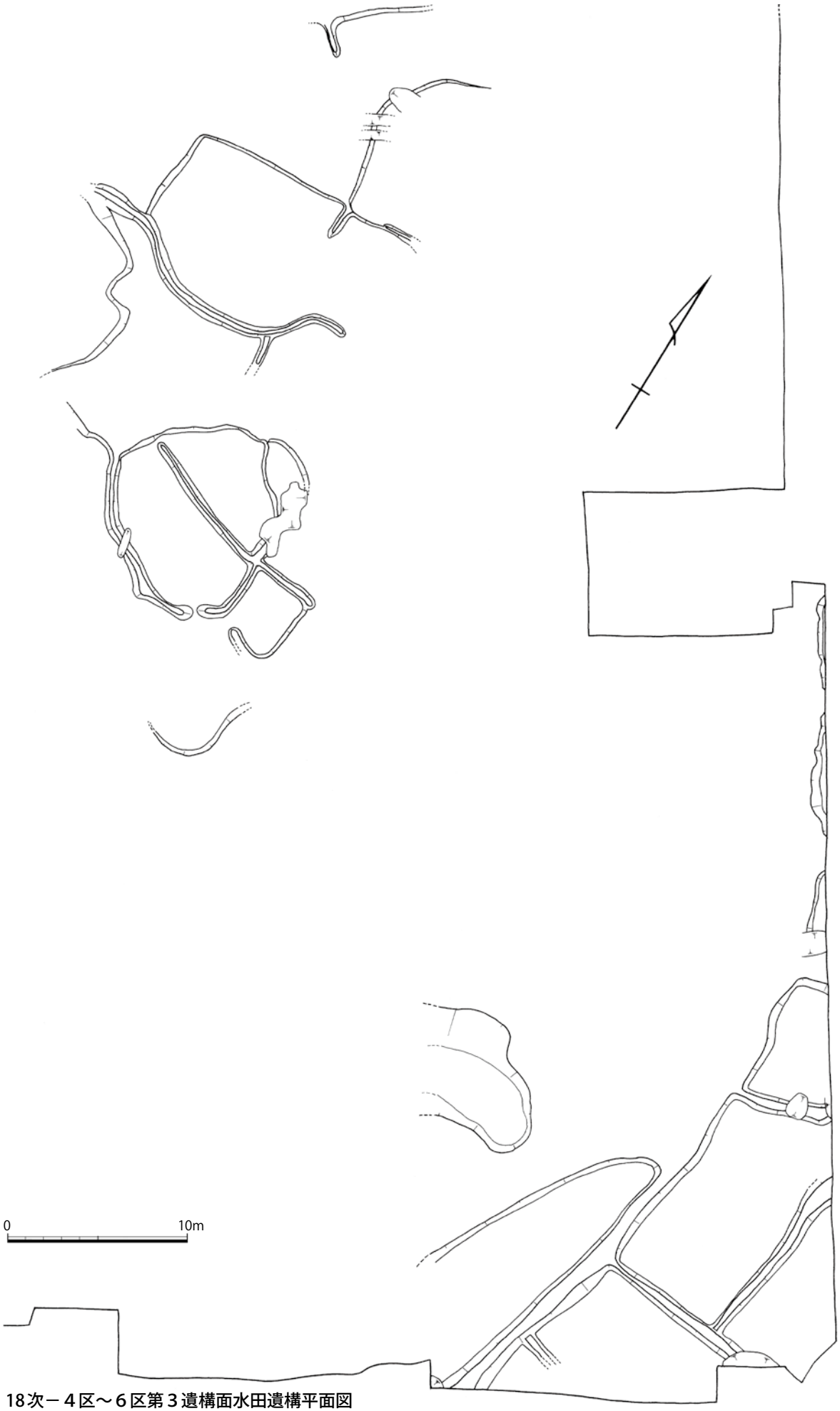


図84　18次－４区～６区第３遺構面水田遺構平面図

第４節　８区の調査成果

調査の結果、基礎・地中梁の間は、島状に遺構面（黄灰褐色小礫混じり細砂）が残り、ピット、土坑等が確認された。また西端では、川の方向に落ち込む堆積（暗褐色混礫砂質土）が確認され、その中から平安時代末の土器や瓦などが出土した。

SX101

８区のほぼ中央部で半円形の遺構を検出した。深さは30㎝程度である。埋土内からは平安時代末頃の土器が発見された。

北端では、分厚い洪水砂層が広く分布し、遺構面を形成する黄灰褐色小礫混じり細砂と交わる部分には50～70㎝大の円礫を３段積み上げた石垣を確認した。これは近世のものと考えられる。

出土遺物

土師器皿（1041～1043，1047，1048）、土師器小皿（1045，1046）、白磁碗（1040）、須恵器椀（1044）などを図化した。土師器皿・小皿は手づくね成形で、口縁部は横方向のナデ、底部には指頭圧痕が残る。1042，1045の口縁端部には燈心の痕跡が残る。白磁碗の高台部は露胎である。須恵器椀の底部は回転糸切り未調整である。1040～1044は暗褐色混礫砂質土、1045～1048はSX101出土である。1049の軒平瓦、1050，1051の平瓦は、いずれも須恵質で、暗褐色混礫砂質土から出土した。

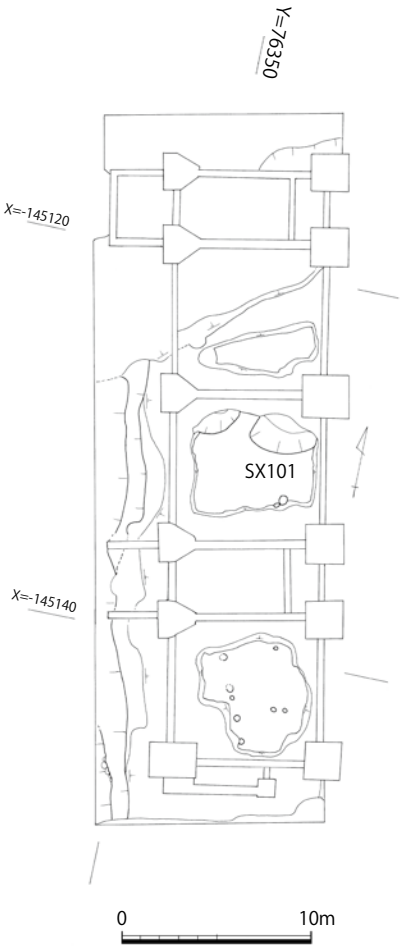


図85　18次－８区遺構平面図

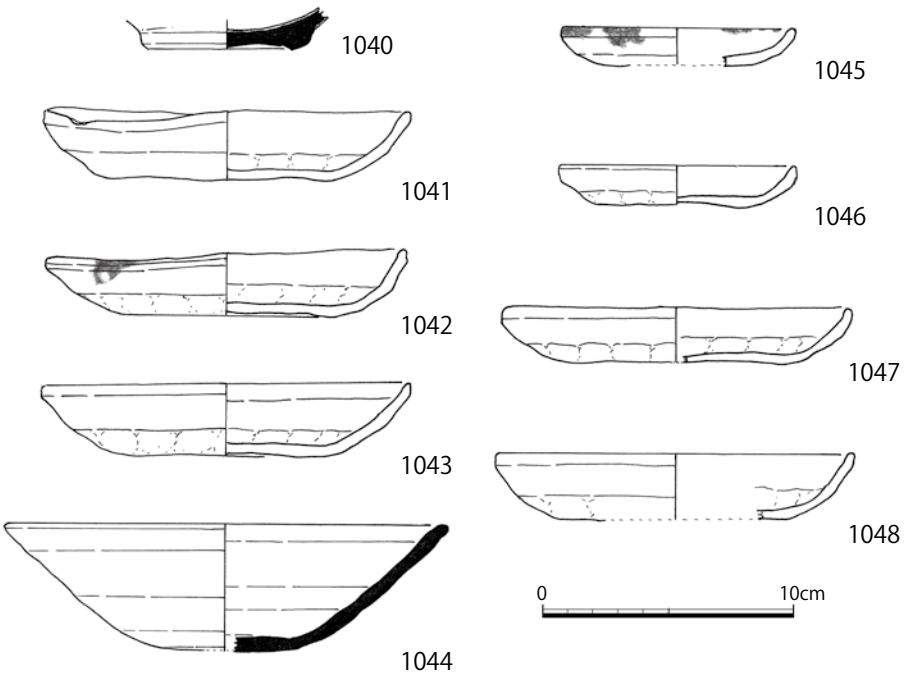


図86
18次－８区暗褐色混礫砂質土・SX101出土土器・陶磁器

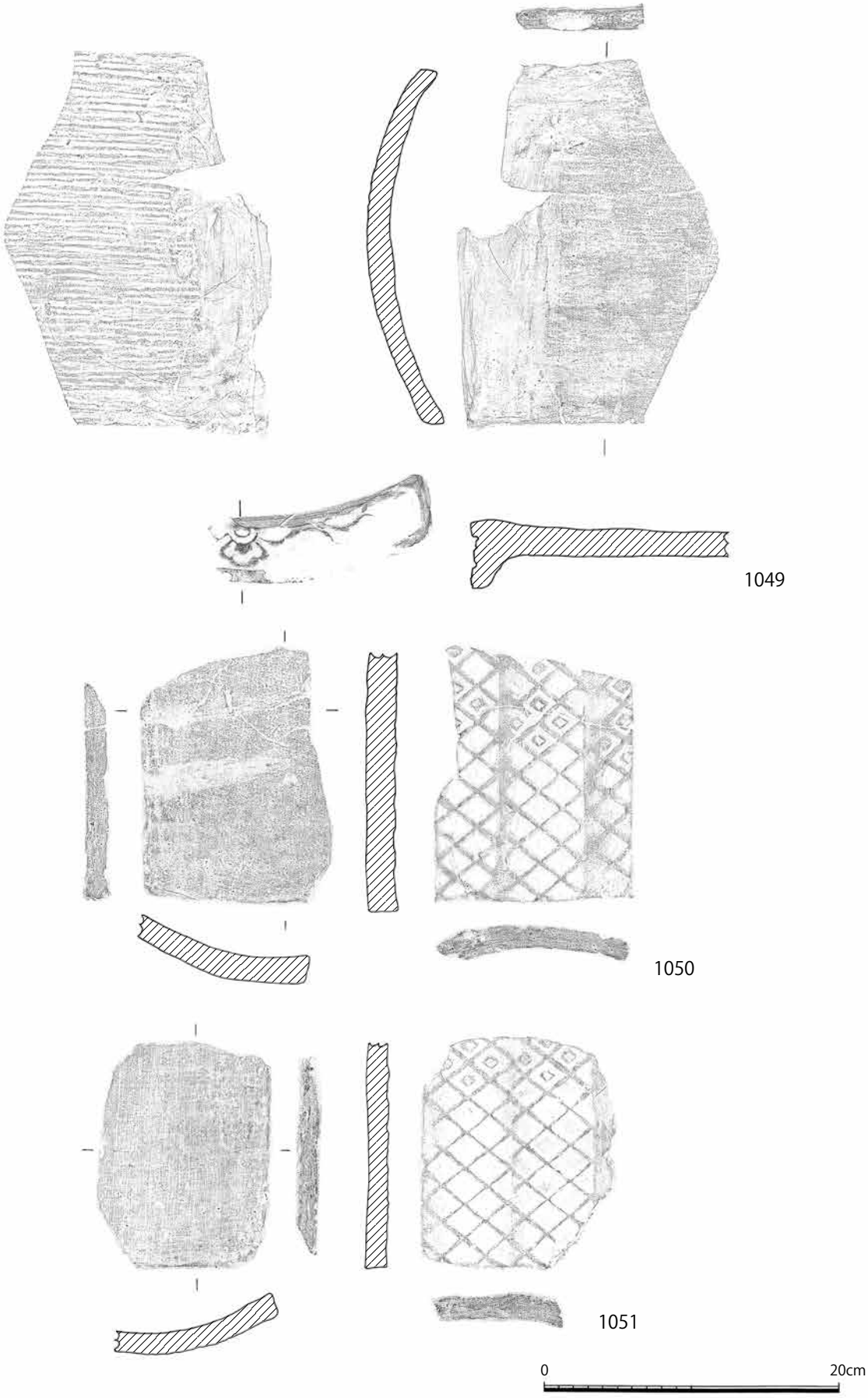


図87　18次－８区暗褐色混礫砂質土出土瓦

第５節　　第17・18次調査　出土金属製品

第17・18次調査で鉄製品39点、銅製品７点が出土している。このうち鉄製品25点、銅製品１点を図示する。

1062は鉄製刀子、1076は鉄鏃、1077は銅製傘鋲、それ以外は鉄釘と思われる。刀子は破片であるため、長さや幅は不明である。鉄鏃は隅円の方形の断面を呈し、茎を僅かに残す。全長2.5㎝を測る。銅製傘鋲は直径８㎜の傘に長さ1.8㎝、一辺1㎜の断面方形の軸が接続する。釘は断面形が方形を呈し、一辺５～７㎜程度のものが多い。全長は折損や折れ曲がりのため判然としないが、最大で９㎝のものがある。1063には部材と思われる木片の一部が残存している。1052・1053は17次調査SX21、1054は17次調査１区遺物包含層、1055～1057はSD201西、1058はSD205、1059はSE202、1060・1061は落ち込み状遺構、1062は東溝、1063は中央溝、1064・1065は西溝、1066・1067は北東西溝、

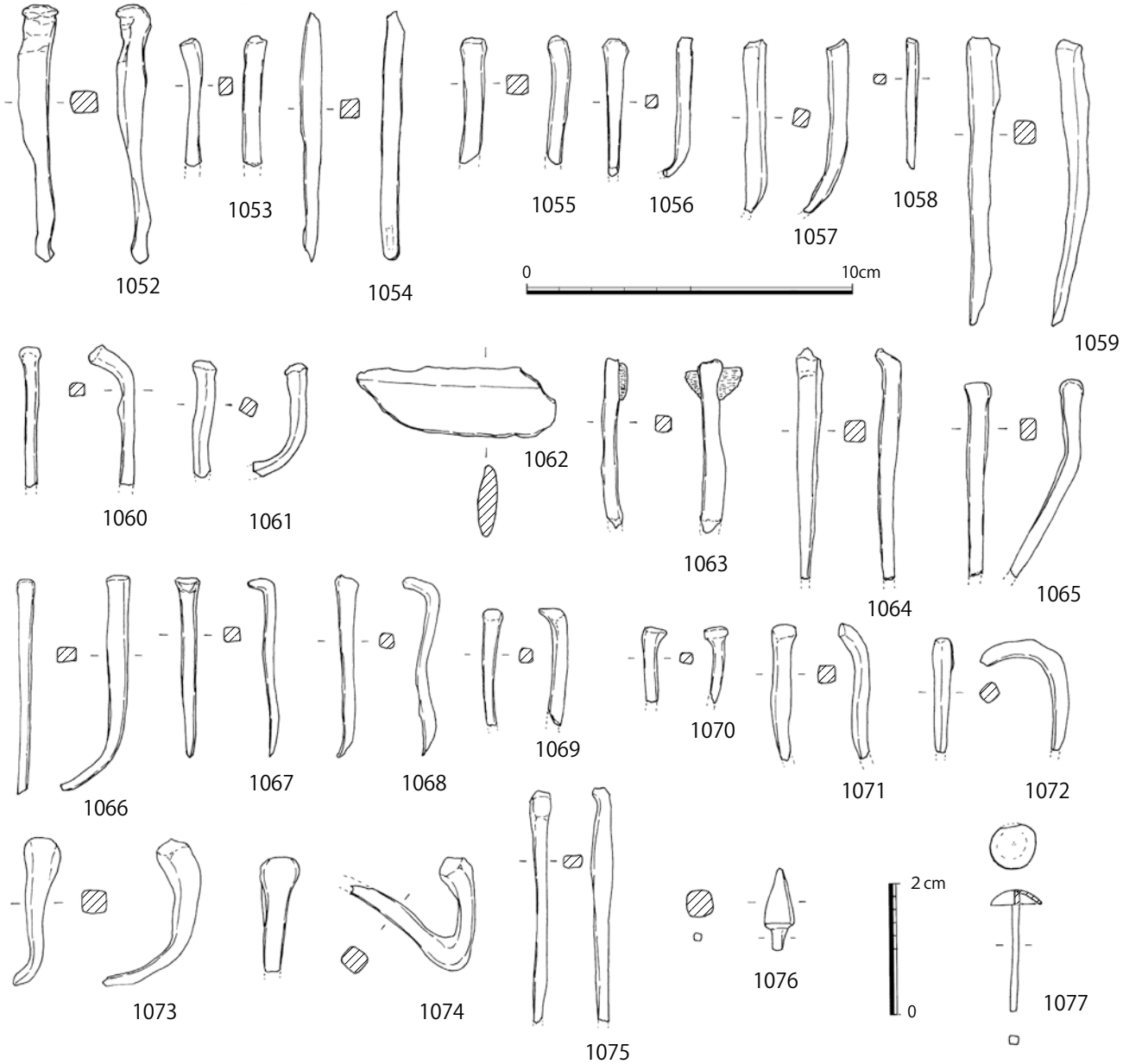


図88　金属製品実測図

1068・1069は南東西溝、1070・1071はSX204、1072はSX205、1073～1075は５区旧耕作土～遺物包含層、1076・1077は５区遺物包含層出土である。

銅銭は５点出土しているが、４区の遺物包含層から天聖元寶が１点出土している他は、中世耕作土、土石流堆積砂、攪乱土層からの出土である。

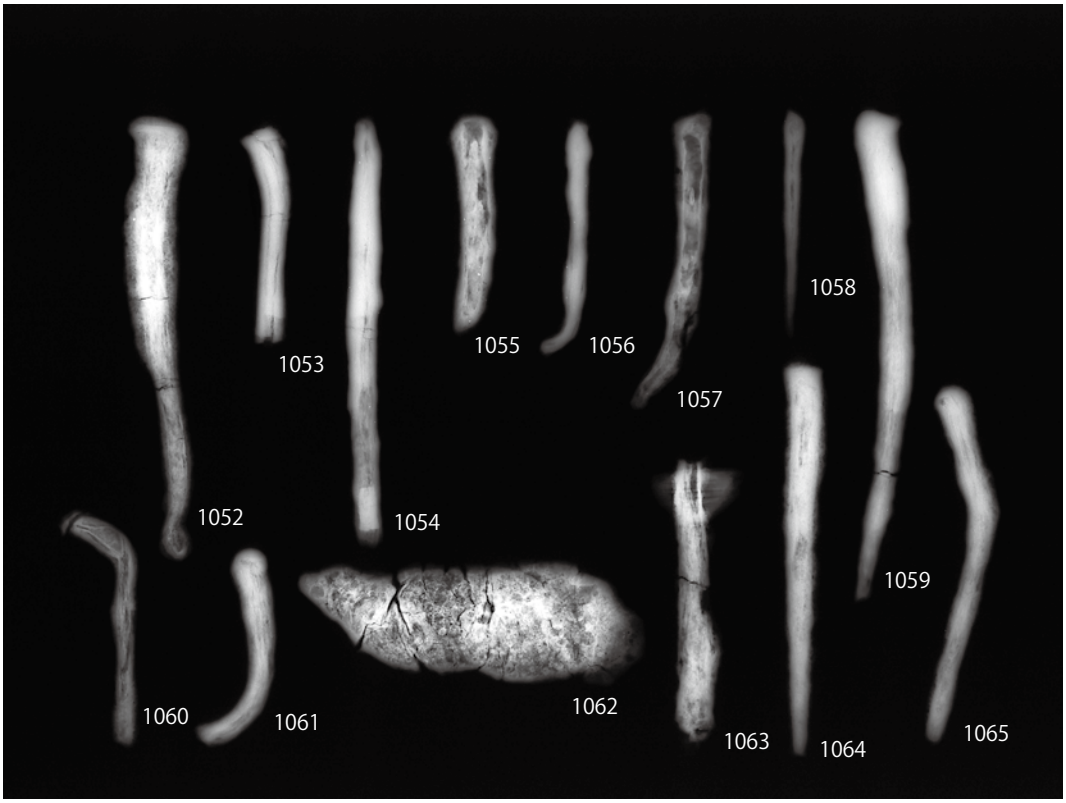


写真25
出土金属製品
Ｘ線透過写真（１）

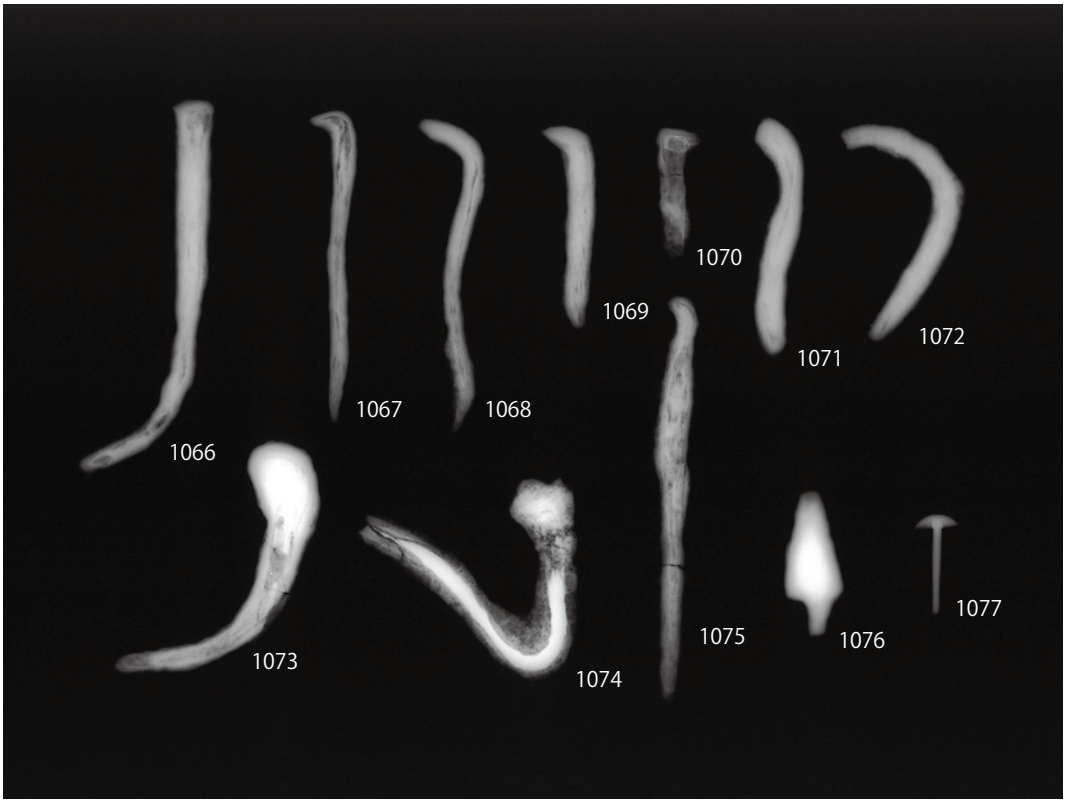


写真26
出土金属製品
Ｘ線透過写真（２）

第６節　　18次調査出土の墨書土器について

18次調査では、土器に文字を墨書きしたものが２点出土した。

墨書土器の文字判読は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室室長渡辺晃宏氏・主任研究員山本崇氏、研究員桑田訓也氏にお願いした。

1078は土師器小皿の底部外面に「桑野」（桑は異体字）と書かれている。小皿は手づくね成形で、口縁部が横方向のナデで整形される。底部には成形時の指頭圧痕が残る。これは５区SD201[西]の堆積土内から出土した。

1079は土師器小皿の外底部の全面を遣って、ひら仮名の文章が書かれていたようであるが、上半分が欠失しており、文章の全体が把握できない。現存する部分を判読してみると「けに□　らふに　□□　く［　　］」と読め、４行目の「く［　　］」の部分は底面の縁に当たって真っ直ぐに書けないため、字が斜め右方向に向いて書かれている。記された内容は和歌の可能性もあるが判然としない。この土器は６区南東西溝の堆積土内から発見された。なお、この仮名文字については字のくずし方が丁寧で自己流ではなく、手習いを正式に学んだ人の手で書かれたものであるとのコメントを得た。

写真27　第18次調査出土墨書土器（１）

写真28　第18次調査出土墨書土器（２）

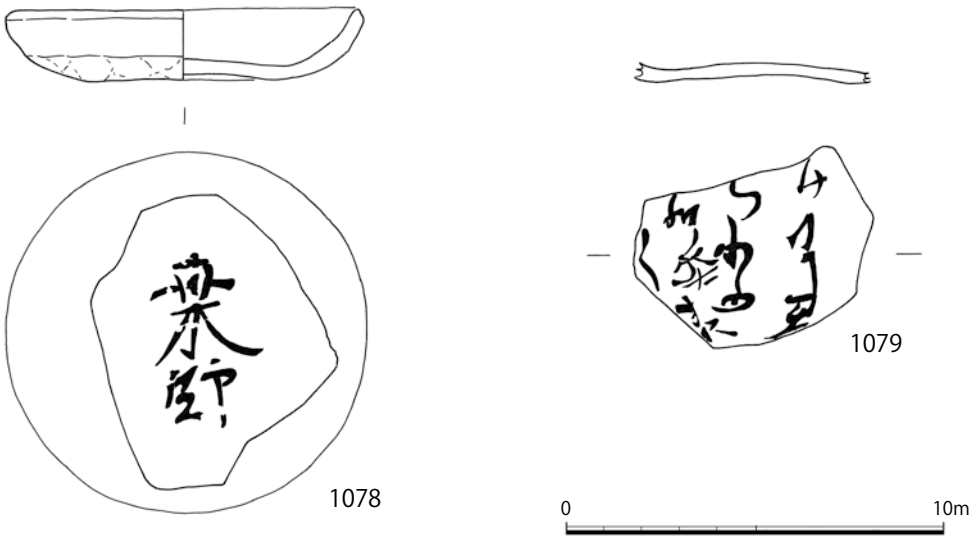


図89　第18次調査出土墨書土器

第４章　自然科学調査

祇園遺跡第18次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、１）弥生時代以前の土石流堆積物中の木材の放射性炭素年代測定、２）弥生時代～古墳時代の落ち込み状遺構と12～13世紀の石組み遺構埋土の微化石分析、３）井戸構築材の樹種同定を実施し、調査区周辺の古環境や遺構・遺物に関する情報を得る。調査結果を以下に示すが、紙面の都合で分析方法・結果の一部を割愛するが、詳細報告は神戸市教育委員会に保管されているので参照されたい。

１　土石流堆積物出土木材の放射性炭素年代測定

１－１　試料

試料は、４トレンチおよび５トレンチの土石流堆積物内の木材遺体２点（No. １、No. ２）である。No. １は樹皮が無く、外側が破損している木材で、クスノキ科に同定された。年代測定は残存年輪中の最外年輪を含む５- ６年分を対象とした。No. ２は樹皮が残る小径の芯持丸木材（５- ６年生）である。樹種は広葉樹材ではあるが遺存状態が悪く種類を特定できなかった。年代測定は試料端部を切断して測定試料とした。

１－２　方法

試料は、付着物の除去後、酸・アルカリ・酸処理を行う。試料を燃焼させ二酸化炭素を発生させ、真空ラインで精製、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトを得る。グラファイトをカソードにプレスしてターゲットを作成する。タンデム加速器のイオン源に装着し、14Cの計数、13Cの濃度（13C/12C）、14Cの濃度（14C/12C）の測定を行う。測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。

１－３　結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表１に示す。補正年代値および２σ確率１位の暦年代は、No. １が6200±30yBP（7240～7000cal BP）、No. ２が6140±30yBP（7160～6950cal BP）を示し、誤差範囲内でほぼ一致する年代値を示した。

表１　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

地点・深度(m) 測定試料	処理 方法	測定年代 y.B.P.	δ13C (‰)	補正年代 y.B.P.	暦年較正結果				code No.
					誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
4トレンチ 土石流堆積物 中の木材No.1	AAA	6240±30	-27.58+±0.54	6200±30 (6199±31)	σ	cal BC 5,216 - cal BC 5,204	cal BP 7,165 - 7,153	0.117	IAAA- 150554
						cal BC 5,169 - cal BC 5,075	cal BP 7,118 - 7,024	0.883	
					2σ	cal BC 5,288 - cal BC 5,267	cal BP 7,237 - 7,216	0.029	
						cal BC 5,260 - cal BC 5,250	cal BP 7,209 - 7,199	0.012	
						cal BC 5,230 - cal BC 5,049	cal BP 7,179 - 6,998	0.959	
5トレンチ 土石流堆積物 中の木材№2	AAA	6200±30	-28.89+±0.65	6140±30 (6138±32)	σ	cal BC 5,206 - cal BC 5,163	cal BP 7,155 - 7,112	0.359	IAAA- 150555
						cal BC 5,119 - cal BC 5,108	cal BP 7,068 - 7,057	0.059	
						cal BC 5,079 - cal BC 5,005	cal BP 7,028 - 6,954	0.582	
					2σ	cal BC 5,209 - cal BC 4,998	cal BP 7,158 - 6,947	1.000	

１）処理方法のAAAは、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。
２）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。y.B.P.年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。
３）暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を使用し、補正年代に（）で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用する。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

２　遺構埋土の微化石分析

２－１　調査地点

微化石分析は、弥生時代～古墳時代中期と推定される６区断割りトレンチ下層落ち込みと、13世紀後半と推定される５区石組み遺構SX201の埋土について実施する。分析層準を図90に示す。

２－２　方法

（１）珪藻分析

湿重約３ｇをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解･漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。

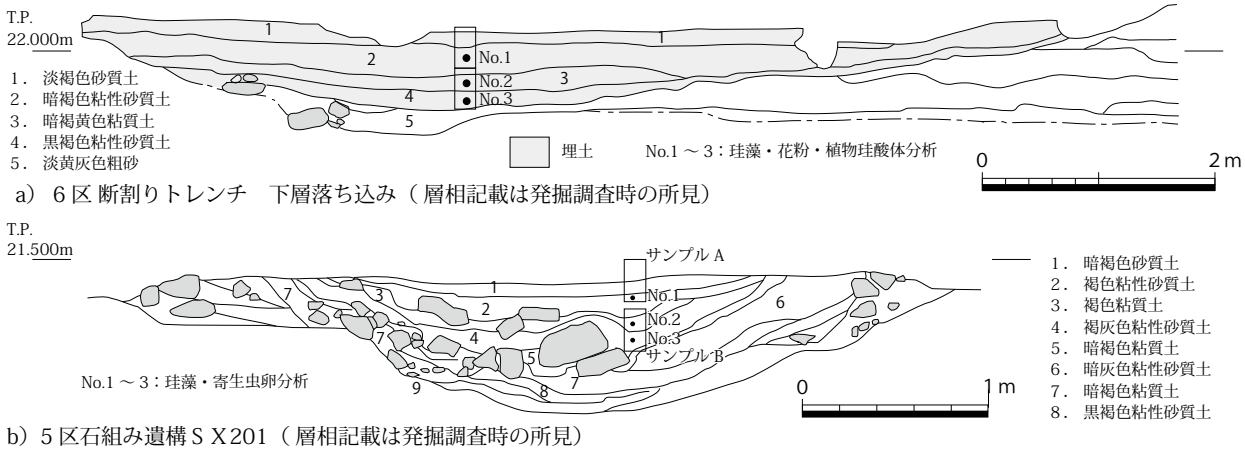
（２）花粉分析・寄生虫卵分析

花粉分析は、試料10gを秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理を行い、化石を濃集する。処理後残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、産出する種類について同定・計数する。

寄生虫卵分析は試料10ccを秤量し、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して産出する全ての寄生虫卵を同定･計数する。併せて花粉･胞子数も計数する。

（３）植物珪酸体分析

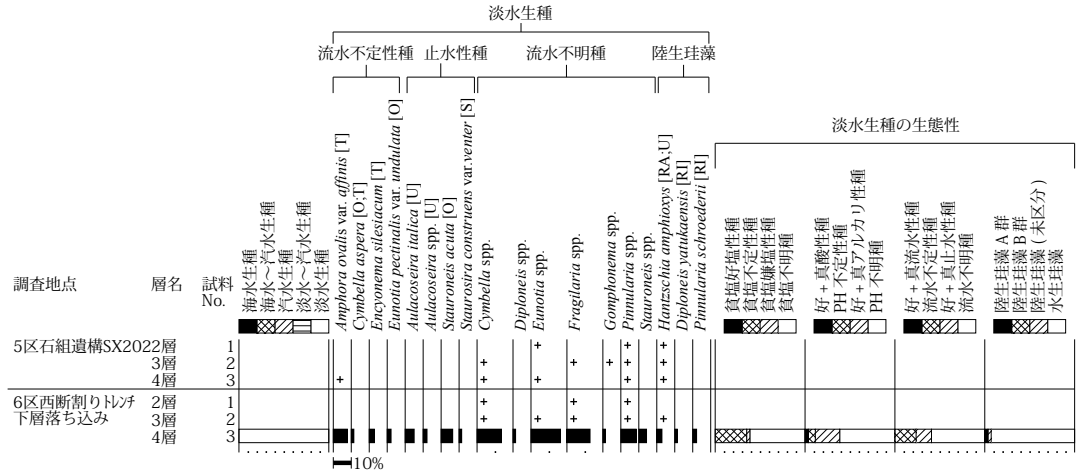
試料の乾燥重量を秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを一定量秤取り、カバーガラス上に滴下・乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定・計数する。



a）６区 断割りトレンチ　下層落ち込み（ 層相記載は発掘調査時の所見）

b）５区石組み遺構ＳＸ201（ 層相記載は発掘調査時の所見）

図90　調査地点の断面図・試料採取位置および不攪乱柱状資料写真



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は1％未満、＋は100個体未満の試料から産出した種類を示す。各種類名末尾の[　]内のアルファベットは、次の環境指標種を示す。O:沼沢湿地付着生種(安藤,1990) S:好汚濁性種 T:好清水性種 U:広適応性種(以上はAsai & Watanabe,1995)　RI:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群;伊藤・堀内,1991）

図91　主要珪藻化石群集の層位分布

2－3　分析結果

（1）珪藻分析（図91）

分析を実施した６層準からは珪藻化石が検出されるものの、全体に堆積物中に含まれる量としては少ない。統計的に扱える化石数が得られたのは、第８トレンチ西落ち込み状遺構No. ３のみで、他の５層準は50個体未満である。化石の保存状態は、総じて半壊した殻が多いだけでなく、溶解の痕跡が認められる殻が多いことから、状態としては極不良～極々不良である。

（2）花粉化石・寄生虫卵分析（表２）

断割りトレンチ下層落ち込み、５区石組み遺構SX201ともに花粉化石の産出状況が悪くい。分析残渣も微量で、化石数が極めて少なかった。また、石組み遺構SX201からは寄生虫卵も全く産出しなかった。

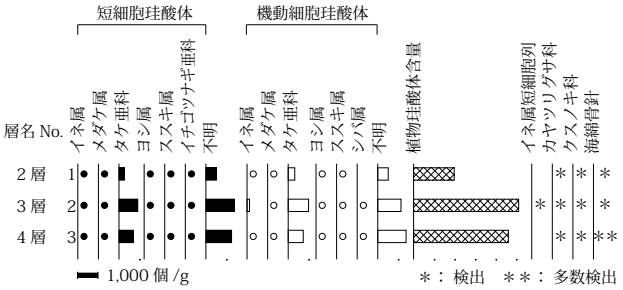
（3）植物珪酸体分析（図92）

６区断割りトレンチ下層落ち込み埋土試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。各試料の産状は類似し、栽培植物のイネ属、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属などが産出する。イネ属には短細胞列を呈するものが認められる。イネ科以外の植物珪酸体では、カヤツリグサ科、樹木起源のクスノキ科が産出する。植物珪酸体以外として海綿骨針も産出する。

表２　花粉分析・寄生虫卵分析結果

種　類	６区下層落ち込み			５区石組遺構SX201		
	２層 No.1	３層 No.2	４層 No.3	２層 No.1	３層 No.2	４層 No.3
木本花粉						
モミ属	-	1	-	-	-	-
ツガ属	6	-	-	-	-	-
トウヒ属	1	-	-	-	-	-
マツ属	2	-	4	5	-	1
スギ属	1	-	3	-	1	1
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属	1	-	-	-	-	-
ハンノキ属	2	-	-	-	-	-
ブナ属	21	3	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	1
コナラ属アカガシ亜属	-	1	-	-	-	-
シナノキ属	3	1	-	-	-	-
イボタノキ属	1	-	-	-	-	-
草本花粉						
イネ科	3	-	-	6	1	-
カヤツリグサ科	-	-	-	9	-	-
ソバ属	-	-	-	1	-	1
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	1
アブラナ属	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	1	-	-
キク亜科	-	-	-	1	-	-
タンポポ亜科	-	-	-	3	1	1
不明花粉						
不明花粉	4	1	2	6	-	-
シダ類胞子						
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	1	-	-
イノモトソウ属	-	-	-	2	6	7
他のシダ類胞子	25	19	50	60	28	45
合　計						
木本花粉	39	6	7	5	1	3
草本花粉	3	0	1	21	2	3
不明花粉	4	1	2	6	0	0
シダ類胞子	25	19	50	63	34	52
合計(不明を除く)	67	25	58	89	37	58
寄生虫卵数(個/cc)				0	0	0
花粉・胞子数(個/cc)				〈100	〈100	〈100

1）寄生虫卵数、花粉・胞子数は、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。
〈100は100個未満、／は未分析を示す.



乾土 1 g あたりの個数。●○は 100 個 /g 未満を示す。

図92　断割りトレンチ下層落ち込みの植物珪酸体結果

２- ４　考察

（１）６区断割りトレンチ下層落ち込み

珪藻化石の産状（産出率・群集組成）をみると、埋土最下部の４層は珪藻化石で比較的多産したが、埋土中・上部の３層・２層では少なかった。

埋土最下部の４層では流水不明種のCymbella spp.、Diploneis spp.、Eunotia spp.、Fragilaria spp.、Pinnularia spp.等に加えて、止水性種のAulacoseira italica、Aulacoseira spp.、Stauroneis acutaおよびStaurosira construens fo. venterが特徴的に認められる。このうちCymbella spp.、Eunotia spp.、Fragilaria spp.、Pinnularia spp.等は、いずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。止水性種のAulacoseira italica、Aulacoseira spp.の生態性は、広域分布種であり、適度に富栄養な池沼や河川等の止水域に生育するとされる（Krammer and Lange-Bertalot、1991）が、通常はある程度の水深がある水域に多産する傾向にある。さらに、止水性種のStauroneis acutaは、貧塩-不定、好アルカリ性、好止水性とされ、池沼から湿地に特徴的に認められる種である。同じく止水性種のStaurosira construens fo. venter は、池沼から地下水位の高い湿地等の止水域に広く認められ、比較的広域に生育する種である。このほか、陸生珪藻のHantzschia amphioxysも産出する。本種は水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1986）で、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内、1989；1991）。このような群集組成を踏まえると、埋土最下部の４層形成期の遺構内は、乾燥する時期を挟在する、ある程度の水深を有する水域環境下であった可能性が高い。

埋土３・２層では、珪藻化石が少なく、流水不明種としたCymbella spp.、Eunotia spp.、Fragilaria spp.、Pinnularia spp.等が僅かに産出する。上記の生態性を踏まえると、３層・２層形成期は、基本的に湿地の環境下にあったと思われるが、地下水位は低く、全体に好気的であった可能性が高い。

一方、花粉分析結果をみると、いずれの層位も分析残渣が少なく、全残渣を検鏡しても花粉化石の計測数が100個体未満であった。一般的な水成層では、１ccあたりの個数は数千から数万個程度であることから、極端に少ないといえる。また、図版２に示したように花粉化石の保存状態は悪い。花粉化石は好気的環境下では風化することから（中村，1967等）、調査地点では堆積後の続成作用により花粉化石が消失している可能性が高い。花粉化石、胞子化石の検出状況をみると、スポロポレニンの含有量が高いため風化に強い針葉樹花粉やシダ類胞子、形が特徴的で風化が進んでも同定可能なブナ属やシナノキ属、イネ科、カヤツリグサ科、キク亜科、タンポポ亜科などが検出される。このことから、今回得られた花粉化石組成は、風化に強い種類や、風化が進んでも同定可能な種類に偏っており、実際の周辺植生を反映していないと考えられる。このことは、堆積物の大部分が好気的環境であったとする珪藻分析の結果とも矛盾しない。なお、２層ではブナ属が多い。これまでの周辺地域の花粉分析結果をみると、当該期は、シイ属やアカガシ亜属などの常緑広葉樹が多いのが普通で、ブナ属が優勢な事例はない。ブナ属花粉の保存状態が悪いことを考えると、遺跡周辺の丘陵地に分布する大阪層群からの再堆積の可能性が高い。

局地的な植生を反映する可能性が高い植物珪酸体分析結果では、埋土４層～２層を通じて、周辺にはメダケ属、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属などのイネ科植物が生育していたと思われる。また、イネ科の他にも草本類のカヤツリグサ科、クスノキ科などの樹木も生育していたのであろう。なお、埋積物の中で植物珪酸体含量が概して少なかったが、これは、珪藻化石や花粉化石と同様に、好気的環境下による風化が原因と考えられる。また、埋積物からはイネ属の植物珪酸体や珪化組織片が産出している。

ただし、含量密度は少なく、調査地点での生育の可能性は低い。イネ属の植物体は住居構築材や燃料材など生活資材として利用されることが多い。そのため、検出された植物珪酸体は、遺跡内での生業や、周辺の稲作地から流入の可能性がある。なお海綿骨針も検出されるが、これはブナ属花粉化石と同様、大阪層群に由来する可能性がある。

（２）５区石組み遺構SX201

埋土４層～２層の珪藻化石の産状（産出率あるいは群集）は近似している。湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である流水不明種としたCymbella spp.、Diploneis spp.、Eunotia spp.、Fragilaria spp.、Pinnularia spp.等と、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する陸生珪藻のHantzschia amphioxysが特徴的に産出する。このうち陸生珪藻の産出数は比較的多い。堆積物の分析を行った際、陸生珪藻の種群が優占（70～80％以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できる。したがって、５区石組遺構１埋土４層～２層形成期は、基本的に湿地の環境下にあったと思われるが、地下水位は低く、全体に好気的であったと推定される。

一方、寄生虫卵分析の結果、埋土４層～２層からは寄生虫卵は全く検出されなかった。花粉化石も１ccあたり数個程度と少なく、産出花粉化石の保存状態が著しく悪かった。上記の珪藻化石の産状を踏まえると堆積時・後に分解消失している可能性が高い。

３　出土木製品の樹種同定

３-１　試料

樹種同定用試料は、４区SE201のS-１～S-５の５点と、４区SE202のS-６～S-９の４点の計９点である。

表３　　樹種同定結果

No.	地区	遺　構	部位	種　類	備考
S-1	4区	井戸SE201	横桟	ヒノキ	③
S-2	4区	井戸SE201	横桟	スダジイ	④
S-3	4区	井戸SE201	横桟	スダジイ	⑤
S-4	4区	井戸SE201	横桟	ヒノキ科	⑥
S-5	4区	井戸SE201	横桟	スギ	⑰
S-6	4区	井戸SE202	横桟	ヒノキ	横桟-1
S-7	4区	井戸SE202	横桟	スギ	横桟-2
S-8	4区	井戸SE202	横桟	ヒノキ	横桟-3
S-9	4区	井戸SE202	横桟	マツ属複維管束亜属	横桟-5

３-２　方法

試料について、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を直接採取し、ガム・クロラールで封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。同定結果を表３に示す。

３-３　結果

樹種同定結果を表３に示す。木製品は、針葉樹４分類群（マツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹１分類群（スダジイ）に同定された。

３-４　木材利用状況

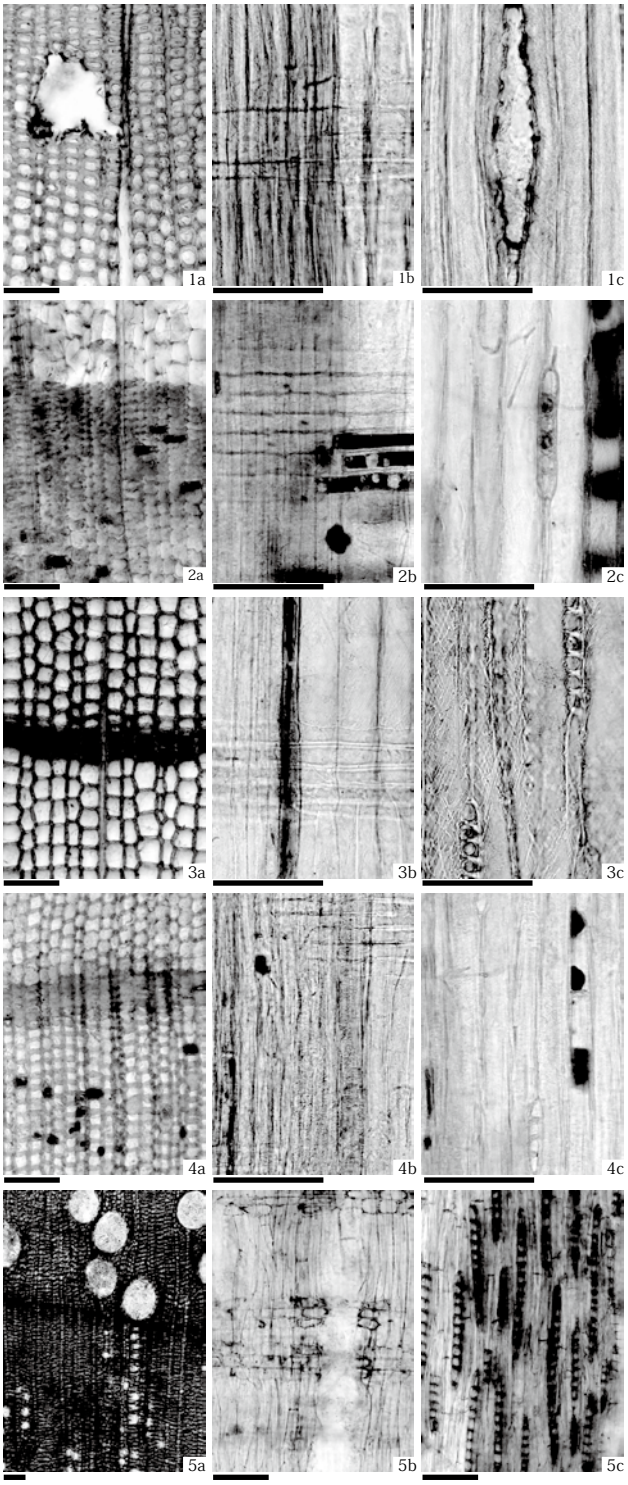
４区の井戸跡は、SE201が２×２ｍの正方形、SE202が1.8×1.7ｍの楕円方形を呈し、井戸確認面から掘形底までの深さは、1.6～1.7ｍである。井戸の時期は、いずれも出土した遺物から12世紀後半～13世紀と考えられている。出土した井戸部材は、いずれも横桟であり、針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、ヒノキ科、広葉樹のスダジイが認められ、少なくとも５種類が利用されたことが推定される。各種類の材質をみると、マツ属複維管束亜属は、針葉樹としてはやや重硬な部類に入り、強度と保存性が高い。スギ、ヒノキ、ヒノキ科は、木理が通直で割裂性・耐水性が比較的高い。

井戸別にみると、SE201ではスギ、ヒノキ、ヒノキ科、スダジイの４種類が認められ、針葉樹と広葉

樹が混在した種類構成となっている。５点の資料に４種類が認められ、材質が異なる針葉樹と広葉樹が混在する結果から、入手できる様々な木材を利用した状況が推定される。

一方、SE202は、マツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキの３種類が認められ、複数の種類が混在する結果はSE201と同様であるが、全て針葉樹からなり、広葉樹は利用されていない。針葉樹が主体となる結果から、加工性や耐水性などを考慮した木材利用が推定される。これらの結果から､SE201とSE202は、横桟の用材選択が異なる可能性がある。

伊東・山田（2012）のデータベースを参考にして周辺地域の近い時期の資料をみると、二葉町遺跡の12世紀後半とされる井戸枠にはヒノキ、コウヤマキ、シイ属、13世紀前半とされる井戸枠板材にモミ属、ツガ属、ヒノキ、13世紀中頃とされる井戸枠にスギを中心にアカマツ、マツ属、ヒノキ科、ツガ属、コウヤマキ、ヤブツバキ、ガマズミ属、ハイノキ属、シイ属、カキノキ属、クスノキ等が確認されている。また、御蔵遺跡の平安時代末とされる井戸では井側材にモミ属とヒノキ、上沢遺跡の13世紀前半とされる井戸では横板にツガ属、横桟にツガ属、コウヤマキ、ヒノキが報告されている。今回確認された種類は、いずれもこれまでの調査で井戸部材に確認例がある。また、既存の調査例で針葉樹が主体となる結果も今回の結果と似ているが、用材の12世紀と13世紀の時期差、部位や形態による差等は明瞭ではない。例えば、播磨地域になる玉津田中遺跡の鎌倉時代とされる井戸では、支柱にモミ属、側板にモミ属、ツガ属、ヒノキ、横桟にアカガシ亜属が認められ、横桟にのみ硬い広葉樹材を利用している。こうした用材が摂津地域でも認められるのか、今後も継続した調査が必要である。



1．マツ属複維管束亜属（S-９）2．スギ（S-５）3．ヒノキ（S-64）
4．ヒノキ科（S-４）5．スダジイ（S-３）
a：木口，b：柾目，c：板目，スケールは100μm

写真29　木材組織写真

引用文献
伊東隆夫・山田昌久,2012,木の考古学　出土木製品用材データベース.海青社,449p.
伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌,6, 23-44.
Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（4）: 437p.
中村　純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

祇園遺跡第17・18次調査出土の動物遺存体

丸山真史（東海大学海洋学部）

１）概要

今回、報告する資料は祇園遺跡第17次、第18次調査で出土した動物遺存体である。発掘調査では、建物や区画溝は方向が一定であり、京都系の土器が出土していることから、平氏の有力者層の邸宅と関連する遺跡として注目されている。

動物遺存体は土坑・井戸・溝などから出土しており、いずれも共伴する土器から12世紀末のものと考えられる。出土した動物遺存体は破片数にして総計64点、そのうち種類・部位などを同定できたものは28点を数える。魚類が最多の出土量を示し、資料の大部分は被熱して白色を呈する。

表４　動物遺存体種名表

軟体動物門　Mollusca
　腹足綱　Gastropoda
　　新腹足目　Neogastropoda
　　エゾバイ科　Buccinidae
　　バイ　*Balylonia japonica*
　斧足綱　Bivalvia
　　カキ目　Ostreoida
　　イタヤガイ科　Pectinidae
　　イタヤガイ　*Pecten albicans*

脊椎動物門　Vertebrata
　硬骨魚綱　Osteichthyes
　　ウナギ目　Anguilliformes
　　ハモ科　Muraenesocidae
　　ハモ属の一種　*Muraenesox sp.*
　　カサゴ目　Scorpaeniformes
　　コチ科　Platycephalidae
　　コチ科の一種　Platycephalidae gen. et sp. indet.
　　スズキ目　Percidae
　　スズキ科　Percichthyidae
　　スズキ属　*Lateolabrax sp.*
　　タイ科　Sparidae
　　マダイ　*Pagrus major*

哺乳綱　Mammalia
　偶蹄目　Artiodactyla
　　ウシ科　Bovidae
　　ウシ　*Bos Taurus*

２）種類別の特徴

ａ）貝類

バイ　５区SD201〔西〕から１点出土しており、被熱して白色を呈する。殻長50.9㎜を測る。

イタヤガイ？　２区の第２遺構面から１点出土している。小片であり形態的特徴は類似するが、種の同定には至らない。

ｂ）魚類

ハモ属　４区SE202炭層から歯骨（右）が１点出土しており、被熱して白色を呈する。大きさは、体長100㎝以下である。

コチ科　４区SE202炭層と５区SD201〔東〕から歯骨（左）１点ずつ、計２点が出土しており、いずれも被熱して白色を呈する。大きさは、それぞれ体長20～30、30～40㎝と推定される。

スズキ属　４区SE202炭層から主上顎骨（右）、同区SD201西から主鰓蓋骨（右）が１点ずつ、計２点が出土しており、いずれも被熱して白色を呈する。大きさは、それぞれ体長10～20、20～30㎝と推定される。

マダイ　４区SD201〔西〕から口蓋骨（右）が１点出土しており、体長60㎝以上の大型個体と推定される。同区SE201井筒底付近から主上顎骨（左）、方骨（右）、上擬鎖骨（左）が１点ずつ、計３点が出土している。大きさは、上擬鎖骨が30～40㎝、それ以外は20～30㎝と推定される。同区SE202炭層から前上顎骨（右）、角骨（左）、方骨（右）が１点ずつ、計３点が出土している。大きさはいずれも

体長20～30㎝と推定される。５区SD201〔東〕から椎骨、前上顎骨（左)、主鰓蓋骨（右）が１点ずつ、計３点が出土している。大きさは、いずれも体長30～40㎝と推定される。以上、すべてが被熱しており、白色や褐色を呈する。

タイ科　４区SD 201〔西〕から、歯骨（左）が１点出土している。同区SE202から遊離歯４点、舌顎骨（左)、前上顎骨/歯骨が１点ずつ、計６点が出土している。５区SD 201〔東〕から東から遊離歯２点、椎骨１点、計３点が出土している．以上、すべてが被熱しており、白色や灰色を呈する。

ｃ）哺乳類

ウシ　１区落ち込み状遺構、５区SX202上層、６区SX201内集石部分から、それぞれ遊離歯（左右不明）が１点ずつ、計３点が出土している。SX202、SX201内集石遺構のものは被熱しており、白色を呈する。

３）祇園遺跡における動物利用

動物遺存体が出土した主要な遺構は、４区の井戸SE202および５区の溝SD201〔東〕である。その他の動物遺存体が出土した遺構を含めて、出土した土器から12世紀末の資料群と考えられる。SE202やSD201〔東〕から出土したものは、貝類と魚類である。貝類はバイ、魚類はマダイを含むタイ科が最も多く、コチ科、スズキ属が出土している。いずれも食用となるものばかりであり、当地における食料残滓と考えて差し支えない。いずれも白色ないし灰色を呈し、被熱していることから、食用とした後に生ゴミを火中に投じたと考えられる。また、その他の遺構から出土した魚骨も被熱しており、いずれも食料残滓であろう。当調査区では、SX201およびSD201〔東〕などの遺構で多量の土師器皿が投棄されており、饗宴などが催された邸宅の一角と考えられ、出土した魚貝類が饗宴の食材であったことも考えられる。

また、１区と６区で検出された庭園状遺構（SX201)、５区で検出された石組み遺構SX202からウシの遊離歯が出土している。これらにも被熱したものがあるが、生ゴミとして焼却されたとは考えにくい。祭祀などによる特殊な扱いを受けた可能性もあるが、これらの遺構を埋め立てる際に土に混じっていた可能性もあり、その利用法は判然としない。

４）まとめ

出土した資料の大部分は、被熱して白色を呈しており、細片となっているものが多く、種や部位の同定は困難であった。しかしながら、マダイを含むタイ科、スズキ属、コチ科、ウシを同定でき、当地における平安時代末の動物利用の一端を垣間見ることができる。特に、今回の調査地が平氏の有力者の邸宅跡の可能性があることから、平安時代の上流階級の食生活を物語る資料として意義深いものである。今後、近隣の調査によって資料が増加すれば、具体的な食生活像を描くことも可能となるであろう。

表５　祇園遺跡17次・18次調査出土動物遺存体一覧表

R番号	枝番	地　区	遺構・層位	大分類	小分類	部　位	左右	加工	備　考	破片数
79		17次−2区中央	第２遺構面上面	斧足綱	イタヤガイ？	殻体	−		小片	1
65		18次−1区北	落ち込み状遺構	哺乳綱	ウシ	臼歯	−		破片	1
B−1	1	18次−4区	SE201井筒底付近③	哺乳綱	不明	不明	−	被熱	白色	1
B−1	2	18次−4区	SE201井筒底付近③	硬骨魚綱	マダイ	上擬鎖骨	右	被熱	白色	1
B−1	3	18次−4区	SE201井筒底付近③	硬骨魚綱	不明	椎骨	−	被熱	白色	3
B−1	4	18次−4区	SE201井筒底付近③	硬骨魚綱	不明	鰓条骨	−	被熱	白色	1
B−1	5	18次−4区	SE201井筒底付近③	硬骨魚綱	不明	不明	−	被熱	白色	複数
B−1	6	18次−4区	SE201井筒底付近③	不明	不明	不明	−	被熱	白色	5
B−1	7	18次−4区	SE201井筒底付近③	硬骨魚綱	マダイ	方骨	右	被熱	白色	1
B−1	7	18次−4区	SE201井筒底付近③	硬骨魚綱	マダイ	主上顎骨	左	被熱	白色	1
B−1	7	18次−4区	SE201井筒底付近③	硬骨魚綱	不明	不明	−	被熱	白色	2
B−1	7	18次−4区	SE201井筒底付近③	硬骨魚綱？	不明	不明	−	被熱	白色	複数
B−2		18次−4区	SE201井筒内埋土④	不明	不明	不明	−	被熱	白色	2
B−3		18次−4区	SE201井筒底付近⑤	不明	不明	不明	−	被熱	白色	1
B−4	1	18次−4区	SE202検出GL−40㎝付近	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯	−	被熱	白色	1
B−4	2	18次−4区	SE202検出GL−40㎝付近	不明	不明	不明	−	被熱	白色	複数
B−5	1	18次−4区	SE202検出GL−50㎝付近	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯	−	被熱	白色	1
B−5	2	18次−4区	SE202検出GL−50㎝付近	硬骨魚綱	不明	不明	−	被熱	白色	1
B−5	3	18次−4区	SE202検出GL−50㎝付近	不明	不明	不明	−	被熱	白色	複数
B−6	1	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	タイ科	舌顎骨	左	被熱	白色	複数
B−6	2	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯	−	被熱	白色〜灰色	10
B−6	2	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯	−	被熱	白色〜灰色	3
B−6	2	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	右	被熱	白色	1
B−6	2	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	ハモ属	歯骨	右	被熱	白色	1
B−6	2	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	コチ科	歯骨	左	被熱	白色	1
B−6	2	18次−4区	SE202(炭層)	不明	不明	不明	−	被熱	白色	1
B−6	3	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	不明	不明	−	被熱	白色	5
B−6	4	18次−4区	SE202(炭層)	哺乳綱	不明	不明	−	被熱	白色	2
B−6	5	18次−4区	SE202(炭層)	不明	不明	不明	−	被熱	白色	複数
B−6	6	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	スズキ属	主上顎骨	右	被熱	白色	1
B−6	6	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	マダイ	方骨	右	被熱	白色	1
B−6	6	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	タイ科	前上顎骨/歯骨	−	被熱	白色	1
B−6	7	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	マダイ	角骨	左	被熱	褐色	1
B−6	7	18次−4区	SE202(炭層)	硬骨魚綱	不明	鰭棘	−	被熱	褐色	1
B−7	1	18次−4区	SD201西	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	右	被熱	白色	1
B−7	1	18次−4区	SD201西	硬骨魚綱	タイ科	歯骨	左	被熱	白色	1
B−7	1	18次−4区	SD201西	硬骨魚綱	スズキ属	主鰓蓋骨	右	被熱	白色	1
B−7	2	18次−4区	SD201西	硬骨魚綱	不明	椎骨	−	被熱	白色	2
B−7	3	18次−4区	SD201西	不明	不明	不明	−	被熱	白色	2
B−7	4	18次−4区	SD201西	硬骨魚綱	不明	不明	−	被熱	白色	複数
B−7	5	18次−4区	SD201西	不明	不明	不明	−	被熱	白色	複数
B−8		18次−4区	SP203	硬骨魚綱	不明	椎骨	−	被熱	白色	1
37		18次−5区	SX02上層	哺乳綱	ウシ	臼歯	−	被熱	白色	1
91		18次−5区	SP269	不明	不明	不明	−	被熱	白色	1
93		18次−5区	SP272	硬骨魚綱	不明	不明	−	被熱	白色	2
94		18次−5区	SP273	哺乳綱？	不明	不明	−	被熱	白色	2
111	1	18次−5区	SD02東(No.4)	硬骨魚綱	マダイ	第一腹椎	−	被熱	白色	1
111	2	18次−5区	SD02東(No.4)	不明	不明	不明	−	被熱	白色	複数
116		18次−5区	SD02東(No.10)	不明	不明	不明	−	被熱	白色〜青灰色	複数
127	1	18次−5区	SD02東(No.21)	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	左	被熱	白色	1
127	2	18次−5区	SD02東(No.21)	硬骨魚綱	不明	鰭棘	−	被熱	白色	1
127	3	18次−5区	SD02東(No.21)	不明	不明	不明	−	被熱	白色	3
161	1	18次−5区	SD02東(No.25)	硬骨魚綱	マダイ	主鰓蓋骨	右	被熱	白色	1
161	2	18次−5区	SD02東(No.25)	不明	不明	不明	−	被熱	白色	複数
164	1	18次−5区	SD02東	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯	−	被熱	白色〜灰色	1
164	2	18次−5区	SD02東	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯	−	被熱	白色〜灰色	5
164	3	18次−5区	SD02東	硬骨魚綱	タイ科	椎骨	−	被熱	白色	1
164	4	18次−5区	SD02東	硬骨魚綱	不明	不明	−	被熱	白色	6
164	5	18次−5区	SD02東	硬骨魚綱	コチ科	歯骨	左	被熱	白色	1
170		18次−5区	SD02西(E2)	腹足綱	バイ	殻軸・殻体	−	被熱	白色、殻長50.9㎜	1
171		18次−5区	SD02西(E3)	不明	不明	不明	−	被熱	白色	1
643		18次−6区北	落ち込み状遺構	斧足綱	不明	殻体	右？	被熱	白色	1
697		18次−6区	北東西溝	鳥綱/哺乳綱	不明	大腿骨	左		unfused(pro)	1
1033		18次−6区	SX201内集石部分	哺乳綱	ウシ	上顎臼歯	−	被熱	白色	1

神戸市兵庫区 祇園遺跡で観察された土石流と土砂流堆積物

増田 富士雄（同志社大学理工学部）

はじめに

神戸の市街地の遺跡発掘に伴って出現した地層から、六甲山地から発生したと思われる土石流の堆積物がみいだされ、それらに対する地層学的な報告がなされてきた［例えば、増田 1999a、2003、2014、増田ほか 2014］。そこでは土石流堆積物の特徴だけでなく、随伴する堆積物の特徴や、礫や流木の配列様式や、堆積時の流れの方向の推定についてなど、堆積学的な解析も合わせてなされてきた［増田 1998、2010］。それらの結果から、六甲山麓の扇状地の構成物は、土石流の堆積物が主体をなし、さらに、その土石流堆積物は典型的な堆積相を示すことがわかってきた。

土石流堆積物は 分級が悪く、上部に巨礫を含み、基質に泥を多く含むことなどから認定されてきた［増田 2004、2010］。また、土石流のような石礫とともに泥分を多く含む堆積物の動きは、土砂の集団移動現象として捉えられる。土石流は、水と土砂が混じり合って一体化し、全体がひとつの集団として流動化し、重力を受けて斜面を流れ下る。従って、土石流には泥分が多く含まれ、流れ自体に粘着性があり、堆積するときにはそこで急激に停止して、堆積物は泥がセメントのような役割を果たして固結してしまう。石礫を多く含むものを石礫型土石流、全体に細粒なものを泥流型土石流あるいは泥流と分けられることもある［高橋ほか 2003］。

水中の土石流は、重力流という流れでまとめられ、土石流よりも密度の低い（含まれる粒子数が少ない）流れは、高密度（高濃度）重力流や混濁流（乱泥流）などと呼ばれ、その堆積物は特徴的な堆積構造を示すことがよく知られている［Lowe, 1982; Mulder and Alexander, 2001；成瀬ほか、2001］。一方、陸上では、土石流よりも流れの粒子濃度が低く、一般的な河川の洪水流よりも流れの粒子濃度が高い流れ、すなわち、河川流と土石流の中間的な流れは、擬塑性土石流［pseudoplastic debris flow: Miall 1978］とか、ハイパーコンセントレイティッド流（hyperconcentrated flow）と呼ばれ［Beverage and Culbertson, 1964; Pierson, 2005］、その堆積物はハイパーコンセントレイティッド流堆積物（高密度洪水流堆積物、超濃度洪水流）として報告されてきた［片岡 2004］。ところがわが国では、この堆積物の堆積相についての報告は火山周辺地域からのものが多く（例えば、Kataoka et al. 2008）、非火山地域の扇状地からの詳細な報告は少ない［例えば、増田ほか 2005］。また、Beverage and Culbertson［1964］によれば、土石流（あるいは火山泥流）は流体中の懸濁粒子の濃度が 80wt% 以上で、ハイパーコンセントレイティッド流はそれが 80 ～ 40wt% で、河川流は 40wt% 以下と定義されている。この定義を過去の堆積物に適用することは、現状では報告例が少ないためできない。この報告では、流れ状態に対応した名称ではなく、土石流と河川流との中間的な流れから堆積したのではないか、と考えられる堆積物を土砂流堆積物と呼んでおく。従って流体中の懸濁粒子の濃度と堆積物の特徴との対応を知るためにも、土砂流堆積物の堆積相の実例を多く集めることが重要である。

神戸市教育委員会による祇園遺跡第 18 次調査に際して出現した地層を観察した結果、土石流堆積物の側方に連続して変化する特徴的な土砂流堆積物が存在することがわかった。さらにこれらの堆積物に付随して土砂流堆積物と考えられる特異な岩相の砂層が見いだされた。これらの堆積物について、

図 93　祇園遺跡の位置

その特徴を報告する。また、この堆積物は年代が測定されており［神戸市教育委員会 2016］、約 6,200 年前のものであることがわかっているという点でも貴重である。

祇園遺跡の位置と観察トレンチ

祇園遺跡は神戸市兵庫区下三条町 11-1 にあり、天王谷川の扇状地上の標高 23 ～ 25 mに位置する（図 93）。この遺跡からは、12 世紀後半から末にかけての遺構や遺物が見いだされている［神戸市教育委員会 2013、2016］。

露頭の観察は発掘調査地内の 1 トレンチから 5 トレンチ、および、11 トレンチと 12 トレンチで行われた。その位置や方向は図 94 に、また、各トレンチでの地層断面やスケッチは図 95 に示した。

観察された堆積物

各トレンチで観察された堆積物の特徴について述べる。図 94・図 95 を参照しながら、読んで頂きたい。

1．1 トレンチ：下位の礫層（厚さ約 40 ～ 50 ㎝）と上位の礫層（厚さ 1.2 ～ 1.4 m）に 2 分される（図 95 の破線が境界）。下位の礫層は、径 10 ～ 30 ㎝の亜角礫～円礫の礫支持から基質支持の礫層で、淘汰（分級）が悪い。上位の礫層は、基質が細粒～中粒砂で泥分を多く含み、上方粗粒化を示す基質支持で、最上部に花崗岩類の巨礫（径 50 ㎝～ 1.2 m）、いわゆる “outsized clasts” を含む。礫は明瞭な定方位配列を示さない。また、堆積時に形成された上に凹の剪断面［増田、2004,2005］と思われる線状構造が認められる。上下の礫層の境界は、下位の礫層の岩相から判断すると侵食面と思われる。

2．2 トレンチ：地層は下位の礫層（厚さ約 60 ㎝）と上位の砂礫層（厚さ約 1.8 m 以上）にわけられる（図 95 の破線）。下位の礫層は亜角礫～亜円礫からなる礫支持で、礫径はその上部ほど大きく 30 ㎝～ 50 ㎝になる。基質は泥分が多い砂である。上位の砂礫層は、下部が砂礫で上部は砂になる。下部の礫層は、北側では礫径が 25 ㎝以下で、厚さは 1.2 m 以上になり、基底が下位層を削り込んだ小さなチャネル状を呈し、上面もやや盛り上がる凸レンズ状の形態をとる。このチャネル壁の伸びは西北西－東南東である。この礫層を覆って砂層が重なる。また、上位の砂礫層の下部の礫層は、南に向けて厚さが薄くなり、礫径も小さくなる。それを覆う上部の砂層は南側では厚さが 1 m にもなる。その砂層は塊状で淘汰の悪い泥質であるが、細礫を含む粗粒な部分がみられる。すなわち、このトレンチ全体でみると、見かけ上、北側の礫層のチャネルから南に向けて溢れ出して堆積したような形態を示す。その上部を砂層が覆って水平になったように分布している。溢れ出したような部分では下位から上位に砂から礫

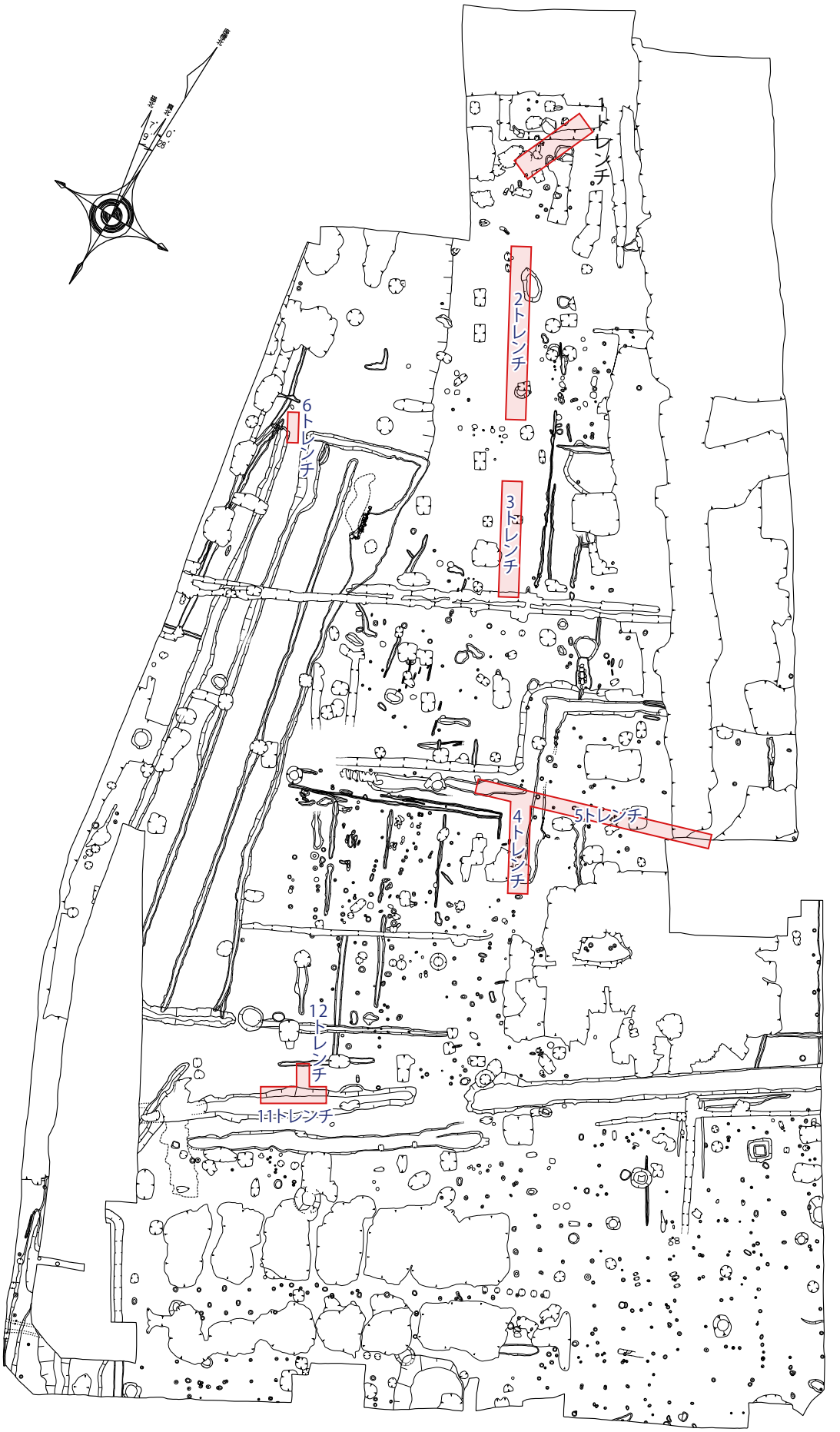


図 94　調査地区内の土層断面観察用
トレンチ配置図

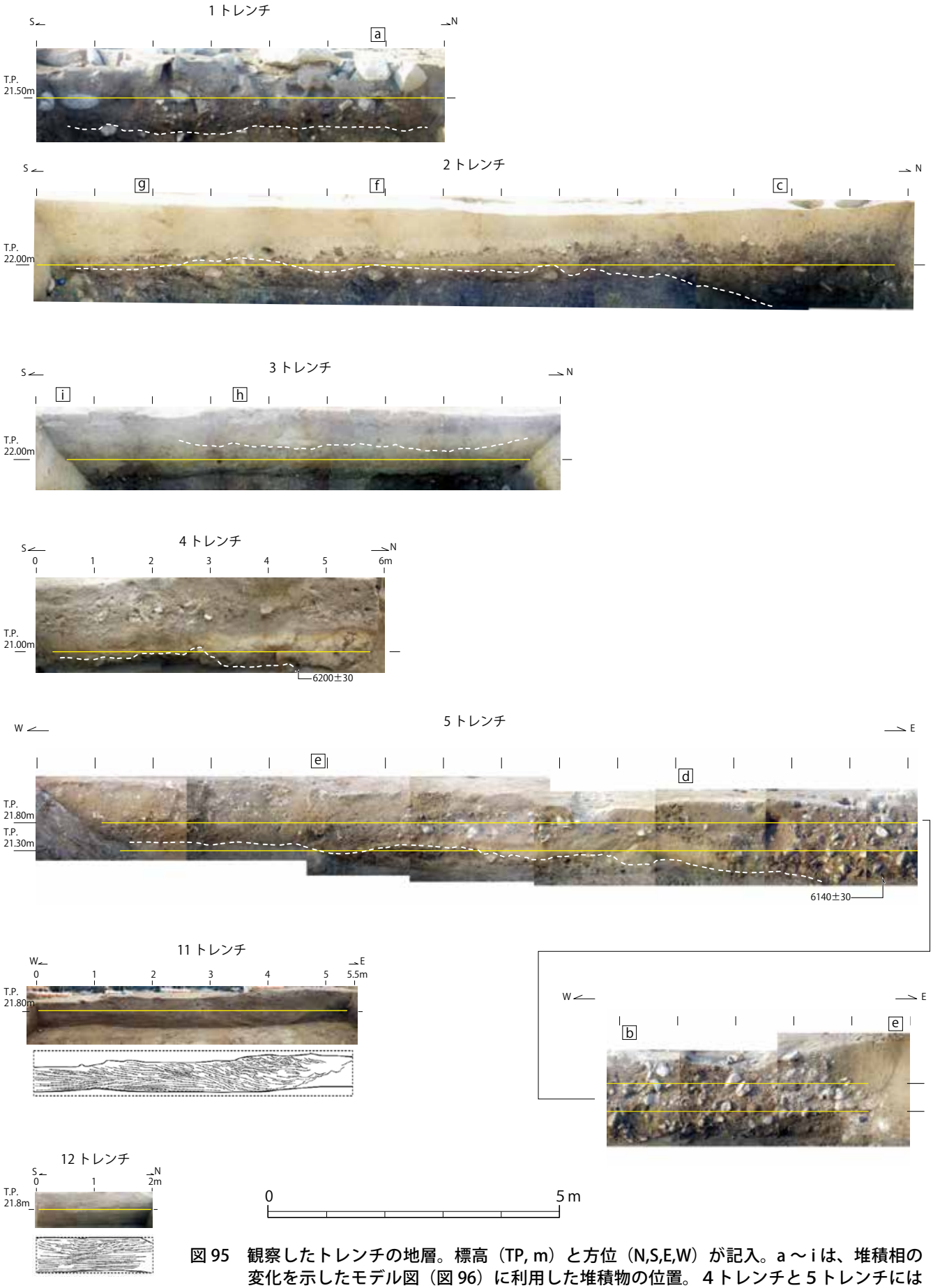


図 95　観察したトレンチの地層。標高（TP, m）と方位（N,S,E,W）が記入。a ～ i は、堆積相の変化を示したモデル図（図 96）に利用した堆積物の位置。4 トレンチと 5 トレンチには年代測定試料の採取位置とその年代値が表示。11 トレンチと 12 トレンチには堆積物内部の層理・葉理構造のスケッチが添付。破線は表層の土石流・土砂流堆積物の基底面。

そして砂へと、逆級化から正級化の構造を示す。

３．３トレンチ：厚さ 1.4 m の砂質泥層と泥質砂層がみられる。中部に厚さ 20 ～ 30 ㎝の中粒～細粒砂層がレンズ状に認められる。その砂層の基底で上下に２分できる（図 95 の破線）。砂層は正級化している。泥層には植物の根痕が認められる。南側の上部には洪水氾濫層の粘土から砂への逆級化（グレーディング）構造［増田・伊勢屋 1985］がみられる。また、泥層の上部は一部、人工改変によって撹乱されたと思われる部分も認められる。

４．４トレンチ・５トレンチ：ここでも上位の砂礫層と下位の礫層に２分できる（図 95 の破線が境界）。下位の礫層はトレンチ中央部で、厚さ 20 ～ 30 ㎝の部分がみられる。上位の砂礫層は、５トレンチの東側では、厚さ約 1.5 mの基質支持の分級の悪い大礫層で、中央部から西側では厚さ 1.2 m 程の砂礫層に側方変化している。この砂礫層は上方粗粒化から上方細粒化のサクセッションを示す。東側の礫層は、礫が無秩序に散在し、上方細粒化や上方粗粒化が明瞭ではない。その礫層の礫配列から推定すると、下位層を削り込んだ幅６m以上のチャネル状の分布をとっていると思われる。すなわち、礫層の厚さも礫径も見かけ上、東から西にむかって小さくなっていて、東側の礫層から西側の含礫砂層に側方変化を示している。

４トレンチは、５トレンチの礫層が薄くなっていく部分にあたり、そこの上位層は、下部の砂層の上位に厚さ 50 ㎝ほどの礫層があって、砂から礫への上方粗粒化とさらに上部で砂への細粒化を示す。

５．11 トレンチ・12 トレンチ：11 トレンチと 12 トレンチではともに、厚さ１m ほどの中粒～極粗粒砂層からなり、葉理構造の違いから、平行葉理や低角くさび状葉理の発達した下部と、波状層理がみられるより粗粒な上部に区分できる（図 95）。上部と下部との間に侵食面を含むが、一連の流れによってできた堆積物と思われる。上部は葉理の重なり構造からみると、下位をチャネル状に削っている。堆積初期の部分には、細礫が密集する部分がみられ、それが側方で砂層に変化している。 すなわち、11 トレンチでは、層理から判断して、西から東にむかって上位の地層が重なり、12 トレンチでは見かけ上、北に向かって上位層が重なる。これらの葉理構造は、波状で連続性が悪く、非対称の形態を示し、フォーセット葉理が認められないことなど、フルード数が１以上の射流状態での高いエネルギーレベルの、浅くて強い流れでできたアンティデューン葉理の特徴［Araya and Masuda 2001］を示す。この葉理からは、見かけ上、北から南への流れで形成されたものであることがわかる。11 トレンチの東側で砂層がより粗い砂層がチャネル状に削り込んでいることや、西側に薄く細粒になることも、上流側に向かって形成されるアンティデューン葉理で説明できる。

６．堆積物の特徴と堆積営力：１トレンチの礫層は、礫の分級度が悪く基質に泥分が多く含まれ、最上部に巨礫（outsized clasts）を含み、上方粗粒化を示すことなど、土石流堆積物の特徴［Nilsen 1982、1985、Nemec and Postma 1993、増田 1999b、2004］を示している。また、２トレンチの下部の礫層も、明瞭な上方粗粒化はないが、分級の悪さやマトリックスに泥分を多く含むことなど土石流堆積物の特徴を持っていることがわかる。

それに対して、チャネル状を示す２トレンチ北側の礫層や５トレンチの東側の礫層は、チャネルを埋積したときの層理面がその内部にみられること、上方粗粒化が顕著でないこと、上方や側方で細粒化して砂層に漸移することなど、典型的な土石流堆積物ではなく、いわゆる“土石流様”堆積物である。すなわち、これは土石流の本体よりも流れに含まれる粒子濃度が低く、粘着性がやや小さい流れからの堆積物といえよう。ここでは土石流と河川流との中間的なこうした流れからの堆積物を、“土砂流堆

積物 ” と呼ぶ。このような視点でみると、1トレンチから3トレンチにかけてみられる、礫層から砂礫層、そして砂層から泥層への変化、および、2トレンチと5トレンチ内でみられる側方変化は、土石流堆積物の中央部から縁辺部への岩相変化をみていることになる。礫層に伴う砂層や泥層に挟まれた砂層も、土石流に伴ったより流動性に富んだ土砂流堆積物と考えられる。

地層断面で連続性からは確認できていないが、11トレンチや12トレンチの葉理や層理の発達した砂層も上方粗粒化を示すこと、下部の平行葉理から上部の波状葉理（アンティデューン葉理）に変化し、上部ほど流れが速かったことを示すこと、アンティデューン葉理の存在から浅く速い流れであり、トラフ型や平板型の斜交層理がみられず、通常の掃流や跳流・転動などで運搬された河川流路での堆積物［増田 1988、1999b］ではないことなど、これも土石流様の土砂流堆積物だと思われる。この砂質堆積物は、花崗岩類の流域にもつこの地域に特有の風化で生産された豊富な “ まさ土 ” が、集積して流れた特異な土砂流堆積物といえるかもしれない。土石流発生ほど強力な流れではなく、しかもアンティデューンを発生させるような浅くて速い流れのハイパーコンセントレイティッド流が、まさ土を集めて流れて、この特異な土砂流堆積物を形成したのではないかと想像している。

こうした特異な土砂流堆積物に似たものは、扇状地で発生する布状洪水流（sheetflood）からの堆積物（Nielsen 1982）、ピナツボ火山からの洪水泥流のハイパーコンセントレイティッド流堆積物（Pierson, 2005）、京都北白川扇状地での砂質土石流堆積物とされた砂層［増田ほか 2005］からも報告されている。また、この土砂流堆積物でみられるような平行葉理の上位にアンティデューン葉理を伴った砂層は、河川堤防の決壊による洪水破堤堆積物から報告され［増田ほか 2009］、多量の土砂が急激に運ばれた結果、形成されたと考えられる。

土石流堆積物の側方変化モデル

祇園遺跡でみられた土石流堆積物と土砂流堆積物から、土石流の流下にともなう堆積物の側方変化や相互の分布位置を推定し、流れの変化に伴うそれぞれの堆積物の特徴をモデル化してみよう。

土石流本体が下流に向かって舌状に分布することは、雲井遺跡の解析［増田 2010］からわかっている。この祇園遺跡は地形的には扇状地の上部に位置するので、扇状地の下部よりも堆積物は粗粒で流路（チャネル）の発達が良いと思われる。事実、今回の観察でも下に凸の流路状の構造が多くみられた。土石流は浅く枝分かれした流路を流れ下り、その流路から溢れる。土石流が流路を溢れて氾濫して堆積したものが土砂流堆積物で、土石流本体の側方や前方に堆積したと考えられる。

そうした堆積物の側方変化をモデル化したのが、図96である。1トレンチの礫層（図96 a）が土石流の本体で、それが南東に流下した土石流の側部が5トレンチの東側の礫層（図96 b）にあたる。5トレンチで認められる東から西への側方変化（図95）は、土石流から、ハイパーコンセントレイティッド流で堆積した土砂流堆積物への側方変化を示している。その堆積物の特徴は、下部から上部に、砂層から礫層へそして砂礫層から砂層へと変化する堆積物（図96 d、e）である。この堆積相の特徴は擬塑性土石流［Miall 1978］と一致する。さらにその流下方向への側方変化は、2トレンチの中央部から南側にかけての岩相変化（図95）にあたる。その堆積物の特徴は、砂層から砂礫層へ逆級化し、砂礫層から砂層へと正級化する変化から、砂礫層から砂層へと上方細粒化する堆積物（図96 f、g）である。その側方は河川洪水氾濫流から堆積物で砂層から泥層への上方細粒化堆積物（図96 h、i）である。2トレンチの北側の上方細粒化を示すチャネルを埋積した礫層から砂礫層（図95、図96 c）は、土石流が流路内

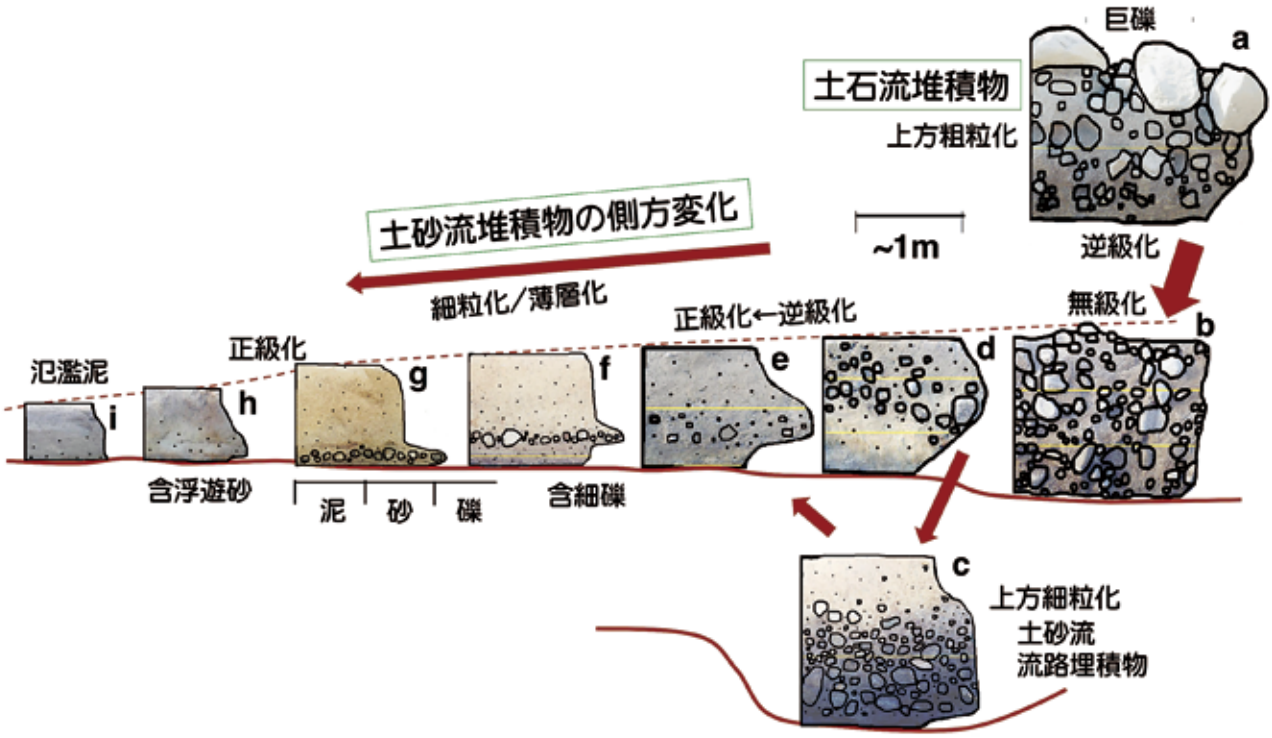


図 96　土石流堆積物から土砂流堆積物、さらに洪水氾濫堆積物への堆積相の変化と特徴。モデル図の右側の凹凸は構成物の粒度組成（泥・砂・礫）を示す。矢印は流下方向を示す。堆積相 a ～ i

で土砂流に流れの分化を起こしたものであろう。土石流が水塊に突入して流れの分化を起こした例は、富士山の大沢扇状地で知られている［増田 2005］。

神戸地域でこれまでに土石流堆積物に伴った土砂流堆積物として報告されたものと比較してみよう。雲井遺跡［増田 2010］の土砂流堆積物は逆級化構造を示す砂泥互層で、今回の 11 トレンチと 12 トレンチの砂層が、全体的に泥質になって層理面に薄い泥層が発達したものといえる。北青木遺跡［増田ほか 2014］の土砂流堆積物は上方細粒化が特徴で、２トレンチの南側のものに近い。深江北町遺跡［増田 2014］の土砂流堆積物は上方粗粒化から上方細粒化を示す含礫砂層で、５トレンチの中央部から西側の堆積物に似る。

まとめ

神戸市兵庫区の祇園遺跡の地層から、土石流堆積物とそれから分化した土砂流堆積物をみいだした。土砂流堆積物は、土石流と河川流の中間的な粒子濃度の流れから堆積したと思われるものである。この報告では地層の観察から、土石流から土砂流さらに氾濫流へと含有粒子濃度の低下に伴う堆積物の変化をモデル化して示した。その堆積相の特徴は、巨礫を含む乱雑な礫層の土石流堆積物から、下部から上部へ、逆級化から正級化を示し、さらに正級化を示すサクセッションへと変化する土砂流堆積物の細粒化と薄層化で代表される。

こうした特徴をもった堆積物は、これまで土石流堆積物や土石流様堆積物あるいは河川堆積物として漠然と報告されてきた。従って、土砂流堆積物として識別することは、堆積物の運搬・堆積過程を推定するだけでなく、地層に対する知識を深めることになるといえる。今後、扇状地堆積物の多い神戸市地域の地層の調査から、さらなる土砂流堆積物の事例が集積されることを期待している。

謝辞

調査の機会を与えて頂いた神戸市教育委員会の丸山　潔氏、ハイパーコンセントレイティッド流に関する文献をご教示頂いた新潟大学の片岡香子氏に感謝します。

文献

Araya, T. and Masuda, F., 2001, Sedimentary structures of antidunes: An overview. Journal Sedimentological Society of Japan, 53, 1-15.

Beverage, J.P. and Culbertson, J.K., 1964, Hyperconcentrations of suspended sediment. Journal of the Hydraulics Division, Proceedings of the American Society of Civil Engineers, 90, HY6, 117-128.

片岡香子、2004、ハイパーコンセントレイテイッド流と堆積物。増田富士雄（編）、堆積システムと堆積物、457 － 477、堆積ショートコース、日本堆積学会。

Kataoka, K., Urabe, A., Manville, V. and Kajiyama, A., 2008, Breakout flood from an ignimbrite-damned valley after the 5 Ka Numazawako eruption, northeast Japan. GSA Bulletin, 120 (9/10), 1233-1247.

神戸市教育委員会、2013、祇園遺跡第 18 次調査。現地説明会資料、神戸市教育委員会、4p。

神戸市教育委員会、2016、祇園遺跡第 18 次調査報告、神戸市教育委員会、（本報告）。

Lowe, D.R., 1982, Sediment gravity flows: II. Journal of Sedimentary Petrology, 52, 279-297.

増田富士雄、1988、ダイナミック地層学—古東京湾域の堆積相解析から－（1）。応用地質、29、312-321。

増田富士雄、1998、ダイナミック地層学—堆積と累重の過程を明らかにする新しい地層学。深田研ライブラリー、17、71p。

増田富士雄、1999a、北青木遺跡の海浜堆積物。北青木遺跡発掘調査報告書、神戸市教育委員会、66 － 74。

増田富士雄、1999b、透水層・滞水層のトレース：ダイナミック地層学からのアプローチ。地下水技術、41、 1 － 15。

増田富士雄、2003、神戸市本庄町遺跡で観察された浜堤の形成過程を記録した地層。本庄町遺跡第９次発掘調査報告書、神戸市教育委員会、55 － 62。

増田富士雄、2004、堆積システムと堆積物。堆積ショートコース、日本堆積学会、517 p。

増田富士雄、2005、陸上土石流・水中土石流堆積物から堆積過程を読み取る。京都大学防災研究所報告。一般共同研究、16G-09, CD、14 p。

増田富士雄、2010、地層と土石流堆積物。雲井遺跡第 28 次発掘調査報告書、10、181 － 187、神戸市教育委員会。

増田富士雄、2014、神戸市東灘区深江北町遺跡第 12 次調査地での自然堆積層。深江北町遺跡第 12・14 次調査埋蔵文化財発掘調査報告書、神戸市教育委員会、171 － 182。

増田富士雄・伊勢屋ふじこ、1985、“逆グレーディング構造”：自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造。堆積学研究会報、22/23、108 － 116。

増田富士雄・伊藤有加・坂本隆彦・佐藤智之、2009、京都府京田辺市魚田遺跡付近の地形と洪水破堤堆積物。京都府遺跡調査報告集（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、133、99 － 104。

増田富士雄・田村　亨・冨井　眞、2005、砂質土石流堆積物の粒度特性－京都大学理学部構内の弥生時代の砂層（黄色砂）－。京都大学構内遺跡調査研究年報、京都大学埋蔵文化財研究センター、185-276。

増田富士雄・谷口圭輔・佐藤喜英、2014、神戸市東灘区北青木遺跡第７次調査における堆積物と地層。北青木遺跡第７次調査発掘調査報告書、神戸市教育委員会、107 － 124。

Miall, A., 1978, Fluvial Sedimentology. Canadian Society of Petroleum Geologists, Memoir 5, 859p.

Mulder, T. and Alexander, J., 2001, The physical character of subaqueous sedimentary density flows and their deposits, Sedimentology, 48, 269-299.

成瀬　元・田村　亨・久保雄介・増田富士雄、2001、重力流堆積物とその構造。堆積構造入門シリーズ（２）、堆積学研究会（京都）、147 p。

Nemec, W. and Postma, G.,1993, Quaternary alluvial fans in south western Crete: Sedimentation processes and geomorphic evolution. In, Marzo, M. and Puigdefabregas, C., eds., Alluvial Sedimentation. Special Publication of International Association of Sedimentologists, 17, 235-276, Blackwell Scientific Publications, London, 586p.

Nilsen, T.H., 1982、Alluvial fan deposits. In, Scholle, P.A. and Spearing, D., eds., Sandstone Depositional Environments. 49-86, AAPG (American Association of Petroleum Geologists, 410p.

Nilsen, T.H. (ed.), 1985, Modern and Ancient Alluvial Fan Deposits. Van Nostrand Reinhold Company, New York, 372.

Pierson, T.C., 2005, Hyperconcetrated flow-transitional process between water flow and debris flow. In, Jakob, M. and Hungr, O. eds., Debris-flow Hazards and Related Phenomena.159-202, Springer, Berlin, 538p.

高橋　保・佐々恭二・中川　一、2003、土石流災害。京都大学防災研究所（編）防災学講座３、57 － 112、山海堂、139 p。

第６章　まとめ

第１節　遺構について

最後に、今回の調査における成果について、主な検出遺構について概観し、あわせて周辺の調査結果と比較、検討して本書のまとめとしたい。

今回の調査においては、１～３面の遺構面を確認し、多量の遺物が出土した。このうち多くの遺構が確認された第２遺構面の遺構については、その殆どが平安時代末頃（12世紀後半から12世紀末）の比較的短い期間に存在したものと考えられる。

検出された主な遺構は、掘立柱建物、溝、井戸、土坑ならびに庭園状遺構、石組み遺構など多岐にわたる。

掘立柱建物

掘立柱建物については、合計７棟を確認したが、いずれの建物の柱穴からも時期を特定できる遺物は出土しなかった。しかし建物に伴うと考えられる区画溝SD201や建物と前後して造られたSX201からは多くの遺物が出土しており、ある程度の時期決定が可能となった。

検出された建物群は、SB207を除いてすべてが区画溝SD201の南に存在している。平面が近接あるいは重複しているものもみられるため、すべてが同時に存在したものではないが建替えに際して同一の敷地が選ばれたと考えられる。

また、SB207については配置とともに南の建物群と方向を違えることが特徴的である。この建物は、南の建物群と方向を揃える溝SD206や207と直接の切り合い関係はないものの重複することからも建てられた時期に若干の隔たりを感じさせる。

建物の構造については、総柱のものが基本のようである。柱掘形は、小型の円形であり確認できる柱痕跡なども比較的小規模である。周辺でも瓦片が殆ど出土していないことから桧皮や板葺きであった可能性が高い。また井戸などが造り替えられながらも存在することから邸宅の主殿ではなく家政にかかわる施設や家人などの居住区と考えられる。

溝のうち４・５区およびＩトレンチで確認されたSD201については、規模や途中で途切れる形状や溝の両側で建物が確認されていること、門など外部と隔絶する施設も無いことなどから、楠・荒田町遺跡で確認されている邸宅地を区切る壕や大溝[(1)]のようなものでなく、大阪の和気遺跡[(2)]や伊豆の北条氏邸宅[(3)]でみつかっている、邸宅内の施設などを区切る区画溝と考えられる。とくに今回溝の南側に小規模の建物が集中することは、示唆的である。同様の溝は祇園遺跡第14次調査[(4)]においても確認されている。

井戸

井戸は全部で３基を確認した。井戸は、廃絶に伴いSE201のように上層を拳大の礫で入念に埋められていたり、SE203のように埋戻しの最終段階において土器を埋納し、祭祀がおこなわれていたようである。またすべての井戸には、廃絶の際に井戸枠材の抜き取りがなされていた痕跡が見受けられる。今回、明確な井戸枠などが確認されずに土坑として報告したSK202やSK203についても、徹底して枠材が抜き取られた結果と捉えることができるかもしれない。

庭園遺構

さらに祇園遺跡に特徴的な遺構として庭園遺構があげられる。17次調査１区のSX21では、土師器皿の大量投棄がみられ、第２次調査や第５次調査で検出された園池内の遺物出土状況に似ていることから、池の底部の一部分が残存し、池の畔になるような州浜などは、後世の圃場面造成時に削平されたものと考えられる。石が集中する部分もあり、あるいは

池の水面に石を見せるための下部構造とも推定される。

SX201

さらに、SX201として報告した遺構については、多量の遺物が出土したが、その大半が土師器皿であることや部分的にせよ石敷きや石列を伴うことなど庭園遺構の可能性をもつため、ここで若干の検討をおこなう。

まず遺構の造られた順であるが、SX201を構成する遺構には時期差がみられ、最終の堆積（整地）と思われる西側落ち込みの埋土を除去した底面で検出された東溝（以下A溝）と中央溝（以下B溝）、西溝（以下C溝）が先行するものと考えられる。また断面観察から北東部分に存在する石列や石敷きを伴う集石部分はA溝を埋めて新しくが築かれたことが判る。北東西溝（以下D溝）は上面を激しく削平されて、盛土直下で検出されているが、A溝から切り合うことなく連続しており同時に存在したものと考えられる。さらに南東西溝(以下E溝)はA溝やB溝を切っているため後から掘り込まれたものである。(図97参照)

ただし、これらの遺構の時期差が造り替え（加え）られるときに完全に埋め戻されたか一部は最後まで機能していたのか判断することは、出土している土器の時期差が認められないため困難である。

次に形状であるが、A溝は北から南西にかけて緩やかな曲線を描くように掘られている。これに対しB溝とC溝の２条の溝は間隔を空けて並行して直線的に掘られており、方向はＮ12°Wを示す。さらに１区で検出されたSD209についても方向を揃えることから関連する可能性があることは第４章で指摘した。ただ、この角度は今回検出されている他のどの遺構とも一にしない。またいずれの溝も遺物や礫が多量に出土するが、底面から少し浮いた状態で滞水していた痕跡も認められなかった。なお、周辺には１m前後の石が散見されたが土石流による転石で景石ではないことが確認されている。

こう考えたとき類例もなく性格の不明な遺構であるが、A溝が北から南西方向に水が流れるよう掘られていることや、集石部分に敷石が施されていること、他の溝にも拳大の礫が多く見られることなどから、やはり可能性としては、庭園遺構に伴う遣水などの施設が

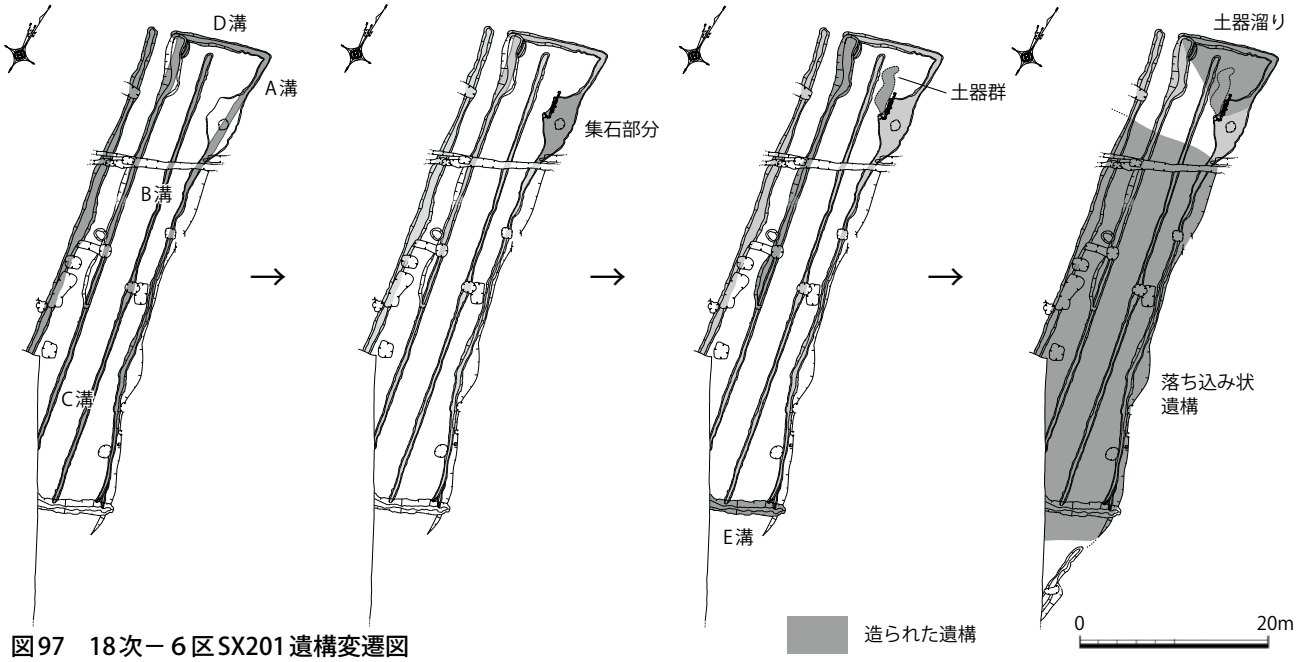


図97　18次－６区SX201遺構変遷図

考えられないだろうか。庭園遺構については、屋敷の主の嗜好や流行によって盛んに造り替えがなされることが判っており、祇園遺跡第２・５次調査[(5)(6)]においても、園池とされる遺構が数十年の間に２回の改修が確認されている。その度に掘り替えや石の組み換えの造作が行われるわけで、不完全な形状は、後世の削平もさることながら、この途中に邸宅が廃棄されたとも考えられる。ただ並行に掘られた溝については、造作の工程なのか排水や導水を目的とするものか、今回判断はできなかった。

石組み遺構（SX202・204）

この他に石材を使用した遺構がいくつか見られるのも、特徴的である。

石組み遺構SX202については、出土遺物が少なく時期を決定することが難しいが、SK201を切るなど遺構群のなかでは比較的新しいものである。堆積から内部には水が蓄えられていたと考えられるが、これに取り付く施設があったかどうかは、調査では明らかにできなかった。また珪藻や寄生虫卵の分析結果からはどのような性質の水が溜められていたのかは残念ながら判らなかった。

石敷水路（SX203）

SX203は、非常に綿密に造られた石敷の水路（暗渠）である。しかしこの遺構は、出土遺物が出土せず、削平のため検出面が旧耕土直下ということで時期決定が困難な遺構といえる。ただ方向については、建物群などと揃って南北方向にはしり、北側で弧を描いて直角方向に曲るという規格性をもった設置がなされているようである。

構造的には、導水部分の側壁も密に並べられ上には蓋石が載せられていることから、水捌けなど集水の効果を求めるものでなく、通水・導水を目的とした施設であると考えられる。なお５区で検出した部分は工事影響深度以下であったため断面観察部分以外は保存した。

石敷溝SX203や石組み溝の可能性があるSX204など導水施設と考えられる遺構も考え合わせると、敷地（邸宅）内に水を引き入れ、貯水した後に外に排水するというサイクルが確立していたようである。

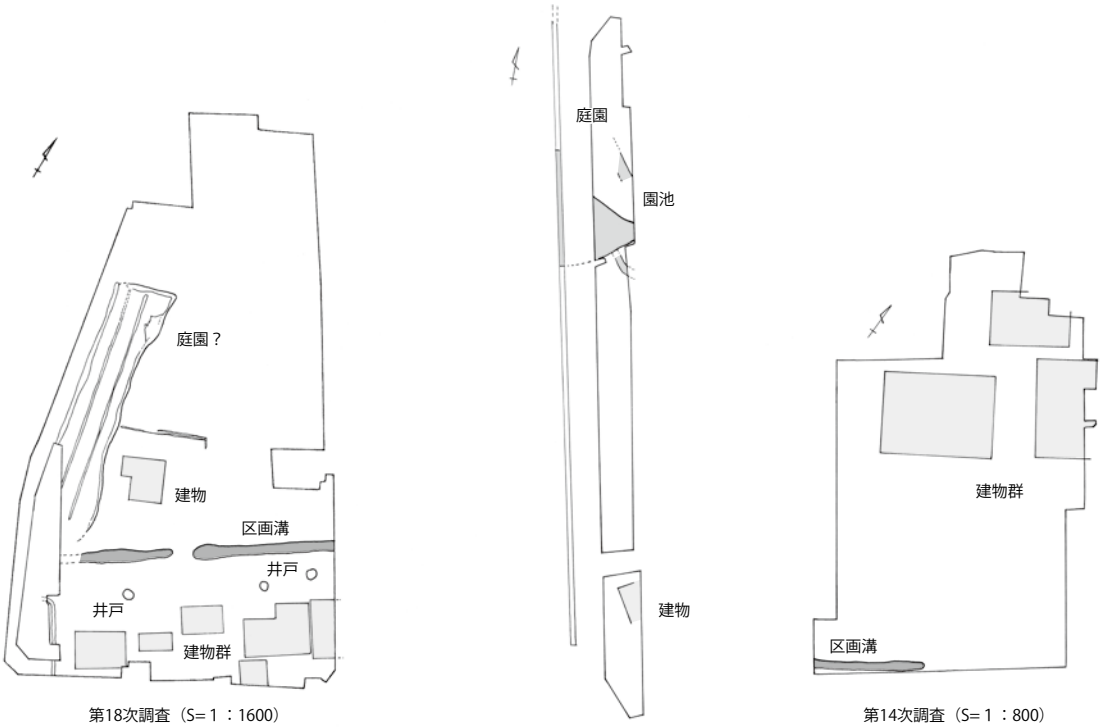
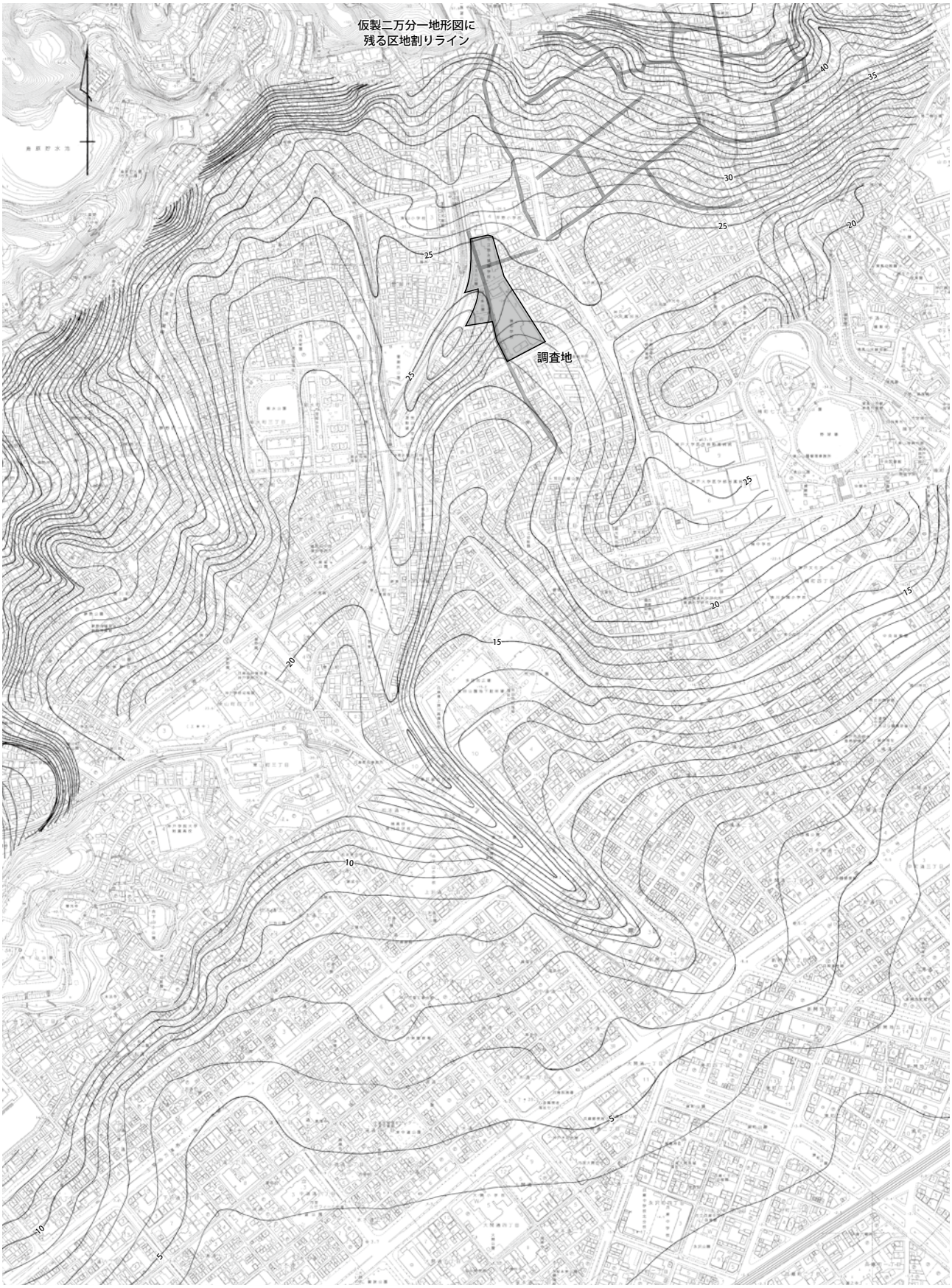


図98　祇園遺跡内平安時代末邸宅内遺構配置図



（著しい改変のある部分については除外した）

図99　祇園遺跡周辺の微地形図（S= 1 ：10,000）〔（4）の文献６頁図６をもとに一部変更・加筆した〕

主な遺構について気付いた点を書き留めたが、次に遺構にみられる規格性を検討してこの調査区の遺構群の性格について考えてみたい。

18 次調査（８区以外）で検出された建物や区画溝は方向を揃えるなど規格性をもっており、これらの建物群と SD201 は、N 55°E（正東西方向より 35°南に傾く）からN 57°E（正東西方向より 33°南に傾く）方向で築かれている。これは楠・荒田町遺跡でみつかっている大規模な濠の方向N 70°Eとは大きく違っている。この濠は周辺のいくつかの建物群の方向N 39°Wとも方向を違えており、むしろ周辺の微地形のコンターラインに沿っているようにもみうけられる。

地割り

調査地の存在する平野周辺一帯には、明治初め頃の地図[7]に残る地割りがみられる。今回確認された建物群などの方向はこの地割に沿って造られているようである。この方向は、第８次調査[8]で確認された掘立柱建物や第 14 次調査において検出された建物群や区画溝の方向ともほぼ揃うほか、第５次調査[6]の園地遺構の州浜の堤の方向にも近いことから、平安時代末においても、この地割をもとに計画的な宅地割りが実施されたと考えられる。

この地割は、祇園遺跡の中心部から雪御所遺跡の微地形のコンターラインにほぼ沿っており、傾斜地を整地・開発するのにはある意味合理的であるといえよう。

邸宅の区画

また、今回検出された遺構群が平安時代末頃の邸宅に伴うものであるとした場合、敷地内には区画溝と考えられる溝以外に宅地の境界を示す遺構は確認されなかった。また東側には区画溝 SD201 が延び、南側にもさらに遺構が続く様子が確認されている。調査区の南北長は約 120 mであるため推定される邸宅の規模はそれ以上ということになる。仮に東西方向もほぼ同規模の距離をもつものとすれば、現在 80 mほど東側をはしる幹線道路が古来よりの有馬道と重なるとされ、これによって区画が規制されと考えられる。先ほどの地図でも調査区を含んで南北 130 m、東西 150 mほどの地割りがみられることから全体が一つの邸宅になる可能性がある。これは、平安京などで上級貴族の邸宅の目安とされる１町四方を凌駕する。

この邸宅の時期については、出土遺物より 12 世紀後半から 12 世紀末の比較的短い期間に存在したものと考えられる。この時期は、平清盛による福原への退隠から平家の遷都前後にあたる。立地的には西側には天王谷川が流れ南側を谷筋が入り込んでいる。実際、断割りトレンチによって調査区西部の１・６区西には下層に湿地状の堆積が確認されるなど必ずしも良好な占地とは言い難い。ただ、急造されたとはいえ、このように大規模な邸宅であることや、小河川を挟んで対岸には、清盛の雪御所や別業（本皇居）なども想定されていること、さらに、第２次調査や第５次調査で確認された園池遺構をもつ邸宅が存在する「福原京」の中枢部といえる地区に隣接することから、政権との結びつきの強い有力な人物の邸宅であった可能性が高いと考えられる。

小結

このように狭隘な場所に短期間に規格された土地利用、大規模な邸宅の建造などを推し進める行為からは、平清盛を中心とする平家一門の政権による強い意思によって一帯が急速に開発されていった様子が窺える。

多くの注目すべき遺構が検出され、祇園遺跡について新たな成果を得ることができた今回の調査であるが、不明な点、新たな課題も多くみつかった。今後類例の増加を待って、邸宅の構造や庭園状遺構や落ち込み遺構の性格など明らかにしたいと考える。

第２節　出土遺物について

17・18次調査を通じて、出土土器の過半を占めるものが土師器の大・小皿であり、他は東播系の須恵器の鉢・椀・小皿、大阪湾周辺で多用される瓦器椀・小皿（和泉型）、地元および大和（紀伊）産の土師器の鍋･羽釜、中国製貿易陶磁器、吉備系土師器椀、常滑窯･十瓶山窯と思われる甕､滑石製品（石鍋）が認められた。以下にそれらの特徴を記述する。

土師器皿・小皿・坏

出土量の大半を占める土師器皿･小皿は手づくね成形、一段ナデ技法[9]で製作されており、京都産の土師器皿･小皿との類似性が高く、工人の招聘などが行われたものと推定される。また、各遺構出土品を比較しても、技法の差異が認められないことから、各遺構の時期差はほとんどないと判断される。また、京都産の土師器で確認される器形が低平で口縁端部を内側に巻き込むコースター型の小皿やロクロ成形で底部に回転糸切りの痕跡を残す小皿・坏[10]（播磨の製品と思われる）が少量確認される。

瓦器椀

瓦器椀は和泉型のものがほとんどであり、器高が低く、胴部外面には指頭圧痕、口縁部は幅広く横方向のナデを施し、内面の上半部には圏線状、見込部分には平行線状の暗文を施すという共通性がある。ただし17次調査SK21出土の瓦器椀（81）は大和型と判断される。和泉型のものは森島康雄氏の編年[11]でⅢ－２期（12世紀末～13世紀初頭）に相当すると考える。

須恵器捏鉢・椀・皿

東播系の須恵器の鉢・椀・小皿が量はさほど多くないが出土している。神戸市神出窯跡群の出土遺物から考案された池田征弘氏による編年[12]のⅡ－２期にほぼ一致する。その実年代については報文の中で明確には述べられていないが、同時に出土した瓦の年代のⅡ期を12世紀後半としていることから、Ⅱ－２期は概ね12世紀末頃と判断する。

羽釜・鍋

羽釜・鍋は在地のものと思われるもの（195，196）および大和（紀伊）型（菅原正明氏の分類[13]では大和B型式）と思われるもの（194）がある。

貿易陶磁

出土した貿易陶磁のうち、碗・皿では白磁碗Ⅳ・Ⅴ類・同安窯系青磁が多く、龍泉窯の劃花文青磁碗がそれに次いでいる。また遺構内からは龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗は一点も発見されなかった。その他は青白磁皿や合子、掲載はしていないが白磁四耳壷の小破片が確認されている。山本信夫氏の分類と編年[14]によると、上記の様な段階は概ね12世紀後半の時期と捉えることができる。

また、褐釉四耳壷（991）が確認された。これは基本的には、宋船に積み込まれた薬種･香料や液状の物品の運搬容器と考えられ、宋船が直接寄港した博多やその周辺で多く出土している。このことから、この遺物は平清盛が大輪田泊で行った宋との直接交易を示す資料の一端を提示していると考える。

他地域からの搬入品

そのほか他地域からの搬入品として吉備系土師器椀（西溝出土・728）、掲載していないが､常滑窯甕､十瓶山窯の製品（平底の甕）と思われるようなものもある。また石鍋（おそらく長崎県付近の製品）が２点（SE202出土・516，517）確認されている。

以上のように、当遺跡の居住者たちと、畿内、北部九州、播磨、吉備などの瀬戸内海沿岸部との結びつきが、土器・陶磁器の様相に色濃く反映していると考えられる。

瓦

瓦は須恵質のものがほとんどであり、軒瓦の文様を観ると東播磨系のものが含まれる。しかし、今回の調査地内では瓦の出土量はごく少なく、確認された掘立柱建物[15]には瓦は用

いていないと判断される。井戸を附設したこれらの建物は主屋ではなく、厨屋・郎従、家人、所従等の住居と考えるのが妥当であろう。

土師器の皿・小皿の規格性について

手づくね成形の土師器皿・小皿の規格性を知るため、出土数が多かった遺構２カ所（SD201[西]、南東西溝）の土器について法量の測定を実施した結果、以下の通りとなった（表参照）。なお計測はコースター型を除く手づくね成形の土師器皿・小皿の口径と器高を実測図から求めた。

１．皿はいずれの遺構も口径14㎝～15㎝の間、器高は２～３㎝の間に集中する。

２．小皿はいずれの遺構も口径９㎝～10㎝の間、器高は１～２㎝の間に集中する。

皿・小皿ともに多少のばらつきはあるものの、概ね上記結果に纏まっており、規格に則って製作されていることが判る。この傾向はかって祇園遺跡第５次調査報告書[(6)]に掲載されたSX07土師器の径高分布の表に近似しており、調査地点が変わっても、同様の結果が得られることで、他地点でも同様の規格が守られていたことが判る。

また、土師器皿の底部外面に板状・簀子状の圧痕が残っているものがいくつか見られる。板・簀子の上に成形した土器を置いて乾燥させていたものと想定される。このような痕跡は京都では特定の時期（京都Ⅵ期）から確認されるという。

一段ナデ技法の盛行、土師器皿・小皿の法量、上記のような痕跡を総合して京都の編年研究と照らし合わせると、京都Ⅵ期古[(16)]に概ね相当すると思われ、この段階には12世紀末～13世紀初頭頃の実年代を当てはめている。

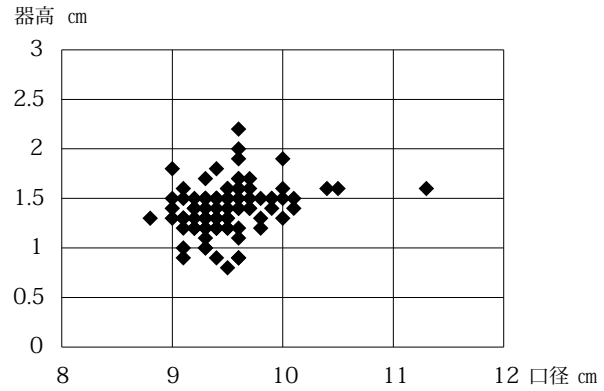


表６　18次－５区SD201〔西〕出土土師器小皿計数表

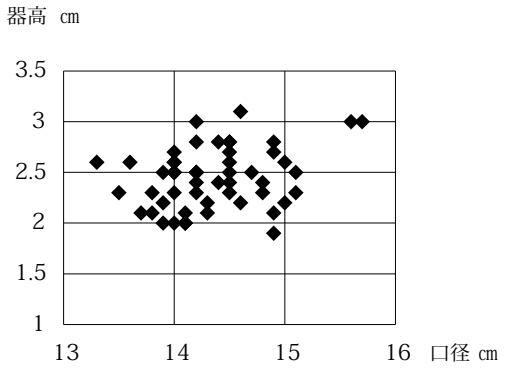


表７　18次－５区SD201〔西〕出土土師器皿計数表

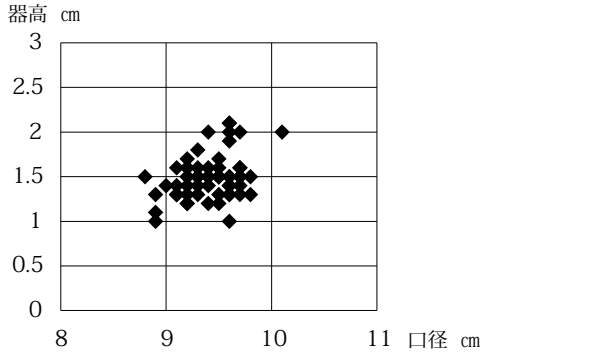


表８　18次－６区南東西溝出土土師器小皿計数表

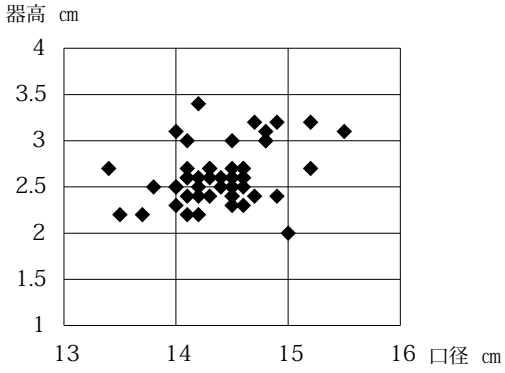


表９　18次－６区南東西溝出土土師器皿計数表

出土遺物の年代について

出土品の過半を占める溝内の遺物出土状況を観るならば、いずれもほぼ同一層位内にまとまって発見されている。また各遺構内の遺物はほとんど時期差が認められないことから、今回調査地点の邸宅としての存続期間はかなり短いものであったと考える。先に述べた各種遺物の年代観は細かいところでは差異はあるものの概ね、12世紀末頃を示しており、平清盛が福原の地に隠棲し、短期間都を置いた時期と一致する。

また、当調査地は川沿いで、西側には湿地状の堆積が確認されるなど立地的には良好とは言い難いことから、平清盛が福原の地に隠棲した当初段階から優先的に邸宅地として占地されたとは考えにくく、周辺の土地利用がかなり進んだ段階（言い換えれば、福原付近で利用できる土地がかなり少なくなった段階）になって、邸宅地とされたものと思われる。このような状況を勘案して、敢えてこれらの遺物群の年代を当てはめるならば、1180年（治承４年）の福原遷都の時に、平家一族・有力家人および親平家貴族に対して福原周辺に設定された土地が分与[17]され、急速に開発された時期を中心とする前後の短い期間に使用・廃棄された遺物群とすることが妥当ではないかと思われる。

邸宅地を使用した人々

出土遺物の中で、量が突出して多いのは、土師器の皿・小皿である。これらの多くは一時に大量に使用され、一括して溝や土坑に放棄された状況を呈している。このような土器の使用法についてはすでに多くの先学の研究[18]により、饗宴に用いられた後にまとめて捨てられたものという指摘がされている。それらの数が多いほど、多人数、または複数回の饗宴が営まれた証しであることは云うまでもない。

また、土師器皿・小皿のなかには煤や焦げつきが付着し、燈心の痕跡が認められるものがしばしば確認され、これらは燈火器（灯明皿）として使用されていたことが判る。

平安時代末期において灯明油は、植物油では主に荏胡麻油が使用されたと想定されるが、相当高価なものであったと考えられる。それ故か、灯明皿は一般の集落遺跡ではほとんど出土しないものであり、この遺跡の特殊性が窺われる。

灯明皿は、夜間の行事（遊楽・饗宴・仏事等の宗教行事）や机に向かっての執務作業、宿直（とのい）、邸内の夜間警備等に必要とされたと想定される。

このように貴重な灯明油を消費して、夜間の照明を必要とする生活を送っていた人々の邸宅は、平家に繋がる人々のものとすることは妥当ではないかと思われる。

墨書土器について

調査地内で２点の墨書土器が出土した。１点は土師器小皿の底部外面に「桑野」（1078）（桑は異体字）と書かれている。もう１点（1079）は土師器小皿の外底部の全面を使って、ひら仮名の文章が書かれていたようであるが、上半分が欠失しており、文章の全体が把握できない。現存する部分には「けに□　らふに　□□　く［　　］」と読める。記された内容は和歌の可能性もあるが判然としない。なお、この仮名文字については字のくずし方が丁寧で自己流ではなく、手習いを正式に学んだ人の手で書かれたものであるとのコメントを奈良文化財研究所史料研究室の方々よりいただいた。

邸宅の持ち主について

墨書土器の「桑野」は氏姓と思われる。土器に名前を書くことは共同生活の中で自分の器であることを主張するための行為[19]であるといわれている。共同生活を行う人とは邸の警備・宿直をする武士と推定され、邸宅の主に対して従属の関係を持つことが想定される。

桑野姓から、この邸宅の持ち主が誰であるかを特定する作業を試みたが、確証は得る

ことできなかった。ここでは、可能性のある二人の人物をその候補として挙げる。

平貞能邸の可能性

桑野姓は現在、九州北部（福岡県・大分県）に多いといわれている。福岡県では田川郡福智町、朝倉郡筑前町などに多く、筑前国嘉穂郡桑野村（福岡県嘉麻市桑野）が発祥の地とされている。しかし桑野姓が平安時代末期まで遡及する史料は見当たらなかった。(20)

九州（特に北部）は平家が早くから勢力を伸ばしていた地であり、特に平忠盛・清盛の有力な家人である平家貞（筑後守）、その子で清盛および重盛（小松家）に仕えた貞能（筑前守・肥後守）は、この地と深いかかわりを持ち、国府の在庁官人・在地武士を勢力下に置いたといわれている。桑野姓を持つ在地有力者が当時存在すれば、その膝下に組み込まれ、宿直・警備等への勤仕が課せられ、福原の邸に上番した可能性が考えられる。

阿波民部大夫重能邸の可能性

阿波国那賀川流域の一角（徳島県阿南市桑野町）には、鎌倉時代初めには伊勢神宮領として既に「桑乃御厨」(21)が存在しており、平安時代末期に在地を支配していた荘官層（武士）は桑野姓を名乗っていた可能性がある。しかし、明確な史料は確認できていない。

その北側の吉野川流域を支配下に置いた阿波民部大夫重能（成良）(22)（本拠地は徳島市国府町付近）は、平清盛に仕え、大輪田泊の修築に従事して功があり、後には阿波・讃岐国の武士を従えて平家に加担したといわれている。阿波民部重能は阿波国内の在庁官人で、彼の対抗勢力であった近藤（藤原）氏を抑え込んだ後、その武威を相当広範囲に及ぼしたと考えられ、那賀川流域の桑乃御厨の荘官層との結びつきを深めていた可能性はありうる。

第３節　結びにかえて

今回の17・18次の２年度に亘る発掘調査は、祇園遺跡内においては前例のない大規模な調査となった。調査では、縄文時代～中世にかけての遺物・遺構を確認したが、特筆すべきは平安時代末期の掘立柱建物、区画溝、石組み遺構、井戸、土坑などで構成される邸宅跡であろう。

写真30 調査区周辺垂直写真

特に建物群とこれを区切る区画溝の確認は、この時代の貴族や有力武士の宅地利用の実態を知る資料となろう。さらに庭園の可能性がある末端が結合した平行な溝群は、他に類例がなく、今後の検討課題とすべきものである。

これらの遺構内から出土した大量の土器、陶磁器類では、京都付近で出土する土師器皿・小皿と形状が相似するものが圧倒的に多く、大阪湾・瀬戸内海沿岸で生産されたものがそれに次いでおり、それらを結ぶ舟運のネットワークの中に当地が位置していたと考えられる。出土遺物には時期差はほとんど認められず、邸宅は平安時代末期の短期間に営まれ、放棄されたものと判断される。

この地一帯には、治承４（1180）年、平清盛によって強行されたいわゆる「福原遷都」によって、平家一門や有力家人、親平家貴族の邸が建設されたといわれており、今回確認した遺構群は、都遷り前後に造作されたいずれかの人物の邸宅の一角と見なされる。しかし残念ながら、今回の発見された資料からは邸宅の主の特定には至らなかった。
未だ福原京（和田京）の様相は不明な点が多く、今後の周辺の発掘調査資料の蓄積が必要ではあるが、今回の調査によって、部分的ではあるが平家一門の邸宅の具体的な姿を明らかにすることができた。

さらに、井戸や区画溝内から出土した動物遺存体については丸山真史氏の分析によって遺跡での動物利用の実態、ひいては福原京に移り住んだ人々の食生活の一端を覗うことができた。

また祇園遺跡内の調査では、今回の調査も含め前期や中期と考えられる縄文土器や石器などの出土が確認されている。今回、遺跡の基盤層を形成する土石流内から出土した流木の放射性炭素年代測定によって6200±30と6140±30ｙＢＰの年代値（それぞれＢＣ4250・ＢＣ4190年）が得られ、すでに遺跡周辺に人が生活し始めた時期に大規模な土石流が襲ったことも確認できた。そして今回、この土石流の現象については、増田富士雄氏によってくわしく検討をしていただくことができた。いずれも今回の調査での貴重な成果であるといえる。

最後に文末ではありますが、本調査および報告書の刊行に至るまでの業務に携わった関係者、および御協力をいただいた方々、諸機関に心からの感謝とお礼を述べ本書の結びにかえたいと思います。

註・参考文献

（１）岡田章一他編『楠・荒田町遺跡－神戸大学附属病院構内遺跡－』兵庫県教育委員会　1997
富山直人編『楠・荒田町遺跡　第42・42・46次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2011
（２）石神　怡他　『和気』和気遺跡調査会　1979
（３）池谷初恵編『史跡北条氏邸発掘調査報告書　御所之内遺跡第13次発掘調査報告』
韮山町教育委員会　2002
（４）内藤俊哉編『祇園遺跡第14次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2013
（５）須藤　宏「５．祇園遺跡　第２次調査」『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
1997
（６）富山直人『祇園遺跡　第５次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000
（７）仮製二万分一地形図「神戸」（明治18年測量）および「兵庫」（明治19年測量）
（清水靖夫編『明治前期・昭和前期　神戸都市地図』柏書房　1995に編集のうえ再録）
（８）西岡誠司「４．祇園遺跡」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2002

（９）伊野近富「１．土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995　を参考にした。

（10）このタイプの小皿・坏は神戸市神出古窯跡群で確認されている。
谷正俊・浅谷誠吾「１.神出遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1992
池田征弘・久保弘幸・岡本一秀『神戸市西区神出窯跡群-神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-』兵庫県教育委員会　1998

（11）森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ　-大和型瓦器椀とその周辺-』大和古中近研究会　1992
尾上実・森島康雄・近江俊秀「６.瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
真陽社　1995

（12）池田征弘・久保弘幸・岡本一秀『神戸市西区神出窯跡群－神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』兵庫県教育委員会　1998

（13）菅原正明「畿内における中世土器の生産と流通」『藤沢一夫先生古希記念　古文化談叢』藤沢一夫先生古希記念論集刊行会1983
また紀伊国にも同型の羽釜が報告されている。渋谷高秀「和歌山県の中世土器の様相-奈良県との関連を中心として-」『大和の中世土器Ⅱ　-大和型瓦器椀とその周辺-』　大和古中近研究会　1992

（14）貿易陶磁は山本信夫氏の分類・年代観に基づく。
山本信夫「〔2〕中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
真陽社　1995
山本信夫『大宰府条坊跡ＸＶ-土器分類編-』太宰府市教育委員会　2000

（15）今回発見された軒瓦のうち、SK206出土の軒平瓦（547）は、神出古窯跡群から、出土した部分が左右逆であるがほぼ同笵と考えてよい資料が出土している（池田征弘・久保弘幸・岡本一秀『神戸市西区神出窯跡群-神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-』兵庫県教育委員会　1998所載の901の軒平瓦)。これは鳥羽離宮金剛心院（久寿２・1155年建立）跡の出土瓦と同笵とされている。またSX204出土軒丸瓦(970)と祇園遺跡第３次調査地から出土した軒丸瓦(口野博史「６.祇園遺跡第３次調査」『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1997に掲載）が同笵と見做してよいと思われる。

（16）小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７～19世紀』京都編集工房　2005
京都の土師器皿を中心とした編年には多くの先学の研究成果があり、年代観の大まかな方向性は一致しているが、細かい部分で、検討されねばならない課題が残されているという意見がある(中井淳史「京都産土師器編年の現状と暦年代」『第34回中世土器研究会資料　中世土器研究中軸資料の再検討－畿内系土器類と東海系陶器類の再検討』　日本中世土器研究会　2015)。
この点を理解しながら、ここではクロスチェックの一方法として採用する。

（17）『山槐記』治承四年八月～十月の項に藤原（中山）忠親が福原の給地のことを記述している。
また高橋昌明『平清盛福原の夢』講談社新書メチエ400　2007の福原遷都の項を参照した

（18）藤原良章「中世の食器・考」『列島の文化史５』日本エディタースクール出版部　1988
ただし、今回出土したすべての土師器皿、小皿が饗宴だけに使用・廃棄されたのではなく、日常使用されて破損・廃棄されたものが当然含まれると解釈している。

（19）時代は遡るが奈良時代の土器に同様のものが出土する。森公章「平城京跡の墨書土器」『長屋王家木簡の基礎的研究』2000

（20）桑野姓については森岡浩編『全国名字大辞典』東京堂出版　2011
太田亮『姓氏大辞典』第二巻　角川書店　11版　1987　を参照した。

（21）桑乃御厨は鎌倉時代初期の建久年間に伊勢神宮の所領を書き上げた『神鳳鈔』（群書類従巻第九）に記載されている。

（22）阿波民部大夫重能については野口　実「十二世紀末における阿波国の武士団の存在形態－いわゆる「田口成良」の実像を中心に－」『京都女子大学研究紀要』第27号　京都女子大学宗教文化研究所2014を参考にした。

写 真 図 版

（調査地より南方を望む）

１　調査地周辺空中写真

２　調査地より北方雪御所遺跡を望む

カラー図版２

１　18次－５・６区全景（北から）

２　18次－６・７区全景（南東から）

1　18次－５区SD201〔西〕（北西から）

2　18次－５区SD201〔東〕（北東から）

カラー図版４

18次－４区SD201〔東〕出土土器

18次－６区南東西溝出土土器・カマド

カラー図版６

1　18次－４区SP201出土陶磁器

2　18次－６区東溝・西溝出土陶磁器

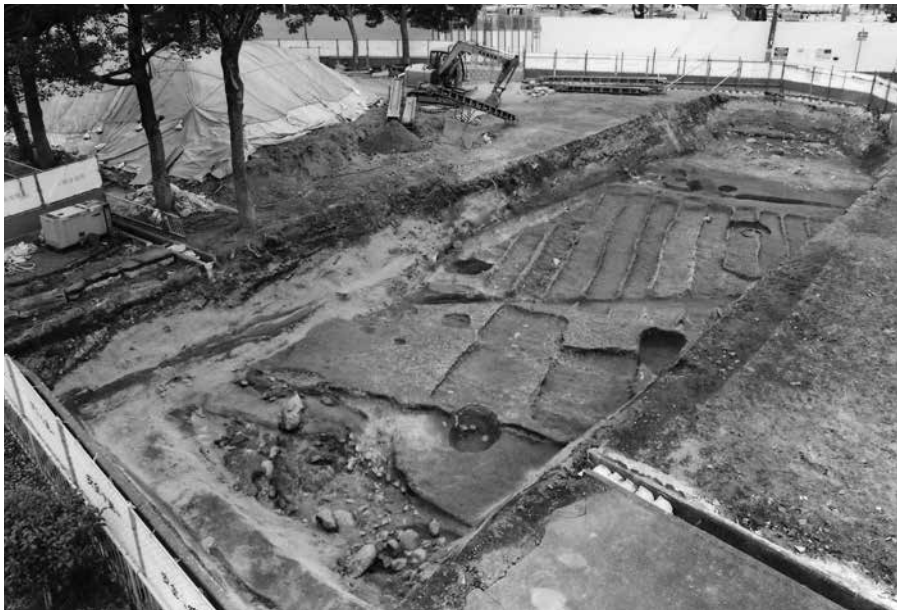
１　17次－１区第１遺構面全景（北東から）

２　17次－１区第２遺構面全景（北から）

写真図版２

１　17次－１区SX21（西から）

２　同上　遺物出土状況（南西から）



１　17次－２区第１遺構面全景
（西から）

２　同上　第２遺構面全景
（南東から）

３　同上　第３遺構面全景
（東から）

写真図版４

18次－１～７区・Ⅰ～Ⅳトレンチ垂直写真（モザイク写真）

１　18次－１区第１遺構面全景（北から）

２　18次－２区第２遺構面全景（北から）

写真図版６

１　18次－３区第２遺構面全景（北から）

２　18次－４区第２遺構面全景（北から）

1　18次－４区建物群（SB201～203）（北から）

2　18次－４区SD201〔東〕（西から）

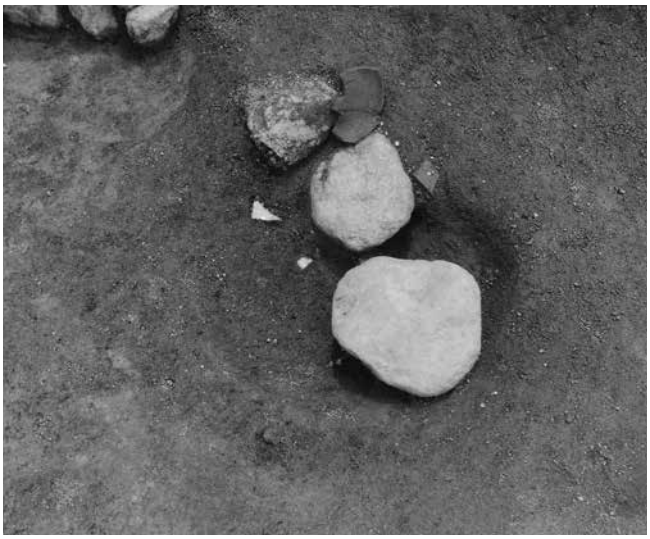
写真図版８

1　18次－４区SE201上層

3　18次－４区SE202

2　同上　断割り断面

4　同上　断割り断面



5　18次－４区SP201

6　18次－４区SP202

1　18次－４区第３遺構面水田面（北から）

2　18次－４区第４遺構面全景（北から）

写真図版10

1　18次－５区２遺構面全景（北西から）

2　18次－５区東拡張部第２遺構面全景（北東から）

1　18次－６・７区第２遺構面全景（南から）

2　18次－７区第２遺構面全景（北から）

写真図版12

1　18次－５区建物群（東から）

2　同上（北西から）

1　18次－５区SD201〔西〕遺物出土状況

2　同左　SD201〔東〕遺物出土状況

3　18次－５区SD204～207（北から）

写真図版14

1　左上　18次－５区SE203
　　上層遺物出土状況
2　右上　同上　井戸枠
3　下　同上　断割り断面

4　18次－５区SX202

1　18次－６区SX201東・中央溝
（北西から）

2　同上　南東西溝（南西から）

3　同上　集石部分・土器群
（北から）

写真図版16

1　左　18次－５区SX203　全景
2　右上　同上　蓋石
3　右下　同上　導水部

4　18次－６区SX204
（北東から）

1　18次－６区
第３遺構面水田遺構
（北から）

2　同上　細部（畦畔）
（南東から）

3　同上　畦畔断面

4　同上　水口

写真図版18

1　18次－Ⅰトレンチ第２遺構面全景（北から）

2　18次－Ⅰトレンチ SD201（南西から）

3　18次－Ⅲトレンチ第２遺構面全景（北西から）

1　18次－Ⅲトレンチ（東）遺構面全景（北西から）

2　18次－Ⅲトレンチ（西）遺構面全景（東から）

3　18次－Ⅳトレンチ遺構面全景（北から）

写真図版20

1　18次－Ⅲトレンチ（西）SK201

2　18次－Ⅲトレンチ（東）SK202

3　18次－Ⅲトレンチ（西）SX203

4　同左　底部導水部

5　同上　断面

6　同上　蓋石

1　18次－８区遠景（北から）

2　同左　遺構面全景（南から）

3　18次－８区石垣列（北から）

写真図版22

17次－1区　SX21出土土器

78

75

73

80

79

81

1　17次－1区　SX21出土土器（個体）

2　17次－1区　SK21出土土器（集合）

写真図版24

136

145

144

147

151

153

156

301

302

361

366

368

367

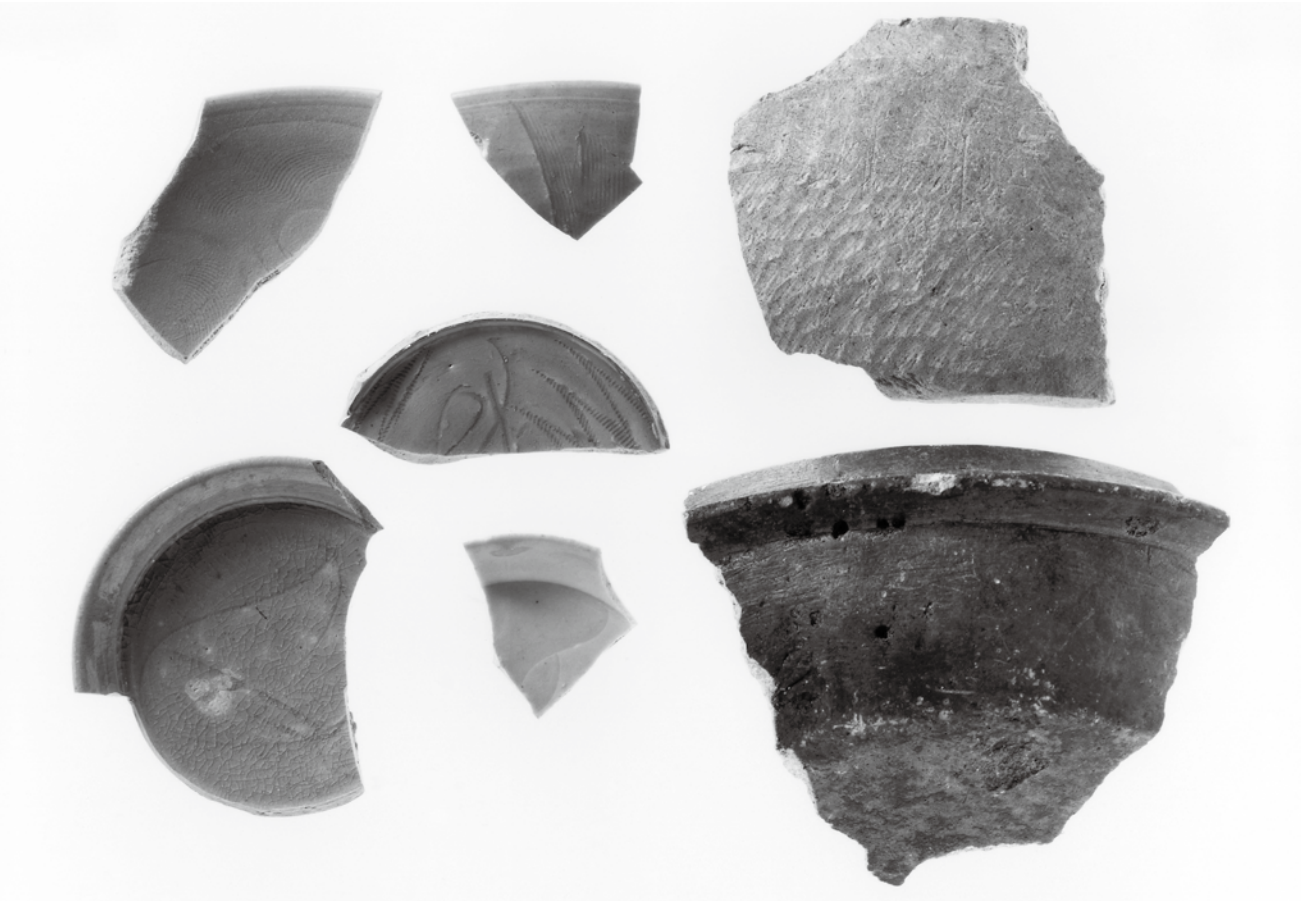
372

18次－５区　SD201〔東〕〔西〕出土土器（個体）

1　18次－4区　SE201出土土器

2　18次－5区　SE203出土土器

写真図版26



1　18次－４区　SE202出土陶磁器・石鍋

2　18次－４区　SE202出土土器

1　18次－5区　SD205出土土器

2　18次－6区　北東西溝出土土器

写真図版28

18次－６区　東溝出土土器

18次－6区　中央溝出土土器

写真図版30

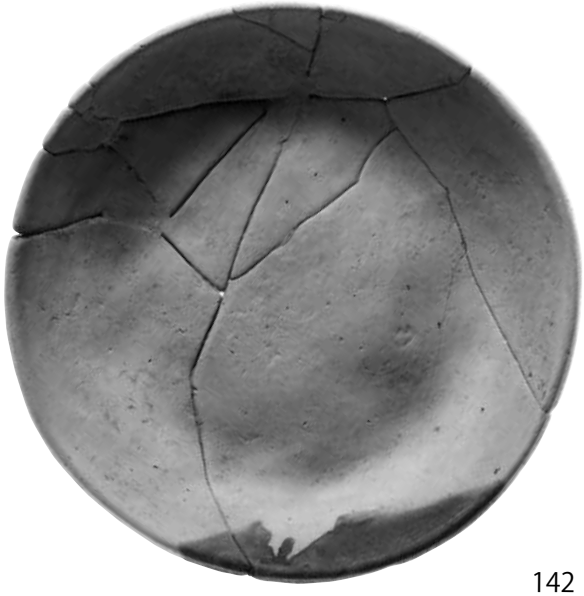
18次－６区　西溝出土土器

18次－6区　土器群出土土器

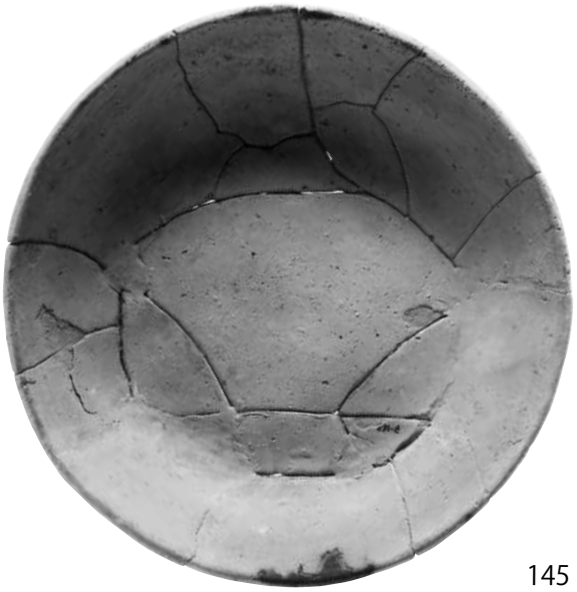
写真図版32

1　18次－6区　土器溜出土土器

2　18次－6区　集石部分出土土器



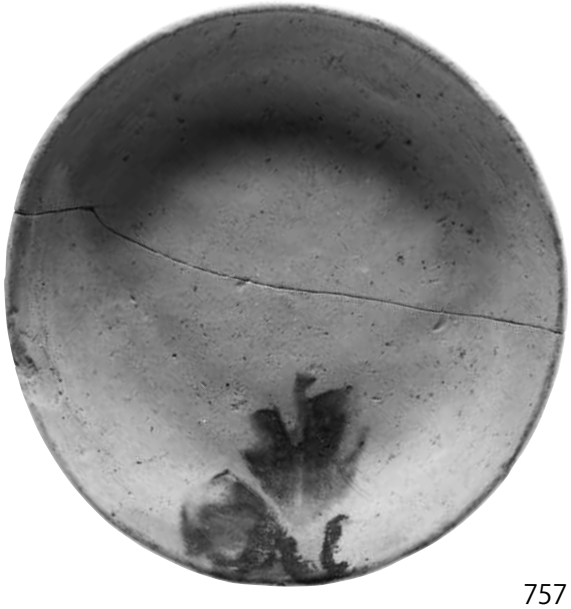
142



145

144

360



757

756

油煙の付着した土器

写真図版34

1　18次－７区　SK206出土瓦

2　18次－６区　南東西溝出土瓦

3　18次－６区　SX204出土瓦

1　18次－６区　南東西溝出土カマド

2　18次－４区　SP201出土褐釉四耳壷

3　18次－４区　SP202出土土器

写真図版36

1　第18次調査出土墨書土器（1）（赤外線写真）

2　第18次調査出土墨書土器（2）（赤外線写真）

3　第18次調査出土石器

報　告　書　抄　録

ふりがな	ぎおんいせきだい 17・18 じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	祇園遺跡第 17・18 次発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	谷 正俊・池田 毅・内藤俊哉・川上厚志・纐纈文佳・山田侑生・増田富士雄・丸山真史・ パリノ・サーヴェイ㈱
編集機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町６丁目５番１号　TEL078-322-6480
発行年月日	西暦 2016 年３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 （遺跡調査番号）	調査面積 （㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
祇園遺跡	兵庫県　神戸市 兵庫区　下三条町 10・11・13・14	28105	4－7	34度 41分 14～ 20秒	135度 9分 50秒 ～ 10分 3秒	201303～ 20131216	6,500㎡	道路・ 小学校 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
祇園遺跡	集落跡	縄文時代　～　中世	掘立柱建物、石組遺構、 井戸、土坑、ピット 水田、流路	土師器・須恵器 陶磁器・弥生土器・ 縄文土器 石器・木製品 墨書土器・瓦	

要約

平安時代末から中世にかけての遺構を確認した。とくに平安時代末頃の遺物とともに掘立柱建物群をはじめこれに伴う区画溝・井戸・石組み遺構などの遺構を検出した。また、多量の土師器皿が廃棄された園池状の遺構も確認された。これらの遺構は、建替えや造り替えを伴いながらも限定された短い期間だけ存在するもので、福原京（和田京）に関連する邸宅跡である可能性が高い。

また下層からは、洪水によって埋没した古墳時代以前と考えられる水田遺構も確認された。

祇園遺跡第 17・18 次発掘調査報告書

発行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL. 078-322-6480

印刷　株式会社クレアチオ
神戸市中央区新港港町８-２　新港貿易会館４階32
TEL. 078-332-0515

神戸市広報印刷物登録　平成27年度　第664 号　広報印刷物規格　Ａ－6類